

沢田綱吉、逆行。

ちびっこ

【注意事項】

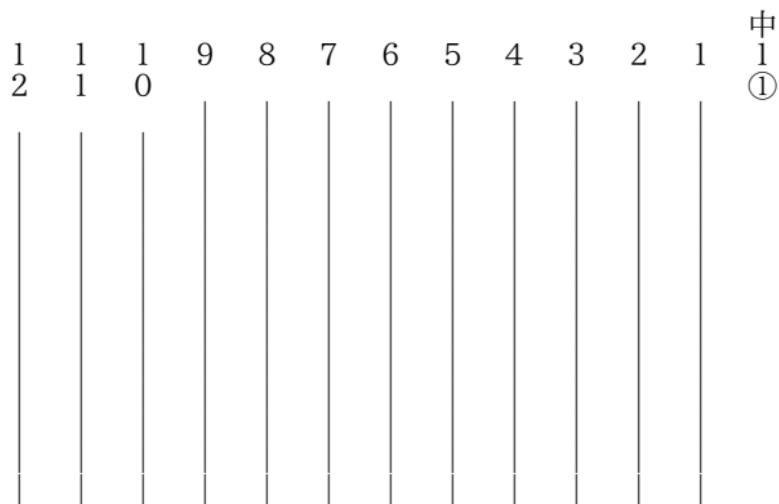
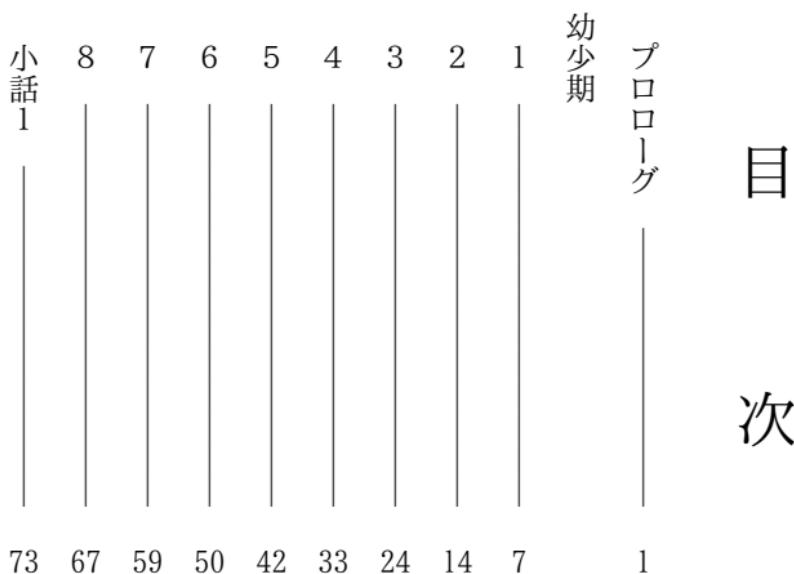
このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

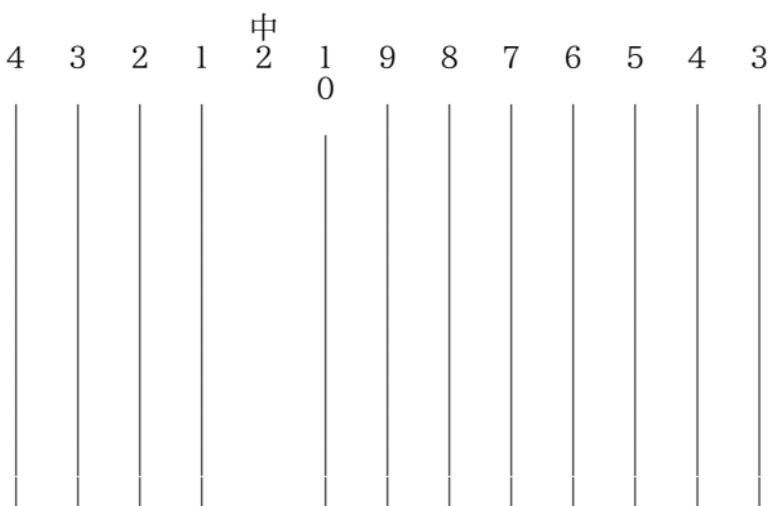
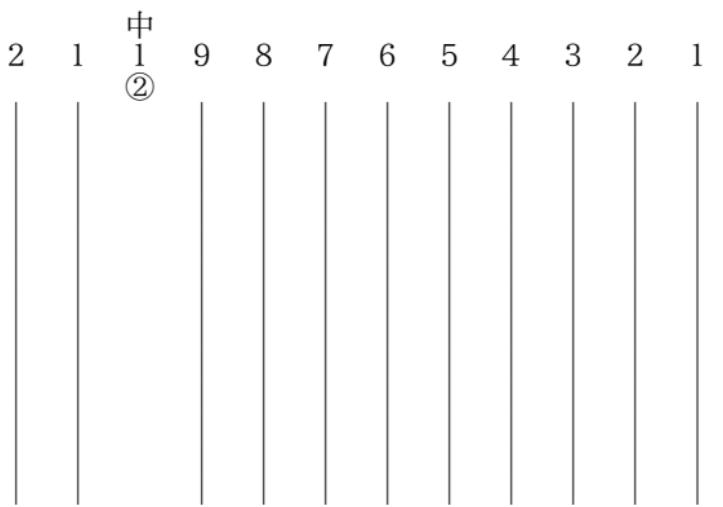
ツナが逆行し、女体化しました。

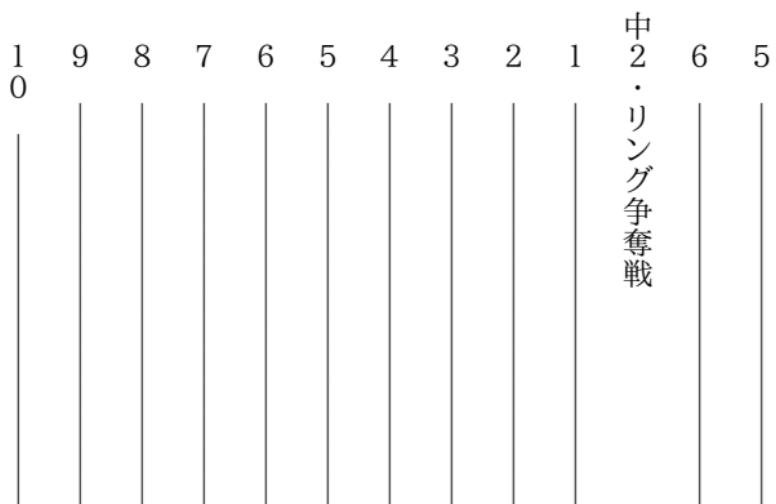
※6月4日に必須タグ、転生を追加。すみませんでした。



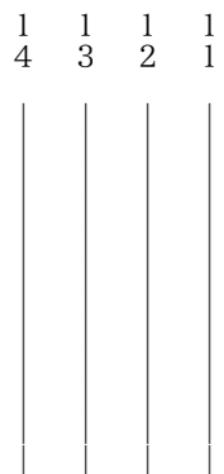
173 162 152 146 135 123 116 108 102 95 87 78

中
1
·
體
育
祭
編





527 515 504 495 483 473 461 449 439 426 420 406



571 555 545 535

プロローグ

オレが今日死ぬつてずっと前からわかつてたつて言つたら、みんな怒るかな。ユ二ほどじやないけど、オレの超直感がずっとそう訴えてたからオレは心残りはないけど、やっぱりみんなが悲しむ顔を見るのは辛いや。

「10代目……」

はは。久し振りに獄寺君が泣いてるのを見たよ。オレの右腕だからつて起伏が激しかつたのに抑えるようになつたもんね。まあオレ達しか居なかつたらふざけあつたりはしたけど。それでも泣いてるところを見るのは随分昔のことだ。

「ツナア……」

こつちも懐かしいなあ。ずっとボンゴレつて呼んでいたのに、ガキのころの呼び方に戻つてるよ、ランボ。お前は大きくなつても泣き虫だつたよな。お前が一番若いんだからしつかりしてほしいんだけど……。でもランボらしいかな。

「沢田、極限起きるのだ！」

無茶言わないでくださいよ、了平さん。でも無茶振りのこの明るさに随分と救われたな。それにオレより年上だからつて言つて、オレ自らが動こうとした仕事を奪つていき

ましたよね。オレに兄が居れば、こんな感じなのかなあ。

「ツナつ！」

そんな辛そうな顔しないでよ、山本。オレ結構生きたと思うんだ。後悔もないし。あ、でも……山本がプロ野球選手で活躍するところは見たかつたな。そりやお兄さんも思うところはあるけど……やっぱりお兄さんにはどこか甘えてるのかな。山本は自分で選んだっていうけど。野球の道をなくしてしまったのは申し訳なく思うよ。オレが死んで落ち着いたら野球の監督とかしてほしいな……。

「……ボス」

泣かないで、クローム。なんとか力を振りしぼつて、クロームの頭を撫でる。女人に泣かれるのは一番くるからと思って頑張つたけど、もつと泣いちやつた。ごめんね、クローム。

骸、そこにいるんだろう。死にかけてるからって言つても、オレの目は誤魔化せないからな。クロームのこと頼んだよ。……お前との約束守れたかな。ボンゴレを継ぐつて決めた時にした、黒のマフィアを全部潰すつていう約束。……最期なのに、溜息つくなよ。

「あなたほど、バカなマフィアは僕は知りませんよ」

それ褒めてるのかな。……褒めてるんだろうな。ありがとう、マフィアなんて嫌い

なのに、オレの言葉を信用してついてきてくれた。そう言つたら、利害が一致したままですとかお前は言うんだろうな。

「……君が死んだらつまらない」

ポツリと聞こえた声に、少し笑つてしまつた。……ああ、拗ねないでくださいよ、ヒバリさん。群れることが嫌いなあなたがここに来てただけでオレ嬉しかつたんです。だつてヒバリさんが群れてまで現れる時はオレが迷つたりどうすればいいかわからなくなつた時ですから。本当にピンチになつたら現れるヒバリさんはオレのヒーローでしたよ。

オレは最期の力を振りしぼつて口を開く。

「リボーン……後は頼んだ」

「……バカツナが」

ありがとう、最期にその言葉を聞きたかつたんだ。オレの心を読んだのか、リボーンはボルサリーノを深くかぶり直した。オレ、ダメツナだつたけどお前のおかげで胸を張つて死ねるよ。そりやあの時はいろいろ文句ばっかり言つてたけど、振り返るとお前が来てからのことからしか思い出せないんだ。それだけ濃い日常つていう意味もあつたんだろうけど、楽しかつたんだ。お前と会えて本当に良かつたよ。

……ああ。もうここまでだな。みんな、今までありがとう。

沢田綱吉。ボンゴレファミリーのボスだった彼は50歳という年齢で命を落とした。彼は数ヶ月前に自分の病に気付き、ボンゴレや白蘭の力をもつてしても治せないことを超直感で知っていた。師であるリボーンだけには伝えてあつた。最期にリボーンが守護者を強制的に集合させ、ツナがひつそりと亡くなろうとしたことを防いだ。

「こ、どこだろ？」

「デーチモよ」

「プリーモ!? あれ? ここつてもしかしてボンゴレリングの中?」

超直感で導き出した答えにプリーモも満足したように頷いた。……そつか、オレの一部はここに残るんだ。ボンゴレの試練の時に歴代のボスが居たんだつた。「栄えるも滅びるも好きにしろとオレは言つた」

「え、あ。はい」

結局どうなんだろ。ボンゴレ自体はオレの方針に従わないところは離れていつたけど、付いて来てくれる人も居たから、そんなに変わつてないと思うんだ。プリーモのような自衛団にはならなかつたけど、警察とは協力関係を築けたし……。

「だからデーチモがボンゴレで何をしても構わなかつた。だが……ボンゴレリングを継げるものが居ないのは問題だ」

「へ？」

「デーチモもわかつてゐるだろう。トウリニセッテの問題になるのだ。しかしボンゴレリングは血筋しか受け付けない」

そういうえば……オレしか居ないからボンゴレファミリーを継ぐ羽目になつたんだつけ。オレ、子ども作つてないよ……。

「どうしょー！やつちやつた!?」

「ああ」

そこは否定して欲しかつた……。

「ボンゴレは縦の時空軸」

確かに、過去から未来への伝統の継承。昔ユニから教えてもらつたつけ。

「その力を使つてお前を過去に戻そう」

「えーーー!? なんでオレが!？」

「デーチモのミスだろう」

……そうでした。

「本来の力とは違つた使い方をする。多少世界に影響を与えるかもしれないが、このまま継ぐ者が居ないより遙かに世界が安定する」

「世界に影響つて……」

「もう一度お前にこの言葉を送ろう。栄えるも滅びるも好きにせよ」

ハツと息を飲む。オレは未来を知つてゐるからこそ、ブリーモはこの言葉を送つてくれたんだ。オレが前と同じ道を歩まなくともいいと伝えてくれたんだ。

「お前には辛い道になるかもしぬれない。お前以外は覚えていないからな」

「あはは。大丈夫、また友達になればいいから」

「…………そうか。デーチモよ。後は任せた」

「はい」

光が溢れ、オレは流れに身をまかせるように目を閉じた。

……多少つて言つたよね?!多少じゃないから!オレ、なんで女の子なのーー!?

幼少期

1

オレ、前世では沢田綱吉という名でボンゴレファミリーのボスをやつしていました。今世では沢田ツナという名で女の子をやつてます。意味わかんねー!?

はあと溜息を吐いていると、家綱が睨んできた。あ、家綱はオレの双子の兄。これもオレが過去に戻った影響らしい。家綱は事あるごとに眠つてゐるのに何でも出来るオレを疎んでる。言つとくけど、情報量の多さに身体が休もうとしているだけだから! オレだつて起きていたいの!……今ならリボーンが昼寝してたのがわかる。オレ赤ん坊の時はびつくりするぐらい眠つてたみたいだからね。母さんじやなかつたら、絶対病院に連れ回されていたよ。

とにかくオレは今世では女だし、同じ日に生まれたつて言つても兄が居るから家綱がポンゴレボス筆頭になるんだと思うんだよね。父さんだつて、巻き込むならオレじやなくて家綱を選ぶと思う。オレ、今世も母さん似で小さいころの母さんとそつくりらしいし。髪の毛は爆発頭じやなくなつたけど、金髪なんだよね。父さんじやなくて、プリーモの血から來てる。超直感がそう言つてるんだ。

あ、家綱？父さん似。髪の毛も普通の短髪だし、色は茶髪。母さんの色だよ。双子なのにここまで似ないのはある意味すげーと思つてる。後、家綱は昔のオレほど酷くないからダメダメ呼びはされてない。まだ小学生だから何とも言えないけど、でもオレよりはましだと思う。だからこそ、昔のオレみたいに諦めるんじゃなくて疎むようになつたのかも。正直、了平さんみたいなお兄さんを想像していたから、ちょっとショックなんだけど……。

まあ家綱との関係はこれからなんとかするつてことで。超直感でこのままつて言つてるけど……。しょ、小学生になつてやつとオレは眠くなくなつたんだ。どこでも寝るオレを知つてゐるからか、今まで1人で外に出かけることは出来なかつたけど、やつと許してもらえるようになつたんだ。

「母さん、出かけてくる」

「わかつたわ。気をつけてね」

「うん。あ、何か買い物があれば、帰りに寄つていくよ」

母さんに偉いわねと頭を撫でられて少し恥ずかしいけど嬉しい。父さんはあんまり帰つてこれないし、オレもボンゴレを繼いでからなかなか帰ることが出来なかつたから親孝行出来なかつたんだよな。だからちよつとでもつて思うんだけど、多分それがまた家綱には気にくわないみたいなんだ。家綱のことを思えばやめた方がいいつてわかつ

てるんだけど、前世の分もあるから母さんを優先してしまったんだ。

「じゃあ、お豆腐買って来てくれる?」

「うん」

「余ったお金でお菓子を買ってきていいからね」

「母さん!!」

ああ、オレだけ最悪したから家綱が怒ってる。どうしようと思つたら、母さんはなんてことないよう笑つて家綱にお小遣いを渡していた。チラッと見た感じではオレの方がちょっとだけ多くなる金額。多分お手伝いをしてくれたことで多くくれたんだ。ここは母さんの好意をそのまま受け取つておこう。なんだか親孝行したいのに、恩が増えてるような……。

「い、いつきまーす!」

いろいろ思うところはあるけど、まだオレは小学生。あんまり遅い時間まで出かけていれば、母さんが心配する。体は小さいし、何をするにしても時間がかかる。早め早めの行動を心がけないといけないんだ。

やつぱ何年も昔だとオレが知つてゐる街と違うんだよな。それこそヒバリさんが風紀財団を立ち上げてから特に変わつた。多少迷いながらも超直感のおかげで見つけることが出来た。そうそうこの不動屋さん。

「いらっしゃい。ボク、1人なのかい?」

この人がハルの言つてたおばあさんかな。未来に行つた時に亡くなつたつて聞いていたけど、理由がわかつたよ……。

「うん! おじさんに話があつたんだ」

「おじさんは酷いじやないの。私はおばあさんだよ」

「でも用事があるのはおじさんの方だから。生粹の地球人のおじさん?」

ピクリと反応したおばあさんは、オレを店に入れてから扉を閉めた。その瞬間部屋が隔離されたことに気付いた。

「末恐ろしい子だ。それにどこでそれを?」

「前世。オレ、前世でアルコバレーノの呪いを解いたから知つてたんだ」

こんなにも簡単に認めたのはオレを殺せばいいと思ってるからかな。超直感が反応していなかから、オレは気にせず呪いの解き方を教える。彼は仕方なくやつただけで、悪い人っていうわけじやない。だから方法があると知つて、ホツとしたように息を吐いた。

「オレが知つてるのはこの方法だけだから、まだ解けないんだ」

「そうだろう。炎が足りない」

「うん。オレ、今世はボンゴレを継ぐことになるかはわからないけど、呪いを解くことに

ついては協力するから」

「そうか。ありがとう」

「後、ユニのお母さん……アリアさんだつたかな。彼女の延命のために、オレの炎をおしゃぶりに込めてみたいんだけど……」

外すためじやなくて延命のために出来るかわからないけど、試してみようと言つてくれた。本当はユニのおばあさん、ルーチエさんの時に出来れば良かつたんだけどオレが小さいから間に合わなかつた。オレが落ち込んだのがわかつたのか、チエツカーフエイスは頭を撫でてくれた。前世も含めるといい歳しているけど、今しか味わえないことだから嫌がらないことにした。

「何かあればいいなさい。君の力になろう」

「え!? ほんと!?'

「その様子だとあるのだね」

あはは……と誤魔化すように笑う。やりたいことがいっぱいあるのに、出来ない方が多いんだ。

「いいだろう。話してみなさい」

「うーんと、骸はすぐにでも助けないといけないし、炎真はいつかわからないから、炎真のお父さんに伝えて……、獄寺君はもう城を出ちやつてるかなあ。XANXUSはいつ

だつたつけ?」

今すぐ思いついたことを話せば、チエツカーフエイスが笑っていた。

「前世の君と深い人物のことばかりだね」

そんな変なことを言つたかなと首をかしげる。

「前世に居なかつた兄に任せて、君は何も知らないフリを出来たのに選ばなかつた」

「出来ないよ!みんなが苦しんでるつてわかってるのにほつとけるわけないじやないか！」

「そんな君だから私も賭けたと思つたんだ。君は次のアルコバレーノになる覚悟だつてあるんだろう?」

誤魔化すことも考えたけど、オレは素直に頷いた。前が上手くいつたからつて今回がうまく行くとは限らない。だからもしもの時はあの時と同じようにオレはアルコバレーノになるつもりだつた。

「抱え込みすぎないように気を付けなさい」

「え?う、うん」

オレは当然のことだと思つてゐるんだけど……。これ以上は遅くなるから帰りなさいと言われ、慌てて時計を見る。そんな長く話したつもりはなかつたけど、思つた以上に時間がたつていた。帰りに買い物に行かないといけないし、母さんが心配するかもしれ

ない。また会う約束をして、オレはその日は慌てて帰つていった。

あれから川平さん……迂闊に外で生粹の地球人やチエツカーフエイスとは言えないからね。川平さんと話し合つた。オレが場所を覚えていたのはボンゴレにいるXANXUSと黒のマフィアを一掃するために調べたエストラネーオファミリーのシマ。一度骸と一緒に行つたから、人体実験をしていた場所はなんとなくわかる。あいつは顔も出さなかつたし何も言わなかつたけど、ああ……そこなんだなってその時思つたから。

だから先にその2つを川平さんは調べてくれたんだ。XANXUSはもう振りかご事件を起こした後だつた。間に合わないかもとどこかで思つていたのもあつたし、たとえ間に合つたとしてもオレも9代目のようにする道しかなかつたと思うんだ。次にオレが出来るとすれば、目を覚ましたXANXUSのストレス発散に付き合うぐらいかな。

骸はオレが予想した場所にいた。川平さんも言葉を濁していたから、かなり非道なことをしていたんだと思う。オレは前世を経験してゐるし、ボンゴレの業も知つてゐる。だから言葉にしても問題ないんだけどと思つたけど、川平さんはオレの見た目が子どもだから言いづらかったみたい。アルコバレーノは自分が赤ん坊にしたから割り切れるら

しい……。

それでも復讐者に目をつけられてる可能性があるエストラネーオアミリーに川平さんが動くのは危険で、オレが潰すことになつた。川平さんは申し訳なさそうだつたけど、そもそもオレのワガママもあるし、今世はどうかわからないけど、骸はオレの守護者だつたんだ。オレが動くのが当然だ。

いろいろ相談した結果、オレは普通に飛行機に乗つて移動することになつた。川平さんは幻覚でおばあさんと子どもを演じて、孫の友達も一緒に連れて行きたいつて母さんを説得したんだ。家綱はオレも行きたいつて言つたけど、家綱にかまう余裕があるとは思えないし、川平さんとは初対面。家綱のワガママが通ることはなかつた。

家綱には最後までオレに恨み言を言つていたけど、いつぱいお土産買つてくるからと言つて振り切つた。ランボもワガママが凄かつたけど、恨むような子じやなかつたからなあ。どうすればいいのかわからない。2回目なのにやつぱりオレは不器用でダメツナだよ、リボーン……。

ちよつと落ち込みはしたもの、川平さんのおかげで飛行機に乗つて骸のところまでやつてこれた。

「大丈夫かい？」

「はい。鍛えてましたから」

フードを深くかぶつて、息を吐く。川平さんにそうは言つたものの、不安はある。流石に50歳も生きていれば、死ぬ気丸や小言弾がなくてもハイパー化出来るようになつてゐる。でもずっとハイパー化すればオレは多分筋肉痛で氣を失うことになる。性別が違うつていうのも少しはあるけど、オレが幼すぎてそこまで筋肉がつかなかつたんだ。そのかわり死ぬ気の炎のコントロールはオレの思い通りだつた。だから必要な時だけ一瞬死ぬ気の炎を灯すつもりだ。

一般人には負けないとは思うけど、銃を使われたら避けるしかない。手に炎を灯したいけどグローブもない。XANXUSはどうやつてるんだろう。オレ、うまくいかないんだよな。超直感も何も反応しないことから、やり方が間違つてゐるのか、そもそもグローブがないと出来ないかもしれない。前は使えたんだけどなあ……。

「いつてきます」

川平さんに声をかけてからオレは進んだ。死ぬ気の炎が飛ばせないから、普通に窓から侵入してバタバタ倒していくけど……この感じヒバリさんっぽい。普通じやない自覚はあるけど、オレあの人ほど強くないから！ただオレが想像していたよりも弱いだけなんだ。もしかしてオレの基準がおかしいのかも。

「わわっ」

超直感が反応して、慌てて壁の裏に隠れればすぐに銃声の音がした。あつぶねー。相

手はマフィアだつた、油断禁物。リボーンに知られれば、ねつちよりだよ。また基準をリボーンにしちやつたー!?と心の中でツツコミながらもオレは次々と倒していく。出来るだけ死ぬ気にならないようにしていったけど、徐々に身体がギシギシと痛む。ハハ、懐かしいや。

オレの限界が来るよりも先に、誰も来なくなつた。超直感に従つて骸達を探す。オレの超直感がここと訴えると同時に、嫌な予感も訴え始めた。骸が危険な気がすると慌てて扉をぶち破つた。

「骸……？」

どこかボーッとしながら三叉槍を持った骸がそこに居た。右目は赤く、六の文字が刻まれていた。間に合わなかつた……。

「ごめん。ごめん。骸……」

気付いたらオレは骸に抱きしめていた。

「はあ。相変わらず君は甘ちゃんですね」

「……え？ 骸？」

「いい加減、離れなさい。邪魔です」

「ご、ごめん」

謝りながらも、問題なく会話が続いていることに疑問を持つ。

「えっと、骸……？ オレのことわかるの？」

「ええ。といつても、この目が無ければわかりませんでしたよ」

「あ！ 六道の力！」

「そうです」

あれ？ でも骸は目を得てすぐこのマフィアを潰したんじやなかつた？
「いでででで」

急に骸に頭を掴まれた。なにすんだよつ！

「あなたがボーッとしているのが悪いのです。さつさと、こを出ますよ。あなたのこと
だから憑依弾も壊したのでしょうか？」

「あ、うん」

骸が前世の記憶を覚えてるから、すっげー話が楽。またどこからか出てきた人達が骸
が幻覚でバタバタ倒してるけどいいのかな。や、でも殺してはいませんよとボソッと
言つたから大丈夫かな。しばらく悪夢を見ることにはなりそうだけど……。
「子どもたちはどうするつもりだつたんですか」

「ええっとオレが出ていつた後、川平さんがボンゴレにタレコミするつて言つてたよ。

「……まあいいでしよう」

「……まあいいでしよう」

気のせいかな。オレが川平さんの名前を出した時に、呆れたような視線を向けられた
ような……。

「では僕が彼らに助けを呼びにいくと声をかけておきます。外に出れば迫害されるとわ
かっていますからね。彼らが眠っているとわかつていても、下手に外にも出れないはず
でしようから。人数は多いですが、後はボンゴレがなんとかするでしよう」

「そんなに多いのか?」

「そうですね。今回はそこそこ生き残つてると思いますよ」

骸は間に合わなかつたけど、助かつた人がいるとわかつてホツとした。

「それに僕一人なら何とか生きていけますが、彼らは難しいでしようから」

「は!? お前、もしかして犬と千種を連れていかないつもりかよ! ?」

「当たり前です。彼らは以前と違つて、そこまで人体実験は進んでいませんから」

え、じやあなんでお前はもう……? もしかしてオレがズカズカと乗り込んで行つたか
ら? 慌てて骸だけ実験を進めた……?

「余計なことは考える必要はありません。僕はこれで良かつたと思つています。マフィ
アの世話になるなんて僕が許しませんよ」

「…………わかつた」

オレが渋々頷いたのを見て、骸はため息を吐いた。

「いいですか。あなたが来なくても同じことになりました。くだらないことを考えている暇があるなら、手と口を動かしなさい。あなたはこれからどうするつもりですか?」「くだらないってお前なあ……。はあ。どうするつて?」
「あなたはマフィアに関わりたくないのでしょうか。僕が名前を出さなかつた時点で察しながらい」

「お前、この状況でよくそこまで気がまわるな。すげー。」

「あなたとは頭の出来が違うんです」

「ははっ。オレは今回マフィアになるかなつて思つてるよ」

「……なぜです」

「後で詳しく話すけど、ボスになるかはわからない。でもお前と約束しただろ?だからマフィアになる方が都合がいいと思うんだ」

骸の足が止まつたので、オレも慌てて止まつた。

「骸?」

「僕は散々あなたにバカだの、お人好し、甘ちゃんと言いましたが、死んでも治らなかつたのですね」

「そこまでいう必要ねーじやん!」

「はいはい。……仕方ありませんね、手伝つてあげますよ」

「え？ いいの？」

確認すると骸は呆れたようにオレを見た。でもどこか笑つてゐ気がした。

「随分僕も絆されたものです」

「……そろは見えないんだけど」

骸に倒されて呻く人達を見ながら思わずオレはツツコミを入れた。

この後、川平さんと合流したオレ達はさつさと逃げ出した。2人はオレとは違つて幻術を使えるから、簡単にその場から離れることが出来たんだ。

相変わらず骸は暗躍するつもりらしいけど、拠点が欲しいということでオレ達と一緒に日本へ行くことになった。

「沢田家綱ですか」

「そう、オレの双子の兄貴。仲はあんまり良くないんだけど……」

「それは助かりました」

「はあ！？ 何でだよ！？」

「仲が良くないということはあなたと性格が違うということです。あなたみたいな人が

2人もいれば、虫酸が走ります！」

ヒバリさんじやないんだから……と思いながらも、オレが2人いることを想像したのか、骸がブルブルと震えていたから声に出すのはやめた。

「そういえば、あなたは誰と結婚するのです？あのボクシング馬鹿の妹ですか？それともマフィアの嫁になると馬鹿げたこと言つていた人ですか？」

え、京子ちゃんとハルのことだよな……？特にハルに対してひでえ……。

「でも今回は家綱がいるじゃん」

「また甘いことを言つてるのですか。巻き込みたくないと言つて、好いた女には手を出せず。かといって、好いた女じゃないと抱けないなんて、馬鹿でしよう」

「そうなんだけどさあ……。まあお前の言いたいことはわかつたけど、2人は絶対に無理だよ。いい人、頑張つて見つけるよ」

どうせ出来ないと思われたのか、肩をすくめる骸にオレも意地になつて睨む。

「つてか、川平さん、笑いすぎっ！」

オレ達の会話を聞いてるのはいいけど、笑うのはやめてよ！？

「すみませんね。ですが、彼に教え忘れている君も悪いと思いますよ

あれ？何か骸に言つてなかつたつけ？

「あなたのフルネームは？」

「あ！ そうだつ！ 骸、オレはツナなんだ！」

「はあ？ 知つてますよ。髪は違いますが、顔は変わつてしませんしね」

ええつと、そうじやなくて！ とワタワタしていると、川平さんが口を開いた。

「私は一度も沢田さんに彼とは言つてませんよ」

骸は川平さんを怪しむような目で見ていたけど、オレが言いたいことが伝わつたのか、途中からオレを上から下まで見てから言つた。

「……僕はお断りしますからね」

「え？ 何も言つてないのに、オレ振られたの!?」

今世もモテないダメツナライフなのー！ と頭を抱えていると川平さんが爆笑してい
た。……川平さんのイメージかわっちゃつたよ！

日本に帰つて一番驚いたのは、オレが海外に行つてゐる間に父さんと9代目がオレン家に來ていたことだつた。本当はオレが帰つてくるまで居るつもりだつたらしいけど、急用が出来て帰つたらしい。特に父さんは泣く泣くだつたらしい。オレ、母さん似で娘だから……。

その話を聞いて、2人が慌てて帰つた理由に心当たりがあつたオレは苦笑いするしかなかつた。死ぬ氣の炎を封じられるのは回避出来たけど、父さんの置き土産を見るとちよつと可哀想かなつて思う。

「可愛いクマさんだけど、ちよつと大きいわよね」

オレの苦笑いはテディベアの大きさに引いていると母さんは思つたらしい。オレがあんまり女の子らしいものが好きじゃないのを知つてるから。

「せつかく父さんが買つてくれたんだし、大事にするよ」

「ふふつ。あの人も喜ぶわ」

父さんが喜んでくれるならいいかと今回は諦める。昔は苦手だつたけど、父さんはオレが出来なかつたことをしたから少し尊敬しているんだ。オレは京子ちゃんやハルを

守れる自信がなかつたから……。

テデイベアを母さんと一緒にオレの部屋に運ぶ。記憶と少し違つてオレの部屋は少し小さい。多分家綱の部屋があるから。性別が違うから部屋を別々に作つたと思うんだ。

「……今度から父さんに大きいのはもうやめてつて言うよ」

「そうね。母さんからも伝えるわ」

前世の影響で、あまり欲しいものがないオレの荷物は少ない。だから大丈夫だつたけど、オレじやなかつたら何も置けなくなつてたよ……。

「ツーチayan、何か欲しいものある?」

「え? なんで?」

「イツ君はお父さんだけじやなくて、お父さんの上司の人からもいっぱい買つてもらつたの」

そう言つて母さんは溜息を吐いた。母さんが困るぐらいだから、家綱は相当買つてもらつたのかもしれない。あ、でもだから家綱はテデイベアを見ても何も言わなかつたんだ。オレの方がもらつてるつて感じで。

「欲しいもの、ね」

オレが欲しいのはグローブなんだよな。母さんに頼んでも意味がない。でもオレが

ないと言えば、母さんは困ると思うんだ。何かあつたかなあ……。

「あ、あつた」

「なに？ なに？」

「貯金箱」

机の引き出しを開けて、母さんに袋に入っているお金を見せる。

「このままだと味気ないし、何かに入れたいと思つてたんだ」

それに家綱が勝手に使つてることも知つてゐるし。オレは別にお菓子とかいらないから買わないだけで、チビ達が来た時のために残してゐるのに。

「そうね。ツーちゃんだつたら、割らないと開けれないものでも大丈夫そうね」

その言葉に驚いて母さんの顔を見てしまつた。母さんは何も言わずにオレの頭を撫でた。……ああ、そつか。家綱のお小遣いを渡しているのも母さんだよな。買える量にも気付いていないはずがなかつたんだ。

「今度一緒に買いに行きましょうね」

「うん！」

オレは何も言わなかつたのに、母さんはちゃんとオレ達を見てゐるんだなつて思つた。

「骸」

いつたいどうやつてこのマンションを買つたんだろ。いや、もちろん幻術を使つてるのはわかつてゐるけどね。骸はちゃんとまともな方法でお金用意しましたよつて言つてるからその言葉を信じるけどさ。

「おや、また来たのですか？」

「母さんからの差し入れを持つてきましたんだよ」

「そうですか」

少しは標準体型になつたかな？と思う。子ども好きの母さんは骸を見て、燃えちやつたからね。オレもちつこいけど、骸はガリガリだつたから。

母さんは骸を引き取るぐらいの勢いだつたけど、骸がもう落ち着いたからと言つて断つたみたい。それ以来、時々持つて行つてあげてとオレに頼むんだ。もちろんオレも協力する。骸はチョコばかり食うからね。母さんの子ども好きに助かつたよ。

「……なに、お前どこか行くの？」

カバンに服が入つてゐるのを見て、オレは眉間にシワがよつた。

「ええ。ですが、君の言う無茶はしませんよ。復讐者に目をつけられたくはありませんから。ただ僕が記憶して いた通りなのか確認しに行くだけです。君の兄のように何か違うかもしませんから」

「あんま無理するなよ?」

「はいはい、分かつてます」

オレもついていけたらなと思う。でも何度も家を出る説明なんか出来ない。

「いでつ」

「少しは僕のことも信用しなさい」

「……えー? お前を?」

「クフフ。そうです、僕をです」

前世では出来なかつたやりとりに笑つてしまふ。骸はオレが笑つても嫌な顔はしなかつた。これなら、大丈夫そうかな。それにコイツのことだから、犬と千種の様子も見に行くと思うんだ。

「うん。わかつた、信じるよ」

「ええ。では、いただきましようか」

「食べて食べて。あ、今回オレも手伝つた」

「大丈夫ですよね……?」

ビアンキじやないから!とオレがつつこめば骸は何も言わずに食べた。ほんと、コイツとの関係は変わつたな。骸は察しがいいから、オレが寂しいことに気付いてるのかもしない。

「そういえば、ヒヨコと会いましたよ。彼、この頃にはもうあの武器だったんですね」「ぶはっ、お前何してんの!？」

ヒヨコって絶対ヒバリさんのことだろ!? オレもまだ会つてないのに……なんで一番会つちゃいけない組み合わせが出会つてんの!?

「僕は何もしてませんよ。ただ向こうが……」

「ヒバリさんが?」

「僕の頭が気にくわないと言つて、いきなりトンファーをふるつってきたのです!」

余程苛立つたのか、骸は箸で玉子焼きを突き刺した。まあちゃんと食べたからいいけど……。

「お前、手加減したよな?」

「もちろんです」

「あー良かつた!」

オレも骸も前世の影響か、ふつーに強いからな。いくらヒバリさんでも今のオレ達には敵わないよ。

「まあ返り討ちにしてあげましたけど」

「お前、何してんの!? 絶対ヒバリさん、お前のこと探しまわってるよ!?」

「その時はまた返り討ちにしますよ」

……この2人は今世でも相容れない仲なんだとオレは察したよ。

「しかしやはり彼は面白いですね。このまま行けば、彼は随分強くなりますよ」

「まああの人、根っからの戦闘狂で負けず嫌いだからなあ」

オレも何回手合させしたことか。ヒバリさんにお願いしに行つたはずなのに、着ていたスーツが綺麗なままで帰つてきたことはないよ。草壁さんは随分お世話になつたなあ。

「あ、話かわるけどさ。お前小学校とか行かないの？」

「今更行つてどうするのですか」

「それもそうか」

ヒバリさんってことで、学校のことを思い出したけど、骸は行かないのか。

「ああ、でも黒曜中学には行くかもしませんね」

「なんで？お前、あれはする気ないんだろう？」

「今のところは」

いや、するなよ？と心の中でツッコミする。骸がボカした言い方をした時は何か考えがあるんだろうなつて、長い付き合いでわかるから口には出さないけどさ。

「それと僕が帰つてきた後、クロームを迎えに行くのでそちらに通わせますから」

「え？クローム？」

「あの子もまともな環境で育つてませんからね。本人が望めばここで一緒に住む予定です」

「そつか、クロームのためにもこの家を用意したんだな。1人にしちや大きいと思つたよ。」

「先程も言いましたが、今更僕が小学生に混じる気はありません。だから頼みましたよ」「わかつた。オレも女だし、前より助けれるとと思う」

「……そうでしたね。時々忘れそうになります」

「あははと笑う。小学校は私服つていうのもあつて、スカートは履かないからなあ。

「君はその口調をどうにかする気はないのです？」

「それこそ、今更じyan。それにオレが私とか言つたら、気持ち悪くねえ？」

「たしかに。僕が一番ダメージを受けそうです」

「そうかもとオレはまた笑つてると骸が食事を終えた。だから話も終わりだ。骸は食

事の間だけ、文句も言わずに付き合つてくれるから。

「帰つてきたら顔ぐらい出せよ」

「もちろんです。あなたの家にせびりに行くつもりですから」

「はは。母さんは喜んで作つてくれるよ」

「母さんは骸のことを幼馴染とか思つてるだろうし。

「ではまた会いましょう」

パタンとしまった扉に寂しさを覚える。わざわざ付き合つてくれてる骸のためにも、山本と接触した方がいいのかなーと思う。でもオレと関わつたら野球出来なくなるかもしれないし……。せつかく家綱は人気者の山本にはいい印象は抱いてないのに。やつぱり関わらない方がいいよなーと思いながらオレは家についた。

4

「ツナ、また見てるの？」

黒川の言葉にハッとオレは我に返つた。

「今日もツーちゃんは山本君の応援してるんだね」

「うん。そうなんだ」

別に隠すことじやないから、素直に認める。山本にはずっと野球をして欲しかつたから、見ているのが好きなんだ。

ちなみにオレに話しかけてきたのは、黒川と京子ちゃん。幼稚園から一緒にオレがどこでも寝るから、小さい時からしつかりしていた黒川がほつとけないつて面倒見てくれたのがきつかけ。

京子ちゃんは黒川と仲良かつたのもあつたけど、髪の色のこともあつたと思う。オレも京子ちゃんも変わつた色をしてるからね。みんな話しかけづらそうにしていたもん。

最初、京子ちゃんはツナちゃんつて呼んでくれたんだけど、オレがゾワつてしまつたから変えてもらつた。ツナちゃんつて呼ばれた時、真つ白い人が思い浮かんだからだと思う。だから呼び捨てか、ツーちゃんなら母さんで慣れてるからどつちかにしてつて頼ん

だんだ。

「はあ。もつたいないわ」

「え？ 何が？」

京子ちゃんと一緒に首を傾げれば、黒川はまた溜息を吐いた。

「いい、あんたはね。美人で可愛い、勉強もスポーツもできる。ちょっとドジだけど、そういうところがあつたほうがポイントが高いの」

ますます黒川が何を言いたいのかわからなくて首をかしげる。

「あんたがいいっていう男が多いのに、そのあんたが見てる男は野球一筋でなーにもわかつてないのよ！」

「大げさな。それにそういうところが山本のいいところだよ」

オレの言葉になぜか黒川は首をふつた。

「あんたが男なら私が付き合ってたわ」

ハハハ……。それは絶対ないよ、黒川……。

「花の言いたいこともちよつとわかつたかも。ツーちゃんは山本君を見てるだけで全然話しかけないんだもん」

「いや、それは邪魔しちゃ悪いから」

「なに、この可愛い子！」

黒川に抱きしめられながら、そんな変なこと言つたつけ?と思う。

「オレは見てるだけでいいんだ」

今日も山本が野球頑張つて見るなつて見れるだけで十分だよ。あ、また打つた。やっぱりすごいなー、山本は。

「なんでこう不器用なのかしら……」

山本の野球を見ていたオレは黒川の呟きは聞こえていなかつた。

今日は野球部の活動はないことを確認したオレは帰ろうとしたところで山本に話しかけられた。

「沢田」

「……えっ、なに?」

山本に沢田つて呼ばれるのは地味にショックだ……。

「今週の日曜、ここで野球の練習試合するぜ」

「そうなの!?」

「ああ」

「わー、ありがとう！山本！」

良いこと聞いたと喜んでたけど、なんで山本はオレに教えてくれたんだろう。

「お前、野球好きなんだろ？ずっと見てるの知ってるのな！」

「ごめん！山本！オレ、山本の集中の邪魔しちゃってたんだ！」

やつぱりオレ疫病神かも！と頭を抱えると、山本は笑った。

「ハハツ、逆だぜ。お前、熱心に見てるだろ？だから不甲斐ないどこ見せられねーなって
気合いが入るんだ」

山本、やつぱカツコいい！とオレが思つてると、周りにいるみんなも同じこと思つた
のか、キャーキャー聞こえる。

「つつても、オレはまだ一年だから試合に出れるかわからんねーけどなー」

そつか。忘れてたけど、山本は一年なんだ。上級生と同じぐらい打つてるからつてだけ
で試合に出れるとは限らないんだ。

「今回の試合は無理でも、山本ならすぐにレギュラー取れるよ」

「お？そこまで言われたら期待に応えるしかねーな」

「あ、でも怪我には気をつけてよ」

「わかってるつて」

今世でこんなにも山本と話せたの初めてだつたんだ。だからちょっと浮かれていた

んだ。

「あ、あのさ……山本、もし良かつたら……」

「ん？」

ゴクつてオレが喉を鳴らしていると、いつのまにかクラス中がオレ達のことを見ていることに気付いた。

「わっ。ごめん！ オレ、うるさかつたよね！」

オレ、なに言おうとしてたのー！ 山本とは関わらない方がいいって考えてたじやん！

「ツナ！ もうそこまで言つたのよ！ 最後まで言つちやいなさい！」

「うえつ、でも……」

「ツーちゃん、頑張つて！！」

黒川と京子ちゃんだけじゃなくて、みんながオレに言えつて目で訴えてくるー！？

「沢田？ オレになんか言いたいことあるのか？」

ああ、もう知らない！ オレ、言つちやうよ！？

「や、山本！」

「おう？」

「オ、オレと……友達になつてください！！」

バツと頭を下げるが、教室中が静まつたのがわかつた。オレ、終わつた……。山本、嫌

な顔したんだ……。

「ハハッ！もちろんいいぜ！」

「ほんと!?」

「おう！」

やつぱ山本は山本だった——！オレなんかと友達になつてくれるなんて、すっげーい奴！

「あ、隣のクラスに双子の兄が居るからさ、オレのことはツナつて呼んでいいよ」「オツケ。よろしくなつ、ツナ！」

「うん！」

今度、野球の話を聞かせてつて山本と約束出来たし、すっげーいい日だつた。

「黒川、京子ちゃん、ありがとう！オレ、2人のおかげで山本と友達になれたよ！」

「よかつたね！ツーちゃん！」

京子ちゃんと一緒にキヤツキヤツとはしゃいでると、黒川は額に手をおさえてた。

「黒川、大丈夫？体調悪いの!?」

「……大丈夫よ。ただ私があんたの精神年齢を勘違いしただけだから……思つた以上に

低かつただけの話よ」

え。もしかして黒川はオレに前世があると怪しんでたのかな。

「オレ、そんなに高くないよ!?」

「大丈夫、ちゃんとわかつたから」

慌てて否定したけど、大丈夫そう……かな?

「あんた、日曜日見に行くの?」

「もちろん!」

山本は出ないかもしけないけど、練習頑張つてるとと思うし!

「あ、でもあいつ帰つてきたらどうしょー……」

家に来ると思うから長時間出かけてるのはまずいよな。あいつ、母さんとは話すけど家綱とは話さないし。いや、家綱が悪いんだよ? あいつ、骸の髪を見て爆笑したから……。ケイタイがあれば良かつたんだけどな。

「あいつ?」

「えーと、幼馴染?」

「私、会つたことはないわよ。京子は?」

「私も知らないよ」

まあ基本的にオレがあいつの家に行くからね。2人が会うことはないよな。

「すぐ否定したりするけど、いい奴なんだ。人見知りが激しいから、2人は会えるかわかんないけど」

「そう。なら写真は?」

「無理無理。あいつ写真とか絶対うつらない」

骸のことだから幻覚を使って誤魔化しそうだよ。

「おや? 僕の悪口ですか?」

「悪口なんか言うわけないだろ! って、骸ー!? お前、何してんの!?」

「ここから! 窓から入ってくるなよ!?

「あなたが帰ってきたら顔を見せろって言つたのでしよう」

「いや、そうだけどさ」

学校に来るとは思わないじゃん!

「それより手伝つてください」

「どうしたの!?

「あの子と買い出しです。僕より君の方が適任でしそう」

「わ、急いでそつちへ行くよ!」

今ここにいるのは本物だ。骸のことだから、幻覚を置いていつてると思うけど、ク

ロームは不安だと思うし。

「ごめん! 黒川、京子ちゃん、オレもう帰るね!」

えーっと何を買えばいいんだろう。服とかも絶対ないよな? 父さんが買ってくれた

から一度は着たけど、オレは落ち着かなくてそのままタンスに仕舞われてる服を持つて行こう。クロームなら似合いそうだし。

「骸、お前もオレン家に来て。服とかオレ一人じやそんなに持てないから」

「仕方ありませんね」

そう言いながらも、今もちやつかりオレの手提げ袋を持つてくれるじやん。いやまあそれはオレが鈍臭いからだけど。荷物を持つて走つたらたまに転ぶんだよ……。多分死ぬ気になつた感覚で動いちやうからだと思う。

「先に行つてますよ」

「わかつた！」

大変だー！つて慌てるオレはこの時気付かなかつた。次の日に黒川に骸のことについて詰め寄られるなんて……。

オレの朝は早い。前世では考えれなかつたけど、朝の方がランニングに行きやすいんだ。夜だと母さんが心配するからさ。朝から走つてゐるといつも同じ場所でお兄さんと会う。お兄さんも毎朝走り込みしてゐるからね。

「沢田ツナ！ 今日も極限だな！」

ちよつと意味がわからないけど、なんとなくわかるからオレも笑つて返事をする。

「お兄さんも元気ですね！」

「おう！ そうだ！ 昨日、沢田の知り合いが転校してきたんだつてな！ 京子が仲良くなりたいと嬉しそうに話していたぞ！」

「それは良かったです。クロームも友達欲しいと思うから」

「ああ！ 極限青春だ！！」

お兄さんは変わらないなあと思いながら別れる。その場で足踏みしながら話しているけど、あんまり止まるのは良くないから。お兄さんも走りながら話すのはダメだと思つてゐるから、毎日ちよつとずつ話して終わり。前の時は不良に絡まれて額に怪我をしたつて聞いたけど、今のところは不良に目をつけられてる様子はない。あれかな、オレ

に負けられないな！って言いながら必死に走つてゐるからかな。まあまだどうなるかわからないから、油断しないようにしよう。

それにもクローム、大丈夫かな。予定通りクロームは六道風という名前で転校して來た。一応、骸と兄妹つていう設定らしい。クロームは骸とオレがつけたあだ名つてこととした。オレのことはツナつて呼ぶように頼んで、骸は……骸様だつたけど、オレ達とは普通に話せてたからこれなら大丈夫かなつて思つてたんだ。でも学校では骸も居ないし、オレにべつたり。やつぱまだ小さいのに自分の意思で家を出たんだから、甘くみるのは間違いだつた。

今日も迎えに行つた方がいいかなと考へる。クロームは可愛いから、いろんな奴が寄つて来るんだよな。もちろんオレが防波堤になるつもりだけど、黒川の話だと喜ばせてるだけつて言うんだよ。オレ、そんなにナメられてるのかな……。あまりに酷いなら、骸が学校まで迎えに来るつて言つてたけど、あいつはあいつで大変なんだよな。

この前出かけた時に、あいつ炎真のお父さんと接触したらしいんだよ。川平さんは炎真の顔がわからないからつてのもあるけど、まさかすぐに骸が見つけるとは思わなかつた。どうするつもりなのかわからぬいけど、あいつ炎真のことは任せろつて言うし。今度の3連休にオレがアリアさんのおしゃぶりに大量の炎を込めるつていうのもあるんだろうけど。骸の負担が多すぎないか？って思うんだよな。炎真達を守るのは自分の

身を守ることに？がるのですつて骸はいうけどさー。

「はあ」

「ツナ、ため息吐いてつと怪我するのな」

「あ、山本！おはよう！そうだね、ありがとう。気をつけるよ」

今日は山本とも会つた。山本は日によつて走る場所を変えるみたいで、会う日と会わない日があるんだ。

「で、どうしたんだ？」

「いやさ、やりたいこといっぱいあるのに、オレ器用じやないからさ。何をどこからすればいいのかなつて」

「んー、1個ずつやつていくしかねーんじやね？オレも野球の試合に出たいけど、体力ねーと先輩についていけないつて思つて毎日走り込みしてゐるのな。遠回りに見えつけど、ツナはちゃんと進んでるつて」

「……うん！ありがとう、山本！」

「いいつてことよ」

やつぱ山本はすげー。ちょっとオレ氣が楽になつたもん。

「オレ、もつと鍛えるよ」

「ははっ。ツナは強くなりてーのか」

「うん。それが一番の近道だと思うんだ」

「そつかそつか」

なにかあつた時にみんなを守る力がいる。オレがみんなを守るんだ。

「ツナ……？」

「つて、ごめん。時間だ！」

「えつと……もうそんな時間か？」

「や、まだ大丈夫。オレはクローム迎えに行くからさ。山本も遅刻しないように気をつけてね」

「おう。また学校で会おうぜ」

バイバイと手を振つて山本と別れ、オレはダッショウした。急がないと遅刻するー!!

家に帰つたオレはシャワーを浴びて、朝ご飯を食べる。家綱はまだ起きていないらしい。……こういうだらし無い感じは前世のオレとそつくりだ。まあオレと違つて家綱は遅刻しないけど。

「ツーちゃん悪いけど、イツ君起こしてくれる? 母さんが言つても起きないのよ」「う、うん……」

母さんはオレが言えば起きるとわかつてゐから頼むけど、あんまり気が進まないんだよなー。母さんが困るから起こすけど。

「家綱、起きてる？ 起きてるなら入らないよ」

ノックしたけど返事はない。今日は二度寝したな。仕方ないから、布団に近寄つて声をかける。

「そろそろ起きないと遅刻するよ、家綱。おーい、家綱？」

「……うるせーー！ 見てわかんねーのかよ、起きてるだろうが！」

さつきまで寝てたじやん……つてツツコミしたいけど、グツと我慢する。オレが言い返した方が家綱は機嫌が悪くなるから。

「着替えるんだ、出て行け！」

「ゞ、ゞめん」

慌てて部屋を出る。まああそこまで怒鳴つてたなら、完全に目が覚めただろう。

「母さん、家綱起きたよ。多分もうすぐ来るよ」

「ありがとうね、ツーちゃん」

よしよしと母さんに頭を撫でられた。あいつ怒鳴つてたからな、さつきの声が聞こえてたのかも。母さんは自分が言つても起きないのもあると思うけど、オレが全然気にしてないから頼むんだろうな。はつきり言つて、ヒバリさんが怒つた時に比べれば家綱

の怒りはなんてことないから……。

ヒバリさんで思い出した。骸、あれから会ったのかな。……あいつの性格を考へてると、会つてそうだ。今度やり過ぎてないか確認した方がいいのかなあ。でも行けばヒバリさんに目をつけられる気がする。早いか遅いかの違いつてオレの超直感が訴えているのは気のせいと思いたい。

さよなら、オレの平穏ライフ。……川平さんに会いに行つた瞬間から、平穏は諦めたけど。

「つと、母さん。オレそろそろ行くね。クローム迎えに行くんだ」

「そうね。今度連れてきてね。骸君と一緒に」

「うん。わ、弁当もありがとう」

母さん、骸とクロームの分まで用意してくれてるじやん。母さんのことだから、これからはずつと作ってくれるんだろうな。

「重いから氣をつけてね」

「わかつた！母さん、いつもありがとうございます！」

うわー、ほんとオレ母さんの子どもで良かつた。オレだけじや絶対そこまで気がまわらなかつたよ。クロームはまだしも、骸も母さんのこと気に入つてゐみたいだし、変われば変わるもんだなーって思いながらオレは骸の家に向かつた。

学校では、クロームの防波堤をしつつ京子ちゃんと黒川との間に入る。多分恥ずかしがつてゐるだけだと思うけど、まだ会話は成立していない。京子ちゃんはおつとりしてゐるし、黒川は精神年齢高くて気にしてないから何とかなつてゐる。オレの超直感だと、今回骸はクロームを戦士にする気はなさそうなんだよな。そりやクロームの体質のことはあるから、危険回避っていう意味で少しは幻術のやり方を教えるみたいだけど。本人が望まない限り、骸はクロームに平穀を歩んで欲しいのかも。オレの山本みたいな感じなんだらうな。だから早い内から京子ちゃん達と会わせたと思う。未来を選べるように。

「オレ達、歳とつたなあ」

しみじみ呟いてゐると、黒川に何言つてんのよつてツツコミされた。いやでもさ、そ
う思うんだつて。オレは2人で霧の守護者つて感覺だつたけど、今回は違うつて思つた
よ。だつて骸と一緒にクロームを見て和むもん。流石オレ達の紅一点だつた。問題児
が多い守護者のなかで、唯一の癒し杵だつた凄さを改めて思い知つたよ。オレ、父親?
いや母親の気分だよ。まあこんなこと黒川達には説明できないから笑つて誤魔化すけ
どさ。

不思議そうな顔をしてオレのことを見ているクロームの頭を撫でる。なんでパイ
ナッポーにしたのかな。クロームが嬉しそうだから何も言わないけど。

ちなみに家綱はクロームのことを可愛いと思つてゐるのか、チラチラとクロームを見にくる。あいつ隣のクラスだからさ、休憩時間になつたらわざわざやつてくるんだ。オレと視線があれば、そらすけど。珍しくオレと骸との意見が完全一致して、家綱にクロームには近づけさせないという協定を結んだ。他の男子にはあまり効果がないけど、家綱にはオレの防波堤は効いてるみたいでちようど良かつたよ。

そんなことをしつつ授業を真面目に受ける。ほとんどわかることが多いけど、理科とかだと結構忘れてて面白い。そんな名前だつたー！って懐かしく思うから意外と飽きずに過ごせてる。女の子3人はちゃんと真面目に授業を聞いてるけど、山本はよく寝ている。この時からだつたんだつてちょっと苦笑いしながら、オレがまとめたノート貸してあげようかなつて考え中。山本はやればできるし、勉強のせいで野球が疎かになるのはオレが許しません！

今日は前々から計画していたアリアさんのおしゃぶりに炎を込める日だ。最初、オレはまた飛行機で移動するのかなって思つたけど、川平さんの力で夢で会うことなつたんだ。骸の時と違つてわざわざ会いにいく必要はないからね。

「本当に出来るのですか？」

「うーん、多分……？」

骸が心配するのはわかる。オレ、結局手に炎を灯すことは出来なかつたんだ。おしゃぶりを通せば出来ると思うんだけど、オレの超直感はユニほど正確にわからない。大空のおしゃぶりを見ればはつきりすると思う。以前、川平さんに白のおしゃぶりを見せてもらつたけど、オレの超直感は何も反応しなかつたから。

「まあやるだけやつてみるよ」

「……そうですね」

夢で会うのは川平さんとオレだけ。出来るだけ大空の炎以外の人は入れたくないのもあるし、オレが戻つてきた後のこともある。絶対疲れて倒れると思うから。だから連休中にして、今日と明日は骸ん家に泊まることになつてる。川平さんはもしオレが炎を

込められれば、しばらくアリアさんから目を離せれないからね。だから事情を知っている2人に頼むしかないんだ。熱とか出なきやいいんだけど……。

「私の方は準備出来ましたよ」

「……めちゃくちゃ怪しいね」

川平さんはリボーンが鉄の帽子の男つて呼んでいた姿に変わったから、ちょっとビビった。

「間違つても私を川平さんと呼ばないでください」

「うん、わかつた。川平さんもオレの名呼ばないでね」

「もちろんですとも」

やつぱその姿でいつものノリで話されるとすっげー違和感。クロームもちょっと怖いのか、骸の後ろに隠れてるし。

「よし、オレの方も準備いいよ！」

エストラネーオファミリーに乗り込んだ時と同じ服を着た。もちろんフードは深くかぶつてる。あの時も今回も川平さんが幻術でいろいろ誤魔化してくれてるけど、もし見破られたら困るからさ。実際、骸には効かなかつたし。……いや、それはあいつが凄すぎるだけな気もするけど。

ベッドに寝転ぶ前にオレは頬をパンパンと叩く。こうやつて気合いを入れないと、怖

気付きそうになるんだよ。自分の全盛期を知つてゐるからこそ、今の自分を見ると不安しかないから。

「じゃ行つてくる」

「……氣をつけて」

「早く終わらせた方がいいですよ。明後日の夕方までしか僕のベッドは貸しませんから」

「はは、ありがとう」

クロームの頭をポンと撫でてからオレは目をとじた。

川平さんが何かしたのか、オレはもう夢の中にいた。さつきの骸の言葉を思い出し、クスクス笑いながらオレは進んでいく。あの言い方、オレが絶対成功させるつて言つてるようなものじやん。

ここは骸の夢に入つてしまつた感覚に似てるかも。オレの意思はあるんだけど、動けるかはわからない感じだ。オレが動けるかは川平さんが決定権を持つてるからそういうのかもしれない。

リボーンもこんな感じだつたのかなつて思えるぐらい、心に余裕がある。……骸のおかげかな。

オレが川平さんの後ろをついていくと、ユニに似た人が待つてゐた。

「私のためにありがとうございます」

何も説明していないのに、彼女はそう言つた。……ああ、予知で全部知つていたんだ。

「ふむ。どうやら君の仮説は間違いなかつたようだ」

「みたいですね」

大空のおしゃぶりを見ても、オレの超直感も警告を出さなかつた。

アリアさんはオレがおしゃぶりに手を伸ばそうとしても、何も言わなかつた。ただオレがおしゃぶりを掴むと、その上から手を重ねた。

「オレが今出来る全てを込めます。だから……諦めないで」

リボーンみたいに口クな死に方を期待していないなんて思わないで。この呪いは解けるんだから。

ボツッとオレの額に炎が灯る。オレの想いに反応するかのように、おしゃぶりからオレの炎が吹き出す。しばらくそのまま炎を放出していると、おしゃぶりにどんどん吸い込まれていく。大空は頂点に立つからなのか、呪いの負担も大きい。リボーン達が炎を消費しているのに比べて、大空は多分量が多いんだ。だから寿命が短くなる。

オレが炎を込め続けていると、アリアさんは重ねていた手に力を込めて、おしゃぶりからオレの手を離させた。

「もう十分過ぎるぐらいよ。これ以上はあなたがアルコバレーノになつてしまふわ」

大空のおしゃぶりがオレを選ぶてことなのかもしれない。もう一度オレが手を伸ばそうとすれば、アリアさんに首を振られ止められた。

「ありがとう」

ふわっと笑った姿が、ユニが消えた時にそつくりでオレは唇を噛んで耐えた。
「とても優しい子。だからどうか自分を傷つけないで」

口に手を添えられた。これ以上オレが噛まないように……。
悔しい。

オレ一人が純度の高い炎を出せても全然足りない。前世ではリングに炎を灯せる人は限られていた。オレ達は簡単に灯したけど、そもそもそれが難しいことなんだ。中学の時に10年後へ行つた時は使える人が多かつたけど、あれは白蘭の力があつたからだつた。まして呪いを解くほどの純度の高い炎を出せる人はもつと限られてるし、それに耐えうるリングも少ない。

グッと歯を食いしばり、我慢する。オレが今泣くのはダメだ。この人の前で泣くのは絶対に間違つてる。

「……必ず。必ず、呪いは解きます」

プツンと唐突に夢の世界が終わつた。

「おや？ 随分早かつたですね」

「む、くろ……？」

「ええ、そうですよ」

そつか、もう我慢しなくていいんだ……。

オレが目を両腕で隠していると、パサつと何かが乗った。……骸がタオルをかけてくれたみたいだ。

「……オレ、お前の言つた通り甘くてバカだつた」

「そうですね」

「呪いは解きたい。でも、オレの世界に巻き込みたくないんだつ」

「あなたならそうでしょうね」

オレの言葉に骸は呆れることもなく、ただ肯定した。それがオレだと言つてるかのようだ。

「そもそもあなたがいろいろと考えていても、あの赤ん坊はやつてきて引っ搔き回しますよ」

「う。そうかも……」

「少し前にも言いましたが、明後日の昼までしかこのベッドは貸しませんから。うだうだ考えるよりも先に休んだ方が賢明ですよ」

「……ん、そうする。骸、サンキユ」

オレはこの時、タオルの向こう側で、骸はやれやれと肩をすくめてるのかなって思つたんだ。

次の日、案の定熱を出したオレは散々骸に文句を言われながらも看病してもらつた。今度高級チョコ持つていこうと、オレは熱にうなされながらもお小遣いの計算をしていた。

数日後、大空のアルコバレーノは晴のアルコバレーノに会いに来ていた。

「ちやおつス」

「ひさしぶりね、リボーン」

「随分機嫌がいいみたいじやねーか、アリア」

あら、わかるかしら?とアリアはリボーンにウインクする。明るい予知を見れたのかもしれねーなどリボーンは考える。彼女が予知のせいで苦しんでいることに気付いていたから。

「今日はね、あなたに伝えたいことがあつて來たの」

「言つてみろ」

「私達の呪い、解けるかも知れないわ」

全く想像していなかつた内容に、また軽はずみで言えるはずのない内容だからこそ、リボーンは殺しの時のような雰囲気を無意識に出していた。

「みんなには秘密よ」

「……なんでだ？」

「その未来が見えたわけじゃないの。ただ、あの子の言葉を信じてみようと思えたの」

あの子って誰だ？とリボーンが聞いてもアリアは笑うだけだ。

「信じていいと思うわよ。あれほどあたたかい炎、私は知らないわ」

その炎を感じて、アリアの機嫌がいいのかとリボーンは気付いた。

「どうしてオレを選んだんだ？」

アリアはその質問を待つていたかのように微笑んだ。

「あなたとその子が笑い合つていたから」

リボーンは自分のその姿を想像出来なかつたのか、珍しく驚き固まつていた。

「あなたの未来は明るいわ。私に諦めないでつてあの子は言つたけど、あなたに伝えたかつた言葉のように思えたの」

「……そうか。サンキューな」

「気にしなくていいわよ。私、とつても機嫌がいいもの！」

アリアの笑顔を見て、ほんの少しひボーンも笑ったのだった。

今日は朝から変だ。お兄さんには連休中は走り込みに行けないと説明していたのに、会つて早々肩をベシベシ叩かれるし、クロームはいつも増してオレにべつたりだし。京子ちゃんと黒川は弁当のおかずをわけてくれた。それも確か2人の大好物。他にも休憩時間には山本にキャッチボールを誘われた。なんだなんだ?と疑問に思つてゐ間に放課後になつていた。

「ツーチyan、今から遊ばない?もちろんクロームちゃんも一緒に」

「あ、うん。いい……ん?」

「なに、なんか予定あるの?」

予定はないんだけど、オレの超直感が何か訴えてる。

「ごめん!·ちよつと急用!·クロームはみんなと帰つて

クロームは絶対離さないというようにオレの腕を掴み、フルフルと首を振つた。ひ、引き離すことなんて出来ない……。

「あーうー。わかつた。走るけどいい?」

「……うんつ」

急いだ方がいい氣がするから、京子ちゃんと黒川にまた明日とだけ伝えてオレは超直感に従つて走る。クロームは大丈夫かなと何度も振り返るけど、何とかついて来ている。でもこれ以上遠ければ一度止まつた方がいいかもと思つたところで、骸の姿が見えた。

「骸!!」

「おや？ どうかしたのですか？ 慌てて」

骸が三叉槍を持つているから敵!? と警戒すれば、相手はヒバリさんだった。

「お前、やりすぎだろ！」

ヒバリさん汗だくじやん!?

「彼がいつにも増してしつこいせいです」

あくまでヒバリさんが悪いという骸にオレは頭を抱えた。

「……咬み……殺す」

「わー！ もう動かないでください！ ええっと……」

「彼は雲雀恭弥です」

「ヒバリさん！ もうやめましょよ！」

骸から良く名前を言わなかつたですねっていう視線を向けられた。オレだってそれぐらいわかつてるつての！

「僕に……命令しないで……」

ヒバリさんは小さくてもヒバリさんだつた！話すのも辛いはずなのに……。でもオレの予想は正しかつたみたいで、ヒバリさんはオレにトンファーを振るおうとしたところで充電が切れたように倒れ込んだ。

「つと。なんでぶつ倒れるまでやるかなあ……」

ヒバリさんを支えながら溜息を吐いていると、骸がクロームを連れて帰ろうとするからオレは慌てた。

「お前、ここで帰んの!?」

「ええ。行きますよ、クローム」

ありえねーと骸の行動に引いていると、クロームがオレと骸を交互にみて困っていたからオレは大丈夫だからと言つて骸と帰つてもらつた。

「オレン家がいいよな？」

ヒバリさんの家は知つてゐるけど、そこに連れて行くのはおかしいだろうし。オレは落ちているトンファーをランドセルにしまつて前に背負いなおして、ヒバリさんをおんぶする。今日ほど鍛えてて良かつたと思つた日はないよ……。それでもオレの家につくころには疲れた。死ぬ気になるわけには行かなかつたから。

「ただいまー」

声をかけたけど母さんの反応はない。出かけてるみたいだ。家綱は居るかも知れないけど、オレの部屋に運ぶから文句言わないだろう。なんとかヒバリさんをベッドに寝かせたら、オレも休憩。パタパタ服をあおぎながら、ヒバリさんの様子を見る。ちゃんと骸は手加減しているようでちよつと汚れがついてるけど、怪我はないみたいだ。

「えーっとタオル、タオル……」

オレが濡れタオルを取りに行つてる間にヒバリさんは起きていた。

「…………、どこ？」

「オレン家ですよ。骸んどこじゃないです」

絶対ヒバリさんは骸の世話になるのは嫌だと思つたから教えると「そう……」と呟いた。ヒバリさん、ちよつと元気ない？やつぱまだ疲れてるのかな？

「汗で気持ち悪いですよね？オレの服どうぞ使ってください。オレ男物も持つてるんで」

濡れタオル渡した後、服を見せれば問題なかつたみたいで頷いた。うわー、まだ小さいからかヒバリさんが素直だ……。

ジロジロ見られるのは嫌だと思つたから、ヒバリさんが着替えてる間は後ろを向きながらストレッチをする。ちよつと無理したからケアしとかないと。しばらくすると着替え終わつたみたいで、オレに声をかけてきた。

「……ねえ、君。あれとどんな関係?」

「え? 骸のことですよね。幼馴染ですよ」

「ふーん」

骸のことを知りたいんだろうな。あいつのことだから調べてもわからなくしてそう。「ヒバリさん、大変でしょ。あいつに目をつけられて」

「……逆、じゃないの」

「あいつわかりにくいから。ヒバリさんのこと相当気に入つてますよ」

じやなきや、幻術使つて誤魔化してる。ヒバリさんが見つけるようにしてるよ。それもヒバリさんが探さなきや見つくれないレベルで。それなのに絡んで来る方が悪いってあいつは言うんだよ。

「オレが相手をすればいいんですけど、オレ今武器ないんで。あいつ変なところで律儀だからオレに相手しろって言わないんですけど」

一度だけ骸がオレのグローブを有幻覚で出したけど、オレの超直感のせいで維持するのは大変だつたらしい。一応その状態で柔の炎だけでだけどX-BURNERとかは使えた。けど、維持している骸と戦うのは無理だし、骸が倒した方が現実的で使うことはないと思う。

「……君も強いんだ」

うわっ、オレやつちやつた!?……誤魔化してももう意味ないよな。

「あははは……」

ヒバリさんにジツと見られて笑うしかない。オレ、骸と違つて家までバレたから絶対逃げねー。

「君達、何者なの」

流石ヒバリさん……オレ達が普通じやないつて気付いているよ……。

「うーん、ヒバリさんは関係ありませんよね?……や、そういう意味じやなくて。オレ達が何者でもヒバリさんが咬み殺したいのは変わらないんじやないかなって」

「……そうだよ」

「ですよね」

なんか今日のヒバリさん変だよなーと思つていると、立ち上がつた。帰るのかな?

「あ、待つてください。ヒバリさん!」

「なに」

「トンファー忘れてます!」

慌ててランドセルから出して見せたけど、ヒバリさんが手を伸ばすことはなかつた。

「いい。君にあげる」

「え!」

「これ以外にも持つてるから」

「まだ持つてるんだ……。じゃなくて、なんでオレにトンファーを？」

「何も持つていないよりはいいでしょ」

「あ。オレが今武器を持つてないって言つたからかな。

「でもオレ、トンファー使えませんよ」

銃の使い方ぐらいは覚えろつてリボーンに言われて習つたことはあるけど、他の武器は使つたことがないよ。

「……毎週日曜日、開けときなよ」

「へ？」

「さつき君が言つたのに？僕がこのまま逃すはずがない」

相手しろつてことですね……、ハハハ。

「……それ持つてきたなら、少しほは使い方教えてあげる」

「えーーー！」

「なに」

「いえ、ちょっと驚いただけです」

10年後の世界に行つた時に家庭教師してもらつたことがあるけど、まさかこのタイミングで教えてもらうことになるとは思わなかつた……。

「えっと、よろしくお願ひします」

いつもなら恐れ多いとか、嫌だなつて思うのに、どうしてかわからないけど日曜日が待ち遠しく感じる。

「……また連絡する。じゃあね」

「は、はい。わかりました」

あ、玄関から帰るんだ。いつから窓が出入り口になるんだろう……。

次の日曜日、ほとんど実戦形式だつたけどヒバリさんにトンファーの使い方を教えてもらつた。

「……君」

「はい？」

「才能ないね」

「よく言われます……」

なんとか形にしただけと、早々に気付かれてしまつて、ヒバリさんにリボーンと同じような反応をされた。相変わらずダメツナだつたー！

「骸、頼むつて」

「嫌です」

そんなーと項垂れる。オレのマネをしたのか、クロームが頭を撫でてくれた。ありがとう、クローム。

「あーもうどうしよー」

「どうせ向こうから訪ねて来るのです。ほつといても問題ありません」

「でも絶対無茶してはるつて」

「知りません」

オレと骸がもめている内容は獄寺君についてだ。骸が獄寺君を見つけた時、ちょうど獄寺君が城から出るタイミングだつた。

それから獄寺君の行動を予想しようとしたけど、この頃の獄寺君は一匹狼。骸がめんどくさいと思うぐらい、好き勝手行動していた。獄寺君の場合は直接会わないと止まるようなタイプじゃないつてわかっているから、オレの移動時間を考えないといけない。更にオレは何日も日本を離れることは出来ない。会おうと思つても結構難しい。

骸はいろんなマフィアのことも探つてるし、炎真のことも任せているから負担が多いのはわかっているけどさ。

もう1人の頼みの綱の川平さんはアリアさんの結果から、Aランクオーバーのリングを探しに世界中をまわっている。リングは代々受け継がれる場合ほどランクが高いことが多い。手に入れるのは至難の技だ。けど、抗争や血筋の関係から持ち手がなくなつたリングもあるんじやなかつてことで、川平さんの記憶を元に探してもらつてるんだ。当然長旅になる。オレが小学生の内に動くしかないんだ。中学に通い始めるとリボーンがやつてきて、いろいろと起きるのはわかりきつてるから。

オレが動ければいいけど、母さんになんて言い訳するのか。例え母さんがうまくいつたとしても、長期間つてなると父さんが動きそう。絶対護衛をつけようとする。それに骸の話だと、ちょうど今ボンゴレ10代目の後継者争いが始まつた。もしオレの存在がマフィアにバレれば、一般人には手を出さないとは思うけど母さんと家綱は巻き込まれる。家綱は多分巻き込まれるから諦めがつくけど、母さんが巻き込まれるのは絶対ダメ。今までの父さんの努力を思うと余計に。

「誰でもいいからボンゴレ継いでくれないかなあ」

「クフフ。けしかけましようか？」

「なんでそういうのにはヤル気を出すんだよ……。」

「それも1つの道ですからね」

骸の言いたいこともわかる。川平さんが高ランクのリングを見つけてくれるなら、別にボンゴレリングに拘る必要はなくなる。XANXUS以外の候補なら、血筋の問題もないと思うし。

「でもオレそういうの大っ嫌いなんだよ」

「知つてますよ。言つてみただけです」

このまま何もしなければ、ボス候補の人達は死ぬのはわかってるんだけど、ここでオレが手を出すのは違うような。骸のために動いたオレが思うのもなんだと思うかもしれないけど。

「またくだらないことでウダウダと考え込んでるのですか。本当に君はバカですね」

「いやだつてさあ……、オレ好き勝手してるじやん」

「プリーモに好きにせよと言われたのでしよう。いいではないですか。それに……」「それに？」

「……簡単にボンゴレリングを手に入れられるのは癪です」

「ああ、そつか。オレもそうだったのかもしれない。」

「いろいろあつたもんなあ……」

「主に君が一人バタバタしてましたけどね」

ハハハ……そうかもしれない。苦労して手に入れたボンゴレリング碎いた未来もあつたし……。

「話を戻しますよ。彼にはこの経験も必要だと思つて、獄寺隼人のことは諦めなさい」
すぐに返事が出来ないオレを見て、骸はため息を吐いた。

「言い方を変えましょ。今君が彼を救つたとします。彼の性格から君についてくるでしょう。ですが、候補にもあがつていなし今の君が彼と一緒にいることは周りを危険にさらすことになります」

「…………骸、ごめん」

オレのためにわざわざ嫌な役を買つてくれた。ほんとオレつて成長しないよなあ
……。

「あなたの立ち位置は難しいですからね。バカな君には難しいのでしよう」

わかりにくいけどフオローもされちゃつたよ……。パンパンと頬を叩いて顔をあげる。骸にそこまで言わせておいて、これ以上うじうじするのはダメだ。

「ん、もう大丈夫」

「そうですか」

「クロームもごめん。よくわかんないことばつかり話して」

「…………大丈夫」

ありがとうという意味も込めて頭を撫でる。寂しかったと思うし、今から遊ぼうと誘つてみる。

「それなら、買い物に付き合つてあげてください」

「何か欲しいものあるの？」

オレが聞けば、クロームは首を横にふつた。でも骸がそう言つたなら何かあるよな？「料理をしてみたいと思つたのでしよう？僕も助かりますし、君が居る時ならそこまで変なものは出来ないでしよう」

「……骸様」

話が完結しちやつたけど、オレそこまで料理うまくないんだけど……。そりや母さんの手伝いはするから、出来なくはないけどさ。女になつてから覚えたから教えるほどじゃないよ、絶対。

「何も今すぐ作れとは言いませんよ。何しろこの家には炊飯器すらありませんから」「つて、そこからー！」

「僕が料理すると思つていたのですか？」

うん、思わない。チヨコばっかり食べる奴がするわけない。

「つてことは調味料とかもないのか？」

「チヨコレートはありますよ」

質問したオレが間違いだつた。

「勝手に見るけどいいよな?」

「ええ。かまいません」

クロームと一緒に台所へ行つて、何もねえ……とショックを受けながら、2人でメモする。ほとんどオレが思いついたけど、クロームもちよつとは調べていたみたいで不思議 そうな顔はしなかつた。

骸の食生活はクロームにかかつてるよ……。つてことは教えるオレにも責任重大!? 母さんに頼みたいけど、クロームに家綱を近づけたくない……。オレが母さんに習うしかないよな?

オレが作れればビアンキを台所に近づけさせない理由にもなるし、覚えて損はないと思うことにしよう……。

小話 1

やつぱオレって抜けてる。

明日は恒例になつてしまつたヒバリさんと手合わせの日。……違つた。手合わせはオレもなんか楽しくなつてきたから、そんな風に思わなくていいんだよ。身体に染み付いた癖だよねえ。ヒバリさん、前の時怖がつたもんない。

そりやまだヒバリさんがオレを咬み殺せそうにないのもあるけど、ちよつと取つつきやすいんだよ。理不尽の塊じやない。理不尽だけど。

つて、また思考がズレた。ええつと、毎週日曜日に当たり前のように会つてゐるから先週気付かなかつたんだよね。明日、ヒバリさんの誕生日だから手合わせ出来ないんじやない？ 確かヒバリさん家は名家だつたから。家も大きいし、間違いないはず。

ちよつとアバウトなのは、前の時にオレはあえて調べなかつたから。リボーンや父さんは知つていたと思うけど、そういうのオレは気にしなかつたから。なにか家のことで問題があれば、ヒバリさんが言うつて。まあ問題があつてもヒバリさんは死んでもオレには言わない氣がするけど。誕生日だつてオレが聞いたわけじやないしね。確かハルが聞きまわつて知つたんだよ。ヒバリさんが隠してゐるわけじやないからオレも知つ

てただけ。

んー、まあいつか。ダメならオレン家に電話するだろうし。ヒバリさんのことだから、調べればわかるはず。最悪草壁さんが待ち合わせ場所に居るよね。

なんて思つてた時期……瞬間がオレにもありました。

「ええええ!?」

「なに」

普通に待ち合わせ場所に居たよ、この人。

「今日、誕生日ですか、ここに居て……」

もちろんオレはヒバリさんがまだ幼いといつても、家族そろつてお誕生日会しているイメージはないです。だからにらまないでくださいね。オレがそういう意味で言つたんじやないとなんとなく察したのか、ヒバリさんは問題ないよと軽い感じで言つた。

ヒバリさんがそういうなら、オレは気にしなくなつた。ヒバリさんが決めたことだからね。

「それより、僕の誕生日どこで知つたの？」

「いつ!?ええつと、む、骸から……」

「骸、ごめん。今度おごる。オレが心の中で骸にチヨコを捧げていると、ヒバリさんが

溜息を吐いた。……うん、これってばれてるよね。オレがウソついたの。じゃないと、骸にイラついて機嫌悪くなつてははずだから。

ははは……つと目をそらして笑つて誤魔化していると、ヒバリさんが睨んだ気がした。ひい！と殴られないよう、トンファーをかまえる。

けど、いつまでたつても衝撃はこなかつた。

「ヒバリさん……？」

どこか機嫌の悪そうなヒバリさんに恐る恐る声をかける。いや、機嫌が悪いのはオレのせいってわかつてゐるけどね。

「よくわからない、君つて」

「ええつと？」

オレにもわかるように説明してくれないかなーと心の中でお願いする。オレの直感では勝手に誕生日を調べあげたことじやないつて訴えてるからさ。その思いが通じたのか、ヒバリさんは口を開いた。

「強いのに、どうして草食動物のフリするの」

「フリじゃないですよ。オレは根っからのビビリだし、鈍くさいし、……悪いところをあげればキリがありません。そりやケンカはちょっとできるようになつたけど、やりたいとは思わないし……。それでもヒバリさんがオレが強いつて思うなら……譲れないこ

とがあるからです」

オレは恥ずかしくなつて思わず頬をかく。だつて、教えてくれたのはヒバリさんだもん。前のヒバリさんだけど、ヒバリさんにはかわらない。オレがまた迷つたら、ヒバリさんは同じことをする。だつて、ヒバリさんには譲れない誇りを持つてるから。……あまりにもオレが情けなくて失望しちゃつたら教えてくれないかもしれないと。でもなんだかんだいつてヒバリさんは手を伸ばしてくれる気がするんだ。

「……やつぱり、君はよくわからない」

うーん、オレの伝え方が悪かつたのかな。結構がんばつたつもりだつたんだけどなー。あの時、ヒバリさんはどうしてくれつたつけ？

「あ、そうだ！」

「なに」

「オレを見てください！」

……ん？なんか違う気がする。

ヒバリさんが言つたときは、かつこいい感じだつたのに。オレが言つたら、全然かつこよくなない感じになつた。

「……君が考えなしつてことはわかつた」

あああ、やつぱりそんな感じになつたー！

「ちょ、ちょつと待ってください。リベンジさせてください」

「もういいよ」

「オレが嫌なんですって！」

「知らない」

この後すぐにヒバリさんがオレが鬱陶しいと思ったみたいで、トンファーを振るわれた。そのままの流れでいつもの手合わせが始まってしまって、結局オレのリベンジは叶わなかつた。

中1①

今日からオレは中学生になる。オレが外に出れるようになつてすぐ、いろいろと動いてやりきつたからかな。この数年の間、特に大きな事件も起きなかつた。

何かすることあるかもと何度も考えたけどオレの頭では浮かばなくて……。骸にも相談したけど、「君の好きな平穏でしょうに」と呆れられた。……リボーンの影響で平穏が不安になるなんて思いもしなかつたよ。

でも今ならそれがどれだけ幸せなことなのかわかる。

オレはちゃんとリボーンが来たら振り回される覚悟はしていたよ。でもさ、中学初日から平穏が壊されるとは思わなかつたよ……。

「オレって本当にバカ！」

なんでこんなことにと思いながら、オレは学ランに手を通す。……そう、学ランだ。

事の発端はオレが世間話にヒバリさんに言つた言葉。並中の制服が嫌だなつて。

もちろん並中を愛するヒバリさんはその言葉に反応した。でも何年も毎週手合わせしているからか、すぐに咬み殺すような雰囲気は出さなくて、理由を聞いてくれたんだ。

それでオレはスカートだと気になつて動きが制限されそだからつて教えたんだ。小学校では私服だつたからズボンを選んでたからさ。

この時にはもう並中で風紀委員長に君臨して いたヒバリさんは、オレにあつさりと男物でいひつて言つてくれたんだ。

でもその時にはオレはもう制服を予約しちやつてて、ヒバリさんに先に聞けばよかつたつて後悔すれば、それなら手を回してくれるつて言つてくれたんだ。

ヒバリさんがめちゃくちや優しいつてこの時感動したオレに言いたい。この人、オレを風紀委員にする気だよつて。後、届いた時に確認しろつて。

氣付いたのは入学式の日。つまり今日だつたけど、早起きのオレは余裕があつてヒバリさん家に突撃した。この数年の間に知る機会があつたからね。そして運良くヒバリさんはまだ家に居たんだ。

「ふわあ、朝から何？」

「何じやないですよ！ オレの制服学ランだつたんです！」

「僕、君の希望を叶えてあげたよね」

「そうですけど——！」とオレは叫んだ。

もうこうなつたヒバリさんは止まらないと知つていたオレは必死に交渉した。ヒバリさんもオレに他の風紀委員のようなことを求めてなかつたからか、オレの希望が通つ

たのは不幸中の幸いだったよ……。

「あら、ツーちゃん似合うじゃない！」

オレの母さん、やっぱすげー。オレが男物を着ていることにも、同じ中学なのに家綱と制服が違うことにもスルーしたよ……。

「お前、その服なんなの」

今日は入学式だから早めに起きていた家綱にはちゃんとつっこまれた。
「先輩に風紀委員に入るよう言われたんだよ……。風紀委員はみんな学ランだからオレも着てんの」

「優等生は大変だな」

いや、違うから……。一応、風紀委員は不良の集まりだから。ヒバリさんのせいで不良ってなんだっけ？ つてなつてるけど。

後からわかつたけど、家綱は嫌味を言ったつもりだつたらしい。オレが何も反応しないから、舌打ちして席を立つてしまつたから。

「……母さん、ごめん。写真とろうと思つてたよね？」

「大丈夫よ。入学式でとるわ」

「そつか。母さん、後で一緒に撮ろうね」

「ええ」

よしよしと頭を撫でられる。ああもう、本当に母さんには敵わない。オレの気遣いなんてバレバレだつたよ……。

いつものようにクロームを迎えに行くと、骸に爆笑された。その反応を予想していたオレは耐えた。コテンと首をかしげるクロームがオレの癪しだつたよ……。
「はあ……。朝から疲れさせないでください」

「だつたら笑うの我慢しろよ!?」

「これほど面白いことはないので無理ですね」

キツパリと言い切つた骸にイラッとしたがらも、オレは骸の服を見ていた。

「……その制服みると、お前に会つた頃を思い出すよ」

「クフフ。僕もまさかまた着ることになるとは思いませんでしたよ。やはり君といふと面白いですね」

それ、絶対褒めてないだろ。

「僕はそろそろ行きます。ここから黒曜中は遠いですからね」

「お前も並中に行けばよかつたのに」

「絶対にお断りします」

だよなー。骸が中学に通う理由の1つはリボーンから逃れるためだし。骸が学校に

通つてないってバレれば、無理矢理入れようとするだろうからな。動きにくくて嫌つて言つたコイツの考えもわからなくはない。

「まつ、ほどほどにな？」

「クフフフ」

あ、ダメだ。コイツ、絶対何かやらかす。オレが遠い目をしている間に骸は行つてしまつた。

「……はあ。クローム、行こうか」

「うん。……あの」

「どうしたの？」

「骸様、生徒会長になるつて……」

「へ、へえ……」

もう嫌な予感しかしない。なんで生徒会長になるつていう内容なのに、安心できないんだろう……。

「ツナ……？」

「うん、ごめん。撫でさせて」

嫌がらないクロームはほんとオレの癪しだよ……。

オレ達が並中に向かっていると、2年と3年は学ランの意味を知つてゐるからギョツヒ

してオレを見る。……オレ、リーゼントじゃないしね。もちろんヒバリさんは交渉する
までもなく女のオレにはしろって言わなかつたよ。

後、群れてるのもあるのかも。ヒバリさんの前では気をつけるつてことで許しても
らつた。多分ヒバリさんはオレは群れてる方が強いつていうのを気付いてるからだと
思う。いつ知つたかはわからないけど……。

「ツナ？」

「山本！ おはよう！」

「やつぱツナだつたぜ！ なんで学ランなんだ？」

登校途中に山本に会つて、並中の門では京子ちゃんや黒川に会つた。みんなには家綱
にしたような説明をする。黒川は噂を知つていたのか、引きつりながらも誰に誘われた
か聞かれた。

「ヒバリさん」

「……あんたの友好関係どうなつてるのよ」

「そう言われても……」

オレとしては普通なんだけど。

「さつきあんたの兄貴みたけど、普通のブレザーだつたじやない。どうせあんただけ知
り合いなんでしょうに、変だと気付きなさいよ」

言われてみれば家綱はヒバリさんとは会つてない？いつも同じ場所で待ち合わせだからヒバリさんがオレの家に来ることはないもんな。ヒバリさんのことだからオレの事調べてると思うけど……。家綱は昔のオレよりはマシつてだけで、ヒバリさんが興味を持つようなところは無さそうだからかな。

うーん……とオレが考え込んでいると、黒川はため息を吐いていた。ごめん、心配かけて。

「でもまあ大丈夫だよ。ヒバリさんは付き合い長いから。基本的にオレは風紀を乱している人を捕まえるだけでいいって言ってくれたよ」

「えつ、ツナそんなことするのか？」

あれ？なんで山本びっくりしてるんだろう。

「怪我したらあぶねーじやねえか」

「そうだよ！ツーチayan！」

「ああ、それなら大丈夫だよ。オレそこのらの不良より強いから」

「……ツナ、強い。私、知つてる」

「ありがと、クローム。ヒバリさんもそうじやなきや、オレを風紀委員に誘わないって」

ヒバリさんからすれば、未だにトンフアーの使い方は壊滅的らしいけど……。

「私、あなたの規格外に慣れてきてるのが怖いわ……」

え、だから普通だつてば！

そんな感じでわいわいと教室に向かつたからか、オレの制服がみんなに違うつてことも、風紀委員の噂を聞いていた人達も好意的に受け取つてもらえた。先生にはビビられたけど……。

あ、ちなみにオレ達はみんな同じクラスだつた。そして家綱とも初めて同じクラスになつた。双子だから今まで一緒になつたことなかつたのに。

入学式は普通に終わつた。変わつたことといえба途中でヒバリさんが風紀を乱さないようになると言つたぐらい。2年と3年は必死に首を縊に振つてたよ……。

入学式が終わるとみんなが教室に戻る中、オレはそのまま体育館に残つた。ヒバリさんから他の風紀委員と顔合わせするつて朝会つた時に言われていたから。オレ以外の風紀委員つてデカイ人ばっかりだと思つてゐる間に草壁さんがオレの説明をしてくれる。話していく通りオレは他のみんなと違つて風紀の乱れた人を捕まえるぐらいしかしないこととか。

「沢田、何かあるか？」

「ええつと、沢田ツナです。よ、よろしくお願ひします……！」

急に草壁さんに振られたけど何も考えてなかつたオレは無難な内容を口にし頭を下げた。すると、後ろから殺氣がしてオレはその場から飛び退く。ついでに誰か確認する

ため振り向きながら。

「つて、ヒバリさん!? 何するんですか?! オレじやなかつたら怪我してますよ?!」
さつきまでオレが居た位置の床がトンファードへこんでるよ……。

「これでわかつたよね。彼女、君達より使えるつて」

「そんなことのためにオレは咬み殺されかけたんですか!?」

「そうだけど?」

ヒバリさんの行動にオレは頭を抱えた。

「もう君、行つていいよ。そろそろ教師が説明に行く頃だから」

「はあ。すみません、ではオレは行きますね。これからよろしくお願ひします」

相変わらず優しいのか優しくないのかわかんない人だなあと思いながら、オレは教室に向かう。それにもオレの中学生生活はやっぱ波乱なんだなーつておかしくなつて思わず笑つてしまつた。

「は？お前それでいいのかよ」

「ええ。それが一番良さそうですから」

ほんとに？骸の負担多すぎない？とオレは首を傾げるけど、骸の中でそれは随分前から決めていたみたいで全く気にしていなかつた。

「それよりも気をつけてくださいよ。君の記憶より随分早く来るのでしょうか？」

「う、うん……」

オレの記憶ではリボーンが来るのは夏前だつた。確か半袖だつたから。それなのに骸が掴んだ情報によるともう来るらしい。まだ入学式から一週間もたつてないんだけど……。骸はオレ達を見極めるという意味もあつて早まつたと予想している。オレもそんな気がするから早まつたのは別にいいんだ。オレも会いたかつたし。骸が心配しているのはオレの記憶がアテにならなくなつてること。後、オレのうつかり。

特にうつかりが心配だつたみたいで、それを減らすためにも骸はこれを提案してくれたんだろうけど、本当にいいのかなあ。オレの心配をよそに骸はリボーンや父さんの反応が楽しみですねと笑っていた。……父さん、ショックで倒れなきやいいけど。

そして唐突にそれは訪れた。オレが見回りついでにクロームを家に送つてゐる時に起きたんだ。

「すっげー、嫌な予感がする」

「……？」

リボーンが来るから?と一瞬思つたけど、それはわかつてゐたことだし多分違う。なんだろう?つて思つてるとパンツ一丁の家綱を見てオレは悟つた。

「六道凧!!オレと付き合つてください!!」

最悪だ……。前世のオレ、こんなことしてたんだ……。オレは頭を抱えたくなつたけど、それよりもクロームだ。恐る恐るクロームの方を見る。

「嫌」

ぐはっ、なぜかオレにもダメージが来た。そうだつた、クロームは意外とはつきりと言ふ子だつた……。

崩れ落ちた家綱のフォローをするべきか、兄の行動についてクロームに謝るべきか、京子ちゃんの心広さに押んだ方がいいのか、でも出来ればショックで寝込みたい……。「ツナ、行こう」

オレが困つてると思つたみたいで、クロームはオレの手を引く。数秒迷つたオレはそつと体操着を置いて離れた。家綱もオレに慰められても嫌だらうし……。

クロームを送つた後、オレはヒバリさんに連絡を入れて帰らせてもらつた。もともとオレはノルマとかないからね。他の人達に申し訳なくて見回りぐらいはやつてるけど。家に帰ると家綱に「お前のせいだ！」と指をさされた。オレのせいじゃないと思うけど、前世のオレより結果が酷くて言い返すことは出来ない。

「妹のせいにするなんて情けねーぞ」

「ボコッという音すら懐かしいよ、リボーン。殴られたのはオレじゃないけど。
「つか、お前なんなんだよ!?」

「オレはリボーン。家綱とツナの家庭教師だぞ」

「あはは……。よろしくね、リボーン」

「妹の方が聞き分けがいいじやねーか」

「いや、オレも家綱みたいな反応したよ……。

「ガキの遊びに付き合つてられつかよ！お前が面倒みろよ！いつてえ!!」

「家綱がうるせーから説明してやるぞ。家綱の部屋に行くぞ」

「あ、待つて、リボーン。オレの部屋使つてよ」

リボーンはオレと家綱を交互に見た後、頷いた。家綱は部屋にオレが入るのを嫌がるつて聞いていたのかな。

それからリボーンはオレ達がボンゴレ10代目候補という話をした。昔のオレもうだつたけど、家綱も信じられなくてリボーンに掴みかかって返り討ちにされていた。「お前ら2人のどつちをボスにするかの判断を9代目からオレに任されてんだ。ただ、ツナは女だからな。ボンゴレN.O. 2の奴が反対してつけどな」

ああ、やっぱり父さんはそうだよね。9代目が優先されるからオレにも説明はしたみたいだけど。

「……もしオレがボンゴレ繼けば、こいつの扱いは?」

「本人に選ばせてやれっていうのが9代目の話だ。兄を支えるためにボンゴレに入るのも良し、護衛はつくだろうが普通に社会へ出るのもいいぞ」

「はあ!?不公平だろ!?

「もしオレがツナを選んだら、家綱にも同じことが言えつぞ」

9代目らしいなあ。オレ達が今までマフィアに関わつてなかつたのもあると思うけど。

「一応参考までに聞くぞ。おめーらはマフィアのボスになりてーのか?」「そんなの、知るかよ!」

あ一家綱は考えを放棄したな。気持ちはわからぬくないけど。でもオレみたいに嫌つて言わなかつたな。

「ツナ、おめーはどうだ?」

「ん……オレは……お前がオレを選んだなら継ぐよ」

「……随分、物分かりいいじやねーか」

……やべつ。骸の言つた通りになつたよ。オレはリボーンを信頼しているから、どこかでやらかすつて。

「えーと、実はオレ……ボンゴレ10代目候補つて知つてたんだ」

家綱が叫んでるけど、オレはリボーンが今何を考えているのか気になつて仕方がなかつた。

「リボーンが近々くるつて話も知つていたから、家綱みたいになんでつてならないんだ」「おい、なんで話さなかつたんだ!」「信じられないだらうなーつて思つて……」

ふんつと家綱はそっぽを向いた。言い返さないつてことは自覚はあるみたい。

「……ツナ、おめーは誰から聞いたんだ」

「骸」

「はあ!? なんであいつが!!」

「あいつ、一応マフィアだから。あ、クロームは一般人だよ」

家綱はホツとしようとしたけど、フラれたことを思い出したのか微妙な顔をしていた。リボーンはオレの友好関係も軽く調べてるはずだから、幼馴染の骸のことも知つてはだ。もちろんクロームが義理の兄妹つてことも。だからオレのフォローは疑問に思わなかつたけど、骸がマフィアとは思つてなかつただろうから動搖してると思う。相変わらずポーカーフエイスがうまくて見ただけではわからないけど。

「骸がさ、リボーンに本気で調べられたらバレると思うから言つていひつて。ちよつとデリケートな話だからリボーンだけにしたいんだけど……」

「……わかつたぞ。家綱、おめーは部屋に行つてろ」

家綱は文句を言つていたけど、リボーンが実力行使に出て外へ追い出した。

「ありがとう、リボーン」

「気にすんな。オレには話してくれんだろう？」

うんとオレは頷いて、骸がエストラネーオファミリーの人体実験の被害者つてこと、その人体実験で能力を手に入れた骸がファミリーをボコつて逃げ出したこととか、その時旅行中だつたオレが骸と出会つたこととか。ちよつとウソが混じつていたり前世のこととかは黙つてるけど、ほとんどは真実。前世でリボーンにねつちより鍛えられ、読心術が効かないはずだからリボーンがどう判断するかわからないけど。……まあ骸の

話だと、オレはよく顔に書いてるらしい。オレ、マフィアのボスだつたのに……。

「ボンゴレがエスラネーオファミリーの被害者の子ども達を保護したんだろ？それでボンゴレのことも詳しいんだ。あいつ、何も言わないけど見に行つてるんだと思う」

「……そうか」

骸の言う通り話したけど、本当に大丈夫かなあ。後でバレた時の方が警戒されてやりにくいくつてあいつは言つたけど、絶対オレが動きやすいようにだと思うんだよ。

「あいつ、わかりにくいけどいい奴なんだ。だからさ、無駄に警戒してほしくないつか、うーん……」

リボーンの立場上、警戒しなくちゃいけないのはわかるから、なんて伝えればいいんだろう……。

「おめーの言いたいことはわかつたぞ」「ほんと!?」

良かつたーつて喜んでると、リボーンが真剣な表情をしてオレに聞いた。

「もしそいつが裏切つたらお前はどうすんだ？」

「え？ 骸が？……ないと思うけど。んー、その時はオレが責任もつて止めてみせるよ。

友達だから」

「ならオレからは何もねーぞ」

ニツと笑つた姿が懐かしくて、オレも笑つた。

3

リボーンが来てから数日、隣の部屋から家綱の悲鳴が何度も響き渡つていたけどオレには暴力を振ることはなかつた。……あいつ、女に優しいから。

想像していたスバルタ教育がないことにオレはちょっと寂しさを覚える。もちろんオレだつて痛いのは嫌だけどさ。なんていうか身体にしみてんだよ。

そんな感じでオレと家綱で対応に差があるから、当然家綱は怒つた。リボーンの主義に文句をいつたからボコられていたけど。それでも納得出来るかつて言つたら違うから、オレとの関係が更に悪化。

オレが困つていたのもあるし、多分骸のことを調べ終わつたからのもあつて、今日からしばらくの間はリボーンはオレにつくことになつた。……これ、2人見ないといけないリボーンは大変じやない？

「ランニングに行くだけだからついてこなくともいいんだぞ？」
「問題ねえぞ」

「じゃあオレの頭に乗つていいよ。トレーニングにもなるし」「サンキューな」

ピヨンとオレの頭に乗つたのを確認して、オレは走り始めた。いつもの道を走りながら懐かしいなと思う。リボーンはオレの頭にはあんまり乗らなかつたけど、今のオレの身体はちつこくて肩には無理だから仕方ないんだけどさ。

いつもみたいに了平兄さんにちよつと会話したり、毎日顔を合わせている人にも挨拶する。今日は途中で山本ともあつた。

「……ツナ、おめー毎日これもやつてんのか?」

「ん? そうだけど?」

やつぱりちよつと変かなと思いながら、日課の崖登りもする。今では慣れて朝のコースに組み込まれてるけど、小3ぐらいまでは登りきれなくて、放課後骸に何度も付き合つてもらつたよ。流石に落ちたら危ないからね。そういう、ヒバリさんにバレた時は呆れられたつけ。

崖を登り切ると、ちよつと休憩。その間、リボーンがオレの腕を触つていた。
「この細腕のどこに力があるんだ?」

「あ、それはオレも変だと思つてるよ。なんでだろうね」

そういうやヒバリさんもそこまで腕が太くないのに、力あるよな?まあヒバリさんは身体の使い方がうまいってのも関係してるけど。

「リボーン、そろそろ行くよ?」

「ああ」

リボーンの体重分、ちょっといつもより時間がかかつて家に着いた。了平兄さんや山本と話し込んじやつた時よりは早いから学校には間に合うけどね。

いつものようにシャワーを浴びて制服に着替える。オレが学ランなのは早々に質問されたから、リボーンはオレが風紀委員に所属しているのを知っている。骸のこともあつたから、ヒバリさんとはまだ接触してないみたい。リボーンのことだから数日中の問題だと思う。

オレがシャワーを浴びてる間に家綱は起こされたみたいだ。今までオレが担当だつたけど、家綱の態度を見た次の日からリボーンがやつてくれるんだ。……ほんと、女子に甘いよな。助かつてるからお礼にエスプレッソをいれてあげてる。オレ好みだぞつて褒められたけど、前世で仕込んだのはリボーンだつたから当然なんだけどね。「母さん、いつも助かるよ」

「気にしなくていいわよー」

そうはいうけど、毎日4人分の弁当を作るのは大変だと思うんだけど……。クロームも料理が出来るようになつたけど、やっぱ朝は忙しいからさ。今でも2人の分を母さんが作つてくれてるんだ。

「いつてきまーす」

リボーンはどうするのかなって思つたけど、隠れる気配はないみたい。骸と直接会う氣になつたのかな。

「オレの予想通り骸ん家についてもオレの足元でリボーンは堂々と立つていた。
「クローム、迎えにきたよー」

「うん……！」

「ほんと、かわいいなあ。もう何年もやつてることなのに、嬉しそうにするんだもん。
今でもオレがクロームの頭を撫でるのは仕方ないと思う。」

「ちやおっス」

「おや？ ついにきたのですね」

リボーンの声に反応したのか、骸が奥から出てきた。

「おめーの情報がねえからな。この目で見ることにしたんだ」

「ボンゴレも大したことはありませんね」

いや、お前が凄すぎるだけだから。いちいち煽んなよ。

「なんでおめーは並中じやねえんだ？」

「僕には僕の都合がありますから」

「あーもう。ほら、骸。お前の弁当」

「ありがとうございます」

こういうことにはちゃんと礼をいうのに……。

「おめーの都合ってなんだ？」

「なぜ僕がアルコバレーノに話さないといけないのです？」

「骸!!」

「はいはい。わかりましたよ。僕はもう行きます」

「煽るだけ煽つてオレに丸投げかよ……。まあこれ以上続くよりはいいけどさ。

「あ、骸」

「なんですか？」

「お前の気持ちもわかるから家に来いとは言わないけどさ。たまに母さんには顔を見せてあげて。心配すると思うから」

「お前なら偶然道端で会うつてこともできるだろ? って言えば、仕方ありませんねと骸は返事をしてくれた。これでちよつとは悪い奴じやないつてわかつてくれればいいけど。

「相変わらず君は甘ちやんですね」

「う」

オレがここで言つた意味全部気付かれてるよ……。骸はやれやれと肩をすくめた後、学校に向かつていった。と思つてたんだけど、振り返つてあいつは言つた。

「君の兄が僕のクロームに失礼なことをしたのは知っていますからね」

「家綱、逃げてーーー！」

思わず叫んだオレは絶対悪くないよ。あいつわざとこのタイミングで言つただろ!? と骸が行つてしまつてからオレは頭を抱えた。

「……ツナ。私、気にしない。その人と血が繋がつても私、ツナのことは好き」
ハハハ……。嬉しいけど、それ家綱が聞いたら泣くと思うよ……。

朝からいろいろあつたけど、学校では特に問題なく過ごせた。リボーンは木の上から観察していたみたいだけど。

放課後は見回り。相変わらずノルマもないし、その日の気分でフラフラと歩くだけだけど。今日は野球部の練習があるから学校にしようかな。もちろんクロームを家に送つてからだけど。

オレが歩いてると、他の風紀委員と違うタイプつて噂が流れたみたいで、ちょっとしたこととか話してくれる。特に破損の報告が多い。気付いたのはいいけど、自分がやつたわけじゃないのに咬み殺されるから言えなかつた人が多かつたみたい。最近では町の人にも声をかけられる。

先生に至つては休みの相談とか。例えば家族の結婚式に出たいっていう理由で。ヒバリさんも鬼じやないんだから、普通に説明すれば休めると思うんだけどね。

2、3度オレが間に入つたところで、ヒバリさんからケイタイを支給された。昼寝中に連絡しそうで怖いんだけど……と思いつながらも、ちゃんとした理由があるからか今のところヒバリさんが怒つたことはない。

リボーンはそんなオレを観察していたけど、姿を見せることはなかつた。

チラチラ野球の練習を見ながらも、5時半を過ぎたので見回りを終える。後は『今日は何もありませんでした』とメールで報告するだけ。返事はないけど、いつものことだから大丈夫。

「ツーちゃん！」

聞こえてきた声に振り返る。オレの予想通り京子ちゃんが居た。そういうえば今日は委員会で残るつて言つてたつけ。

「結構長かつたんだね」

「うん。ツーちゃんも終わつたなら一緒に帰ろ？」

そうだね、危ないから家まで送るよつて返事をしたところで、持田先輩の姿が目に入つた。……あの人、京子ちゃんと一緒に帰りたかつたんじや……。

「ツーちゃん、行こうよ！」

オレと帰ることに嬉しそうにしている京子ちゃんを見れば、どつちを優先するかは決まつていた。まあいつかとオレはそれを見なかつたことにした。

いつものようにクロームと一緒に通っていると、オレは鞄箱で持田先輩からと果たし状を突きつけられた。

「……ツナ、無視しよう」

「うーん、一応行くよ」

なんで人通りの多いところをするかなーとオレは思いながら、体育館へと向かう。さつきのを見ていた人も付いてきているのもあるけど、持田先輩が集めたのか野次馬がいっぱい居てオレは溜息を吐いた。

「沢田ツナ！風紀委員という立場を利用し、女子生徒を甘い顔で騙し噛すお前をオレが成敗してくれる！」

あ、京子ちゃんや黒川もいる。おはようと声をかけていれば、持田先輩が周りに声をかけていた。

「見ろ！これが証拠だ！彼女達も騙された被害者だ！お前のような男のクズは神が許してもオレが許さん！」

持田先輩の言葉に一部の人達は「何言つてんだ？」みたいな反応する。見てみるとク

ラスメイトや同じ小学校出身の人達だつた。オレが女と知つてゐるからだと思う。それでも2年や3年の人達は知らないから、敵意みたいなものも感じる。

「どうしよつかなあ」

「私が言つてあげようか?」

黒川の言葉に笑つて大丈夫と答える。オレが困つてるのは教えるのを躊躇しているからじゃない。別にオレは女つてことを隠してゐるわけじゃないし。オレが困つてるのはここまで話を大きくしたなら、お咎めなしつていう訳にはいかないから。オレがヒバリさんに怒られるよ。それに草壁さんみたいに本氣でヒバリさんの考えに共感してについて行つてる人にも申し訳ない。オレのせいで風紀委員全体がナメられちゃうから。

オレがボコボコにすればヒバリさんは納得すると思う。持田先輩も勝負を仕掛ける気みたいで剣道着を着てゐるし。でもオレはそういうのは好きじやない。だから昔やつたみたいに持田先輩を坊主にするのはもつとない。

うーん……と悩んでるとオレが怖気付いたと思つたようで、持田先輩はさうに調子に乗つた。

「賞品は笛川京子だ!」

リボーンじやないけどカチーンときた。ちょっと痛い目にあつてもらおう。持田先輩の発言に怒つてゐるみんなをオレはまあまあと宥める。オレの笑顔を見て黒川が「目が

笑つてないわよ……』と呟いた。え？ 気のせいだつて。

「あのー、オレ剣道やつたことないんで普段使つてる武器がいいんですけど……」

あの重たそうな竹刀や防具をつけても動けると思うけど、筋を痛めそうで嫌だ。

「武器？」

「えっと、これなんですけど……」

そう言つて、シユツと仕込みトンファーを出す。すると、その姿が誰かを連想するのか、今まで強気だつた持田先輩達が怖氣付いた。

「さ、沢田……その武器はどこで……」

「毎年ヒバリさんがくれるんですよ」

あの時だけとオレは思つていたけど、調べたのかオレの誕生日が近い日曜日に新しいのを毎年くれるんだ。それもオレの体格にあつたものを。

「覚悟はいいですか？」

オレはあえてヒバリさんが言いそうな言葉をつかう。チラッと審判に目を向ければ、勝負開始の宣言をした。ヒバリさん、どんだけ怖がれてんの……。

ヒバリさんから見れば、トンファーの使い方はダメダメらしいけど、素人から見れば脅威だと思う。伊達に何年もトンファーを使つてないよ。

オレは簡単に持田先輩の竹刀を弾いて、トンファーを喉につきつける。

「ヒバリさん直伝のトンファー、味わいます？」

耳元でボソッと呟けば持田先輩は気絶した。ちよつとやりすぎちゃったかな？

それでも持田先輩は後輩たちに慕われてるみたいで、真っ青な顔をしながらもオロオロしていた。それを見てオレは笑つて言つた。

「もう怒つてないよ」

後はオレが女つていうことを教えたら終わりかなつて思つてたんだけど、体育館の入り口の方からバキッ！ドコツー！っていう音がし始めた。……ほんと前の時は運が良かつたよな。ヒバリさんが学校にいれば絶対気付くはずだもん。

「なに、この群れ」

オレの姿が見えたからか、ヒバリさんに説明しろつて話しかけられた。

「うーん、正義感からの暴走ですかね？」

これ以上持田先輩が痛い目にあうのは可哀想と思つて考えながら口にする。

「男のオレが女の子を誑し込んでると思ったみたいで……風紀の乱れだつて怒つたんですよ」

「……君、いつから男になつたの？」

さあ？と首を傾げながらも話が逸れ始めてるしちよつとは機嫌が直つたかなと思う。でも確かにヒバリさんの言う通りなんで持田先輩は勘違いしたんだろ。そりや学ラン

を着てるのもあるだろうけど、ちゃんと見れば胸があるのはわかるはずだよね？

「そんな小さいかな？」

オレが服の上から胸の大きさを確かめていれば、ヒバリさんがトンファーを振るつてきたから慌てて避ける。

「いきなり何するんですか！ ヒバリさん！」

「今のは君が悪い」

ヒバリさんに断言されるだけじゃなく、女子達もウンウンと頷いていたからオレが悪いみたいだ。

「はあ。君はもう行きなよ」

「え、でも……」

オレのせいでもあるし、後処理もするつもりだつたんだけど、黒川と京子ちゃんに腕を掴まれた。

「ツナ、あんたはあつちで説教」

「うん。ツーちゃん、さつきのはダメだよ」

え？ え？ ってオレが疑問に思つてゐ間に引っ張られていく。無理矢理外すことも出来るけど、女の子にそんな手荒なことは出来ないし。ヒバリさんの目の前でオレが群れたのに見逃してくれたし、出て行つた方がいいのかな。

その後、黒川と京子ちゃんに男子の前で確かめちゃダメと怒られた。男子がイヤらしい目で見るからって。でもさ、オレもそうだつたけど男子つて女子が何もしなくてもういう目で見てると思うんだけど……。

それをいつたら、尚更やつちやダメつてわかるでしょうが！って黒川に怒られた。

数日後、家に帰るとなぜかリボーンを抱いて機嫌が良さそうなビアンキが家に居た。

ビアンキの姿を見たオレは数秒固った後、どちら様?と呟いた。なんでこのタイミングでビアンキ?骸から何も聞いてないんだけど……。

「紹介すつぞ。こいつはビアンキだ。ツナ、おめーの教育の一部を担当してもらうためにオレが呼んだんだぞ」

「そうなんだ。えっと、よろしくね、ビアンキ」

「ええ。よろしく」

おつかしいなあ。ビアンキがオレを殺そうとしてない。最初の頃はオレを暗殺しようとしていたはずなんだけど……。

「ビアンキの担当つて何?」

「ヒミツだぞ」

自分で考えろつてことかな。うーん、今更オレのどこを教育し直すんだろう。うつかりならリボーンで問題ないはずだし……。

「まついつか。ゆっくりしといて。お茶でも入れるからさ」

ビアンキにはお茶をリボーンにはエスプレッソをいれながら、平和だなあつて思う。

ビアンキが普通に来ただけでこんなに違うんだなーって……。ハハハ……オレの前世、人生濃すぎ……。

あ！ビアンキに獄寺君のこと聞けないかな。でもオレがこんなこと聞けば絶対リボーンに怪しまれるよな。獄寺君が来なくなつちゃう可能性もあるし……。

2人に飲み物を渡した後、ちょっと骸のどこ行つてくる！つて言えば、リボーンがオレの頭に乗つた。

「え？お前も行くの？」

「なんだオレがいやマズイのか？」

「そういうわけじゃないけど、せつかく入れたのに……」

「問題ねえぞ。持つて行くからな」

「さいですか……。ビアンキはいいの？」と視線を向ければ、家で待つててくれつてリボーンが言つたから来ないみたい。骸もマフィア関係者が家に来るのは嫌だと思うから助かつたよ。

骸ん家につくと、オレは早々「ビアンキつて知つてる？」つて骸に聞いた。これだけでオレンン家にビアンキが来たつてことも骸ならわかるだろうし、オレのうつかりを防ぐために少し説明してくれるはず。

「ほお。確か毒を操る殺し屋ですよ。間違つても彼女の手料理は食べてはいけません

よ。死にたくないのですが

「死にたくないっての。骸、サンキュ」

「かまいませんよ。君に死なれたら面白くありませんから」

「あ、うん。気をつけるよ」

随分前にオレの死んだ後のことを見たことがあるけど、骸はあれからボンゴレに近づくことはなかつたみたい。だから多分オレが死んだら本当に面白くないんだろうなって思う。

「しかし彼だけじゃなかつたのですね」

「え？」

「僕が掴んだ情報ではもう一人殺し屋が来ています。君が呼んだのでしょうか？」

「まあな」

「んなつ、誰!？」

オレが骸に聞いても笑うだけで教えてくれない。わかつてゐなら教えてくれたついいのに……。

「君には害はありませんよ」

「んーわかつた。お前が言うならそうだと思うし……」

にしても害のない殺し屋つて誰だろ。彼つて骸は言つたよな？死んだフリができる

モレッティとか？でもあの人つて殺し屋じやなくて殺され屋だつたような……。

「そろそろ戻らないと君の母親が心配するのではないのですか？」

「え？ もうそんな時間？」

風紀委員に入つてると放課後が潰れるから時間がないんだよな。骸に会う時間もめつちや減つたし、リボーンが来てからは川平さんにも会わなくなつたし。何かあつた時は来ていいって言われてるけどさ。リボーンは警戒すると思うんだよな。前もそuddaたし。呪つた張本人だからリボーンの勘は間違つてないんだけどさ。

「あ、でも今日は大丈夫。母さん、町内会の集まりで出かけてるから帰つてくるの遅いつて言つ……」

「ツナ？」

リボーンに声をかけられたけど、オレは説明を後回しにした。

「骸、悪い。帰る」

オレの行動に慣れてる骸は気にすることもなく見送つた。リボーンもついてきたので、走りながら説明する。

「ごめん、リボーン。なんか嫌な予感がして……」

「よくあることなのかな？」

「そうでもないかな？でも外したことはないよ」

それつきりリボーンは話しかけて来ることはなかつたから、オレは家まで急いで走つた。

リビングに入つてすぐオレの超直感が何に反応したのかわかつた。

「家綱ー!? なんで食べちゃつたのー!?

ビアンキの手料理を食べてヒクヒクしている家綱を見て頭を抱える。見た目で絶対食べちゃダメつてわかるじやん! ビアンキも「喜びのあまり気絶しちやつたのかしら?」じゃないよ! 無意識にポイズンクッキングしてるから!

「リボーン、どうしよーー!?

「心配すんな。こう言う時のためにドクターを呼んであるぞ」

「え? それつて……」

オレがもしかして?と思つたところで、チャイムが鳴つた。つて、ビアンキが見に行つちやダメだつて!

「死ね!」

あーもう! オレのツツコミ追いつかないから! シヤマルがポイズンクッキングの餌食になつてるじyan!

オレがオロオロしていると、シヤマルはビニールでガードしていたみたいで、普通に起き上がつてビアンキの頬にキスをしていた。やっぱシヤマルってつえー!

「あ、あの！家綱を診てやつてくれませんか？医者なんですよね！」

「お？こっちにも可愛い子ちゃん居るじゃねーか。どれどれ……」

えつ？とオレが思つてる間に、シャマルの顔が近づいていた。頭ではわかっているのに、身体がすくんで全然反応出来なくて……絶対絶命ー！？

「つと、こえーこえー」

シャマルがピタツと動きを止めたのはリボーンが銃を構えたからだつた。安心したオレはへなへなと腰が抜けた。もうちよつとで頬にキスされるところだつた……。

「た、助かった……。リボーン……ありがとう……」

うう……とオレが情けないところを見せても、リボーンは「オレは女を泣かせる趣味じやねえからな」と言つて許してくれた。

「あー……すまん。生真面目な子だつたのね」

「まつたくだぞ。誰にも構わず手を出そうとするのはシャマル、お前の悪い癖だ」

「女の敵よ、敵。ツナ、もう大丈夫よ」

「ご、ごめん……」

ビアンキに背を撫でられるし、オレ本当に情けねえ……。なんで動けなかつたんだろう……。

「嬢ちゃん、怖がらせた詫びだ。オレに診てほしい奴がいるんだろ？」

「そ、そうだつた！オレの兄、家綱をお願いします！」

「男は診ねー主義だが、今回は仕方ねえか……」
良かつたー！とオレが感動している間に、シャマルは家綱を治してくれた。やつぱ
シャマルの能力すげー。

「家綱、大丈夫？」

「つつ、触んな！」

「ゞ、ゞめん……！」

つい心配して揺すつてしまつた。やつちやつたー！

「おいおい、誰のおかげで治つたと思つてんだ？」

「うるせー！オレは頼んでねえよ！」

「うん、そうだね。オレが勝手にお願いしたことだから。シャマルありがとう」

オレがそう言つたら、3人揃つて溜息を吐かれてしまつた。オレ、そんな変なこと
言つたかなあ……。

「ツナ、食事にしましよう。あなたはまだ食べてないんでしょう？作つてあげるわ」

「えつ……。だ、大丈夫。オレ料理できるから自分でつくるよー。ビアンキは座つてて！」

「あら？ そう？」

あつぶねー。家綱の二の舞になるところだった。ホツと息を吐いてる間に2階から

はドカドコと音が聞こえてきた。うわー、迂闊にビアンキの料理を食べたし絶対怒られるよ。

「や、やりすぎてなきやいいんだけど……。家綱はさつきまで死にかけてたし……」
リボーンを止められないオレを許してつと家綱の無事を祈つてるとシャマルに言われた。

「嬢ちゃんの優しさは美点でもあるが、欠点もあるな」

「あはは。それ、何度か言われたことあるよ」

よくみんなに苦労かけちゃつたよなーと笑つてると、シャマルはオレの頭を撫でて
帰つていった。

オレが普通に授業を受けていると「——A沢田ツナ。応接室へ来るよう」——という放送が流れた。オレ、ちゃんと授業中はケイタイの電源切つてるからなあ。でもヒバリさんには授業中とか関係なかつたよ……。

「さ、沢田。早く行きなさい」

「すみません。ちょっと行つてきますね」

何の用だらうなあと咳きながら立ち上がりと、勇者だ……と誰かが呟いた。相変わらずヒバリさんは怖がられてるなあ。オレからすれば、今のヒバリさんめっちゃ優しいから。トンファーを振るう前に話聞いてくれるんだよ!?そりや歳をとつて落ち着いてきてからはバトルが条件だつたけど先に話を聞いてくれたけどさ。この頃のヒバリさんは理不尽の塊だつたから!

オレが応接室に顔を出すと、ソファーに視線を向けられたからお言葉に甘えて座らせてもらう。

「わあ。ありがとうございます、草壁さん」

「いえ。では私はこれで失礼します」

お茶まで入れてもらえたよ。ヒバリさんの許可がないと出ないから、やっぱりこのヒバリさんは優しいよね。

「さつき、僕のところに赤ん坊がきたんだけど」

「ぶはつ」

「……汚い」

「すみません！すみません！」と言つて慌ててハンカチで拭く。いつかはリボーンがヒバリさんと接触するのはわかつていたけど、まさかオレが居ないところでするとは思つてなかつた。

「君、マフィアの跡取りなんだってね」

「うわー、リボーンの奴、どこまで話したんだろ。

「あはは。ヒバリさんには迷惑かけないように気をつけます」
用件はこれだけかなつと思つて、残りのお茶を飲みこむ。

「……君の要求の中で一つ気になつていたのがあつた」

「要求つて、風紀委員に入る時に言つた条件のことだよな？」

「え？ 何かありましたつけ？」

「中学まで」

ヒバリさんつてなんでそんなに鋭いのかなあ。それともオレが迂闊なだけ？

「最初は進路かなつて思つたけど、決まつてゐるなら君なら僕に言うはずだ。あの赤ん坊の話を聞いて納得した。……君、卒業すればここから出て行く気？」

「こゝつていうのは並盛じやない。表社会からつてことだ。多分オレが誤魔化せばヒバリさんは一生許さないと思う。だから本当のことと言つた。

「骸と約束しましたから。……あ！オレから言つたんですよ！骸はどつちかといえばオレに付き合つてくれてるだけです」

ヒバリさんが骸に良い印象を持つてないから慌ててオレは説明を付け加えた。
「……僕は君と出会つて、強さにも種類があると知つた」

「ヒバリさん？」

「君の場合、こゝは足枷にならない。強さの源だ。それを捨てるつていうの？」

さつきお茶を飲んだはずなのに、喉がかわく。

「危険が及ぶから？確かにそうだろうね。でも……選択肢すら与えないのは、君のエゴだ」

「エ、エゴつて……オレは……みんなを思つて……」

「選ぶのは君じやない。それに……あの南国果実だけじや、君は無理だ」

「ハハハ……。ほんと、ヒバリさんつて容赦ないよな……。

「……そんなのわかつてますよ。オレと骸だけじやどうしようもないつて」

「ふうん。それならいい」

オレは頭を下げる。ヒバリさんの前から少しでも早く去ろうと足を動かす。

「僕は内容次第だよ。……君が僕にくだらない用件を持つてくるとは思わないけどね」

最後の最後にズルい。そう思いながらオレは扉を閉めた。

ゴロツとオレは寝転がる。屋上はヒバリさんがよく昼寝をする場所だけど、多分今日は来ない。学校でオレが1人になれる場所なんて限られてるから……。

「……リボーン、そこに居るんだろう？」

「よくわかつたな」

「お前、ヒバリさんに何言つたんだよ」

はあとため息を吐く。気を遣つたのか、リボーンはヒバリさんとの話は聞かなかつたみたいだけど。その気遣いはいらぬいつて。

「オレはそんなに話してねーぞ」

「ウソつくなよ。あの人、そなちよつとやそつとでは動かないつての」

「ウソじやねーぞ」

話す気はないいつてことかよ。子どもみたいにスネたオレはリボーンを見ないよう

横向きに寝る。

「オレはそんなにヒバリのことを知らねーからな。もしお前の話が本当なら、ツナ……ヒバリはお前のために動いたつてことじやねーのか?」

「……なにそれ、全然笑えないじゃん」

ああもう!と今度は仰向けになつて腕で目を隠す。

「なありボーン」

「なんだ?」

「オレにとつてさ、ヒバリさんはヒーローだつたんだ」

「……過去形なのか?」

リボーンの疑問にはこたえず、オレは口を開く。

「やっぱ、ヒバリさんはオレのヒーローだよ」

「……そうか」

「あーもう!本当にいいとこ持つて行くんだから!……オレ、ずっとヒバリさんみたいになりたかつたんだよ。でもなれないや。オレはオレだから……。ダメツナなりに頑張るよ。だから頼んだよ、リボーン……」

言いたいこと言つてスッキリしたのか、オレは眠くなつて寝た。

ツナの寝顔を見ながら、リボーンはポツリと呟く。

「おめーのどこが、ダメツナなんだ……？」

はつきり言つて欠点の方が少ない。家光もよくこれだけの逸材を隠しきれていたと思うほど、ツナは優秀だ。たとえ家綱以外の候補者が残つていたとしても、ツナなら張り合えただろう。

確かにボスにしては甘すぎる。だが、シャマルが表現したように美点でもある。特にボンゴレのボスには相応しい。「全てに染まりつつ全てを飲み込み包容する大空」という使命をツナは体現しているようなものだから。

これのどこを見てダメツナと呼べるのか。

更にリボーンが困惑しているのがある。リボーンを見るツナの眼差し。……あの眼からは絶対の信頼しか感じられない。

骸からリボーンが凄腕の殺し屋であつて、デイーノを育て上げた家庭教師と聞いただけで、あそこまでの眼差しを送れるとは思えない。

ツナが女ということもあるが、それを抜きにしてもリボーンはツナとの距離感を掴みかねていた。

「ツナ、おめーはオレにどーしてほしいんだ？」

理由はわからないが、そこまで信頼してくれるなら期待にこたえたい気持ちはある。が、いつたいツナはリボーンに何を望んでいるのか。リボーンを信頼しきつて眠ったツナを見て、リボーンは溜息を吐いた。

今日はオレの部屋でビアンキと刺繡しながら、昔話を聞いている。ビアンキの場合、ほとんどリボーンの話だけどね。どこがカッコいいとか、こんなところに惚れたとかだけど、オレの知らない話もあるから結構面白い。

「出来たわ」

「すげー」

ビアンキは料理さえしなかつたら、完璧だよな。このスーツもリボーンに贈るために作つたんだろうし。あ、オレはそんな凝つたもの作れないよ。ハンカチにカーネーションの刺繡をするのが精一杯。母の日が近いから母さんにあげるんだ。

「ツナも惚れた男のために縫う日がきたら、すぐに上達するわよ」

「あはは。そんな日が来ればいいね」

じやないと、今度こそプリーモに怒られる……。

「そうね……。何か贈りたい相手とか居ないの？お礼とかでもいいわ。私達みたいにス

リリングな出会いもあるけど、そこから恋に発展するのも多いわ」

男の人についてことだよな？えーと、骸？あ、後ヒバリさんにも迷惑かけちゃつたし、山

本は今度試合つて言つてたし、了平兄さんも試合が近いつて言つてたよなー。つて、オレの元守護者ばっかりだ……。

「ビアンキ、オレにはそういうの早いかも……」

ファミリーしか浮かばない時点でダメダメだつた。

「そうかしら？ 何人か浮かんだように見えたわよ」

「また顔に出てたんだ……。でも友達とか先輩だし、オレが相手だと嫌だと思う」

「……どうして？」

「昔、骸に言われたんだよ。何にも言つてないのに、オレの相手は絶対嫌だつて。だからみんなもそうだと思うよ」

オレの事、好きになつてくれる人が居ればいいんだけど……。前回の経験からすると、裏社会で探した方がいいんだろうなあ。ただ、オレと付き合いが深かつた裏社会の人つて、口クな人居ないんだけど……。

「その骸つていう子がそう言つたからといつて、全員がそうとは限らないわよ？」
「そうだつたらいいね。つと、オレも出来た！」

結構、上手くなつたよな。後はラッピングして、当日に花を買うだけだ。

「ふう。……そうね、よく出来てると思うわ」

「だよね！」

母さん喜んでくれるといいなあ。まあ母さんの性格なら喜ばないことはないんだけ
ど。

「ドンっ！」という大きな音にオレは警戒する。今のは家綱の部屋からじやなかつた。
多分庭から聞こえたような……。

「ビアンキ、危ないから下がつて。オレがみるから」

「私はプロなのよ？ツナが下がつてなさい」
う、確かに。つい癖でオレが前に出ようとしたり、今のオレじや説得力がないん
だつた……。

「牛がいるわ。子どもね」

「え？牛？それも子ども！」

絶対ランボじやん！こいつも来るのが早いつて思つたけど、ランボはリボーンを追い
かけてきたんだつた。そりや来るのが早くなるよ。ビアンキが警戒する必要はない
わつて言つたからオレも覗き込む。つて、大泣きしてゐるじやん！

「大変だー！！」

慌てて一階におりて、庭へと向かう。ランボはその場からまだ動いてなかつた。

「あーもう！泣くなつて」

ポンポンと背を叩き、落ち着かせる。こりやこつ酷くりボーンにやられた後だな

……。家綱の部屋がなんか騒いでた気がしてたけど、いつものことだと思つて放置してたのが間違いだつた。

「う、ランボさんは、泣いてないもんね……グスツ」「えらい、えらい」

はあと溜息を吐く。どうすつかなー。ランボはまたリボーンにケンカを売るだろうし……。とりあえずお菓子で釣るかなあ。

「母さん、何か甘いものある?」

リビングに戻つて、母さんに聞いてみる。でもちようど運悪く切らしていたみたいで何にもなかつた。

「ランボ、何が欲しい? 頑張つて泣き止んだご褒美に買つてやるからさ」「ほんと!?? お前だれ?」

「ツナだよ」

「ツナ、ツナ、ランボさんはねー、ぶどうが好きなんだもんね」

「わかつたから。落ち着けつて」

懐かしいなあ。昔はこうやつてオレの周りをうろちょろしてたよ。いつの間にかボンゴレ呼びになるし、女の子から奢つてもらつてオレには催促しなくなつたもんね。「ちょっと待つてろよ、財布とつてくつから」

「ツーちゃん」

「ん? なに母さん? 何か買つて来るものある?」

「はい。これを使いなさい」

「えつ。わ、悪いよ! オレが勝手に決めたことだし……」

「いいのいいの」

結局母さんに押し切られてしまつた。

「ランボ、オレの母さんが出してくれるつて。お礼、言えるか?」

「んー?」

あー、ダメだ。まだちゃんと教えてもらつてない時期だ。

「ありがとうつて言うんだ。それを言えれば、また次があるかも知れない魔法の言葉だよ」

「次!? ありがとうだもんね!」

「ふふ。どういたしまして」

「えらいぞ、ランボ」

慣れたもんだなーつて思う。オレの執務室を何だと思つてゐるのか、子どもを置いていくんだよ。託児所じやないから! つて何度ツッコミしたか……。

オレに抱かれながらランボはここになんで来たのかとか、夢とかの話をした。それマ

フィア関係者以外に言つちやダメだからな……。そう思いながらも呆れずに相槌を打つていたからなのか、ランボはオレのことを気に入つたようで部下にしてやるつて言つた。

「オレがランボの部下かあ。あはは、平和で楽しそうだね」

「ツナ？」

「いや、こつちの話。ほら、あんまり高いのはダメだけど好きなの選んでいいぞ」「やつたもんね！」

中学を卒業したら、どっぷり裏の社会につかるつもりのオレからすれば、ランボが眩しく感じるよ。だからこそオレはコイツの未来を守らないとな。

「これとこれにするもんね！」

「どれどれ？……うん、これなら大丈夫。ちゃんと考えて選んで偉いぞ」

褒められて上機嫌なのか、ランボは買い物中も無茶苦茶なことをしなかつた。

「せっかくだし、ここで食べよっか」

公園のベンチに座つて、お菓子の包装を外してランボに渡す。目がキラキラしちゃつて、ほんとお菓子好きだよなあ。

つて、食べ終わつたのはいいけど頬についてるじやん。あーもう、これからはハンカチとティッシュは必需品だよ。出来るだけ入れるようにはしてるけどさ。

「動くなよ。とつてやるから」

「んー」

絶対聞いてねえ……と思いながら、拭つてやる。

「ツナ！」

「ん? どうした?」

「いいもの見せてやるもんね! ジヤジヤーン! 10年バスーカ!! これを撃たれた者は5分間10年後の自分といれかわるー!」

それボヴィーノファミリーの秘宝だから。そんなに簡単に出しちゃダメだから。……なんであそこのボスはこんなチビに渡したのかなあ。それだけランボが可愛いってことなんだろうけど。

ドオン!

「え? 使つちやつたの!? つてことは……」

オレの予想通り、煙がはれるとそこには成長したランボが居た。

「お久しぶりです。若きボンゴレ。10年前のオレがお世話になつてます」

「え、あ、うん」

オレの知つてるランボと変わつてねえと思いながら見てたけど、あることに気付く。

「若きボンゴレってことは、結局オレがボンゴレを継いだんだ」

「ええ。あなた以外誰も認めませんよ」

「……そつか。家綱はどうしてなの？」

あいつもマフィアになつてんのかな？それとも普通の一般人？

「家綱さんですか……」

「え？ なに？」

「……すみません。オレは幼かつたのでよくわかつてないんですが、彼はこの時代ではもう亡くなっています」

は？ とオレはランボの顔を見る。冗談じやないよな……？

「すみません。聞ける雰囲気じやなくて死因は……」

「あー……うん。オレこそごめん。ランボは悪くないから。それに教えてくれてありがとう」

いろいろ思うところはあるけど、今ランボに聞けて良かつたと考えよう。

「あ、家綱には黙つてくれよ？ その話を聞けば気分良くないだろうし、オレがちゃんと守るからさ。お前のおかげだよ」

「はい。……あなたは本当に優しい人だ」

10年後のランボに面と向かつて言われるとちよつと恥ずかしい……。オレは慌てて話題をかえようと考へる。

「あ、そうだ。オレって結婚してる?」

「ふむ……」

「誰とかは聞かないからさ。それだけ教えてよ、ね?」

ジツとオレを上から下まで見るランボに頬むよつと期待をこめて見つめる。

「実は……」

「う、うん」

「……ボンゴレはオレと結婚しています」

「ええええええ」

オ、オレとランボが……? 泣き虫で、ちっこいランボと……!?

「ですから、オレ以外の男と付き合つたり結婚しないでくださいね」

「う、うそだ——!」

誰かと結婚しているだろうなあとは思つていたけど、まさかランボだつたなんて

……。

「ほ、本当にランボとの!? オレ絶対お前をそういう風に見れないって!」

「ぐはっ」

「ごめん……。過去のオレに全否定されると傷つけちゃつたよね……?」

「よ、よく考えてください。オレはもうこんなに成長しましたし、身長だって今のあなた

より大きい」

「そうだけどさ……」

ランボの顔を見ようと思ったら、ちょっと首が痛いぐらいだし……。でもオレがランボと一緒に!?

「そうでした。あなたは少し強引でないと手に入らないんでした。だからあの男が……」

「へ?」

「いえ、なんでもありません」

いやでもさつき大事なことを言いかけていたような……。

「オレを男としてみてください。お願ひします」

「えつ。ちよ、待つて。オレ、心の準備が……!」

ひいー! ランボ近いって! オレの知ってるランボじやない……。
思わずギュッと目をつぶると、ドガツという音がした。

「大丈夫か? ツナ」

「リ、リボーン!! ありがとーー!! ……つて、ランボ!?」

うわー、リボーンの一撃で完全に伸びてるよ……。

「ランボ?」

「ええつと、あれは10年後のランボ。10年バズーカに当たると、5分だけ入れ替わるんだ。あ、ほら」

「ボファンという音と共にちっこいランボが戻ってきた。あーあ、食べて満足したのか寝ちゃつてるよ。

「エロガキに成長したのか……」

「いや、でもなんかランボの話だとオレと結婚してるらしくて……」

はああと溜息が出る。オレ、こいつと結婚するの……。

「……ツナ、おめーからかわれてつぞ」

「へ？」

「このランボが10年たつても、15だぞ。おめーと結婚出来るわけねーじゃねえか」

「ほ、ほんとだーーー!!」

え？ オレ、ランボに遊ばれたの!? そ、それはそれでショックなんだけど……。

つか、前世ではオレ、マフィア界の保母さんっていう不名誉な二つ名まであったのに、ランボの教育間違つちやつたの?

「オレがちゃんと育てないと…………!!」

「……逆効果だと思うぞ」

「大丈夫！ 任せて！」

オレがランボの教育に燃えていると、リボーンは呆れたのか溜息を吐いていた。

オレは鼻歌を歌いながら、骸ん家でお菓子を作っていた。なんで骸ん家かというと、オレン家は今ランボがいるから。絶対ぐしやぐしやにする。別にみんなと食べる分ならいいんだけど、今回はヒバリさんの誕生日ケーキがメインだから、それは阻止しきやつてことでクロームと骸の許可を得て作ってる。……骸には高級チョコを渡したけど。ヒバリさんのケーキのためだしね。

「クロームも手伝ってくれてありがとう。助かったよ」

「ううん。私も作れるようになりたかったから」

「それなら良かつた。あ、骸に言われても作りすぎないようにね」

子どもの頃から頑張った甲斐があつたのか、食生活の大しさを知ったクロームは素直に頷いた。いや、ほんとあいつチヨコ食べすぎ。

「余計なことを言うんじゃないせん」

「はいはい。お前の分もあるから、あとで食べろよ」

「当然です」

こいつの態度を見てるとなんか腹たつ。母さんにはお礼を言うのに、オレには言わ

ねえもん。

「それにしても、よく誕生日会なんてものを彼が許可しましたね」

「いや、ヒバリさんは許可してないみたいだよ。風紀委員メンバーが勝手に集まって祝うんだつて。だから咬み殺されるらしい」

骸がなんとも言えないような顔をしたからオレも頷く。よくやるよなつてオレも思うから。

「それであなたも強制参加なのですね」

「強制参加っていうわけじゃないけど、声かけられちゃったからさ。オレ毎年トンファー貰ってるし、それならケーキ作りますよって言つたんだ。後は咬み殺される前に逃げればいいかなーって」

ただなあ、オレこの前からヒバリさんに全然会つてないんだよ。いや、ケイタイで連絡はとつてはいるんだよ。ただ直接会つてないだけ。毎週日曜日のバトルも野球部の応援つてことで一回休ませてもらつたし。……ヒバリさんにはため息をつかれたけどさ。

「なあ骸。オレさ、10年後のランボにオレがボンゴレを継いでるつて聞いて、守護者の顔が浮かんだのはみんなだつたんだ。だからオレつて超ワガママだなーって思った」「今更でしょう」

「ははっ、だよな」

昔つからオレはウジウジ考えすぎなんだよなあ。答えはわかってるのに、誰かに背を押されないとわかんないんだもん。

「悪いけど、オレン家の分はまだ冷蔵庫に入れさせて。帰りによつて持つて帰るから」「かまいませんよ。……ああ、少し待つてください」

「ん？」とオレが首を傾げると、骸は自分の部屋に向かつた。しばらくすると戻つてきたけど、骸の手には箱があつた。

「ケーキと同じようにあつかつてください」

「え。わかつた」

あんまり揺らすなつてことだよな。オレは慎重に受け取る。

「君からと言つて渡してください」

「……もしかしてヒバリさん？」

「ええ」

まじで。すつげー怖いんだけど。いやでもオレからつていうから、そこまで変な物

じやないはず。変な物なら、骸なら自分で渡すと思うから。

「珍しいじやん」

「……僕も君と同じということですよ」

どういうことだろう？ってオレは疑問に思つたけど、骸は何も言わないだろうなと思つたからオレはそのまま出て行つた。

オレが学校に向かつてると、「助けて、ツナ姉！」という声が聞こえた。ツナ姉つて、もしかしてオレのこと？

聞こえてきた方向に顔を向けると、誰かが腰に抱きついてきた。

「え？ 誰？」

殺氣を感じないから大丈夫だと思うけど、顔を見せてほしい。あれ？でもこの髪色つて……。

「やつと追い詰めたぞ！」

「お前、追われてんの!?」

「頼れるのツナ姉だけなんだ……！」

うるうるとオレを見上げたのは、小さいフウ太だつた。

「わかった。これケーキだから気をつけて持つてて」

3人だつたのもあつて、オレは簡単に気絶させることができた。

「もう大丈夫だよ」

「やっぱツナ姉は凄い！僕のランキングで一位が多いんだよ！」

「へえ？ そうなんだ？」

話しながらもコレってヒバリさんより、リボーンに連絡した方がいいよな？と思つた
ところでリボーンがやつてきた。相変わらず情報を掴むの早いよな。

「リボーン、この子知つてる？」

「こいつはランキングをつくらせたら右に出るものがないというランキングフウ太つ
ていう情報屋だ」

……骸のせいでランキング能力なくなつちやつたもんなん。情報屋としては活躍し
てたけど。

とにかくリボーンの話で今回もフウ太がマフィアに狙われることがわかつた。
「心配すんなつて。オレが守つてやるから」

「ツナ姉……」

ポンつて頭に手を置くと、余程怖い目に合つてたのかフウ太の目が潤んでいた。

「オレこの後用があるんだけど、一緒に行くしかないよな。流石にまだ居るかもれない
し……。リボーン、悪いけどこの人達のこと頼むよ」

「いいぞ」

リボーンのことだから、この人達をボンゴレに引き渡したら追つかけてくると思うけ
どね。

フウ太と一緒に学校へ向かつてると、フウ太はいろんなランキング結果を教えてくれ

た。

「ツナ姉はね、マフィアのバスで総合的な戦闘力が一位なんだよ」

「……そんなに強いんだ、オレ」

「バス限定だから父さんや骸は入つてないんだろうけど、9代目より上だと思わなかつたよ……。まだグローブ持つてないのに……。」

「そして頼まれたら断れないランキングも野望のないボスランキングでも一位なんだよ」

「え？ オレ、一応バスになつたらやりたいことあるんだけど……」

「別にボスじゃなくてもいいけど、黒のマフィアはぶつ潰したいと思つてるはずなんだけど。」

「僕のランキングは外れないよ。それは野望じやないんじやない？」

「野望つてどういう意味だつだけ。身の程を超えた……とかだつたかも。戦闘力が一位なら身の程にならないのかもしれない……。」

「他にも将来有望なボスランキングや温厚ランキングなんかも一位なんだよ。怒らせたら一番怖いボスもツナ姉だけどね」

「えええ！ オレそんなに怖いんだ……」
やつぱこれも戦闘力のせいなのー！？」

「よくオレを頼ろうと思つたな。怒らせたら怖いってわかつてたのに」

「ツナ姉が温厚なのはランギングでわかつてたし、子ども好きランギングでも上位だつたからね！」

ちゃんと考へて來たつてことか。じゃないとフウ太は生き残れなかつたと思うし。オレがボンゴレの後継者候補つてのも関係してゐんだろうなー。ボンゴレは大きいし、9代目は穩健派だしね。

「怒つた……？」

「そんなことないよ。よく考へて偉いなあつて。もう不安にならなくていいよ、オレが守つてやつから」

「ツナ姉!!」

あはは。ぎゅうぎゅうと抱きつかれるのも久しぶりだなあ。つと、学校についたよ。
「ちょっと怖そくな人達がいっぱい居るけど、その人達は見た目と違つて優しい人達だからね」

「うん！わかつた！」

寄り道したから遅くなつちやつたかなあと思ひながら、集合場所の体育館に向かう。

「こんばんはー……失礼しました」

オレは何も見てないと開けた扉を閉める。……いやでも流石にほつとけないよな。

「フウ太。トンファー振るう人がいるけど大丈夫だからね。オレが相手するから」「はーい！」

「これなら大丈夫かなともう一度扉を開ける。……ハハハ、やっぱ見間違いじゃなかつた。風紀委員のみんなが山のようになつてゐるし、その上にヒバリさんが座つてゐるもの……。

「はあ。君もなの？」

「まあ。……みんなヒバリさんのことと思つて集まつたのに」

「僕の前で群れた方が悪い」

「わあー。すごーい」

フウ太はいろいろ危ないことも経験してゐるからか、意外と順応性が高いんだよな。普通、人の山を見て凄いとか言えないから。

「なに勝手にいれてるの」

「すみません。オレの方の関係者で。1人にしちや攫われそうなので連れて来ました。一応倒しては來たんですけど……」

「そう」

良かつた。ヒバリさん、そこまで怒つてないよ。

「あ、これ良かつたらもらつてください。下の大きいのはケーキです」

受け取つてもらえそなのは良かつたけど、こつちに来るために何人か踏まれたよ……。いやでもあのままヒバリさんが座つてたら誰も動けなかつただろうし……。

「こつちは？」

「ええつと……開けてみてください」

チラツと視線がきたけど、ヒバリさんはリボンの紐をといてくれた。あつぶねー。オレも何入つてか知らないから答えられないっての。

「ぶつ」

「……どういうつもり？」

一体何が入つてるんだろうと思つて、オレも興味津々で見ていたんだけど、開けた瞬間に飛びだつてヒバリさんの頭に乗つた。……ヒバードが。

「た、たんまつ。……あははははつ」

いや、無理だつて。我慢しようと思つたけど絶対無理。……骸、お前ヒバリさんの頭に居ないのが違和感あつて、わざわざ探して連れて來たの!?

「ひい、ちよつとむりい……」

オレはトンファーを避けながらも、笑い続ける。骸、お前どうやつたの!?すつげーヒバリさんに懷いてるじやん。頭から逃げないし。

「すみませんっ。あはは。すつげー似合つてると思つて」

「そうは見ないけど」

「でも、ヒバリさん嫌いじゃないでしょ？ オレはいいと思いますよ。ヒバリさんらしくて……好きですよ」

オレの言葉にヒバリさんは呆れたようにため息を吐いてトンファーを直した。
「君と話していると気が削がれる」

「すみません？」

「またオレ変なこと言つた？」

「ねえねえ。ツナ姉、今のお告白？」

「え……。や、そういう意味じゃないですよ!?」

「知つてる」

「なーんだ。ツナ姉の憧れランキング一位の人だから僕凄いとこ見ちやつたつて思つた
のに」

慌ててフウ太の口を塞いだけど、ヒバリさんが聞き逃すはずがない。絶対今オレ顔が
赤い……！

「アハハハ。……オレ、帰りますね」

「……今週は見逃さないから」

「は、はい……」

帰った。

オレ、次にヒバリさんにどんな顔して会えбаいいのー!?と思ひながらフウ太と一緒に

GWや母の日も終わつて、そろそろ獄寺君が来るかなーと考えていると山本に家へ来て欲しいと誘われた。オレが山本の成績をあげたことを知った山本のお父さんが年に数回奢つてくれるんだけど、この時期じやない。なんだろう?と思つたけど、あんまり人に聞かれたくない話だと察したオレは山本の家にやつてきた。小学生の頃から何度も行つてるし、緊張しないしね。

「わりいな、ツナ。わざわざきてもらつて」

「それは別にいいんだけど……どうしたの? 山本」

「お前も気づいてるだろ? 最近、打率が落ちてきてるし守備も乱れちまつてる……どうすりやいいかなつて思つて……」

オレがずっと野球を見てるから、早めに相談してくれたのかも……。オレの記憶じゃ、山本の自殺騒ぎは獄寺君が来た後だつたから。よかつたー、仲良くしてて。

「オレ、野球は見るだけだからそんなに参考にならないと思うけどいいの?」

「ああ」

藁にもすがる思いなのかもしれない。じやなきや、あの山本があんなことしないよ。

「まさか、一年と三年じゃ体格が違うとオレは思う」

「オレは大きい方だぜ？」

「んー身長はあつても筋肉のつき方とはやつぱ違うよ。了平さんは知ってるよね？あの見えてるとよくわかるよ。去年より引き締まってるから」

お兄さんはコロネロが認めたぐらいだしね。

「そんな先輩達から打つのが難しくなるのは普通だと思う。打つ威力が強ければ、守備するのも難しくなるはずだろうし。特に男の人の方がその差ははつきりと出るはずだから」

「……そつか」

「うん。前にさ、山本が言つたことだけど……一個ずつやつっていくだけだよ。そりや立ち止まる時だつてあるけど、そう見えるだけであつて、ちゃんと進んでるし、それも必要なことだつてオレは山本に教えてもらつたよ」

だから追い詰めないと山本の顔色を窺う。

「……だな。サンキュー、ツナ。オレ考えすぎてたみたいだわ」

山本にポンポン頭を撫でられて、オレは良かつたと笑う。

「お？ ツーチャンが来てんのか？」

「お邪魔してます」

山本のお父さんにペコっと頭を下げれば、カツと目を見開いた。ひい。オレなんかし
たつけ!?

「武! 茶ぐらい出さんか!」

「わ、わりい、ツナ! 忘れてた!」

そんなことで怒ったの!? おかまいなくとオレは慌てて手を振る。

「そうはいかねえ! ガキの頃から野球ばつかのバカ息子をここまで育て上げてくれたの
はツーチやんなんだぞ!」

「オレじゃないですって! それは山本のお父さんです!」

「それなのに……気がきかねえで、すまねえ!」

「だ、大丈夫ですって。オレ気にしてないですしちゃ……」

し、知らない間に山本のお父さんがオレを見る目が変わってる……。

「ハハッ。でも親父の言う通りだぜ。オレ、ツナのこと家族みたいだと思つてるのはな
お茶を持って戻つて来た山本が、オレに向かつてそう言つた。家族かあ……。
「だつたら中学卒業すればオレ海外へ行きますし、寂しくさせちゃいますね」

何気なくオレは口にしたけど、山本と山本のお父さんは寝耳に水だつたみたいで固
まつてしまつた。言つちやまずかつたかな?

「ツ、ツナ……。海外へ行くのか……?」

「うん。やりたいことがあるんだよね。もしかしたら跡を繼がなきやいけないし、拠点をこつちに移すにしても10年はまともに帰つてこれないんじゃないかなあ。あー、でもヒバリさんが協力してくれるみたいだし、もうちよつと早くなるかも？」

並盛に被害がない限り黒のマフィアを潰すのは手伝ってくれないとと思うけど、オレが拠点を作りたいって言つたら少しは融通してくれると思うんだよね。

「ツーチやんは跡継ぎだつたのか……」

「は、はい。父さんの仕事の方の関係で……、家綱の可能性もあるけど、多分オレが選ばれると思うんだよね」

リボーンのことだからフウ太からランギングを見せてもらうだろうし。

「他にいい人いなか？」

「血筋を大事にするところでさ。オレと家綱しか継げる人居ないんだ。父さんも泣く泣

くだつたみたいで、この前手紙が届いたよ」

その時のことと思い出してちよつと笑つてしまふ。その日なんかつけられてると思つてたけど、父さんの部下の人でリボーンには秘密にしてつていうから、バレちゃまづいのに書いたみたいで……。で、肝心の中身は「すまん」の一言だけ。……気持ちはわからなくはないんだけどね。父さん結構不器用だから。いろいろ書きたかつたけど、書けなくなつちやつたんだと思う。

「武」

「ん？」

「お前もついていけ！」

「ちょ、何言つてんですか!?」

「なんでそんなんのー!?

「オレは真剣だ。ツーチやんを海外に行かせるなんて心配でならねえ。今まで受けた恩、ここで返すしかないだろう。そうだろ? 武」

「んー……だな! 野球はどこでも出来るしな!」

「いやいやいや、ちょっと待つてください。そんな簡単に決めることがじゃないですし、危ないですし……」

「危ない……?」

え。オレ、またやつちやつた……?

「武。家族同然のツーちゃんが危ないというんだ。これでいかねえのは男じやねえ!」

「いや、だから……」

「うし。親父、剣道教えてくれよ」

「よく言った! それでこそ、オレの息子だ!!」

「なんなのこの親子ーー!?

「オレのせいでも山本の野球の夢がーー！」
結局説得できなまま家に帰ったオレはリボーンに泣きついた。

うわあああと嘆いていると、リボーンなら「ファミリーGETだな」とか言いそ
うなのに、あまりの嘆きっぷりからか、ポンつとオレの肩を叩いてくれた。

山本が野球道具以外に竹刀も持ち歩くようになつた。

あれからオレは支離滅裂になつたけど、ちゃんとリボーンに説明したんだ。マフイアとかは話さなかつたけど、不良を倒せるオレが危ないっていうなら尚更ついていくつて山本が言つて、野球選手になる夢があああつてまた嘆いて……。オレがあまりにも落ち込んでいたからか、リボーンがずっと応援していくたオレの気持ちも理解できるけど、山本の意思を受け入れてやれつて優しく諭してきてさ。リボーンにそんなことさせて、オレもう情けなくてボロボロ泣きながら、うんうんつて頷いて……。もうその日は散々だつた。

家綱にはバカにされるし、リボーンにやられて何も言えなくなつたけど……。ランボもフウ太もうつったのか、わんわん泣いちゃつて。だからしつかりしなきやつて思えて泣きやめたんだけどさ。ビアンキには一緒の布団に潜りながら男のプライドというものを教えてもらつた。前世で男だつたのに……と思いながらも性別がかわるとわからなくなるもんだなーつて思つた。

ちようど次の日が日曜日で、オレの目が泣きはらした後つてわかるぐらい腫れていた

から、ヒバリさんもギヨツとしてさ。笑つて誤魔化したけど、バトルする気にはならなかつたみたいで、ご飯に連れてつてくれた。ヒバリさんがありえないぐらい優しくて、自分の頬を引つ張つてたらトンフアーワーで小突かれた。オレも失礼だと思ったから、これは避けなかつたんだ。でもそれはそれでヒバリさんは気にくわなかつたみたいで、さつきといつものオレに戻れとため息混じりに言われた。

そんな感じでいろいろあつたから、山本が竹刀を持っていてもオレは何も言わないことにしたんだ。骸にもその話をしたら、本当に君はめんどくさいですねって言われたけど……。なんで一番付き合いが長いコイツが優しくないんだよってちよつと思つたけど、骸にも優しくされたらオレは完全に立ち直れるかわからなかつたから、骸が居て良かったと思つてる。

ちよつとずついつもの日常に戻ってきたオレの家の前に、黒服の人たちがいっぱい居てびっくりしたんだ。

流石に付き合いが長かつたから部下の人でも見覚えのある人がチラホラ居て、誰がきているのかすぐにわかつたオレは慌てて家に通させてもらつたんだ。

「よつ。お前が沢田ツナか」
や、やつぱりディーノさんだ!!

「ツナ、骸から聞いてお前もよく知つてんだろ？オレがお前らの前に家庭教師をしてい

たディーノだ。お前の兄弟子だな』

オレ、骸から何にも聞いてないのに知つてることになつてるよ……。あいつが何も言わなかつたのはオレに害がないからだろうけど。

「ええつと……」

「ツナ姉、ツナ姉」

びよんびよん飛び跳ねてオレに何か伝えようと/orするフウ太のためにオレはしゃがんだ。

「リボーンがね、ツナ姉のために呼んだんだよ。僕のランギングだとツナ姉の憧れランギングでディーノ兄は三位だからね」

「リボーン、お前……」

感動してリボーンを見つめながら気づいたけど、ランギング怖え……。知り合つてないはずの人もランギングしてんじやん!? 今回も骸のおかげで乗り切れたよ……。

「んだよ、うまくやつてんじやねーか。こつちへきて早々にオレを呼びつけるから心配してたんだぜ?」

「そうか」

「リボーン?」

「……おめーと違つてツナは優秀だかんな。やることがねえんだ」

「あはは。よく言うよ。オレこの前泣き言をいつて迷惑かけたのに……」
でもそのおかげでこんなに早くディーノさんに会えたんだけど。

「あ、良かつたら泊まつてつてくださいね！」

「ん? そうしたいところだが、泊まるどこねーだろ?」

「オレの部屋を使つてくれていいですよ。オレ、母さんやチビ達と寝ますし」

「……気持ちだけにしておくぜ。部下がホテルとつてくれるしなつ」

それならしようがないよね。ちょっと残念だなあ。昔みたいに夜まで話したかつた
んだけど……。

「それなら、ご飯ぐらいは食べてつてくださいね！」

「わーった。わーった」

「うわー、ディーノさんに頭撫でられるの久しぶりだよ。オレがボンゴレ継いでからは
流石にやつてもらえなくなつたしなあ。

「なに、やつた本人が照れてんだよ、ボス」

「うるせー。こうも喜ばれると可愛いだろ……」

「あはは。またまたー」

あ、可愛い妹分っていう意味だつたのかも。オレ、自惚れちゃつたのかも……恥ずか
しい……。

「ツナ、行きましょう。穢れるわ」

「げつ、ビアンキ!? って、そりやねーぜ」

「ビアンキ、行くつてどこへ?」

「ママンの手伝いよ。この男の分も増えるのでしょうか? 私も手伝うわ」

うわーっとオレは慌ててビアンキを追いかける。このままだとみんながポイズンクッキングの餌食になっちゃうよ!

オレがビアンキの料理を阻止しつつ母さんの料理を手伝つてゐる間に家綱と顔合わせは済んだみたいで、リボーンが何かしたのか4人で食事をすることに家綱は何も言わなかつた。流石に人数が多いからね。ちび達は母さんとビアンキに任せた。

「そういや、お前らファミリーはできたのか?」

「ええつと……」

「ツナは優秀だぞ。オレが目をつけた奴はみんな手懐けてんぞ」

「手懐けてるつていうなよ! 協力してくれてるだけだから!」

「へえ。リボーンが目をつけた奴つてことはこりや本気で凄そうだな」

いや、そんな……とディーノさんの言葉にオレは照れる。みんなが褒められるとやっぱり嬉しいから。

「家綱はどうなんだ？」

「そういや、どうなつてゐんだろ……とチラツと顔色をうかがう。家綱は完全に無視をしていた。

「全然ダメだな。一応同じ奴にも声をかけたが、『面白い冗談ですね』や『嫌』、『誰?……ああ、口だけの草食動物ね。興味ないよ』、『わりい、オレはツナを守るつて決めちまつたからよ』、『極限に誰だーー!』という感じで散々だつたぞ」
「うわ、誰の言葉かわかつちやつたよ……。というか、いつのまにかお兄さんにも声をかけてるし……。」

オレがリボーンの行動に引いてると、ガタツと家綱が立ち上がつた。……ああ、機嫌悪くなつちやつたよね。

「おい、後でオレの部屋に持つてこいよ」

「自分でやれ。ツナに命令すんな」

わかつたとオレが返事をする前に、リボーンが家綱に言つてしまつた。オレは気にしてないからつて言おうと思つたけど、リボーンに視線を向けられてオレは何も言えなくて……。それでも家綱のフォローしなきやつて思つて、お盆をそつと差し出した。食べないと身体に悪いし、後で母さんに作つてもらつたりしたらリボーンの制裁を受けるハメになるから。ひつたくる勢いだつたけど、家綱は受け取つてくれてオレは良かつたと

ホツと息を吐いた。

家綱が料理を持つて部屋に戻るのを見送った後、オレはデイーノさんに頭を下げる。

「すみません！ オレのせいで……」

「ツナ、オマーのせいじゃねえんだぞ。謝んな」

「で、でも……」

「オレは気にしてねーから、大丈夫だ。な？」

デイーノさんの言葉にオレは安心したように座った。

「んで、ツナのファミリーはどんな奴なんだ？」

空気をかえるようにデイーノさんは明るくオレ達に質問してきた。やつぱこういう
氣遣いがサラッと出来るデイーノさんは、カッコいいなあ。

「どんな奴……？ こ、個性的かな」

「一筋縄ではいかねー連中なのは確かだな。特にあいつのヤバさは別格だ」

「あいつてもしかして骸のこと？」

「ああ。オレでも勝てるかわからねえからな」

「は？」

デイーノさんが驚いてるけど、オレもちよつとその気持ちわかる。リボーンが負け
るとは思わないけど、骸は術師だから勝つのは苦労するよ、絶対。

「それ大丈夫なのか……？」

「大丈夫ですよ。リボーンにも言いましたけど、もしもの時はオレが止めてみせますよ。骸もオレにはやりにくいだろうし」

「おいおい。もしもの時の場合は、情を計算に入れるのはよくないぜ」

「違いますよ。オレ、あいつの術のほとんどが効かないんですよ。なんとなくこれは幻術だなーってわかるんで」

ギヨツとしたようにリボーンとデイーノさんがオレを見た。え、何かまずいこと言つたつけ？

「……いや、この歳でもう幻術に対抗できるとは思わなくてな」

「そうですか？ 最近、ヒバリさんもわかってきてる気がするんですけど……」

「ヒバリもなのかな……」

「あの人、天才だから。小学生の頃から、骸の幻術うけてるしね」

本当にヒバリさんは凄いよね。オレみたいに血じやなくて、自力で耐性つけようと/or>るから。末恐ろしいな……と呟いたデイーノさんの言葉にオレも同意して何度も頷いたやつたよ。

「……いつもこうなのか？」

「そうだぞ」

ん? とオレが首を傾げれば、ディーノさんに頭を撫でられた。2人の会話が気にはなつたけど、今でしか味わえないことだからオレは素直に喜んだ。

やつぱり部下がいないディーノさんは半人前で、ご飯をポロポロこぼしてたし、片付けを手伝おうとして転んで食器を割つたりした。でもそれはわかっていたことだし、ちび達で慣れていたオレは笑つて流した。

「キヤアアア!」

「母さん!?

オレは聞こえてきた悲鳴に急いで母さんのところへ向かう。オレがついた時には母さんは腰を抜かしながらも、風呂場へ指をさしていた。

「へ?」

「ディーノのペットのエンツイオだぞ」

「いつたい何!?」と思つていたら、エンツイオが風呂場で暴れていただけだつた。そういうえばそんなこともあつたなー、忘れてたよ。

「いててつ。うわつ、いつのまに逃げ出したんだ? つと、そんなこと言つてる場合じやねーか。ツナはあぶねーから……」

よいしょっとオレはエンツイオを転がしてひっくり返す。まだそこまで大きくなかつたし、オレが本気で殴つたらエンツイオが危ないからね。動けないようにするのが

一番だと思ったんだ。

「言つたろ。優秀でやることがねえつて」

「……だな」

母さんにもう大丈夫だよと声をかけに行つてたオレは2人の会話を聞いていなかつ

た。

すぐにディーノさんはイタリアに帰っちゃつたけど、風呂場の修理代と直るまでの銭湯代と迷惑料をポンつと置いて行つてくれた。オレもあんな感じにサラッと出したい。ボンゴレのボスだつたのに、貧乏性が抜けなくて恐る恐る使つてたから……。

まあそんな感じでしばらくオレ達は銭湯通いなんだけど、女と男で別れるつていつても家綱はオレと一緒に嫌みたいで、母さんが家綱と一緒に通つてる。母さん達の護衛にはビアンキがついてくれた。家綱も料理さえしなければビアンキは大丈夫とわかつたみたいだし。

だからオレはちび達やリボーンと一緒に。みんなで女湯に入ればいいのに、リボーンだけは男湯に行つちやうけどね。まあでも呪いで赤ん坊になつただけだから、無理には言わなかつたけど。

今日もいつものように帰つていたんだけど、家の前でマンガみたいに風呂敷を被つた怪しい人がいた。……ハルだつたよ。

「ちやおつス。ハル、何してんだ？」
「この声はリボーンちゃん！」

どうやらオレの知らないところでリボーンとハルは出会っていたらしい。

「はひー！こんなにも子どもに好かれてる人、保育園の先生以外でハル初めて見ました

……」

「つて、それオレの事!?」

ハルの言葉にビックリしたけど、よく考えればオレはランボを抱っこしてるし、フウ太はオレの腰に掴まつてて、リボーンはオレの頭に乗つてるもんな。でもこれでもまだイーピンが来てないんだけど……。

「ハル、安心しました！家綱さんはリボーンちゃんを邪険にして心配だつたんです！あなたがいれば、リボーンちゃんは大丈夫そうです！」

「えっと、ありがとう？」

「はい！では、ハルは帰ります！」

相変わらず、一度決めたら突つ走つちやうんだよなーと思ひながらハルの腕を掴む。

「はひ？」

「ちよつとここで待つてて。お願ひだから」

「はい。いいですよー？」

ちび達を母さんに預けたオレは、すぐにハルのところへ戻る。リボーンはついてきちゃつたけど、まあいいか。

「ごめん、お待たせ」

「大丈夫です！あの、どうかしましたか？」

「もう夜も遅いし危ないから送ろうと思つて。オレこう見えても強いから安心してよ」「はひ……。あなたが女性で良かつたですう。危うくハルの心は盗まれるところでした……」

ハルは変わんないなあ。よくわかんないところもあるけど、明るくてオレの事ずっと好きでいてくれて。女になつても、好意的に見られるなんて思わなかつたよ。

この後ちゃんとハルと自己紹介しあつて、同じ年で女になつたのに、また「ツナさん」って呼んでくれるからオレもつい嬉しくつて、気付けば連絡先まで交換していた。「相当ハルのこと気に入つたんだな」

「あはは。わかっちゃつた？」

ハルを送つた帰り道にリボーンに言われてオレは素直に認めた。

「リボーンありがとう。オレ、お前のおかげで毎日楽しいよ」

上機嫌だつたオレは氣付かなかつた。リボーンがオレの頭の上で難しい顔をしてるなんて……。

次の日、いつものようにクロームを迎えに行つてると骸に声をかけられた。

「君にいいことを教えてあげましょう」

「ん？」とオレが首を傾げると、骸がリボーンの顔をチラツと見てからオレを見たから背筋を伸ばす。

「今日、君のクラスにスマーキンボムという名の殺し屋が転入してきますよ」

「ええつ!?」

「あぶねー。合図されなかつたら、オレ顔に出てただろうし、骸にほんと?ほんと?つて詰め寄つてたよ。」

「精々気をつけることですね」

がつづり釘を刺されたオレは素直に頷いた。別にオレとしてはリボーンにならバレちゃつてもいいかなつて思うんだけど、なんかの弾みで呪いが解けなくなつちやつたら怖いし、骸にオレのことだからズルズルとバレしていくだけじやなく、元男だとわかれればまた結婚出来ませんよと言われてしまえば隠すしかないというか……。オレももう女として生きる気になつてるから、みんなに男として見られると困るし……。

ここまででは良かったんだよ。オレも獄寺君を見ても顔に出さないようにしたし、家綱の机を蹴られてオレが睨まれても苦笑いだけで済ませたよ。でも骸の話を聞いたクロームがオレにべつたり。山本も朝の獄寺君の態度に警戒しちやつて……。今の山

本つてもしかしてマフィアとか気づいてるんじゃないかなって思う時がある。昔みたいに遊びみたいな雰囲気はないんだよ。

だから獄寺君とうまく接触出来なくて、どーしょーかなーと思つてたんだけど、家綱が授業に来なくて、よく見れば獄寺君も居なくて、これつてオレの時みたいにケンカ壳られてるんじや!?と思つて先生に「オレが探してきます」と言つて授業を抜けさせてもらつた。クロームと山本もついてきたかつたみたいだけど、何人も抜けれるわけもない。それにほとんど名ばかりだけど風紀委員のオレが動くといえば先生はオレだけで十分と判断するしね。

どこだつたかなあと思いながら歩いてると、ドンドンと聞こえてきて、オレは2階に居たけど家綱が校舎の壁に追い詰められてるのを見て飛び降りた。

「家綱!!」

「なつ」

爆発音で獄寺君の声なのか、家綱の声だつたのかわからなかつたけど、オレはなんとか家綱を掴んでその場から離れた。

「家綱！大丈夫!?」

「離せつ！お前がなんか居なくとも……これぐらい……」

そう家綱が言ったタイミングで家綱の額が撃たれた。殺氣がなくて反応出来なかつ

たから、ちょっとビビったよ。

「復活!!死ぬ氣で逃げ回る!!」

えつ逃げ回るなんだ……。オレの時はなんで消火活動だつたのかなあ……。よくわ
かんないけど、これで家綱は大丈夫。あとは獄寺君を止めるだけと思ったんだけど、次
のダイナマイトがふつってきた。うん、やつぱり家綱は問題なさそうだ。つてことは、少
し前からオレの超直感が訴えてるのは……。

「獄寺君、もうやめるんだ！」

「果てる！2倍ボム！」

オレは避けながら、獄寺君へ近づく。これ以上は危険だ！

「3倍ボム!!」

ポロッと落ちたダイナマイトを見て、オレは獄寺君の周りにあつたダイナマイトの火
を手で消していくた。

「獄寺君、怪我はない!?」

「……は、はい」

よかつたあと安心したオレはホツと息を吐いた。……やつちやつたなあ。

「オレ、あなたに一生ついていきます……」

「へ？」

ポツリと聞こえた声にオレは首をかしげる。なんか獄寺君っぽくないよね。前の時は土下座までして、ちょっと強引なイメージだつたんだけど……、顔は真っ赤だし視線も合わないような……。

「んなこと言つてる場合か」

「ぐはっ」

「ゞ、獄寺君!?

リボーンに蹴られて獄寺君が吹っ飛んじやつたよ!?せつかく獄寺君は怪我しなかつたのに……。

「ツナ！」

「ひい！」

怒気を含んだリボーンの声にオレは反射的にビビつた。けど、鉄拳制裁は来なくて……そのかわりグイグイと腕を引っ張られて慌ててリボーンについていつたんだ。やつとリボーンの足が止まつたと思つたら、場所は保健室だつた。

「シャマル！」

「ん? おつ、リボーンとツーちゃんじやねーか」

え、いつの間に……シャマルが保健室の先生になつてたんだろう……。それもオレのアダ名まで知つてるし……。

「ツナ、シャマルに手を診せろ」

「あ、うん」

「うわー、やっぱ素手ですることじやなかつたよなー。オレの両手が火傷で凄いことになつてるよ。

「なつ！……よく我慢したな」

「見た目ほど痛くないというか……これぐらい大したことないかなー……なんて……ハ

ハハ」

やべつ、シャマルとリボーンがなんか怒つてる……。でも全身の骨が粉々になつたことがあるオレからすれば今回の怪我なんて可愛いもんだと思うんだけど……。いや、治療してくれるのは助かるんだけどね。

「ツナ、なんで獄寺のボムを手で消したんだ」

「まじか……。こうなつたのは隼人のせいいかよ……」

「その話は後だ。おめーなら、家綱にやつたみたいに獄寺を引っ張つて逃げれただろ」

「そういえばなんでだろう。グローブをしてる感覺でやつちやつたのかなつて思つたけど、リボーンの言う通り家綱の時はちゃんと出来てたよな？」

「うーん……。あ、わかつた」

「なんだ？」

「獄寺君のことを大事に思つてゐる人がいるつてわかつてもらうには、避けるだけじゃ伝わらない気がして……。守つてみせないとつて考えたみたいで、気づいたら身体が勝手に動いてた」

オレがそういうとリボーンには溜息を吐かれちゃうし、シャマルは天を仰いだ。あ、でももう怒つてはなさそうかな？」

「わあ、シャマルありがとう」

会話中にもシャマルは手を動かしてくれたみたいで、両手にはしつかりと包帯を巻いてくれていた。

「こらこら、どこへ行く気だ。ツーちゃんはこのままベッドだ」

「へ？」

「ツーちゃんが思つてるより怪我はひどい。熱も出るだろうよ。つたく、隼人の奴め

……」

「オレそんな軟な身体はしてないから、大丈夫だと思うけど……」

「医者の言うことは聞け」

リボーンにも睨まれて、しぶしぶオレはベッドに寝転ぶ。これぐらいは大丈夫なのになあと思つていたけど、身体は回復しようと思つたみたいでオレは気付けば眠つていた。

次に起きたらなぜか骸がベッドの近くの椅子に座つて本を読んでいた。

「……なんでお前がここに？」

「感謝しなさい。病人の前でうるさくしていた彼らを追い出してあげたんですからね」

「うわー、みんなに心配かけちゃったのか……。骸の話では獄寺君はずっと土下座して謝つていたらしいし、そんな時にクロームと山本が来てくれたみたいで、獄寺君の態度で許したみたいだけど最初はちょっと怒つてたらしい。で、クロームが来たからシャマルが暴走して幻術の餌食になつた。……さつきから、うんうんと聞こえるのはシャマルの声だつたんだ。絶対骸も追加でくらわせてるよ……。」

それだけで終わればまだ良かつたんだけど、京子ちゃんや黒川も来てくれて……京子ちゃんに聞いたのか、お兄さんまで来て……。骸はため息を吐きながらもそこからは話すまでもないでしようと言つたから、オレは察した。……群れを見たヒバリさんまで來たつて。

「助かったよ、骸」

クロームに聞いて骸がすぐ来てくれなかつたら、みんな保健室でお世話になつっていたよ。それも肝心の医者がクロームにやられちゃつて寝込んでるし……。「そう思うなら、怪我なんてしないことですね」

ほんとわかりにくいなあ。感謝しろって言つたのに、オレが素直にお礼をすれば、怪我するなつて言うんだから。

「雲雀恭弥から伝言です。本調子じやないあなたと戦つても面白くないからしばらくはいい、ですつて」

うわ……、骸に伝言を頼むぐらいだし、この人もわりにくいけどすっげー心配してくれるよ。こんなことになるなら死ぬ気になれば良かつたなあ。火を手で消すぐらいなら、たいして痛くないからつて気にしなかつたんだよね。

「そろそろ休みなさい。今日ぐらいは静かに寝させてあげますよ」

オレは骸の言葉に甘えて、ゆっくりと目を閉じた。

12

死ぬ気で治す気ではいたけど、流石に1日では治らなくて朝から四苦八苦しながらもオレは日課の走り込みのために外へ出た。

「おはようございます！10代目！」

……いつたい、いつから獄寺君は家の前に居たんだろう。オレが学校前に走つてることを話してないのにもう居たよ。

「ランニングですか？お伴します！」

「今日は走るだけだから、手を使わないし大丈夫だよ？」

「いえ、自分も鍛えたいので！」

そこまで言うならとオレも氣にしないことにした。獄寺君が強引なのは昔からだ

し。責任を感じて世話をする気満々だったから。

まだ怪我も治つてないし、身体が鈍らないために走つただけだから、いつものコースは当然やめて早目に切り上げた。

「流石です、10代目！オレも鍛えてるつもりでしたけど、もっと必要だと痛感しました」

「獄寺君は制服だつたしね。走りにくかつたよね、ごめんね」

オレの知つてる獄寺君なら「滅相もありません」とか言いそうなのに、真つ赤な顔してそらすからやつぱりこの獄寺君はちょっと変だよなあ。

「良かつたら家で休憩しながら待つててよ」

「い、いえ……」

「でもオレまだ朝食べてないし、着替えないといけないから気をつかつちやうよ」

「10代目がそうおつしやるなら……」

どうぞあがつてあがつてと玄関まで来たのは良かつたんだけど、オレすっかり忘れてたんだよ。前世ではビアンキは常にゴーグルしてくれたからさ。

「ツナに悪い虫がついたと思つたら隼人だつたのね」

「ア、アネキ……」

ぐぎゅるるるというお腹の音と共に、獄寺君は倒れてしまつた。

「ダ、獄寺くーん!!」

オレの叫びもむなしく、ビアンキがこの場にいる限りどうしようもなかつた。仕方なくオレは朝食を抜いて、さつさと着替えて獄寺君を外へ連れ出した。

「リュックの許可もらつたから大丈夫だよ。あ、でもそう言つてもらえるなら弁当は

【解説】この章では、獄寺君が朝食を抜いていたところ、オレが彼を連れて外へ出る。しかし、オレの朝食を抜いていたために、獄寺君が倒れてしまつた。しかし、オレは朝食を抜いていたので、彼が倒れる原因はオレ自身である。】

持つて欲しいかも

「もちろんです！」

手が使えないから腕に通して持つて居るけど、やつぱり持ちにくくて獄寺君の言葉に甘えることにしたんだ。クロームの家に向かいながら、獄寺君の壯絶な過去の話を聞く。何度聞いてもビアンキの料理は恐ろしいよ……。

「10代目はアネキと親しいんですね……」

「そうだね。料理は……うん、作らないように防いでるけど、よくしてもらつてるね。今日だつて手を使えないから手伝つてもらつたよ」

「オレに言つてくだされば……」

「えつと、汗を拭いてもらつたり、着替えの手伝いだつたから……」

ボンつと獄寺君の顔が赤くなつた。……うん、ごめんね。オレももうちよつと言葉を濁して言えば良かつたよ。でも両手が使えないと不便だなー。よく考えるとオレはいろんなところを怪我したけど、手を怪我したことはないかも。グローブつけてたし。「そ、そういうえば……10代目の弁当は大きいですね」

「ごめんね。重いよね」

「いえ、そんなことはありません！」

獄寺君、もうちょっと肩の力を抜けれないかなあ。懐かしい気持ちもあるけど、しん

どくないかなつて心配になるよ。

「実はそれ3人分なんだ。骸とクロームの分もあるから」

「……骸。昨日の優男……」

「え、骸……獄寺君に何したの。事件を起こしてないのに、もう険悪なんだけど……。
む、骸はオレの幼馴染なんだ。昔からオレの事を知つてて、頼りになるし、悪い奴
じゃないよ」

「じゅ、10代目は……骸の野郎と付き合つてたりは……」

「ないない。オレ、フラてるもん。……あ、弁当」

「なんか変な音がしたなーと思つたら、獄寺君が弁当を落としてた。割れてなきやいい
んだけど……。」

「えつと……獄寺君、どうしたの?」

「すみません! オレ驚いた後、一瞬でも喜んでしまいました! 右腕失格です!」

「あ、やつぱり右腕を目指してるんだ。オレも右腕は獄寺君のイメージだから、嬉しい
なあ。じやなくて、獄寺君はオレがフラれたのを喜んでしまつて謝つたんだよね?……
ハハハ、そんなにオレにモテて欲しくないんだ。」

「……どこかで縁があればなーって思つてるから、その時は獄寺君に応援して欲しいな
「じゅ、10代目のためなら……オレは、オレは……」

……すっげえ嫌そなんだけど、オレ泣いてもいいのかな。

「この話はもうやめようよ、獄寺君……。オレまだそういう人と出会ってないし……」
オレのライフが0になる前にと思つて言つたら、獄寺君が嬉しそうに頷いてくれた。
そんなにオレがモテるの嫌なのー!?

クロームの家についたオレ達は、骸とクロームに弁当を落としてしまつたことを説明した。漏れてなさそうだから、割れてはないと思うんだけど崩れてるだろうから。

説明が終われば、すぐにオレ達は学校に向かつた。獄寺君が骸にガンを飛ばしてたからね。骸は何が面白いのか笑つてたし、クロームの機嫌も悪くなつてきたからさ。

オレの予想通り、骸と獄寺君が絡まなければ大丈夫だつたみたいで、オレが間に入つて学校につくころにはなんとか普通に会話もできるようになつていた。

「ツーチayan、大丈夫?」

「そんなに痛くないんだけどね。シャマル……医者の人の話だと後数日はこのまま無理させないようにだつて。教室による前に診てもらえたんだ」

クロームがシャマルを見た途端、三叉槍を出した時はビビつたけど。ヒクツと頬を引きつらせながらも、オレの手を見るだけで何もしないとシャマルは必死に弁明してたけど、これは間に入らなかつたよ。シャマルの自業自得だし。

心配して声をかけてくれた人達にオレは何度も大丈夫だよーと教えてると、お腹が

鳴った。朝食食べ損ねたからね……。

「ツナ。腹減つてんのか?」

「聞こえちやつたんだ……」

「まあな。オレいいもん持つてるぜ」

山本にそう言われてオレは目を輝かす。なんでもいいから恵んでください!

「ほら、あーん」

「あーん」

「山本! 10代目になんて失礼なことを!」
ルブル怒りに震えて驚いた。

「ん? そう言われてもガキのころから何度もやつてるしなー。な、ツナ」

「そうだね。山本ん家に行けば、お菓子絶対もらえるもんね」

子どもの頃の遊びの延長みたいな感じで、オレ達はあんまり気にしてない。クラスのみんなも慣れてるのか誰も気にしてないし。山本のファンの子達に恨まれるかもつてちょっとと思つたことはあつたけど、オレ達にそういう感じの雰囲気は一切ないからね。すぐに誤解が解けて今のところ問題になつたことはない。

「ははーん。さてはあんたもやりたかつたのね」

「なつ」

「お？ そうなのか？ ほらよ」

黒川が真面目な獄寺君をからかって楽しんでるよ……。山本は天然だから純粋に信じちゃつて獄寺君に渡しちゃつたなー。オレとしてはどっちでもいいんだけど……。いや出来れば貰えるなら食べたい。一枚じや足らないし、手がこんなだし。

チラッと期待を込めて獄寺君を見ると、恐る恐るだけどクツキーをオレの前に持つてきてくれた。やつたねとオレが食べれば、獄寺君はプルプルと震えていた。……怒つてはないみたいだね。どつちかというと感動かな。そういうえば瓜に初めてちゃんと餌を食べてもらつた時もそんな感じの反応をしてたよ。

その流れで面白いと思つたのか、順番にみんなからも食べさせてもらつた。

「なんだがみんなに餌付けされてるみたい。オレ、家でもそんな感じだよ」

「昼食の時間が楽しみだわ」

「あはは。頼むよ」

オレはいつも一緒に食べてゐる京子ちゃん達に向かつてお願ひした。

朝の出来事が広まつたのか、休憩時間にオレが歩いてると女の子達がお菓子をくれる。もちろん、あーんつて感じで。お腹が減つてたのもあって相手は女の子だし、遠慮なくいただく。流石に山本と獄寺君以外の男の子からは恥ずかしいから貰わないけど。

まあそんな感じで歩いてたのが悪かつたのか、後ろから殺気がしてオレは振り向いた。

「なに、君が風紀を乱してるの」

「アハハハ……」

笑つて誤魔化したけど、ヒバリさんの機嫌は直るはずもなくオレはうなだれた。
「はあ……。廊下は禁止。教室の中として」

チラッとオレの両手をみて、ヒバリさんが譲歩してくれた。あのヒバリさんが、だよ
！オレもう感動しちゃつて笑顔でお礼を言つちやつたよ。

「……君、本当に反省してるの」

「すみませんでした！」

まあすぐに頭を下げるハメになつちやつたけどね。

それからはみんなの協力もあつて普通に過ごせていたんだけど、ハルから放課後に遊
べないかっていうメールが届いたんだ。ちょっとぐらいなら大丈夫だけど、長文を打つ
のはしんどいから京子ちゃんにお断りの内容を代筆してもらつた。もちろん手のこと
を書いて、かわりに打つてもらつてるつてこともちゃんと説明して。しばらくすると電
話がかかってきたんだ。まあメールよりはいいよね。

『ツナさん、大丈夫なんですか？』

「うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとうね。後、持つのがちょっと痛いからス

ピーカーにしてるから

『はい！ ハルもちゃんとわかっています！』

よかつたよかつた。伝え忘れてても怒られることはなかつたみたいだよ。

『それですね、ハルも一緒に銭湯行きます！ ランボちゃん達の面倒はハルに任せてくれださい！』

話を聞いてるみんなが銭湯と首を傾げた。ハルは銭湯帰りに会つたから、オレン家の風呂が壊れてるのを知つてるみんな。みんなにそのことを説明しつつ、なんとかなるかなーと思う。そりや家綱は嫌がるかもしれないけど、リボーンと2人で銭湯行つてもらえれば問題ないはず。でもこのことをハルに説明すれば、反対するだろうしなー。

と、オレがいろいろ考えていると京子ちゃんとクロームも行くつて言い出した。黒川にはなぜか謝られた。子どもが居なけりや……とブツブツ呴いていたから、蕁麻疹出るもんなーとオレは一緒に行けないことを謝つてくれたんだつて気付いた。
「や、ちょっと待つてよ。気持ちは嬉しいけど、お風呂に入つてると遅くなつちやうし女の子がそんな時間に外に出ちゃ危ないよ」

ハルにみんなを会わせられるしいいかもつて一瞬思つたけど、ダメだダメだとオレは首を振る。

「なら、オレと獄寺も付き合うぜ。みんなを送ればいいだけなんだろ？」

「なんでオレも……!?」

「ん？ ジヤオレ一人でするのな。獄寺はいかねえって」

「誰も行かねえとは言つてねえだろが！」

「お兄ちゃんにも声をかけるね」

『はい！ では決まりですね！』

決まつちやつたよ……。でも獄寺君と山本とお兄さんが来てくれるなら大丈夫だし、オレも嬉しいしお願いしよつかな。

その日の夜、みんなと集まつて銭湯に向かつた。お兄さんがヒバリさんを誘つたのに来なかつたつて怒つてたり、獄寺君がフウ太を男湯に無理矢理連れて行つたりとか、一緒に入ることはなかつたけど骸がクロームの迎えに来てまた獄寺君が睨んだりといろいろあつたけど、オレはずつと楽しくて笑つていた。オレは女になつたし出会い系方も全然違つたのに、変わらなかつたから。

中1・体育祭編

1

オレの手が治つて、テストとかも終わり一学期の終業式を終えた日、ヒバリさんに呼び出された。獄寺君はオレがヒバリさんの下についてるのが気にくわないみたいで怒つてたけど、まあまと落ち着かせてオレは応接室へとやつてきた。……まあ折れたのは一度ヒバリさんに返り討ちにされたのもあるんだろうけど。

ヒバリさんに呼び出されたのは、夏休みの間のことだろうなー。風紀委員なのに、才レよくわかんない立ち位置だしね。と、思っていたんだけど違うみたい。すっげー機嫌悪い。

「ええっと……どうしました?」

「さつき僕のところにふざけた男が来てね。それを置いていったよ」

視線が机にある紙だったので、オレはなになに……という感じで軽い気持ちで読んで叫ぶハメになつた。

「黒曜中と合同体育祭——!？」

ふざけた男つて絶対骸じやん!つーか、あいつ何やってんの!?お前、こんなこと企画

するキャラじやないじやん！

「これから向こうの代表がその企画の説明をしに来るらしいから、君もそこの端で聞いて」

「え？」

「やるとなれば、こここの代表は君が適任だろからね」

……オレもそんな気がして来た。こんな企画を持つてくるんだから、黒曜中のトップにもう骸が君臨してそうだし……。

「ヒバリさんはこの話に乗る気なんですか？」

「…………」

これは悩んでる感じだね。まず骸が持つてきたからこの話に乗るのは癪。でもヒバリさんは売られたケンカは買う主義。ただこんな企画を実行すれば、風紀が乱れるに決まっている。まだから話を聞く気になつてるんだろうと思うけど。骸の考えも知りたいだろうしね。あいつなんか絶対企んでそうだから。

とりあえずオレは紙に書いてある内容を頭に入れる。うわっ、結構ちゃんと考へてるじゃん。

ますます何企んでるんだろうと思つてると、ノックの音がした。草壁さんが黒曜中の人をここへ案内してくれたみたいだ。

「委員長、お連れしました」

「そう。君はさがつてて」

チラッとオレを見たから、今回お茶とかはオレの仕事ね。と、はいはいと頷く。これ以上、人口密度をあげたくないんだろうね。向こうの代表ってどんな人かなーとオレは目を向けて、驚きのあまり名を呟いてしまった。

「……エ、ンマ」

なんでここに……？至門中の制服だし、そもそもオレが見間違うはずがない。なんで黒曜に？とかいろいろ疑問を浮かべていたオレだつたけど、ヒバリさんの殺氣で我にかえつた。

慌ててお茶を出しながら、炎真の様子を窺う。相変わらず怪我をしているみたいだけど、殴られた感じのようなものはない。多分ドジでやつた怪我だ。骸は約束通りちゃんと炎真達のことを見てくれていたんだ。

ただ最初にオレを見てから、一度もこっちには視線を送らない。ヒバリさんと話してるのであるんだろうけど、なんか懶らしくて……見ないようにしている気がするんだ。

炎真の話はほとんど紙に書いてあることだった。これ以上はもつと話し合わないと決まらないのもあるから、仕方がない部分もあるんだろうけど。

「それで、こんなことを企画した理由は？」

「うわっ、ヒバリさんズバツと聞いたよ。」

「骸君……生徒会長は……他校と交流することで生徒達の意識を高めたいって……う、うそくせーーー！ そう思ったのはオレだけじゃなかつたみたいで、ヒバリさんの機嫌が急降下した。」

「生徒会長は1週間だけ返事を待つ、と。では、オレはこれで……」

それだけ伝えると炎真が帰つちやつたのでオレはヒバリさんに「門まで案内して来ます！」と言つて慌てて追いかけた。

「ま、待つて！ 炎真！」

ヒバリさんに名乗つていたのを聞いていたから、オレは前みたいに呼んだんだ。すると、炎真も止まつてくれた。

「あ、あの……」

「……断つてくれていいから」

なんて声をかければいいのか、躊躇していれば炎真がそう言つた。それつて合同体育祭のことだよな？」

「隠さなくていいよ。君に頼まれたから骸君がシモンを守つてるつて聞いてる。父さんからもボンゴレとシモンの関係は教えてもらつたから」

「そ、そつか……」

関係つて、シモンを陰から支えるとかだよな？ そういうや、前世では炎真のお父さんは死んじやつたけど、その話を聞いたたつてことはちゃんと知つていたんだ。正しい歴史を。……ボンゴレはなんで途絶えちゃつたんだよ、はあ。

「えつと、骸はちゃんとしてくれてる？」

「……良くしてもらつてるよ。骸君のおかげでシモンの至宝のシモンリングも見つかつたから」

「そうなの！？ 良かつたー！」

前は未来の戦いから帰つてきた地震の影響で見つかつたんだよね。シモンの土地にあるのは骸も知つていたから、探してくれたんだ。シモンを守るにもリングがあつた方がいいつていうのもあるんだろうけど、あいつ本当にちゃんと見てくれてたよ。もつと報告してよ！ とも思うけどね。いやでも骸だし……。

「僕は父さんと違つて……陰になる気はなかつた。完全に覚醒してないとはいえ……リングもあるんだ、表舞台に出たくなつたんだ」

「うん！ うん！ オレもそれに賛成だよ！」

いつまでもシモンが日の目が当たらないところにいるのもおかしいからね。今回は争うこともなく決まってオレすっげー嬉しかつたんだ。だから炎真が「でも……」と

言つて続けた言葉にオレは固まつた。

「オレが間違つていた。ファミリーの反対を押し切つて、骸君に頼んで1人で転入してまでここまで来たけど……父さん達が正しかつたよ」

「な、なんで……」

「君と僕は違う」

え？ なんで？ オレと炎真は似た者同士だよね？

「骸君が君を知る機会だからと言つて、この企画を考えてくれたけど……、ここでちよつと話を聞くだけでわかつたよ。日の当たる場所にいる人っていうのは君みたいな人なんだつて。オレ達とは違う」

「そんなことないよ!! もしオレがそうなら、君達だつてそうだよ！」

オレの必死の訴えも、炎真には届かなくて首を振られた。

「……心配しないで。初代から続く誓いは守るから。君がボンゴレを継ぐなら、シモンは理不尽な扱いは受けないだろうしね」

「ま、待つて！ 炎真！」

オレの言葉に、炎真は止まることも振り返ることすらなかつた。

グッと手に力をいれ顔をあげたオレは、応接室に戻ってきた。

「ヒバリさん、合同体育祭の企画、受けてください」

「……ふうん。マヌケ面じやないようだね」

あははとオレは笑う。殺氣送られたらし、動搖してたのはバレバレだったよね。

「いいよ。そのかわり……負けることは許さないよ」

はい！とオレはヒバリさんに返事をした。

炎真との距離が縮まつた。オレが思つたような感じじゃないけど。……あの2人が悪いんだよ！ヒバリさんはまだわかるよ。あの人、昔からそうだし。骸……お前、オレと炎真のために企画してくれたんじやないの!?なんでそんなにも勝つ気満々なの!?ただの体育祭だよ！もう2人で話し合つてよ！顔を合わせるとバトルになるのはわかつてるけど……！オレと炎真がどんだけ2つの学校を行き来してると思つての!?少しでも自分の学校に有利なルールにしようとしないで！調整するオレ達が大変なんだから！

と、オレと炎真が2人に振り回される夏休みを送つてゐる。その間を縫つて、みんなと遊びに出かけたりするからまた忙しい。いや嬉しいし楽しいんだよ？ただ体育祭のことを思い出すと頭が痛いというか……。

「ツナ」

「ん？リボーン、なに？」

今日もあの2人のせいで疲れたーと休んでるとリボーンが声をかけてきた。
「明日海行くぞ。炎真も誘え」

「えっ、ちょっと！」

と、まあオレが言つても何か企んだりボーンが止まるわけもない。仕方なくオレは炎真に連絡する。オレが炎真の連絡先を知つてるのは仲良くなつたからじゃなく、連絡先を交換しないと合同体育祭の日までに間に合いそうになかつたからだけど……。

『……もしもし?』

「あ！ オレ、ツナ。あの良かつたらだけど明日海に行かない？ いやその、疲れを癒すにいいかなあ……なんて……ハハハ」

自分で言つてて、海なんて行つたら余計疲れるじやん！ つて思つたよ……。でもオレも炎真と少しでも仲良くなりたいし、なんとか来てもらおうと必死に言葉を考える。「ええつと……」

『……いいよ』

「ほ、ほんと?! いいの!？」

やつたーとオレは喜んだけど、リボーンから何も詳しいこと聞いてねえ……。

「く、詳しく決めてすぐに連絡し直すね」

『わかった』

オレは炎真との電話を切つた後、すぐに「リボーン！ 明日のことなんだけどー」つて叫んだ。

オレ達はいつものメンバーと炎真で海にいた。黒川とお兄さんは居ないけど。黒川はいつも通りの理由でお兄さんは部活。代わりについていうわけじゃないけどリボーンが何か言つたのか、家綱も居る。

「ビアンキは自分で大丈夫だと思うけど……、クローム、京子ちゃん、ハルはオレから離れちゃダメだからね」

「どうしてですか？ ツナさん」

「みんな可愛いし、ビアンキは綺麗だけど……まあナンパされると思うよ。特に1人になっちゃ、すぐにね」

前の時もそうだつたしなーと思つていたら、クロームがオレの腕に抱きついた。怖がらせちゃつたかな。

「クロームちゃん、ナイスです！」

「大丈夫よ。心配しなくてもみんな私が見ているわ」

ビアンキがそういうとみんなホツとしたような顔をした。いや、オレもビアンキがそう言つてくれるなら助かるんだけどさ。

「行こう、ツーちゃん」

「あ、うん……」

なんか違うような……と思いつながらも、オレは男子との待ち合わせ場所へと向かつた。

「みんなーー！」

ブンブンと手をふると、獄寺君が思いつきり目をそらした。あれ？ ビアンキには獄寺君は恥ずかしがり屋だからゴーグルつけてあげてって言つたから、ずっとつけてくれてるはずんだけど……。うん、やつぱりつけてるよね。

「獄寺君、大丈夫？ 体調悪いの？」

「い、いえ……」

「でも顔真っ赤だよ」

熱中症かなとオレは心配していたんだけど、リボーンは相変わらず男に厳しくてほつとけと言われた。もちろんそんなことは出来ないオレは下から獄寺君を覗き込んだんだけど……。

「ご、獄寺君！ 鼻血、鼻血出てるよ！」

テツシユテツシユと慌ててカバンから取り出す。いやほんといろいろと持つてきて良かつたよ……。

「すみません……10代目……。オレ、しばらく頭冷やしてきます……」

ふらふらと歩いて行くからオレも付いて行こうと思ったけど、フウ太に捕まつてそれは叶わなかつた。

「ツナ姉、しばらくすれば隼人兄は大丈夫だよ！」

「お前何か知つてんの？」

「まあね。でもツナ姉は知らない方がいいと思うよ。隼人兄はまだ知られたくないみたいだから」

教えてくれてありがとうとオレはフウ太の頭を撫でる。えへへと喜ぶ姿で誤魔化されそうになるけど、フウ太はほんと昔つから周りをよく見てるよなー。

まあこんな風にフウ太を褒めてると、オレつちも！つてランボもやつてくるんだけどね。撫でてやるけど、今度はフウ太がもつとつて言うんだよ。

オレがちび達に振り回されてると、家綱が炎真に絡もうとするのを山本が仲裁していった。ちょ、あいつ何やつてんの？！

「家綱！」

「んだよ。こいつ、ポンゴレの傘下なんだろ。それも弱小

家綱に教えたの、絶対リボーンだ！

「傘下じゃないから！同盟だから！弱小とかそんなの関係ないよ！それと……ポンゴレを繼ぐと決めてもないのに、そういう態度はダメだよ！」

「うるせー。継げばいいんだろ、継げば」

「本気で言つてるのか？」

「家綱が腰を抜かした。自分でもこれはまずいと思った。……オレ、結構怒つてる。
「……」めん。でもいい加減な気持ちで口にすることじゃないよ」

極力家綱を見ないようくに視線をそらす。オレが後ろを向くのは違う気がしたから。
何も言えずにただ離れていく家綱の足音を聞いてると、やつちやつたなあと後悔が押し
寄せる。そんなオレに気付いたのか、山本が「ツナ、任せとけって」と言つて家綱を追
いかけてくれた。こういうところ、ほんと山本には頭があがらないや。

「僕達のために怒つてくれて……ありがとう」

炎真がそう言つてちび達の相手をし始めたのを見て、オレは後悔していた気持ちが少
し軽くなつたんだ。

ちび達を選んだのは知り合いがオレしか居ないからというのもあるんだろうけど、炎
真はちび達の相手がうまいつてすぐわかつた。

「まみ……妹が居るからね」

「あ、そつか」

どんな子だろう。オレ会つたことないんだよなあ。

「やつぱり可愛い？」

「わがままだけど」

炎真とこんな話が出来るなんて思つてなかつたから、オレすっげー嬉しい。

「今度の体育祭で会えると思うよ」

「え!? 紹介してくれるの!?」

「……次期ボス候補を見たいはずだろうから」

そつちなんだ……とオレはちよつとショックを受ける。友達だからつて言つてほしかつたなあ。いやでも、諦めないよ、オレ。

「妹いいよね。みんな男だし、オレも欲しいや」

イーピンはまだ来ないのかなあとオレが思つてると、炎真は軽く息を吐いてから言つた。

「そんないものじやないよ。さつきも言つたけどわがままだよ」

「でも炎真、可愛い? ってオレが聞いたら否定しなかつたじやん」

しばらく考えた後、炎真はそうだねつて、今度は声を出して笑つたんだ。

久しぶりに炎真がちゃんと笑つたところを見たから、オレも声を出して笑う。オレが急に笑い出したから、炎真は驚いたみつたみたいだけど、また笑つた。

もつと話したいなあと思つたんだけど、炎真と2人で來てるわけじゃない。いつの間

にか復活した獄寺君がオレのところへ来て、向こうで泳ぎましようと必死に声をかけてきた。少し寂しかつたのかなつて思つたオレは獄寺君に付き合うことにした。

そのままなんでか知らないけど、少し機嫌が戻つた家綱と一緒に戻ってきた山本と4人で勝負することになった。いや獄寺君がケンカを売つたからなんだけどね。戻つてきた山本が声をかけたから、せつかくオレと2人つきりになつたんだぞつて。相変わらず獄寺君はオレを慕つてくれてるみたいで……。ちなみに家綱はリボーンに言われて強制参加。

その勝負だつたんだけど、オレは昔つから泳ぐのは苦手だし、女だから不利じやない？つて思つてたんだ。結果は……山本の次で2位だつた。獄寺君はすげーオレを褒めてくれたんだけど、家綱と一緒に女のツナに負けて情けねえぞとリボーンにボコられてた。オレからすれば、家綱が泳げるだけ凄いと思うんだけど……。獄寺君はまだ調子悪かつたんじゃないのかな？

その流れで他の泳ぎ方でも勝負することになつて、オレが基準みたいでオレより下の人達はリボーンに罰ゲームをくらつていた。といつても、泳ぐのは得意じやないから獄寺君にも負けるようになつたけどね。家綱は……うん。もちろんオレも最初は止めたんだよ？でもオレが止めた分は後でねつちよりらしい……。リボーンのねつちよりは本当にねつちよりだから……止めるのやめたよ。

炎真も巻き込もうとしたところで、オレはもう疲れたと言つて勝負は終わらせてもらつた。本当はまだまだ大丈夫だつたけど、リボーンが仕方ねえなと許してくれてよかつた。……あの目、オレがウソついたの絶対気付いてたし。

オレが男子達と遊んでいたのもあつて、午後からは女の子に捕まつた。オレの身体は一つしかないから……つて何度か思つたよ。

結局、ほぼ1日一緒に居たのに、炎真君とはちよつとしか話せなかつた。

3

夏休みの全校登校日の朝礼でヒバリさんから合同体育祭のことが発表された。

「うおおおお!! 極限、燃える展開ではないか!!」

……うん、わかつてたよ。お兄さんが知ればこうなるつて。ヒバリさん、お兄さんの声で眉ひそめてるよ。でもなんだかんだで慣れてるから見なかつた……というより、見ないことにするから問題なわけです。体育祭ではお兄さんにも頑張つてもらわないといけないし。

これが発表されたことにより、オレは更に忙しくなる。今から憂鬱だ。いやちやんとやるけどね？ オレがお願ひしたことだしさ。でもこれから風紀委員は当然だけど、他の委員会とも連携を取らなくちゃいけない。そのまとめ役がオレなんだよ……。まあオレだけじゃないけど、大変なのは。

「スポーツ委員会、運営委員会、放送委員会の委員長は、今日の放課後、会議室に来るよう。委員に所属している者も近々呼び出すだろうからそのつもりでいてね」
体育館に悲鳴が響き渡つた。

「何か問題もある？……うん、ないみたいだしよろしくね」

……ヒバリさん、それ脅しです。オレも協力してほしいから何も言わないけど。夏休みが消えた人達はご愁傷様。

こうして朝礼は終わつたんだけど、オレが教室に戻るとみんなに囲まれた。他の風紀委員には聞けないからしようがないんだけどね。でも詳細はまだ話せないんだよ。ごめん、ヒバリさんに口止めされてるんだと言つて手を合わせて許してもらう。クラスメイトはそれでわかつてくれたんだけど、他のクラスの人達もやつてくる。キリがないなーと思つてたら、獄寺君と山本がオレのところへ来るまでに止めてくれた。

「ごめん、2人ともありがとう！助かつたよ」

「当然のことでしたまでです！」

「気にすんなって」

やっぱ2人は頼りになるよ。オレが困つてたらすぐに助けてくれるんだもん。だから2人が困つた時はオレが助けるんだ。

「オレ、2人と友達になれて良かつた」

「おう！オレもだぜ！」

「……じ、自分もっス」

獄寺君は友達つて言つたのが気になつたのかな。オレの部下つていう気持ちが強いもんな。

「ごめんね。今はまだ友達でいたいんだ」

「……10代目?」

なんでもないよって言おうとする前に、オレは山本にちょっと強めで頭を撫でられた。獄寺君が怒っていたけど……山本はもう完全に知っているんだ。薄々そうじやないかなと思つていたけど、これではつきりしちやつた……。

「ツナ、謝んのはなしだぜ」

「……うん。ありがとう、山本」

オレは出来る限りの笑顔で山本にお礼を言つたんだ。すると、隣から不穏なオーラが流れてきた。ご、獄寺君!?

「……山本、死にやがれ」

「うわわわ! 獄寺君、たんまつ! 危ないし、オレ風紀委員だから見逃せないから!」

前と立場が違うから学校ではお願ひだから大人しくしてー!

放課後、ヒバリさんに呼ばれた委員会の委員長がやつてきた。オレはその人達に今回の合同体育祭について説明する。

「まず黒曜中との合同なので、普通の体育祭と違つて種目は全員参加ではありません。出場の機会がない人は応援団や体育祭に飾る垂れ幕を作成してもらいます。こちらも

勝敗に關係してくるので、体育祭には参加という形です

二校同時で、それも勝負という形だからね。全員参加させれば1日で終わるのは無理だとすぐに想像できた。でも喜ぶ人は多いと思うんだよね。運動が得意じやない人は他のところで協力できるから。全員参加だと迷惑かけるあの感じ……オレ、すっげー気持ちわかるもん。

「こちらの方で種目ごとに男女はもちろんですが……どの学年で何名選出するとかの調整はしました。なので、学年ごとで代表者の選出をお願いします」

オレがそういうとホツとしたような顔をした。学年だけでも決まつていれば、楽に聞こえるもんね。

「同じ人ばかり出ないよう1人2種目までと制限しています」

これは普通の体育祭であることだから受け入れられた。

「棒倒しの総大将はそれしか出れませんけどね」

「それしかですか？」

「はい。でもそこは流してくれていいですよ。ヒバリさんがするらしいですから」

みんなが目を輝かせたけど、オレからすれば恐怖しかないからね。もしヒバリさんを落とせばどうなるかわからないもん。

「問題はこれです……。全種目で一度だけ。代わりの人が出れるのは……」

え? と驚いたような顔があがつた。これも散々話し合つたんだよね。真剣勝負だからこういう形にするしかなかつたんだよ……。

「その日、出場が決まつてゐる人が風邪をひいて2人休んだとします。1人は代理で出場出来ます。これは誰でも代理可能です。誰でもなので総大将も一応可能です。もう2種目出ると決まつてる人でも大丈夫です。当然男子がかわりに女子限定の競技に出ることは不可能ですけどね。そこで使うともう1人の方は交代できません。例えはリレーだとそのチームは勝負する前から失格です。最下位でもありません。0点です」

うわあとスポーツ委員長が頭を抱えた。すぐ理解してくれて良かつたよ。……これ、メンバー決めは結構大変だからね。オレ達もそう思つたから学年までは絞つたんだよ。まあ一年と三年では違うからバランス調整のためにあつたけど。でも山本とかなら三年といい勝負出来るから、スポーツ委員のためにやつてあげたんだよ。

「すみません。怪我もですよね……?」

「はい。怪我人が毎年出る棒倒しは、最後にしましたけど……。あ、その競技だけは総大将以外は出れなくなつても失格にはなりません。代理は使つてなければ1人だけ可能です」

「……あの」

放送委員長が手をあげたので、どうぞとオレは話を促す。

「このルール、うまく使えば1人3種目出ることを計算して選出も出来ませんか?」
 「誰も病気や怪我がないという前提になりますが、可能です」

ますますスポーツ委員が頭を抱えた。

「ああでもそこは普通にベストメンバーで考えてくれて大丈夫ですよ。そのカードを切るところを決めるのはヒバリさんが担当してくれますから」

責任重大なところをヒバリさんがやつてくれるつて感動してるけど違うからね。あの人、本気だから譲らなかつただけだから。ちなみに骸もね。まじなんなの、あの人達!

「並中開催なものがあつてスポーツ委員の負担が多いので、実行委員の方でも協力してあげてください。オレも手伝いますので最後に振り分けしましよう」

大方予想していたみたいで、実行委員長の方は頷いてくれた。そういう時のためにある委員だしね。

「風紀委員からのお願いです。当日、一部の教室と体育館は黒曜中生徒のために解放します。風紀委員はトラブルが起きないように見回りをしますが、用がない限り近づかないようにそちらでも注意を促してください。恐らく人数の関係でグラウンドの方が割かれるでしょうから」

グラウンドもいつもの倍の人数だからね。生徒達だけならまだいいけど、保護者も来

れるから。1人の生徒に對して2人までつて制限したけど。參加証がなければ入れない仕組みで、門のところにも風紀委員が立つ予定。

ちなみに炎真のところはお父さんとまみちゃんが来る。お母さんはいいの？つて聞けば、まみちゃんがもう行く気満々だったみたいで現ボスであるお父さんは外せないからそうなつたんだって。

「あ、そうだ。オレちょっと忙しいんで、競技を決める時にオレが出席出来るかわからないで、もし居なければそつちで相談して決めてください。2種目出るのはいいんですけど、棒倒しはなしで」

「ええっ。女子もあれ出れるんですか！？」

「ヒバリさんがオレを出せるように抜け道を作つてます。棒倒しが一番点数が高いですからね。でもそれは怪我人や病人が続出した時ぐらいの保険で。そこで使えるかもわかりませんし。最初からオレを棒倒しに出すくらいなら、女子限定の競技に出て2種目分の点数を稼いだ方が得なんですね。運の要素が絡む借り物競走とかは抜きますが、個人種目ならオレが一位取ります。……取らないと咬み殺されます」

あはは……と遠い目をする。ヒバリさんの中で個人種目ならオレは一位を取ると決まつてるだろうからね。競技に集中出来るようにオレは見回りはないけど。まあ本部にいるけどね。

「ただ個人種目よりリレーの方が点数が高いですし、そつちにオレを選ぶのもアリです。本当にここはみんなと相談しないとわからないんで、オレも出たいと思つてるんですけどね」

ヒバリさんもオレを出席させたいと考えてると思うんだよね。オレ結構重要なポジションらしいから。

「オレの出場種目はこれで置いといて。代表メンバーがかなり重要だと理解はしてもらえたと思います」

みんな頷いたからオレは話を進める。

「この情報が黒曜中に漏れると対策を取られるので、前日に選出した内容の書類を交換するまでは絶対にバレないようにしてください。もしバレたとわかれれば、選考し直しだけじやなく、ヒバリさんがキれます。徹底してください」

みんな真っ青になつた。放送委員が今日呼ばれた意味を理解してもらえてよかつたよ。練習するのはいいけど、持ち出し禁止にしないと本当に怖いから。

「会議中、基本生徒達はメモはなし。自分の出る競技だけ覚えればいいですし、もし忘れれば委員かオレに聞けばいいでしよう。プログラムや注意事項とかは別で渡しますし。前日……黒曜中に渡した後ですが、ちゃんとみんなの手にも配られますから」

とりあえず大事なところを話したので、オレはゆっくりと息を吐いてから残りの細かい

い注意事項などの説明をし始めた。

合同体育祭前日、オレはヒバリさんに睨まれていた。まあ理由はわかるけどね。黒曜中の出場選手の資料を受け取ったのはオレだから、真っ先に確認したし。

「ねえ、これどういうこと」

「さ、さあ……？」

オレが聞きたいってば。あいつの考えなんて、わかんないことも多いし……。でもオレも黒曜中の総大将が骸じやないとは思わなかつた。

「ふざけてるの？」

「それはないと思います。骸と炎真は小学生の頃からの付き合いですから、骸に鍛えられている可能性があります」

まあシモンリングは使えないけどね。そういうのアリになつたら、ずっと骸を見張らなくちゃいけないから。一番最初になしつてオレが言つた。……なんでもありなら、オレも手段選ばないからね。オレの副音声が聞こえたのか、骸はすぐにしませんと断言した。

そのことを思い出しながら、ヒバリさんの様子を伺う。……うん、機嫌が悪そただけ

ど大丈夫かな。嫌々ながらも骸の実力は認めてるし、ヒバリさんも骸と出会つたことでかなり強くなつたからね。ヒバリさんは骸のおかげなんて死んでも言わないだらうけど。

「あいつ本人が出ないのは、暗躍が好きだからだと思います。オレ、あいつがみんなと一緒に競技するなんて想像出来ませんよ」

これはヒバリさんにも言えるけどね。でもまだヒバリさんの方が可能性はある。ヒバリさんは学校のためなら動くから。骸が動くなら誰かに成り代わつてやる。今回の体育祭ではできないけど、やつてもオレが見破つちゃうよ。

「ですでの、あいつが代理で出たとしても総大将しかありません」「その根拠は？」

「オレが笑うから」

何言つてるの？ というような視線をオレはヒバリさんに向けられた。

「もし骸がリレーとか出たなら、爆笑します。我慢出来ませんよ」

絶対無理。オレ、お前そんなキヤラじやないじやん！ って思つて爆笑する自信しかな

い。総大将ならまだわかるけど、みんなと走るとかもう……。

「ぶつ、あはははつ。……す、すみませんっ」

ひいひい言いながらもオレは謝る。想像しちゃつたじやん！

「……ふう。ええっと、そんな感じでオレに笑われるのはあいつのプライドを考えると耐えれないと思います。総大将も炎真なら変わる必要がないので、出ないと考えていいと思いますよ」

オレがそう言うと、ヒバリさんは納得出来ないという顔をしていた。まああれだけ勝つ気でいたのに、自分は出ないんだもん。骸の実力を知っているヒバリさんからすれば、気にくわないよね。でも骸って昔つからそういうところあるよなー……。

「あ。骸の行動ちよつとわかつたかも」

「なに」

「あいつ、人の企みを理解したら放置とかあるんですよね。なに考えるのかわからなかつたら積極的に動きます。で、内容次第ではオレか誰かに情報をさりげなく流すんです」

「そうそう、昔つからそだつた。あいつどこから調べてるのかわからぬけど、モス力に入つてた9代目のことや、大空戦後のヴァリアリー隊のこともそうだし、ユニがおしゃぶりに炎を込めて復活させようとしたことだつて知つてたんだよ。白蘭の能力だつて自ら乗り込んで調べてたし。で、ちよつと教えてくれるんだよ。オレ達の命がやばい内容なら。

「……ふうん。つまり僕たちの考えが読めたから、出ないつてこと」

「ひつ」

ヒバリさんの機嫌がやばいことになつてたー!!いやでも、オレが言つたことはそういうことだよね!?

「オ、オレが勝手にそう思つただけで、違う可能性の方が高いですよ? だつて向こうの代表を見る限りでは情報は漏れてなさそうですから」

黒曜中の生徒をヒバリさんの力で調べて、要チェックした人達の種目を見たけど、獄寺君とお兄さんと被つてたからそれはない。あいつが本当にわかつてたなら全部避けるよ、絶対。

「それにあいつは人を煽るのが好きつてヒバリさんも知つてますよね? 今回もそうですつて」

「……君がそう感じて口にした時点で、僕はそれを考慮しなくちゃいけないんだ。負けるわけにはいかないからね」

「確かにオレは骸と幼馴染ですけど、そこまであいつのこと知つてるわけじゃ……」「それが理由じゃない。君は……厄介なんだ」

オレは首を傾げるしかない。いきなり厄介とか言われたけど、どういうことかさっぱりわかんねえ……。ヒバリさんがそこまで悪い意味で言つてないことはわかるんだけど……。

「……それ」

「え？ どれ？」

「はあ。もう後で自分で考えなよ。僕は忙しいんだ。君もさつさとコピーして配っては、はい。わかりました」

ヒバリさんの言う通り、今日中に全生徒に配らないといけないオレは後で考えることにした。……さっぱりわかんななかつたけど。

ヒバリさん結局どうするのかなーと思いつつ、体育祭当日を迎える。オレは始まる前に家族のところへ向かう。オレはずつと本部に居なくちやいけないから、次は昼休憩ぐらいしか帰つてこれないからね。

「みんな来てくれたんだ」

「もちろんだよ！」

とオレの言葉に真っ先に反応したのはフウ太だつた。もうその流れでちび達の相手をしつつ母さんに声をかける。

「今日の弁当は大変だつたよね。手伝えなくてごめん」

「ツーちゃんが前の日に手伝つてくれたし、ハルちゃんが朝から来てくれたの。だから

ツーちゃんが気にするほど大変じやなかつたわ」

「はい！ ハルもお手伝いしたんですー！」

「ありがとう、ハル。助かつたよ」

「ええ。それにビアンキちゃんも頼もしかつたわ」

えつ。とオレは声をあげる。オレ、ビアンキには観戦するために必要なものとかの準備を頼んだんだけど……。

「ツーちゃんがお願ひしてくれたんでしょ。ランボちゃん達のものまで全部揃えてくれて助かつたわー」

「う、うん!! そ、うなんだ!!」

よ、よかつたー!! ポイズンクッキングはやつてなかつたー!! ビアンキにもちゃんとお礼しどこ。料理回避のためつていつても、前の日に準備出来ることだつたのに、当日急に頼んだからさ。まあリボーンにはよくやつたと珍しく褒めてもらつたけど。

「ビアンキありがとう！」

「どういたしまして」

ビアンキは料理さえしなかつたらほんといい女の代表つて感じだよな。オレにはあんなクールな感じでお礼を言える気がしない。

オレンところが大所帯みたいな感じになつてるけど、不正はしていない。山本のとこ

はお父さんだけだから1枚くれて、獄寺君から2枚。クロームも使わないから2枚。京子ちゃんからも2枚。お兄さんの分があるから大丈夫って言つてくれたんだ。それに加えてオレと家綱の分もあるから余裕でいい。逆に余っちゃつたぐらいで、オレは慌てて炎真に連絡したんだ。みんなのおかげで炎真のお母さんも来れるようになつたんだ。

炎真は最初遠慮してたけど、オレが押し切つたらやっぱり嬉しかつたみたいで笑つてお礼を言つてくれたんだ。というか、骸が譲つてやれば良かつたんじやない?つて一瞬思つたけど、オレのためかなーなんて炎真の笑顔を見てそう思つた。

「ツーちゃん、骸君は黒曜中の本部なのよね?お弁当持つて行こうかしら」

「あ、それならオレが持つていくよ。ついでだし」

真ん中を基準に2つの学校を分けた形にしたし、本部も2つに分けたけど、正面にあることもあつてそこまで遠くない。

「でもせつかくだし……」

「うーん、あいつも忙しいだろうから。でも、骸ならどこかで母さんにはお礼言いにくると思うから会えるはずだよ」

「そう?なら楽しみに待つてるわ」

そうしてとオレは頷く。真剣勝負のせいかちよつと殺氣立つてゐるし、母さんが行くと

なればビアンキとかもついていくと思うんだよね。母さんだけならいいけど他のマフィアがいれば骸も嫌だろうし。リボーンはオレのセットみたいに考えて諦めてるみたいだけど。

骸の弁当を預かつてオレは本部へと戻る。本当はもつとゆっくりしたかつたけど、そろそろトラブルは絶対起き始めるはずだからオレは本部で待機しないと。

「遅い」

本部に戻つてきすぐヒバリさんに怒られた。もうトラブルが起きてるらしい。とりあえずトンファーをしまつてください。風紀の乱れが発覚すれば黒曜中でも咬み殺すとは伝えて許可をとつてるけど、常に出してると相手の代表選手を強襲しに行くようにも見えるから。

オレが苛立つのはわかりますが、誤解が生まれてさらに風紀が乱れるのも体育祭が中止になるのも嫌ですよね? というとヒバリさんは渋々トンファーをしまつた。風紀や学校行事を出すと素直になるよなーってオレが思つてるとトンファーで殴られそうになつた。避けたけど。

「いきなりなんですか!?

「顔に書いてる」

またか……とオレは遠い目しながらも弁当を片手に頬を揉む。つて、骸に届けない

と。

「すみません。ヒバリさんちよつとオレ向こうの本部へ行つてきます」

「何かあつたの？」

「えーと……ハハハ」

骸に弁当を届けるつて言つたらヒバリさんがどんな反応するかわからんねえ。とりあえず笑つて誤魔化したけど、行くときには持つてなかつた弁当袋があるから、頭のいいヒバリさんは想像できたらしく、機嫌が悪いながらも視線で行つてこいと送つてきた。これはここに置いてる方が嫌だと思つたかな。

ヒバリさんの機嫌がこれ以上損ねる前にオレはさつさと骸のところに顔を出す。ちよつとピリつとした空気が流れてるけど、オレは気にせず歩く。黒曜中の生徒もオレを止める事はない。この体育祭のために何度も黒曜中にも顔を出してるからね。

「骸ー」

と、軽い気持ちで顔を出して後悔することになる。なにあいつ、めっちゃ慕われてるんですけど。すっげー気持ち悪い。

「相変わらず失礼ですね、君は」

「……オレの顔どうなつてんの」

はあと軽くため息を吐いて、骸に弁当を渡す。いつものことなので骸もふつーに受け

取った。

……そう、ふつーに受け取ったんだよ。

「……君はもう行きなさい」

「悪い！ 骸！」

女の子ってこえええ！ すっげー睨んできた!! 母さんからとか、オレと骸はそんな関係ないからとかそんな説明出来る感じもなかつた。

とにかくオレは安全地帯へと逃げた。そりやもちろんヒバリさんのところ。だつてあの人不機嫌なオーラが全身から出てて誰も近づこうとしないんだもん。

「ヒバリさんのところが安全なんて思うようになるとは……」

「君、さつきから僕にケンカ売ってるの？」

「まさか！ 逆です！ 賴りにしてます、ヒバリさん！」

オレの言葉にヒバリさんは大きな溜息を吐いた。え？ なんで？

ヒバリさんを隠れ蓑として使つていたオレの判断はある意味正解だつたらしい。ヒバリさんの近くにオレがいると知つた風紀委員や他の委員はオレを間に挟むようになつた。ヒバリさんが動くまでもない内容なら、オレの判断で処理してから報告するだけでいいからね。草壁さんも同じことをやつてるだろうけど、オレの方がそういうの慣れてる。これでも前世ではボスだつたからね。それにオレはヒバリさんのトンファー避けれるし。まあ基本的にオレの判断は正しいみたいでトンファーが飛んでくることはないんだけど。

トラブルに追われながらも、無事に合同体育祭は開幕した。両校から長つたらしい挨拶とかは辛いけど。一応まじめに聞いてるフリをする。近くに一番厳しい人が居るからね。寝たりしたら怖い怖い。

眠気覚しを兼ねて、オレは自分のクラスを観察する。みんな本部の方を見ながら立つててから見やすい。女子達は眞面目に聞いてるね。黒川はうんざりしたような顔をしながらだつたけど。男子はどうだらうなーと思つたら、山本と目があつた。オレと同じようなことをしてたらしい。ちょっと笑つてしまつた。……すぐにヒバリさんに睨ま

れて口は閉じたけど。獄寺君の方へ視線を向けると、オレのことを見ていたらしくて山本に苛立ちの念を送っていた。オレの視線に気付いたら、嬉しそうな顔になつたけど。獄寺君らしくて笑わないように笑顔だけ送ると、真つ赤な顔して視線をそらされちゃつた。オレに笑われたと思つちゃつたのかな？そんなつもりなかつたんだけどなあと思いながら、家綱の様子も見る。……あ、寝そう。ガクツと首が動いた瞬間、どこからか狙撃されていた。ちょっと驚いたけど嫌な感じはなかつたからすぐに正体に気付いた。家綱は痛がつてたけど氣絶するほどじやなかつたから、リボーンにしては優しい対応。

そういうや家綱は今回選手として出ない。リボーンにこつそりいいの？って聞いたけど、死ぬ気弾を打つても逃げる方に死ぬ気になるから意味ねーんだつて呆れたようになつて息を吐いていた。それを聞いてオレは思つたよ。なんでオレは逃げなかつたんだろう……つて。嫌だつたのに練習までしちやつてたよ……。

つと、そんなこと考えてる場合じやないや。オレはフラツと本部から離れて生徒の方へ向かう。

「大丈夫？・ちょっと向こうで休もう？」

オレが声をかけた時点で限界だつたらしく、その子は頷くことは出来たけど動くのは無理そうちだつた。女同士だしいいよな？とオレはその子を抱き上げる。周りの女の子

達がキヤアアとちよつと叫んだけど、静かにねと声をかければすぐに頷いてくれた。協力ありがとうとオレは笑顔を向けて彼女を抱えたまま本部に隣接している救護室へと向かう。

あんまり目立たないようにしたかったけど、それでもやっぱ目立っちゃって、寝かせた後もその子はちょっと気にしてたみたいだから大丈夫だよと頭を撫でる。オレの言葉に安心したようにその子は目をつぶつた。

「……ツーちゃんが女の子で良かつたぜ。オレのライバルになるところだつた」

それはないよ……シャマル……。オレ、女の子と喋れなくてシャマルに同情されたぐらいだから。

そりやボスの女という座を狙う人は居たけど、オレ自身はモテないダメダメライификаつたよ……と遠い目をしながらオレは本部へと戻る。ヒバリさんはオレが戻つてきたことに気付いているだろうけど、何も言わなかつた。ちゃんとした理由があつたし、大事にならなかつたのもあるし、代表選手じやなかつたという3つの理由かな。

開会式もちよつとトラブルが起きたけど、本格的に体育祭が始まるといつきに落ち着いた。みんな勝負の方へ興味が移つたのもあるだろうし、慣れてきたんだと思う。生徒達もだけど、トラブルを対処するオレ達も。これなら大丈夫そうかなとオレは本部の端で準備体操する。結局オレは400メートル走とスウェーデンリレーのアンカーに出

る。ヒバリさんからは何も言われてないけど、絶対負けちや咬み殺されるし油断はしない。

「気合い入つてますね！10代目！」

「わっ、獄寺君！わざわざ応援にきてくれたの？！」

「もちろんです！」

ありがとうと言いながら思い出す。獄寺君つてそろそろ出番じやなかつた？

「覚えてくれたんですか！10代目！」

「感動してる場合じやないから！行かないと失格になるから！」

「そうつスね。行つてきます！」

ふうとオレが息を吐いていると、ヒバリさんに「君、負けたらどうなるかわかつてると怒られた。なんでオレが怒られるのー！？理不尽だー！」と嘆きながらも、ちょっとどこかでオレのせいかもって思うから、結局いつものようにオレは頭を下げた。

獄寺君はやっぱ凄くて、一位だつた。オレも頑張らないと！と気合いを入れて走つたらオレも一位だつた。小学校の時もとつたことがあるけど、やっぱり感動。前の時はダメダメすぎて、万年ビリだつたから。リボーンとヒバリさんにいい報告ができるなーとか、でも2人とも見てただろうしなーとか、いろいろ思いながら本部に帰つていたのに

一瞬で吹き飛んだ。

「勝手に入つてこないでくれる?」

「わりい、わりい。ツナに会いにきたんだよ。ここに居るつて聞いたんだけどなー」「ディーノさん!……と、ロマーリオさん!」

なんでこの2人出会つてんの!?そしてディーノさん相変わらず懐大きすぎ!機嫌が悪くて殺氣を出してるヒバリさんを笑つてかわしてるよ……。

「お?・ツナ!見にきたぜ」

ヒバリさん、オレにも殺氣を向けないでください。呼んだのは絶対リボーンですから。チケット余つてたのあいつも知つてたからなあ……。

「ええつと、それは嬉しいんですけど……どうしてここに?」

オレに会いにきたのはわかるんだけど、昼になつたらそつちに行くつてみんな知つてるはずなんだけどな。オレの言いたいことが伝わつたのか、ディーノさんは答えてくれた。

「ちよつと骸つて奴を見ようと思つてな。後、雲雀恭弥つていう奴も」

「わー!ヒバリさん、ストップ!咬み殺しがいがありそうな人が來たとか思つてるでしょ!そうだけど!今、体育祭中!それも合同!」

一応オレの言葉に納得したのか、ヒバリさんはトンファーをおろした。あつぶねえ

……。デイーノさんなら付き合ってくれるだろうけど、このタイミングはさすがにマズイって。

「デイーノさん、ヒバリさんはもう見たでしょ！ 骸のところ、案内しますよ！」
「お？ そうか？」

ヒバリさんが追っかけてこなかつたことに、ふーと息を吐く。あの人、ほんと戦闘狂。
「いやあ、悪かつたな」

「いえ、オレもすみません……。デイーノさんのこと強いつて教えたから、今度会つたらバトル仕掛けられると思います……」

「それぐらいどーっとことねえよ」

「それならいいんですけど……」

デイーノさんなら大丈夫だよね？ 前回よりヒバリさん相当強くなってるんだけど

……。

「……油断して死なないでくださいね」

「お、おう。そんなになのか……。わーった、そん時は気合入れるぜ」
ゼひお願ひしますとオレは何度も頷く。

「骸でしたよね？ 会つて話しますか？」

「あー、そいつマフィア嫌いなんだろ？ 遠くからでいい」

「ありがとうございます」

骸のことだから視線で気付くだろうけど、多分ディーノさんなら大丈夫。苦手なタイ
プだろうけど、嫌いじゃないはずだから。

案の定、ちょっと遠い位置から教えたのにあいつはすぐに気付いた。オレの顔を見た
ら警戒をといたけど、ごめんと手を合わせてジエスチャーする。

……うん、怒つてなさそうで良かつたよ。

「普通の奴に見えるが、反応の速さから考えてもリボーンが言うだけのことはあるな
……。あいつ、あれで術士なんだろ？」

「そうですよ。格闘できる術士ですね」

感心したようにディーノさんは息を吐いた。あいつ、ゲームでいうとラスボス級だも
んな。

「ついでだ。古里炎真はどういつだ？」

「ええっと、骸の席の近くにいる赤い短髪です」

ついでって言つたし、同盟ファミリーだから気になるつていう感じかな？

「リボーンから聞いたぜ。ツナが継ぐなら、シモンファミリーはボンゴレにつくすつて
あいつ……いつの間に聞いたんだ？ オレが炎真と初めて会った時は居なかつたから
知らないはずだもん。というか、前はオレを積極的に巻き込んでたのに、最近はオレの

知らないどこでいろいろやつてない？

「炎真が言つたんですか？」

「そう聞いてるぜ」

いつリボーンが動いたか知らないけど、多分海よりも後。炎真を巻き込もうとしたのはその時だけだし。

「嫌なのか？」

今回はオレも顔に出たとわかつていてから、眉間を揉む。

「……オレだつて子どもじやないからわかつてるんです。ボンゴレは大きいし、まだ何も実績のないオレにそう言つてくれるのはどれだけ有難い話なのかつて。……でもオレはボンゴレとかシモンとか、そんなの関係なしにまず友達になりたいんです」

「言いたいことはわかるが……あいつは次期ボスとしての自覚があるんだぜ？ ツナを次期ボンゴレとして見ないわけにはいかねーだろ」

「オレを次期ボンゴレボスとして見るつもりだつたら尚更です」

ディーノさんはオレをジツと見た。

「昔……ある人にオレはヒーローになれないって言されました。オレは1人じや何も出来ない。誰かに背を押してもらってやつと動けるんです。……オレは甘ちゃんつて散々言われてますけど、線引きできないほど子どもでもない」

ハツと息を飲んだのはディーノさんなのか、後ろにいるロマーリオさんだつたのか、オレにはわからない。……違う、知りたくない。

「……まだそんな風に考えたくないから、気付かないフリをしてますけどね」はあーと大きな溜息を吐いて、オレは頭を切り替える。

「オレにつくすつて言つてくれるなら、オレのことちゃんと知つてほしい。そして背を押してほしいんです。じやないと、オレはどつかおかしくなる」

「……そういうことか」

ディーノさんもオレがマフィアのボスに向いてないと思つたのかもしね。元々オレにはそんな器はないんだ。すつげーしんどかつたし、泣きたくなる日もいっぱいあつた。でもみんなが居たからオレは頑張れた。

「今のが関係のままなら炎真の覚悟を背負いきれないんだな……」

ディーノさんの言葉をオレは否定出来なかつた。もちろん、オレはシモンが日の目が当たるところに居るべきだと思ってる。でもボンゴレのボスだつたオレは、他のファミリーの決定に口に出すことも出来なかつた。だからあの時、「なんで?」とか「そんなことはないよ」とは言えたけども「絶対にダメだ」とは言えなかつた。

「覚悟した炎真からすれば、オレが友達になりたいっていうのは迷惑だと思うんです。でもオレはこのままじや嫌で。すつげーオレ、ワガママ……」

「……ツナ、それはワガママじゃなくて、優しいっていうんだぜ？」

ポンつとディーノさんがオレの頭に手に置いたのが合図になつたのか、オレはほんの少しだけ泣いた。

あの後すぐに、ヒバリさんから「いつまで油売ってるつもり?」という電話がかかってきて、オレはデイーノさんに謝つて慌てて本部へ向かって走った。デイーノさん迷惑だつただろうなーとか、また情けないこと言つてリボーンにバレたらボコられるとか浮かんだけど、今のオレの頭の中はヒバリさんの機嫌の方が優先されたんだ。

「すみません、遅くなりました!」

あんまり怒つてませんように!とオレは祈りながら恐る恐るヒバリさんの様子を窺う。

「……君……はあ。もういいよ」

呆れられちゃつたっぽいけど、大丈夫そう。助かつたーとオレはホツと息を吐き、どんな感じかなあと体育祭の得点表を見る。並中の生徒も頑張つてるみたいだけど、なんとか勝つてるつていう程度。油断すると簡単にひっくり返っちゃうだろうなー。

でもこうみんなわいわいしている感じをみると大変だつたけど頑張つた甲斐があつたなあつて思う。ヒバリさんは勝たないと納得しないだろうけど、オレとしてはみんなが笑顔だつたらいいかなつて思うんだ。

「ツナ」

「山本？」

「差し入れ持つてきたぜ。親父がツナについて」

「うわー、いつもありがとう！」

相変わらず、山本のお父さんは太つ腹だ。保冷バッグに入つてるし、朝から作つて持つてきてくれたんだろうなー。ヒバリさんも確かお寿司好きだつたはずだし、おそらく分けしようつと。オレが喜んでもると山本に頭をガシガシと撫でられた。え？ なに？ なに？

「なんかあつたんだろ？ 力になるぜ」

「また顔に出ちゃつてたの!?」

「んー。目、赤い」

うそーっと顔を隠す。これ、絶対ヒバリさんにもバレてたじやん！ ヒバリさんにも情けないつて思われてたんだ……。つて、今はオレを心配してくれてる山本に返事しなきゃ。

「あ、いや、大丈夫。オレまたパニックになつちやつただけ。1個ずつ頑張るから」

ディーノさんと話してゐからマフィアのボスとしての考えが出ちゃつたけど、今は何も考えずに炎真と友達になりたいつて思いを大切にしたい。

「そつか。何かあつたら声かけてくれていいんだぜ。力になるのな！オレも獄寺も、ヒ
バリだつてそだろ？」

うえ！？って変な声が出ちやつたよ。山本急に何言つてんのー！？恐る恐るヒバリさん
を見たけど、オレ達の存在を無視してた。ただちよつと機嫌悪くなつてから多分聞こ
えていたと思う……。

「本当に大丈夫だつて！……でも、ありがとう。ダメそうなら相談するね」

「おう。もちろんそん時は力になるぜ」

ありがとうとオレがもう一度お礼を言えば、山本はもう一回オレの頭をガシガシと撫
でてから、クラスのところへ戻つていった。

山本つてやっぱいい奴ー！とオレはしばらく感動していたんだけど、ハツとヒバリさ
んのことを思い出した。いろいろ悩んだオレは、貰つたばかりのお寿司をそつと差し出
した。

「……なに」

「ヒバリさんもどうです？オレ一人じゃ食べきれないですし」

さつきの話題には触れない。ヒバリさんが聞かなかつたことにしたんだから。オレ
もなかつたことにする。だから最初の予定通り、おそらく分け。

オレが別に機嫌を取ろうとしたわけじやないとわかつたヒバリさんは、椅子に座つ

た。つてことは食べるつてこと。こう見えて育ちのいいヒバリさんは立つて食べたりしないからなあ。食べ歩きを意図した料理ならわからぬけどね。

オレもギリギリお寿司が届く位置の椅子に座つて、いただく。昼食の時間じやないけど、こうやつて食べれるのは責任者の特権だ。オレはまあ選手の方でも活躍しなきやいけないから昼ご飯の時間は確保させてもらつてるけど、ヒバリさんは昼休憩の方が忙しいだろうからね。風紀が乱れるだろうし。だから食べられるタイミングで食べる。まあヒバリさんに文句を言える人なんていないけど。

「そういえば、どこで使うつもりなんですか？」

点数から考えて後半まで残しておくのはオレでもわかるけど、結局ヒバリさんはどうするつもりなんだろうね。誰が聞いてるかわからないところで聞いたから、話題をふつただけでオレは答えを期待してなかつたんだけど、ヒバリさんは口を開いた。

「……君ならどこで使う？」

「え？ オレですか？ ……うーん、やっぱ棒倒しかな。この感じじゃ棒倒しの結果次第になる可能性が高い気がしますから」

垂れ幕や応援を入れても、そこまでハツキリと差は感じられない。みんな得意なことを選んでるし、それは向こうも一緒だから。飛び抜けて結果を出してるのはオレ達だけど、そこで一位とつても、他のところで落としちゃ一緒だし。あ、そう思つてるそばか

らお兄さんが圧勝した。

「どうか、オレがそう思うぐらいだし、ヒバリさんも似たようなこと考えてますよね？
なにか引っかかることでもあるんですか？」

オレに意見を聞くなんてヒバリさんらしくないよ。つてことは、なんかあるよ、絶対。
「……気にくわない」

一瞬、オレに向かつて言つてるのかなーと思つたけど、ヒバリさんは黒曜中の方を見
ていた。つまり骸の行動が気にくわないんだ。まつ、あいつ競技出てないもんな。ここ
でオレも棒倒しで投入したら、いくら炎真が総大将でも勝てないだろうし。

ちなみに棒倒しに出るオレの知り合いはお兄さんと獄寺君。山本は他の競技を優先
して出てもらつてた。山本は陸上部より足速いからね。棒倒しに出席するのはもつた
いなさ過ぎ。

お兄さんと獄寺君が揃うと超攻撃型の2人だなーなんて、思つたりする。……やつぱ
なし。クロームとランボ以外はみんな超攻撃型だつた。

オレが若干遠い目をしながらも、ヒバリさんの気持ちを考える。相手が余力を残した
状態で勝つても嬉しくないんだろうなあ。

「なら、ヒバリさんが出なきやいいのに」

オレが未だ咬み殺されてはないとはいえ、並中の生徒からすればヒバリさんがトップ

で、柱なのは間違いないよ。ヒバリさんが出なくて勝てば、こっちも余力を残しての勝利だから条件は一緒だ。

「あーでもヒバリさんが譲るわけないよなあ」

自分で提案しといて、ないないとオレは否定する。他に何かいい案はないかなーと考える間に、黒曜中の方でトラブルが起きたと聞いてオレはそつちに顔を出すことになった。

「炎真」

「ツナさん」

オレが来たことに気付いた炎真はこつちにわざわざ来てくれた。朝よりもちよつとピリピリしてるものね。……案内された場所が黒曜中の救護室だから、すぐに理由は察したけど。

「……怪我?」

「うん……。骸君がかわりにオレを出すつて」

「そう……」

誰も怪我なく終わればいいと思つていたけど、そうはならなかつた。

「相変わらず、君は甘ちやんですね。敵の心配をしなくてもいいでしょうに」「敵つて……。オレは誰も怪我しないのが一番いいの!」

真剣勝負してるととはいって、相手が怪我したつて聞いても喜べないつての。お前が一番オレの性格を知ってるだろとオレはムスッとしながら骸を睨む。

「君が心配だけで終わるなら、僕は頭を痛めません」

うぐつと言葉が詰まる。何度もやらかした記憶があつたオレは睨むのをやめて、そつと視線を逸らした。

「……まあいいでしよう。彼から聞いたみたいですが、ここで僕達は交代の権利を使います。代わりは古里炎真がします」

「わかった。ヒバリさんに伝えるよ」

「そうしてください」

「怪我酷いようなら、救急車の手配するからちゃんと言えよ」

「……ただの捻挫です」

あ、そりなんだ。骸がちょっと呆れるのも仕方ないかな。捻挫で救急車はないつてオレも思うよ。まあでも並盛にある病院を教えておかないと。あんまり痛むようなら最後まで見ずに行つた方がいいだろうし、体育祭が終わつてもすぐ黒曜中に帰れるわけじゃない。片付けを待つて間に行つた方がいいだろうし。オレの考えがわかつたのか、骸は軽く息を吐いたけど最後まで聞いていた。

「調べる手間が省けました」

相変わらずオレに礼は言わなかつたけど。

黒曜中が交代のカードを使うと決まったから、オレはヒバリさんに報告をした後は放送委員会やスポーツ委員会のところにも確認にまわる。黒曜中からも報告はあつただろうけど、今回のルールだと絶対にミスを起こしちゃいけないところだからね。オレが動き回つてると昼休憩の時間になつた。ヒバリさんからもそのまま休憩に出てと電話があつたから、本部へ寄らずにみんなが居るところへ向かう。

「ツーチャン、おかえり」

母さんの声でオレが帰ってきたとわかつたのか、みんなが駆け寄つてくれる。オレの走つてるところもちゃんと見てくれてたらしく、みんなから褒めてもらえて凄く嬉しい。

「悪くなかったぞ」

「リボーン！」

でもオレの中でやつぱ一番嬉しかったのはリボーンに褒められたこと。万年ビリだつたのにお前のおかげで出来るようになつたんだよつて思えるから。オレがあまりにもニコニコしてるからか、リボーンはボルサリーノを深くかぶつて視線をそらした。

呆れられちゃつたかな？

リボーンの様子を見て興奮がおさまったオレは、チラッとディーノさんの様子を伺う。ディーノさんはやっぱ大人で、オレがいろいろとやらかしたのにそんな素振り一切みせない。心配はしてると思うけどね。やっぱディーノさんはカツコイイなーと思いつながら、みんなとわいわい食事を取る。応援も白熱しているからか、ハル達も飽きなかつたみたいで楽しんでるみたい。

「向こうは代理を使うと決めたみたいっスね」

「うん、そうなんだ。リレーに出る選手だつたみたいで、外せないから骸も即決したみたい」

「オレ達はどうするんだろうな？」

「ヒバリさんも随分悩んでるみたいだよ。オレに意見を聞くぐらいだつたし」

ヒバリさんを知つていればいるほど驚くことだよなーと山本達の反応にオレもわかると頷く。

「でもまあオレ達はヒバリさんの指示に従うだけだよ。ヒバリさんほど真剣に考へてる人はいないから」

オレの言葉に納得したのか、この話はそれで終わつたんだ。

その話が終わつたとしてもオレの周りは相変わらず賑やかだ。だからなのか、最近家

綱とあんまり話せてない。……元々話しててほどじやなかつたけど。今も家綱は完全にオレ達のことは無視。そのおかげで獄寺君とのトラブルは防げてるんだけどね。獄寺君の前でいつもの態度すれば怖いから。オレ達はそういう関係なんだと思って、獄寺君は流してくれる。

ちび達とかは気にせず突撃するかなーと思うんだけど、フウ太は家綱のことが苦手みたいで絶対にそつちへ行かない。ランボもやりそうに見えるけど、最初のうちだけだつた。似たような反応をする獄寺君には懲りずにやらかして泣かされるのにね。もちろんすぐにオレがあやすけど。不思議だなーと思つてリボーンに一度聞いたことがある。ガキの方がよくわかつてんだって言われて、オレは首をかしげるハメになつたけど。

家綱とどんどん距離が離れて行つてる気がする。なんとかしたいとは思つてるんだけど、家綱はオレを嫌つてるし。どうすればいいのか本当にわからない。今までオレのことが嫌いっていう人は居たんだけど、なんか違うんだよ。カツ消すとか死ねとか言われる感じで来るからさ。うーん、この中で家綱とまともに話せるのは山本ぐらいだよなー……。今度相談してみよつと。

「炎真！」

オレが今後のことを考えると、炎真達がやつてきた。後ろに両親と妹さんもいる

し、もしかしたら会いにきてくれたのかも。今日はオレ腕章をしてるつて言つても他の風紀委員とは違つて普通の体操服だし、よくわかつたなーつて思う。いやでも周りから見たらこの人数だと目立つかな。オレだけじゃなくディーノさんも居るから、遠くからみても髪の色でわかるだろうし。

みんなにちょっとごめんねと謝つて、少し離れたところで挨拶する。

「父さん、母さん、真美……この人が沢田ツナさん」

「こんにちは、はじめまして！沢田ツナです！」

オレがバツと頭を下げてから顔を上げると、炎真のお父さんは困つたように笑つた。うわー、歳をとつた炎真とそつくり。お母さんも美人だし、まみちゃんも可愛いなー。つてなんで困つてんだろう？

「ツナ、おめーが頭を下げる時、シモンは土下座しねーといかなくなるぞ」「んなつ。オレそんなつもりじゃ……！」

リボーンに言われてオレつてバカーーって頭を抱えたくなる。とにかく身振り手振りで違うと否定する。そんなことされればオレは胃に穴が開くよ……。

「……うん。炎真からよく聞いているから、そういうのは望んでないつてわかつてる。大丈夫だよ」

「炎真！ありがとーー!!」

ね

「良かつたー、オレの事話してくれてーーー……って、オレの事、家で話してくれてるんだ。次期ボンゴレボスの可能性もあるからだろうけど嬉しいや。今日はありがとうね。チケット譲つてくれて。おかげで家族みんなで楽しめているわ」

「いえっ、そんな、オレじゃなくてみんなが譲つてくれたおかげで……。でも家族みんな揃つてるのはオレも嬉しいですから喜んでもらえてよかつたです」

本当に良かつたと思う。こうやって家族揃つてるのは骸のおかげだよな。あいつは聞き飽きたとか言うだろうけど、改めてお礼しないと。

「えっと、まみちゃんだよね？ 楽しんでる？」

オレがかがんで声をかけると炎真の後ろに隠れちゃった。恥ずかしがり屋なのかな

？

「こら、話したいって言つてたのは真美だろ？」

あ。なんか新鮮。炎真がお兄さんしてるよ。

「だつて、こんな可愛い人なんて聞いてないもん！ お兄ちゃんのバカ！」

「……僕のせいにするなよ」

「あはは。ありがとうね。でもまみちゃんの方が可愛いよ。炎真が言つてた通りだつた

あれ？言つちやまづかつたかな。炎真の顔が赤くなつたし、まみちゃんが面白そうに炎真を見ている。

「お兄ちゃん、私のこと可愛いって？」

「えつと……うん。可愛いって言つてたよ」

期待するような目で見られちゃつたから、教えちゃつた。炎真にごめんつと心の中で謝る。

「……ツナさん、お兄ちゃんと付き合つたりしない？」

「え？ オレが炎真と？」

「まーみー！」

うわー。本当に新鮮。炎真が妹にはそんな感じになるなんて知らなかつたよ。オレは我慢できずに思いつきり笑つてしまふ。

「つごめん、ごめん。ちょっと楽しくて」

2人を笑つたわけじゃないよとオレは説明する。そしてまみちゃんに向かつてオレは一応返事をかえす。

「オレに炎真はもつたいないよ。すつげーいい奴だし。あ、でも友達にはなりたいかな」

「……お兄ちゃん、フランチやつたね」

「えつ、そんなつもりは……」

「だつて！チャンスはあるみたいだよ！」

「真美つ！」

「きやー！お兄ちゃんが怒つたーーー！」
 ついに堪忍袋の緒が切れたのか、炎真はオレに謝つてから逃げたまみちゃんを追いかけて行つた。仲のいい兄妹なんだなーつてオレは微笑ましく思う。2人が行つちやつたからか、炎真の両親はこれからも炎真をよろしくお願ひねと頭を下げて戻つて行つた。

炎真是次期ボスを見たいからつて言つていたけど、炎真の友達に会いにきたつて感じだつたなー。……オレの希望でそう見えるだけかも。

「よかつたじやねーか。あの2人はツナを炎真のダチと思つておめーを見てるぞ」「…………うんっ！」

でもリボーンがそう言つてくれたから、オレは素直に信じることができたんだ。

その後もみんなとわいわい過ごしたけど、昼休憩が終わる10分前には本部へと戻る。……うん、やっぱりヒバリさんの機嫌は悪くなつてたよ。いろいろあつたんだろうなー。でもまだ大丈夫な範囲。

「休憩ありがとうございました」

御機嫌斜めのヒバリさんは返事はなかつたけど、オレが帰つてきたからフラツヒ

本部から出て行つた。群れを咬み殺しに行くようなオーラを漂わせてたけど、多分休憩に行つたんだろうね。ヒバリさんはほんと忙しいからね。

ヒバリさんに任されたのもあるし、オレは周りに状況を聞いてトラブルの対処をしていく。午後の部が始まるころにはちゃんとヒバリさんは本部に帰ってきた。ちよつと気分転換できたみたいで、さつきより機嫌はましになつてたよ。

午後からはリレーのような協力するような競技が多くなる。1人のミスがチームみんなに響くからちよつと不安。その分盛り上がって面白いんだけどね。一応、運動神経が良くてチームプレイが苦手な人は個人種目にまわつてもらつてる。……獄寺君とお兄さんとかね。棒倒しは乱闘になつてあんまり関係ないから出てるけど。

だから人当たりのいい山本はこれからが本番。昼休憩で気合いが入つてた。オレもリレーに出るけど、一回だけだし棒倒しの一つ前。女子限定競技の中では一番最後になるからまだ先。女子の中では一番距離が長いしね。アンカーなのもあって、オレはまた400mだし。

トラブルは競技が始まるとまた減つたからオレも競技へと集中する。山本頑張れー。

「あつ！」

思わず声が出たのはオレだけじゃなかつた。並中の生徒のほとんどが出したんじやないかな。山本のチームの1人がバトンを落としちやつたから。体育祭でバトンを落

とせば失格っていうのは厳しすぎるかなってなしだった。もともと、欠席とかあれば失格だつたからね。重なつて失格続出つてのも避けたかつたのもあるから。だから山本達は失格にはならないけど、かなり痛いミス。いくら山本でもここから挽回するのは厳しいんじやないかな。それでも山本は凄くて、バトンを受け取つた時は最下位だつたのに、ゴールした時には2位だつた。

「危なかつた……」

確実に1位を取れる計算だつたから、ここで最下位とかだつたら本当にやばかつたよ。……だからそんなに機嫌が悪くならないでください。怖いです、ヒバリさん。バトンは落としましたけど、みんな最善を尽くしてますつて。

オレは出場表を見ながら、計算し直す。ヒバリさんなら頭の中でやつてのけるだろうけど、オレそこまで頭良くないからね。ちゃんと資料を見て考えるよ。

「えーっと……」

オレが頑張つてる計算している間に、次のリレーが始まつた。わつ！ っと盛り上がる声にオレは一度顔を上げる。

「……速い」

予想はしていたけど、やつぱり炎真は凄かつた。普段ドジでちょっと不運だから怪我とか多いけど、本当にやるときはやる男。骸が動いたのかわからないけど、ちゃんと炎

真は鍛えていた。

この種目は全部黒曜中に一位を取られたこともあつて、午前に貯金してた差がなくなつてしまつた。

「あー……」

オレは思わず頭を抱えた。これほぼ確実だ。棒倒し落とせないじやん。多分いい結果が続いても、棒倒しで負ければひっくり返されると思う。最後の競技つてのもあつて盛り上げるために点数を高くしそうかなーなんて思う。いやでも出場選手の数も一番多いからなー。

「ねえ」

「は、はい！」

ヒバリさんどうするのかなーなんて思つてたオレは、そのヒバリさんに話しかけられてビビつた。

「負けたら許さないよ」

「え？……えっと、わかりました。勝ちますよ」

これはオレも棒倒しに出ることだよな？と判断して、オレは返事した。ヒバリさんはオレの返事に満足したのか、もう話しかけてくることはなかつた。

リレーってやっぱり盛り上がるよなーってオレは軽く身体を動かす。ポツポツあつたトラブルも全くなくなつたからね。オレは集中できるしすっげー助かる。まあヒバリさんもオレには仕事まわすつもりはなかつただろうけど。ちよつとあれから流れが黒曜中にいつちやつたみたいで、バトンを落とすミスとかはないんだけど黒曜中が押せ押せつて感じになつてるんだ。棒倒しの前に流れを戻したいだろうからね。

集合場所につくと、オレはすぐに緊張しているみんなに大丈夫だよと声をかける。オレが言つても効果があるのはやっぱこの腕章のおかげなんだろうなー。みんなの顔がちよつと明るくなつた。

一年のオレ達が上位二つを独占したのもあつて、少し流れがかわる。二年と三年も一位はとつた。それでも黒曜中は二位と三位をちゃんと確保するから凄い。結局オレ達が予想した通り、棒倒しの結果次第になつたんだ。

リレーが終わつたオレはみんなと一緒に退場する。そのままここで待機の方がいいのかな。ヒバリさんにははつきりと言われたわけじやないけど、多分オレは出ることになるから本部に戻つちゃダメな氣がするんだよなー。と、いろいろ考えてるとヒバリさ

んを見つけた。

……そうだった、ヒバリさんは総大将だったよ。でもみんなと入場するイメージなんかないんだけど……。そう思つたのはオレだけじゃなかつたみたいで、ちよつとざわざわしながらヒバリさんが通る道をみんな譲る。ヒバリさんはオレの前にとまつた。

「やっぱりオレが出る感じですか？」

「勝つって言つたよね？」

「はい？ そりや言いましたけど……」

うわっとオレの視界が黒に染まる。なんだなんだ？ と思いながら、オレの視界を遮つた物を広げる。

「え……？」

オレが驚いてる間にヒバリさんはもう居なくて、放送が流れた。

『そ、総大将……ひ、雲雀恭弥さんにかわり……さ、沢田ツナ』

えーーーーっという声が並盛側から響き渡る。オレはオレで「ハハハ……」と苦笑いが出了。言つたのはオレだけど……そりやないですよ、ヒバリさん……！ それならせめて先に言つてください！！

あーもう！ とオレはヒバリさんの上着をきて、動搖している棒倒しのメンバーに声をかける。

「みんな、落ち着いて！ヒバリさんが出なくとも勝てると判断したんだ。だつたら、オレ達は勝つだけだ！」

オレの声に少し動搖が収まる。それでもやつぱりヒバリさんはみんなにとつて大きな柱で、オレはヒバリさんにはなれない。どうしようともオレが困つてると大声が響き渡つた。

「沢田の言う通りだ!! 極限、勝つのみ!!!!」

「お兄さん!!」

「何より沢田はオレが認めた奴だ！極限に総大将として不足はない！！」

お兄さんはボクシング部主将というのもあって、説得力がある。オレが言うよりも動搖が收まつたんだ！不利な状況を変えるのはやつぱりお兄さんだよ！

「10代目ー!!この右腕の獄寺隼人が来たからにはもう安心してください！必ず勝つてみせます！」

「獄寺君！」

「てめえら、10代目……沢田さんを落とすようなことがあつてみろ、果たすぞ！」

……うん、それはやりすぎだよ。獄寺君。

なんだかいつもの感じになつた気がしたオレは、ヒバリさんの上着をギュッと握つてから頭を下げる。

「みんな、話を聞いてほしい」

ヒバリさんの誇りに泥をつけるわけにはいかないんだ。

トラブルを避けるために黒曜中と入場門を別にしてよかつたよ。作戦を立てる時間があつたし聞かれる心配がなかつたから。

「獄寺君、ごめんね？ わがまま言っちゃつて」

「それはいいんですが……。10代目の負担が多いような……」

「そう？ オレが考えた作戦だとみんなの方が負担が多いと思うよ」

そこがなーつてオレも気にかかる。ちょっと怪我しやすいんだよね。でも短期決戦狙いなのもあつて、意外とみんなの反応は悪くなかったんだよなー。もともと怪我の危険があると考えていたのもあると思うけど。つて、そんな話をしている間に時間が来ちゃつたよ。

「じゃ、獄寺君よろしくね。この作戦、獄寺君が居なかつたら出来ないから」

「え？」

靴を脱いだオレは、よいつしょつと登りきつて棒の上に立つ。うーん、懐かしいなあ。あの時は、相手はヒバリさんだつた。それが今ヒバリさんのかわりにオレが出てるんだもんなー。2度目つてすげーつて思う。死ぬ気なつたら変わつたけど、死んだらもつと

変わったよ。

「炎真、行くよ」

女のオレが総大将になつたことで、優しい炎真は動搖してるだろけど勝負だからね。悪いけど炎真の優しいところも利用させてもらうよ。負けるわけにはいかないから。

『開始!!』

号令がかかつたと同時に並盛のみんなは黒曜中へと攻める。オレの周りに残つたのは棒を支える数人と獄寺君のみ。上から見ていた炎真が目を見開いてるのがわかつた。多分オレが女だし、守備重視にすると思ってたんじやないかな。でもお兄さんが居るんだよ? ここはもう行くしかないじやん。本当は獄寺君にも特攻して欲しかつたんだけどね。

「みんな、行くよーー!」

上から見て、割といい感じになつたからオレは声をかける。いくらオレが軽いっていつても、衝撃はあるからね。それも死角である後ろからだしね。

驚いた声があちこちから上がる。でもオレは気にせずそのままみんなの肩を借りてぴょんぴょんと飛び跳ねて黒曜中の陣地へ突つ込む。目指すは前のオレがたどり着かなかつた総大将!!

「よいしょつと！炎真、来たよ！」

「ツナさん!?」

ついに相手の棒に掴んだオレはそのまま駆け上がる。下の方で黒曜中の生徒が動搖してるなー。でもまあそりゃだよね。落としたいけど、オレを落とそうとすれば、炎真も落ちちゃうかもしれないからね。

「炎真、ごめんっ」

「わわっ」

オレが殴ろうとしたら、炎真はやつぱりやり返すことはせずにオレがしたみたいに飛び跳ねる方を選んだ。オレとしてはこのまま拳で語り合う感じでもよかつたんだけどね。炎真が居なくなつたことで、オレは黒曜中の生徒が支えてる棒にいるのもあつて当然ピンチになる。周囲も黒曜中の生徒ばっかりだしね。

「次は逃げるが勝ちつてね」

死ぬ気の状態だつたら絶対出来ないことだよなーって思いながら、並中の方へと同じように引き返す。これでどつちも棒が倒れてしまつた。

「獄寺君!!」

「はい！10代目!!ぐはっ」

……うん、ごめん。出来るだけ減らしたけど勢いは残つたし、重かつたよね。でも

やつぱり獄寺君はオレを落とすようなことはしなかつた。

オレは獄寺君に抱っこされながら炎真を見る。

「あー、やつぱ炎真はおりれないかあ」

もしかしたらいけるかもって考えもあつたけど、炎真是オレと違つて男だからね。いくら勢いを落としても衝撃は凄まじいはずだよ。数人かがりで受け止めないとキツいんじやないかな。炎真是棒から降りたら飛び続けるしかないんだ。どこかで停止しようとすれば、衝撃が全部いつちやつて下の人が怪我しちゃうよ。

1回目にオレが止まれたのは棒を掴んだから。炎真的ために何人もの人が棒を支えていたからね。2回目はまあこの作戦をみんな知つていたから。オレは靴を脱いでいたし、体格の良い人の肩を優先するけど獄寺君のどこに行くまでに小刻みで飛んで衝撃を減らす必要があつた。だから近くにオレが居たらもう来ると思つてと言つたのがあつたと思う。2回目はオレは黒曜中の方からやつてくるから、みんなからはよくオレが見えたはずだしね。でもやつぱ体重差かな。

「きょくげーーん!!」

「あ、お兄さん」

やつぱお兄さんには難しいことを頼まなくて正解だつた。炎真を目指して一直線つて言つただけの作戦で、本当にたどり着いた。他の人たちにはオレが棒にたどり着いた

時点で、黒曜中を囮むようにしてねつて伝えてるからね。オレを守る人が少なすぎるのもあるけど、飛び跳ねる炎真の体重を支え続ける黒曜中の生徒の負担がキツくて自滅を促したのもあるんだ。

『勝者、並盛！』

「勝ったよ、獄寺君！」

「はい！10代目！」

やつたーとオレはそのまま獄寺君の首に抱きつく。

「へ？うわあ！ちょ、獄寺君大丈夫！？やつぱり重かつた！？」

「……い、いえ。10代目が軽くてやわら……、驚いたほどですから……。だから大丈夫ッス。怪我はないですか？」

獄寺君が尻餅ついちゃつたけど、横抱きなのもあってオレは獄寺君のお腹の上に居るし怪我はない。というより、獄寺君、よく気絶しなかつたね。いくらオレが軽いって言つても絶対この体勢は重い。だからオレは大丈夫と答えてすぐにおりたよ。

「ツナさん」

「つと、炎真！お兄さんの拳受けたけど、大丈夫！？」

見た目からはわからないけど、お兄さんだから容赦しなさそだもん。ちょっと混戦すぎてあんまり見えなかつたんだよなー。

「うん、僕は大丈夫。でもあの人凄いね。ガードしたのに、手がしごれちゃった」「お兄さんだもんね」

手がしごれただけで済んだ炎真も凄いと思うけどね。

「僕たちの完敗だよ」

「うーん、でもそれは仕方がないんじゃないかな」

「え？」

あ、バカにしたわけじゃないよと慌ててオレが手を振る。

「オレには獄寺君が……信頼できる友達が居たからね。絶対オレを落とさないってわかつっていたから」

そりや前の時は落としちゃつたけど、あれはコンビネーションがちょっと悪かつたからだし。急に立てた作戦で騎馬戦を組んでオレを支えてくれたんだよ。最初からお願ひしていた今回の状況とは全然違うよ。

「炎真も信頼できる友達が居れば違つたんじゃない？」

今日シモンファミリーのみんなが居れば、炎真もおりることは出来たはずだよ。オレ

の言いたいことがわかつたのか、炎真は笑つた。
「そうだね。……今度、オレの友達を紹介するよ」

「ほんと!？」

「うん。みんなに……新しくできた友達ってツナさんを紹介したいから」
えつ……とオレは炎真をジッと見つめる。オレ結局何もしてないよな？拳で語り合
うみたいなことも出来なかつたし。

「君と話していると、ファミリーのみんなと居る時みたいに楽しいんだ。……真美にも、
怒られちゃつたしね」

「まみちゃん？」

「もううるさかつたよ」

まみちゃん何言つたんだろう……。オレの疑問が顔に出てたのか炎真は口を開いた。

「ヒミツ」

「えー！そりやないよ、炎真！」

「……ふつ、あはは」

オレの反応に炎真は笑い出した。でもオレもつられて笑つてしまつた。

なんか思つていた形とは違つたけど、オレ達はまた炎真と友達になることができたん
だ。

①炎真と妹

妹の真美の態度に僕は怒ろうと追いかけていたはずなのに、真美はある程度すれば止まつて僕を待つていたように仁王立ちしていた。

「お兄ちゃんってほんとヘタレ！ 頑固！」

「……何が」

「ほんと、なんでこういう風に育つちやつたかなあ。 いきなりなんだよって思うのは僕だけじやないと思う。

「だつて友達つて認めてないのはお兄ちゃんぐらいだよ」

「……ツナさんは次期ボンゴレボスになる人だよ」

はあと僕はため息を吐く。僕が次のボスになると決まつてゐるのもあるんだろうけど、真美はちよつと疎すぎ。ツナさんは友達なんて言つたらダメな人だ。

「……お兄ちゃんからツナさんの話、聞かない日ないんだけど

「え？ そう……かな」

でも父さん達も知りたいと思うし話すのは当然じやないのかな。

「家綱っていう人の話は全然聞かない」

「あんまり接点ないからね」

「お兄ちゃん、最初は2人を見てくるつていつたよ、覚えてないの」

僕は言葉を詰まらせる。確かに僕は2人のボス候補を確かめに行くと言つて黒曜中

へ行つたはずだつた。

「お兄ちゃんが一番私情を挟んでる」

グサツときた僕は何も言えなくなつた。それをいいことに真美は好き勝手僕に言いだした。

「こつちはね、お兄ちゃんがツナさんの毒牙にかかるやつたとかいろいろ心配したんだよ!? 今日会つてみて違うつてわかつたけど。まあツナさんは天然人誑しつぽいから、お兄ちゃんが落ちちゃつたのは間違つてなかつたけどね」

「……天然人誑しつて……」

「お兄ちゃんは楽しかつたからツナさんとばつかりといるんでしょ!」

僕のつぶやきには真美は無視して言いたいことだけ話すんだ。でも言い返せなかつ

た。真美の言う通り僕が一番私情を挟んでいた。

「それなのにお兄ちゃんは! 変に頑固だから! このまま至門中に戻つて接点がなくなつてもいいの!」

「……あ」

いつかは戻らなくちゃいけなかつたことを僕はすっかり忘れていたんだ。みんながこつち来ないかなぐらいの感覚で居たことに気付いた。

「ツナさんはもうお兄ちゃんに気持ちを伝えるんだよ。それなのに返さないなんて、ヘタレ！ 意氣地なし！」

「……意氣地なしまで増えたよ。

「はあ。わかつた、ちゃんと考えるよ」

「お兄ちゃんが考えると、ボンゴレやシモンの関係とかごちやごちや考えるからダメ」

「……まみ」

「お兄ちゃんがどうしたいか、それがシモンの決定なんだよ！」

黒曜中に来る前に僕の希望を伝えた時は、みんな反対したじやないか……。僕の考えが顔に出ていたのか、真美は「だからお兄ちゃんはお馬鹿さんなの！」と言いながら行つてしまつた。ああもう一人じや危ないだろと僕も追いかけようとしたけど、父さんと母さんがまみのことは見ておくから、僕のやるべきことをしなさいって言つてくれたから本部へ戻つたんだ。

考えれば考えるほど、真美の言つてる意味がわからないし、みんな反対したじやないかというムツとする。でも僕はシモンのみんなに怒りを向けたくなくて、真美の言葉か

ら逃れるようにリレーへ没頭したんだ。結果ちゃんと集中できたみたいで、一位を取れたことにホツとする。骸君にはお世話になつてゐるし、恩を仇で返すようなことはしたくなかったから。

「リレーの時はうまくいったようですが、他のことを考えていれば、沢田ツナに勝てませんよ」

骸君の言葉にギクツと肩が跳ねた。なんで気付くんだろう、骸君は。でもなんでツナさん？

「ほぼ間違いなく、向こうの総大将がかわつて沢田ツナが出てきますからね」

「え？ ツナさんは女人の人だよ！」

「ルール上、問題ありません」

「そうだけど……。いくら次期ボンゴレボス最有力候補だからって……」

僕は最後まで言葉を続けることが出来なかつた。骸君は大きなため息を吐いたから

……。

「君もめんどくさい人ですね……」

「君も？」

「こつちの話です。いいですか、この体育祭ではマフィアは関係ありません。最初になしと決まりました。だから僕は術を使ってませんし、君も完全ではないとはいえ、シモ

ンの力を使つていません。ここまでいいですね?」

ツナさんが真っ先に力を使うなよと骸君に約束させていたことを覚えている僕は頷く。

「僕が約束したことで、この体育祭はアルコバレーノですら好き勝手出来なくなりました。もしやつていれば、それ相当の報いを受けてもらつてから外へ放り出します」

「ええっ!?

「おや? 言つてませんでしたか? 僕は大のマフィア嫌いですよ。マフィアがいきがつてる状況など、僕は我慢なりません。クフフフ」

骸君のこの笑顔は本当だと僕は知つていて。……知りたくないと今ほど思つたことはないよ。でも骸君が大のマフィア嫌いなら、なんで僕たちの世話をしてくれてるんだろう?

「……まだわかりませんか。僕は次期ボンゴレに命じられていれば捻り潰しています。
……僕は沢田ツナの手伝いをしているだけです」

同じようにみえて、とてつもなく大きな違いだと骸君は言つていて。一緒にしないでほしいという嫌悪感を持つていてるほどだ。

「僕が関わっている限り、この体育祭ではマフィアは一切介入出来ません。ですから、良い機会だと僕は言つたのです」

次期ボンゴレじゃない、ツナさんを見ろつてことだよね……と僕が理解して返事をする前に骸君は居なくなっていた。

棒倒しでツナさんが総大将として出てきた。骸君から聞いていたけど、それだけでも僕は驚きなのに、ツナさんは僕へと向かってきた。……無理だつて！僕には女の人は殴れないよ、骸君！

向き合うとかそんなどころじやないと僕はツナさんから逃げた。僕が逃げてしまつたから追い込まれてしまつた。いつか捕まつてしまふとわかつていたのにどうするとも出来なくて、こんな時みんなが居ればと思つてしまつた。

だから負けてしまつた後に、「オレには獄寺君が……信頼できる友達が居たからね。絶対オレを落とさないつてわかつっていたから。炎真も信頼できる友達が居れば違つたんじゃない？」とツナさんに言われて……、僕は一緒じやないかつて思えたんだ。

……まみ、お前の言う通りだよ。僕がバカだつた。みんなが反対するのは当然だよ。僕の友達なんだから。ボンゴレとシモンの未来じやなくて、僕たちシモンの未来を考えないといけないことだつたんだ。

何もかも考え直しだ。でもきつとみんなは僕の答えを待つてくれる。

……ああ、でも少しは進んだよつて教えたいな。

まずツナさんに返事をかえすことから始めよう。僕と同じようなことを考えた君と

友達になりたいつて思つたから。みんなを紹介するのはその後になるけど、遅くはならないと思うよ。だから待つて。

②応援席にて

『そ、総大将……ひ、雲雀恭弥さんにかわり……さ、沢田ツナ』

この放送が流れた時、私は京子とクロームと一緒にいた。周りが叫んでるけど、私はそんな気持ちになれなくてツナが心配で声も出せなかつたの。それは京子の顔色を見れば一緒のようで、なんとかして止めないとという気持ちで私は頭の中はいっぱいだつた。

「花ちゃん、京子ちゃん、大丈夫」

そんな大きな声じやなかつたのに、不思議とクロームの声は私達に届いた。
「で、でも……男子と混じつて参加するだけでも危ないのに、総大将つて……」

私だつてツナがそこらの男よりは強いと知つてゐる。最初は驚いたけど、ケンカの仲裁をしているのも見たこともあるから。でもそれとこれは別よ。いくらなんでも複数の男子に狙われる総大将は危険の度合いが違うわ。

私達の心配をクロームはキヨトンとした表情で見るだけ。大丈夫つていうなら、せめ

でもうちよつと安心させてと思うのは私だけかしら……。クロームがそういうのが苦手と知っているから口には出さなかつたけど……。

「山本！あんたも止める気はないの!?」

「ん？」

こうなつたらと私は矛先をかえた。山本も動く気がないみたいだし、よつとでもいいから大丈夫と思う根拠を教えなさいよ！

「ツナなら大丈夫なのな」

「ツナが強いから!? 心配する必要ないってこと!?」

「ん……それは違うな」

は？と私は山本に聞き返す。強いから安心して見てるんじゃないの？

「オレはツナが強いとこはあんまり知らないぜ」

「じゃなんであんたは動かないのよ」

山本が知らないっていうのは意外だつた。そっこ仲良いと思つていたけど……。

でも私達が知らないのだから山本が知らないのは当然よね。ツナつて仲裁する時はよつと相手の腕をおさえたりするけど、それ以上は力を使おうとはしないのよ。トンファーを持つてるのも知つてゐるけど、持田先輩の時に出したぐらいで、結局あの時もツナはトンファーで殴らなかつた。

「ツナはやると決めたらやるからなー」

「まあ……ツナはなんでも出来るわね」

「ん？ ツナは不器用な方だろ？」

私達、ツナについて話してゐるよね？ と首を傾げたくなる。それこそ幼稚園のころから、なんでもすぐ出来て寝落ちするイメージしかないんだけど。私が少しそのことを話すと「器用なら体力残せると思わねー？」と言われて、ポンつと思わず手を叩いてしまつたわ。「ツナはそんなところから全力投球だつたのな」と山本が笑つたのを見て、目からうろこが落ちるつてこういうことなのねつて思つたわ。

あの子のことわかつていたつもりだつたけど、まだ知らないことも多いのね。つてそうじやない。天然の山本のペースに引っ張られてしまつたわ。棒倒しよ、棒倒し！
「ツナがやると決めたらやるなら、余計に心配になるじやない！」

「心配はする必要ねーじやねえか？ ツナは凄いのな。獄寺と笹川の兄貴もいるし、問題ねーつて」

結局山本の説明では私は安心出来なかつたのだけど、京子はちよつとホツとしたのよね。ちよつと私だけ置いていかないで！

「お兄ちゃんがツーちゃんの努力を見てね、いつかツーちゃんに頼られるような男になりたいつつて言つたことがあつたの」

京子のお兄さんだから深い意味はないわ、絶対。聞く人が聞けば告白みたいに聞こえるわよ……。相手がツナで良かったわね。あの子、自分がモテないって思い込んでるから。

「そしたらツーチyan、『それならもう叶つてますよ』って言つたの。お兄ちyanがいつもどうつて疑問が顔に出たみたいで『オレ本当は根性ないんです。お兄さんを見てオレも頑張んなきやつて思えるんです』だつて」

……ツナなら言いそうだわ。煽てるのがうまいというか、あの子はそんなつもりはないんだろうけどね。

「なんとなく言いたいことわかつたわ。あの子人の気持ちに敏感だし、私達が躊躇しそうな恥ずかしい言葉も伝えることができるものね。こういう集団戦の方があの子は得意かもしれないわ」

風紀委員なのに頭を下げたりするものねー。変なプライドもなくて、人を頼れるつていうのもツナの凄いところの一つだわ。

あの子なら男子達とうまくやるでしょと思つた私はおとなしく京子達と観戦することにした。

総大将自ら敵陣に突つ込んで行つた時は、ツナはふつーじやなかつたわつていうことを思い出して、呆れて心配しなくなつたんだから、私もツナのことちyanとわかつてい

たみたい。

ただ……そんなところでわかりたくはなかつたわ。

③報告

「リボーン、棒倒しでオレ勝つたんだよ！」

体育祭の後片付けも全部終わつたオレはリボーンのところに行つたんだ。あいつのことだからちやんと見てたと思うけど、それとこれとは別だよ。死ぬ気になつても出来なかつたことが出来たんだよ。

「よくやつたじやねーか」

「だよね！だよね！」

やつたーとオレはリボーンに抱きつく。リボーンも機嫌がよかつたみたいで、オレがこんなことしても怒らなかつた。

「ツナ、ご褒美に何が欲しいんだ？」

え？リボーンがオレにご褒美？あまりにも驚いたオレはリボーンを離して、ちやんと向き合う。

「総合MVPも取つたしな。なんでもいいぞ」

「……い、いや……いいかな」

「こいつからのご褒美つて口クなものじやなかつた。ご褒美という名目で、やりたい放題。オレの希望が叶うことはなかつたし……。」

「遠慮すんな」

「そう言われても……」

オレがボスになる前は、ボスになるためのものだつた。ボスになつたら、ボスに必要なものだつた。だからそのほどんどでスバルタの特訓が用意されていたんだよな。……いやでもこいつのおかげでこんなにも成長したのは事実だし。オレに必要だつたんだよな？

「と、特訓……」

まさかあんな嫌がつていたオレが自ら頼むようになるなんて……。

「……ツナ、お前は少し休め」

「え？ わかつた。お前がそういうなら……」

最近忙しかつたもんな。リボーンが休めつていうぐらいだし、オレ結構疲れてんのかも。さつさと風呂入つて寝ようと腰をあげる。

「あ、そうだ」

「なんか欲しいのがあつたのか？」

「え？ だからそれは特訓だつて」

オレがそう答えた後、リボーンはしばらく黙った後、「オレに言いたいことあるんだろ？」って聞いてきた。そうだった、そうだった。

「炎真と友達になれたんだ。今度シモンファミリーのみんなも紹介してくれるつて約束したんだ」

「そうか。叶つて良かつたじやねーか」

「そうなんだ。ありがとうね、リボーン」

元々はこいつのおかげだよなーって思っていたオレはちゃんと伝えられたこともあつて、「お風呂行つてくるー」つて上機嫌で部屋を出ていったんだ。

④雲雀の学ラン

オレは時間をとつて、骸ん家に来ていた。聞き飽きたと思うけど、お礼を言いにね。
……聞き流されたよ。

「そういうえば、あの時の学ランは雲雀恭弥の物だつたと風の噂で聞きましたが本当なのですか？」

「そらなんだよーあれ、ヒバリさんの学ラン！」

やっぱお前はこの凄さわかってくれるよな！とオレが興奮しても、骸は呆れることはなかつた。その反応にオレは喜ぶ。ヒバリさんの学ランだよ！これがどれだけ凄いことかをほんとみんなわかつてほしい。語つても引かれるのは草壁さんぐらいだから言えなかつたんだよ！

「それもクリーニングして返してつて言われたんだよ！」

「おや、『いらない。君にあげる』とは言われませんでしたか」

ほんとにそれ！

「並中の学ランつてのもあつただろうけど、オレすげー嬉しかつたんだ」

人は変われば変わるものですねと骸が呟いた。それ、お前にも言えるからな？

「あ、そうだ。ヒバリさんからお前への伝言預かつてたんだよ」

ちよつと興奮が収まつて、思い出した。あぶねー、完全に忘れてた。また顔に出てたのか、骸はちよつと呆れつつもオレへと向き直つた。ヒバリさんからの伝言だからだろうね。でもオレこの伝言よくわからなかつたんだよなー。

「『これで満足？』だつて。お前わかる？」

骸は一瞬固まつた後、笑い始めた。うーん、この様子だと意味はわかつたみたいだね。

「クフフフ。流石、雲雀恭弥と言つたところでしようか」

「どういうこと？」

「あなたは知らなくていいですよ。これは僕と雲雀恭弥での駆け引きですから駆け引きって……。でもこの様子だとヒバリさんが勝ったのかな?」

「僕は負けてはいません」

……だからなんのこの人達。

オレは思わずもう少しで体育祭で負けたじやんつて言いそうになつた。口にするだけ疲れるだけ。こいつのことだから、僕は出てませんとか言うだろうし。オレがヒバリさんも出なかつたじやんとか言つても、僕と雲雀恭弥と一緒にしないでくださいとか言うんだよ。付き合つてられないつての。

骸はオレが黙り込んだのをどう判断したのかわからないけど、ヒバリさんの伝言の意味を教えてくれた。

「あの伝言は、今回彼は僕の思惑に気付いているにも関わらず、乗つてあげたという意味ですよ」

「それならヒバリさんが勝つたと言つても良くね?」
「違います」

「うん、もうオレはどつちでもいいや。
「ちなみに、返事は?」

「そうですね。『とても楽しめました』としましようか」

うわあとオレは引いた。

「一応伝えるけどさ。あんまヒバリさんを煽んなよ。オレが疲れる」

「本音が漏れていますよ」

あえて言つたの！ どうせどつかでバトルするくせにオレに伝言残すんだから。律儀に伝えるオレもオレだけど。

「……ですが、実際僕にも読めないことがありましたからね」

「ん？ そうなの？」

「ええ。ですから、ウソではありませんよ」

ふーん、それならまあいいけど。

「やはりあなたと居ると面白いですね」

「つて、なんでオレ!?」

オレのツッコミは無視されて、骸は本を読み始めた。

中1②

1

帰つて いるとい いんだ けど……と思 いなが らオ レは 暖簾をくぐる。

「こんに ちはー」

「いらつしや い！お、ツーちゃんじやねえか！待つてろ、なんでも 好きなも の握つてやつから」

「えええ！ 悪いです つて。オレ山本に用事があるだけなんで……」

ほんと、山本のお父さんは 太つ腹すぎ……。オレが 来るたびに 奢らなく いいから。「なに!? ツーちゃんを待たせるとは……！」

「ち、違います！ 急にオレが 来ただけです つて」

約束するのも 良かつたんだけど、 そうすると 獄寺君が やつてきそ うなんだよ ね。 ちよつと 2人つきりで 話をしたかつたのも あつて 急に 来たんだ。 今日は 午後から 野球の 練習が ないのも 知つていたから。

「だから 待たせてほしいなあなんて」

「どうか どうか。 ゆっくりして つてくれよな」

いやだから……と思ひながらもオレは諦めて椅子に座る。もう山本のお父さん、お寿司握つて置いちゃつたんだよ。

「すみません。いただきます」

「おう！」

もぐもぐ食べながら、山本のお父さんの動きを見る。ちょっと忙しそうだよね。手伝つた方がいいかな。つて言つても、オレが出来ることは洗い物ぐらいだけど。母さんは習つたけどオレが出来るのはふつーの料理だから。

ちよつと手伝う手伝わないで山本のお父さんと勝負したけど、見事オレの勝利。洗い物ぐらいは今までに何度か手伝つてるから、山本のお父さんもオレを見てなくていいからね。前の時もバイトしたから食器の場所だけは完璧。ただ2回目なのにそれしか出来ないんだけど……。

「ツーチ яннはいい子だなあ……」

だからそんなに感動しないで。山本は配達も出来るんだから。この前のこともあるし、山本のお父さんの中でオレはどんな位置になつてるんだろう……。怖くて聞けない。

「山本に継いでもらいたいって思つたことはないんですか？」

そういうやと思つてオレは声をかける。オレが継ぐつて話した時に山本のお父さんは山

本に継げと言わなかつた。

「一度は夢を見たな」

「やつぱそうなんですね」

「ただこの店はオレがやりたくてやつた店だ。武がやりたいって言わねー限り、手伝わせても教える気はなかつたな。それに……武は継いでくれた」

あ。とオレは思わず声をあげた。山本はもう時雨蒼燕流を継いだんだ。

「筋は悪くねえ。毎日振つてるみてーだし、ツーちゃんの助けになるだろうよ」

「……ありがとうございます」

「そりやオレのセリフだ。ツーちゃんのおかげで夢が叶つた」

オレ、山本の夢を壊してしまつたと思つていたけど、山本のお父さんの夢は叶えていたんだ……。

「オレのところはまだいいが……ツーちゃんのところは大変じやねえのか?」

「え?」

「いや、オレはまあ考え方があるんだろうが、息子はいつか出て行くもんだと考えて、娘はそうじやねーとどつかで思い込んでしまつてな……。お母さん、よく送り出す決意したもんだと思つたんだ」

「……あ、あの……男と女じや、そんなに違います?」

「ツーちゃん、まさか……」

ハハハ……とオレは乾いた笑いを繰り返す。前回の時は何も言わずに送り出してくれたのもあって、まだ母さんに言つてなかつたよ、オレ……。

「帰つたら、話します……」

「……相談は乗つてやるからいつでもここに来ればいい。オレ達は味方だからな」

山本のお父さんの中で反対は確定なんだ……。えー、母さんに反対されたらどーしょ！ オレは頭を抱えたくなる気持ちを抑えて、食器を洗い続けた。

ちょうどひと段落したタイミングで山本が帰つてきた。バイト代を渡されそうになつたのをなんとか回避したオレは、山本の部屋にお邪魔する。

「急にごめんね、山本」

「いいつてことよ。それに親父の手伝いをしてくれたんだろ？ サンキュー」

「大したことしてないよ」

実際、洗い物しかしてないからね。オレと山本の仲だしがいうこともあつて、この話はここで終わりという空気が流れる。急にオレが会いにきたつていうのもあるんだろうけど。

「あのさ、ちょっと家綱のことと相談が……」「仲悪いもんな」

山本のストレートの言葉にオレは大ダメージを受けた。変に気をつかわれるより
はいいけど……。

「山本は家綱と話せるみたいだし、何かアドバイスみたいなものが欲しいなあって
「オレは兄妹いねえからなあ」

「あーそうだよ！ オレのバカー！ 山本もこんな相談、困るつての！

「ん」、家綱とケンカしたことあるのか？」

「ケンカはどうなんだろう？」

家綱は怒ってるけど、オレは別に怒ってるわけじゃないしなー。この前オレが怒った
時は、家綱は何も言つてこなかつたし……。

「ツナがそういうの苦手つてわかつてるけどよ。家綱はツナとケンカしたいんじやねえ
の？」

「え？ 家綱がオレとケンカ？」

「そ。ダチだつて、ケンカして分かり合えることもあるだろ？ そんな変わらねーんじや
ねえかと思つたんだ」

そうかもと納得したオレは山本にお礼を言つて、家綱とケンカなーと思いながら帰つ
ていった。

「リボーン、居るー？」

家についたオレはリボーンを探す。

「ツナ、呼んだか?」

「うん。ちょっと相談したいことあつてさ」

オレの言葉にリボーンは驚いた表情をした。相変わらずポーカーフェイスでわかりにくいけど。

ちび達に突撃されつつ、オレはリボーンを部屋に案内する。オレが女つてことで、リボーンは勝手に入らないようにしてゐみたいだからさ。

「で、何があつたんだ」

オレが無理矢理ちび達を追い出そうとしないから、この2人なら聞かれても問題ない話だと判断したリボーンはさつそく聞いてきた。だからオレは山本からのアドバイスの内容を話す。

「ツナ。お前、家綱とケンカしたことがなかつたのか?」

「うーん、多分。帰りながら考えていたんだけど、記憶にないんだよね」

「それもあんのか……」

「ん?」とオレが首をかしげるとリボーンは首を振つた。あ、これは教える気ないな。

「ま、いいや。でさ、オレケンカしてみようと思つたんだけど、どうしたらいいのかなつて。最近じや家綱はオレに何も言つてこなくなつたし、オレもそんな怒りっぽくないと

「いか……」

「ツナはマンに似てるからな」

「あはは。母さんもあんまり怒らないよね」

「ちゃんと怒るところでは怒るけど、八つ当たりみたいな感じのは一切ないからね。あとオレ、怒ると怖いみたいだからさ。そういうのも気になつて、どうしようかなーって」

「ツナ姉が怒るなら先に言つてね。僕、みんなを連れてデイーノ兄のところに行くからえ。そんなにー!?遊びつつも会話に入つてこなかつたフウ太の言葉にちょっとオレは自分のことなのにビビる。尚更、家綱とケンカしたくないんだけど……。」

「なくはねえぞ」

「え?! なに、なに?」

「流石リボーンだよ。オレの頭じや浮かばなかつたことをすぐに提案してくれるなんて……!」

「ツナ、お前が家綱を怒らせればいいんだ」

「え? オレが家綱を怒らせる?」

「ああ」

「でもオレが居るだけで、家綱は怒つてるよな。オレがそういうえば、リボーンは似てる

ようで全く違うと言つたんだ。リボーンがそういうならそうなんだろうなー。

「ただおめーが家綱を怒らせるようなことがあるのかつて話だ」

「うーん」

オレ、そういうの苦手なんだよなーと考え込む。あ、ごめんごめん。ランボ、手が止まつてたね。

「……ツナには無理か」

「ちょ、ちょっと待つて。考えてるから」

リボーン、見捨てないでーー!とオレは心の中で叫ぶ。ランボとフウ太と遊びつつ、家綱を怒らせる」と……と考えていると一つ浮かんだ。

「あ、あつた」

「あんのか!?」

え。そんなにびっくりすることなの?お前が提案したんだろう?

「うーん、多分ね。オレがこれ言つたら、あいつ怒ると思う」

「やつてみろ」

心の準備の時間とか、リボーンにはないよね……と、もう慣れたオレは素直に行動する。

「今家綱部屋にいる?」

リボーンが頷いたのでオレは早速家綱の部屋の前に移動する。フウ太が空気を読んで、ランボの面倒を見てくれたんだ。まあフウ太も興味津々だったのもあるみたいだけど。ランボを抱きながら、オレの部屋からのぞいてるし。

オレは家綱の部屋をノックして声をかけた。相変わらず無視されたけど、リボーンが居るっていうんだから居る。ノックした時にちょっと反応したっぽかつたしね。

「あのさ、そのまでいいから聞いて欲しいんだ。ちょっと大事なことだから」

チラツとリボーンを見れば、頷いた。んじや言うよ。

「オレ、中学卒業したら家出るつもりだから、母さんのことお前に頼みたいんだけど……」

最後まで言えなかつた。家綱がドアを開けてオレの前に出てきたから。

「えつと……ごめん」

「……入れ」

うわ。めずらし……じゃなくて、家綱絶対怒つてる。怒らせたのはオレだけど……。

「お、お邪魔しまーす……」

そーっと部屋に入つたオレはドアを閉めて家綱と向き合つた。

「こいつか」

リボーンを見ながら言つたからオレは違うと必死に手を振る。

「ボンゴレは関係ないよ。ずっと前に決めていたから」

ドンツと机を叩く音にオレは驚く。家綱つてオレを嫌つてるけど、殴つたりはしないんだよ。

「ええっと、ボンゴレのことはあるけど、オレがこの家を出て行くつもりなのは変わらないからさ。お前が継ぐことになつたら……その時はまた考えるよ」

もちろん大人ランボが言つていたこともあるし、家綱のこともちやんと対策するつもり。父さんにも話して、あつちからも気をつけてもらうよ。でもそういうのとは別で母さんのことを頼みたかったんだ。

「……母さんは話したのかよ」

「えつと、まだ。今日の夜には話そうと思つていたけど……」

「言うな！」

……ああ、やっぱそうだよな。家綱はオレのことは嫌いだけど、母さんとはうまくやつてるもんな。

「……」めん、それは出来ない。ずっと前から決めていたんだ

「母さんの気持ち考えろよ！」

「ごめんとオレは呟くことしか出来なかつた。

「……出てけ。この部屋から出て行け！」

家綱に言われてオレは部屋を出る。オレが扉を閉めた途端、物が扉に当たつたような

音がした。

自分の部屋に帰つたオレはやつちやつたなあと頭を抱える。母さんを味方につけてからと思つていたから……。

「……なあ。本当にこれでいいのかよ、リボーン」

「さあな。だが、進んだのは確かだぞ」

「そつか……」

ちび達とも遊ぶ気力もなくなつたオレは少し1人にしてと頼んで、ベッドでうずくまつた。

晩御飯の後、オレは母さんに大事な話があるつて言つて、2人きりにしてもらつて話したんだ。いつかは言わないといけないから……。

「そう。わかつた。いつでも帰つてきていいからね。この家はツーちゃんの家なんだから」

「……いいの？ 母さん」

「時々ね、ツーちゃんはお父さんみたいな顔をするから、そうじやないかなつて思つていたの」

まいつたなあとオレはちょっと泣きそうになる。今の父さんは前みたいに変な設定とか作つてないけど、仕事の都合で簡単に帰つてこれないつてことになつてるからさ。

オレも同じだと思つていたんだ……。

「ごめん……母さん……」

「滅多にないツーチヤンのお願いですもの。叶えてあげたいと思うのは当然よ。だから謝らなくていいわ」

ああもうとオレは我慢できずに涙が溢れた。なんでオレが泣いてんだろう……。泣きたいのは母さんのはずなのに……。

「母さん」

「……家綱？」

オレがグズグズ泣いていると、家綱がいつのまにか扉のところで立っていたんだ。

「オレは出ていくつもりはないから。ずっと居るから。こいつと違つて」

「あら、イツ君が居てくれるなら心強いわ」

「……おい。だからお前が繼げ。いいな！」

「え、あ、うん。わかった」

オレがそう返事をすると家綱は二階へ行っちゃつたんだ。

「みんなに大事に思われてる母さんは幸せものね」

母さんの言葉にオレは何度も頷いたんだ。

次の日、リボーンがオレの部屋にやつてきた。オレも話したかったからちょうど良かった。

「お前も昨日の話を聞いていたと思うけど、オレがボンゴレ継ぐから」

まあ最終決定はリボーンにあるのはわかってるんだけどね。オレ達の意思はちゃんと伝えどかないと。

「今んとこ、オレもツナで文句はねえぞ」

「そつか。それなら良かつた」

この確認だけかなーと思っていたけど、リボーンはまだ話があつたみたい。

「んで、お前の用は?」

「この家を出て何すんだ?」

それかーとオレは思わず天をあおぐ。しばらく悩んだ後、オレはリボーンを見た。

「言つてもいいけど、誰にも言わないで欲しいかも。特に父さんには」

「わかつたと言いてえところだが、理由次第だぞ」

「それならわかつてくれると思う。父さんには自分の口から言いたいんだ」

予想通りリボーンも納得したみたいだつたから、オレは口を開いたんだ。

「黒のマフィアを一掃する」

「……あれ？なんか反応があるかなーって思つたんだけど。まあいつか。

「ちやんと考へてるから安心して。今骸に証拠とか集めてもらつてるし、復讐者と交渉してからやるから」

「……………そ、うか」

「うん。あ、お前ならわかつてると思つたけど迂闊に話さないでよ。計画してるのでバレたら逃げられちゃうからね」

「……………やる時はオレにも声をかけろ」

「え？まじで？助かるよ、リボーン」

リボーンも手伝つてくれるならもつと早く潰せそ、うだなーとオレは中学卒業後の予定を考え直すこととした。

最近、フウ太が家綱と話しているのを見る。いつのまにか仲良くなつたみたい。オレとはサツパリだけど。リボーンの話では進んでるみたいだから、その言葉を信じるけどね。

そういうこともあつて、フウ太にちよつとお願ひした。家綱にリボーンの誕生日を教えてプレゼントを用意しておいた方がいいってうまく伝えてつて。あいつ、毎年なんかするからさ。ボスになつてめちゃくちゃ豪華な誕生日パーティーとか開いてもらつたけど、前の日で疲れてほとんど無意識にこなしてたからね。リボーンのスバルタのおかげで問題なかつたらしいけど。

家綱はこれで多分大丈夫だと思うけど、問題はオレなんだよな。何あげよ。今までいろいろやつたけど、なんか全部微妙な感じになつたんだよな。いやまりボーンが無茶をするからだけど。

「相手はアドバイスが欲しくて黒川に聞いた。
「大人の男性つてプレゼントにどういうのを貰つたら嬉しいの？」
「相手は誰!？」

ガクガクとオレは揺さぶられながらも、リボーンと口にする。予想外だつたらしく黒川の動きは止まつた。

「あいつ小さいけど、精神年齢高いつづーか。普段からスーツでエスプレッソとか好きだし」

「……はあ。そういうことね」

それならと黒川は買い物に付き合つてくれるって言つてくれたんだ。オレ達がそう話してると結局いつものメンバーが集まつて、みんなで行くことになつた。「じゃ、ちょっとヒバリさんのところ行つてくる」

もう今日の放課後に行こうという話になつたから、ヒバリさんに一応許可をもらつてくる。別にオレはノルマないんだけど、それはそれ。休ませてつて頼むんだから、直接言つた方がいいよなーと応接室に向かつたんだ。

「今日の放課後、誕生日プレゼント買いに行くんで休ませてくださいっ！」

「プレゼント？ 君の？」

ああ、そつか。ヒバリさんオレの誕生日知つてるもんな。毎年トンファーケれるし。つてか、家綱にはあげないと思つてるのかな……ヒバリさん……。家綱のことまた忘れかけてるのかも……。いやまあ家綱はオレからもらつてもあんまり嬉しくないだろうから、誕生日ケーキをオレが毎年作つてるんだけどね。母さんが忙しいとオレが料

理したりするから、そういうのは大丈夫だから。

「リボーンのです。オレと1日違いなんですよ」

「あの赤ん坊ね」

リボーンのことは覚えてるみたいだし、強いつてこと知つてるんだろうなあ。最初に接触した時にリボーンが仕掛けたのかも。

「制服で行くとか言わないよね?」

「大丈夫です。ちゃんとわかつてますつて」

つまり許可はもらえたつてことだ。

「あ、参考にしたいんですけど、ヒバリさんなら何が欲しいですか?」

「君との時間」

……聞くんじやなかつた。トンファー構えないでください、ヒバリさん。

「……君、そろそろ武器用意出来ないの?」

「それ、オレも気になつてるんですけど、頼んでみようかと思つたんですけど、オレの直感が意味ないつて訴えるんですけどよねー」

本当にどうしようとオレも考えてる。レオンに作つてもらつても、死ぬ気の炎に強いグローブしか出来ない気がするんだ。あのグローブはオレ専用のアイテムだつたから、オレが炎を灯しても大丈夫だつたみたい。

ちなみにヒバリさんはオレの直感のことは知っている。オレが嫌な予感がするつて呟いた後、大抵オレが何かに巻き込まれてるから。ヒバリさんといる時に一番ビビったのはヒバリさんとのバトル中に車が突っ込んで来たこと。その時あんまり信じてなかつたヒバリさんを引っ張つて移動させた瞬間、どーんつて来たからね。そのあと物凄く胡散臭い目で見られたけど。

「そんなに特殊なの？」

「ヒバリさんならいいかな、言つても。オレ、炎を使うんですよね。両手からブワツて出る感じで」

……うん、久しぶりに胡散臭い目で見られたよ。まあ骸のことを知つてゐるから否定されなかつたけど。

「あつちの血筋なんです。専用の道具があれば、簡単に灯せるんですよね。正確にはなくとも灯せるはずなんんですけど……なんかサッパリで」

オレ昔どつかで使えたはずなんだよ。一度作つたらレオンは作れるみたいだから、確かに新しいのもらつたもん。あれつてどこの戦いだつけ。多すぎてわけわからなくなつてるんだよなー。オレの前世、濃厚すぎ。……骸に聞けばいいじやん。あいつなら覚えてるはず。いやでも一度幻覚で試した時、あいつ何も言わなかつたよな。つてことは使えないってこと？

あれ？でもXANXUSや9代目は武器持つてるよな。つてことはやっぱり頼んだら作つてもらえるの？いやでもそれならオレの超直感が引っかかるないはず。

「はあ。君がちゃんと考へてるのはわかつた」

「あ、すみません」

ヒバリさんをそつちのけでウンウンと悩んでたよ、オレ。これも前だつたら絶対出来なかつたよな。トンファーフィでくるから。

「しばらくはトンファーフィで乗りりますよ」

「その腕で？」

「……ですよね」

普通の人なら問題ないけど、ある一定のところまで行くとオレのトンファーフィの使い方なら歯が立たなくなるよ。最悪、川平さんからリングもらつてトンファーフィに灯そうかと思つてたけど……リングの無駄遣いな気がする。川平さんも頑張つてくれたんだけど、大空のリングはあんまりなかつたんだよ。なんとかAランクが一個あつたけど、オレが本気で灯せば終わるつて超直感が訴えてきたんだ。そつと指から外したよ、そん時。

「ヒバリさん、ちょっとオレを咬み殺してくれます？」

「……どこでそういう発想になつたかは知らないけど、無抵抗の君を咬み殺しても僕は

面白くない」

「オレも言つてて、なんか違うと思いました」

オレ達は2人揃つてため息を吐いた。オレの頭の悪さにうんざりして。

放課後一度家に帰つて着替えたオレ達は、リボーンへのプレゼントをあーでもないこーでもないと言いながら探した。実はこつそりリボーンがついてきていたと気付いていたオレは微妙な気持ちになつたけど。本人がそれでいいならいいやと思つてそのまま続けたけどね。結局、ハルがリボーンの服を作つてみたいてことでスーツとパジャマを作ることになつた。みんなで割り勘して生地を買つた。ちよつと男子の方が大目に出したけど。女子が作ることになつたから。黒川も乗りかかつた船つてことで、子ども嫌いだけど最後まで付き合つてくれることになつた。

だからなのか、そのままオレ達女子はパジャマパーティーに。リボーンの服を作るからつてのもあるんだけど、多分やりたかつただけ。オレ達はまた一旦帰つて、京子ちゃんの家に集合した。そん時にオレはビアンキに頼んで服の型を借りてきた。前に作つていたの知つてたからね。

ハルと京子ちゃんが得意でオレ達は2人に指示のもと喋りながら縫う。オレもあんまり出来ない方だと思つていたけど、クロームが一番苦手だつた。家庭科の授業で習つてるからできるけど、家ではやつてなかつたらしい。骸はダメになつたら新しいの買いつ

そうだもんな。ちょっと意外と盛り上がった。クロームは女の子！って感じだからね。本人が気にしてないのと、そういうところがギャップでいいって感じの盛り上がりだつたからオレも止めはしなかつた。まあみんないい子だから、そう言う流れにならな いってわかってるんだけどね。つい昔のオレが悪い方でからかわれたから敏感になつちやうんだ。黒川に過保護つて囁かれたよ……。オレもちょっとそう思つてたからう なだれるしかなかつた……。

女子同士の会話はコロコロ変わつて、オレがなんで黒川は下の呼び名ぢやないのかと いう話にもなつた。ハルがずっと不思議だつたみたいで。黒川の話だと幼稚園の頃に オレが寝ぼけながらも「黒川は黒川だから」つて言つたらしい。それでもう黒川は諦め たらしくて……。オレが全然覚えてないつてまた顔に出てたみたいでみんなでまた盛 り上がつた。

恋愛話にもなつたけど、これにはオレが一番サッパリで。クロームもサッパリだつた けど、今のところ興味がないみたいという意味で。オレは興味があるのにわからないと いう一番残念な感じだつたんだ。

で、なんとか知らないけど、オレは獄寺君とヒバリさんと骸のことをどう思つてるか 聞かれた。獄寺君とヒバリさんは友達と先輩つて即答できた。両方とも良いつて言葉 がつくね。ただ骸だけはなんて答えたらいいかわからなくて……。オレが言い淀んで

るとクローム以外のみんなはオレの答えを期待した感じで待つてゐるし……。仕方なく悩んで悩んで出した答えが、「共犯者」で。オレとしては結構納得する答えで、よく出てきたなあと心底頑張つたつて思つてたんだけど、みんなから微妙な顔をされた。まあ共犯者つて良い意味じゃないしね。

それはそこで話が終わつたんだけど、恋愛話は終わらなくて……。みんないろいろな理想があるんだなーって素直に感心した。オレも結婚はしたいと思つてたけど想像がつかなくて。前の時は京子ちゃんの顔が浮かんだのにね。自分がドレスを着ているところは想像出来るから、女として生きているのは間違いないと思うんだけど……相手がない。

オレがそう言えば、憧れてる人とかいないのつて聞かれたけど、オレにとつての憧れはヒバリさんで。でも絶対憧れの意味が違うと思うんだ。結局焦る必要はないって黒川に慰められた。いやでも少しは焦つた方がいい気がする。オレこのままズルズル行つちやつて、同じ繰り返しをしそうで怖い。リボーンはそういうのうぜーと思うタイプだから、今度ビアンキに相談しよ……。良い提案してくれるとと思う。やりすぎる気もしなくもないけど。今の状態よりはマシなはず。

ビアンキに要相談とオレが頭にメモしている間に、話はコロコロと変わる。これが結構楽しい。女子がおしゃべり好きになる理由が今になつてよくわかつたよ。……遅

いつての。オレってなんでいつも後から気付くかなーと思ひながら、その日は更けて
いつた。

リボーンの誕生日、当日みんな一緒にプレゼントを渡した。ふつーに。オレの中で激震が走ったよ、ほんと。多分みんなで用意してるのを知っていたからだと思うけど。そのかわりかはわからないけど、家綱でリボーンは遊んでいた。「だから僕、言つたのに」というフウ太のスネた声でオレは察した。

3

相手が想像つかなくて危機感を覚えていたオレはビアンキに相談した。ビアンキはオレの話に呆れることもなく、ちゃんと聞いてくれたんだ。

「そうねえ。デートしてみてはどうかしら？」

「デート!?

「ええ。デートすれば少しは想像がつくはずよ」

ビアンキの言葉にビックリしたけど、よく考えたら前の時もこの頃に京子ちゃんと動物園に行つたつけ。でもあれって結局デートじゃなかつたような。まあいいや。

「でもその相手がいないんだよ?」

「隼人なら喜んで付き合つてくれるわ」

獄寺君があとオレは考える。……うん、オレのためつて協力してくれそう。

「オレ、明日誘つてみる!」

よしつと気合いを入れたオレだつたけど、ビアンキにはそんな頑張らなくていいわと言われちやつた。今回、誘うのは仕方ないけど、あとは男性に任せろだつてさ。ちょっと考えて納得したオレはビアンキの言葉に素直に頷いた。

次の日、オレは朝一で獄寺君に頼んでみた。

「獄寺君、今度の土曜日にオレとデートしてくれない？」

あれ？とオレは何度か獄寺君の前で手を振る。固まっちゃってるよね？

「獄寺くん」

「隼人」

「ぐはつ」

ゴーグルを外したビアンキが声をかけたことで、獄寺君は元に戻った。……元に、って言っちゃダメだね。とにかくビアンキも固まつた獄寺君をどうにかしたかつただけみたいで、すぐにゴーグルをつけてくれた。よかつたよかつた。

「ア、アネキ……」

「耳を貸しなさい、隼人」

嫌そうな顔をしながらも、獄寺君はビアンキに耳をかした。何を話してるのがわからなかつたけど、獄寺君がキラキラした目でオレを見てくるからそんなに悪い内容じやないはず。多分だけど。

「任せてください、10代目！デートしましょー！」

「え？あ、うん。よろしくね」

昨日のオレみたいに獄寺君が燃え始めたけど、獄寺君が気合いを入れると口クなことがないんだけどなー。でもまあオレが頼んだことだし、仕方ないよね。

……そう思つていたんだけど、獄寺君の気合いにオレはちょっと引いてる。授業とかそつちのけで、いろいろと計画してゐるんだもん。そこまでしなくていいよ！って言いたくなるんだけど、黒川達に止められた。獄寺君の様子が変だつたから、学校きてすぐにお教えたからみんな知つてゐるんだ。オレのためにここまでしてくくれてゐるんだから……

「僕の耳にふざけた噂が入つてきたんだけど」

「そんな祈りも虚しく、オレはヒバリさんに呼び出された。なんでバレちゃつたのー!?」「すみません！」

「……節度ある行動なら、僕も口うるさく言う気はないよ」

「あー? とオレは首をかしげる。これつて獄寺君の授業態度はバレてないよね。

「…………交際するつて聞いたけど」

「誰がですか？」

「君と獄寺隼人」

ヒバリさんの言葉を何度も心の中で復唱したオレは、んなつ!?と叫んだ。なんでそう

なつてんの!?

「違いますつて！オレが跡継ぎつて知つてますよね？その関係でオレもいつかは跡継ぎを作んなきやいけなくて。でもオレそういうのよくわかんないから、仲良くしてもらつてる女人人にそれならデートしてみれば？つてなつた感じです」

オレがあたふたしながら説明すれば、ヒバリさんは残念な子を見るような目でオレを見た。オレだつてそういうのに疎いつて自覚してるから、デートしてみようと思つたんですつて！

「それ、向こうは理解してるの？」

「えつと多分。獄寺君はその女人の人の弟ですから」

「……そういうことね」

ヒバリさんが頭を押さえ出したけど大丈夫かな。……でもそれはオレのせいな気がする。理由はわかんないけど。

「事情は理解したから、もう行つていいよ。君と話していると疲れる」「す、すみません……」

結局ヒバリさんを疲れさせただけだつたよ……。まだ獄寺君のことがバレてないのにね。

なんとかヒバリさんにバレずに土曜日を迎えたオレは、朝からビアンキに言われて女の子らしい服を着ることになった。まあデートだしね、それもオレから頼んだデート。

「……家光泣くんじやねーか？」

「え? なんで?」

リボーンの呟きに反応する。今日の服一式、今年の父さんからの誕生日プレゼントだつたんだけど、そんなに似合つてないのかな。

「泣いて喜ぶという意味よ」

「ならいいけど。今度写真送ろうっと」

父さんには手紙しかダメだからなー。ボンゴレでケイタイ用意してもらおうかな。そうすればもうちょっと連絡しやすいのに。いやでも連絡できると思った方が母さん寂しく感じちゃうかな。でも前の時より連絡取れる手段があるだけずっとましだけど。「まつ、行つてくるね」

いつものように門のところで獄寺君は待つていた。ちよつと待たせすぎたかな、うろうろしてるしイライラしてるかも。

「ごめん、待たせちゃつたね」

「いえ、そんなことは……! つ10代目、そのお姿は……!」

「オレらしくないけど、せつかくだからと思って……。へ、変かな?」

ブンブンと音が聞こえるぐらい獄寺君は首を振ってくれた。さすがにオレもちよつとテレる。

ビアンキ、オレにもちよつとわかつてきただかも……！

心中でビアンキにお礼をしていると、獄寺君が手を出してきた。数秒オレはなんだろうと思っていたけど、ああ！という感じでオレも手を出した。……うーん、獄寺君と手を繋ぐとは思わなかつたなあ。

「なんか変な感じだね」

「う。嫌つスか……？」

「あ、や。嫌というわけじゃないんだけど……想像してなかつたというか……。ええつと、とにかく今日はよろしくね！」

「は、はい!!お任せください!!」

嫌な空気になりそだつたから誤魔化せたことにホツとする。今日はどこに行くのかなーと思つたら、ビツシリと予定が詰まつた紙を見てオレは思わず引きつた。……獄寺君がオレのためを思つて頑張つて考えてくれたんだよ。付き合うよ、付き合うけど……ミスつたなーとも思つた。靴、もつと楽そうなのにすれば良かつたつて。今からまた待たせるのは悪いから言わないけど……、服も変えた方がよくなるし。

「では、行きましょう！10代目！」

「あ、うん！」

ちよつと不安だつたけど、何とかなるかなと思つたオレは獄寺君についていくことにした。

獄寺君とのデートは楽しい。何が一番いいからって会話に困ることはないから。問題は……なんでリボーンとビアンキが尾行してゐるんだろう。なんで気付かないの、獄寺君!? つて何回ツッコミしたくなつたか。空氣を読んで我慢してゐるオレめっちゃ偉い。

「10代目、こここの料理はすっげー美味しいスよ」

「う、うん」

危ない危ない。リボーンとビアンキに気をとられるところだつた。ちよつと2人のことは忘れよう。こここの料理は本当に美味しいらしいから。実は山本が何度か付き合つて食べに行つたんだつて。オレの中では獄寺君が山本を誘つたことに衝撃だつたんだけど、店を見て理由はすぐにわかつた。この店、男一人で入るのは恥ずかしいよね。山本は気にしないタイプなのもあつただろうし、獄寺君の性格ならオレとのデートの下見なのに他の女の子は誘えないよね。意見だつて聞きたいだろうし。いやでも噂だと獄寺君は毎食ここだつて聞いたけど……。

……店員さんにめつちや微笑ましく見られてるつて、獄寺君!! オレ、超恥ずかしい!! 結局、何食べたかよくわかんなかった……。美味しかつたとは思うけど。

その後も女の子が好きそうな店を一緒にまわる。……父さんと似てるとちょっと思つたよ。選ぶ趣味というかなんというか。可愛いとはオレも思うんだけど、気後れするんだよね、こういうの。京子ちゃん達へのプレゼントの参考にはさせてもらうけど。「なにか良い物ありましたか?」

「うえ!ええつと……じゃあこの子かな」
「このぬいぐるみはナツツっぽくて好きかなー。早く会いたいなって思う。

「……ライオンですか?」

「えつ、オレに似合わないかな……?」

「そ、そんなことは!!」

うーん、これはウソだよね。獄寺君に気をつかわせちゃったなあ。前の時もオレはライオンつて感じじやなかつたし、今は女だしもつと合わないんだろうなあ。ちょっとションボリしつつ、この子とお別れする。いいんだ、オレにはナツツがいるから。

「ちょっと待つてください、10代目」

「えつ、ちよ、獄寺君。いいつて!オレ、自分のお金で買うから!」

獄寺君がレジに持つていこうとするからオレは慌てて腕を掴んで止める。お昼ご飯も奢つてもらつたし、流石に悪いよ!デートつていつても練習だし。獄寺君がバイトしてるのでオレ知ってるからさ。

つて思つていたんだけど、結局買つてもらうことになつてしまつた。獄寺君に負けたわけじやないよ。オレ達が言い合つてると、うるさかつたのか周りから睨まれちゃつて……。その視線に耐えきれずオレが折れるしかなかつたんだ。いやでもあれはなんか恨みもこもつていたような……。

そんなにも恨まれるほどうるさかつたのかなーと思ひながら、ぬいぐるみを受け取つた。包装するか聞かれたけど、ナツツを思い出したのか寂しくなつてさ。ちよつと抱きたい気分だつたから、そのままにしてもらつたんだ。もちろん袋はもらつたけど。

「ありがとう、獄寺君。大事にするね」

「その言葉だけでオレは……！」

前の時は気付かなかつたけど、獄寺君つて悪い女の人騙されそだよね。気をつけとこ。

オレが獄寺君の将来の心配をしていると、獄寺君は自分の手を見たと思つたら項垂れながら歩き出した。……あ、そつか。手を握れなくなつちやつたのか。オレがぬいぐるみ抱いぢやつたから。

ちよつと悩んだオレは獄寺君の腕を掴む。うーん、こっちの方がいいや。手を握るより違和感ないかも。

「つて、獄寺君!？」

「ず、ずびまぜん」

なんで泣いてんの!?……多分感動してると思うんだけど。え、そんなに!?

オレはわちやわちやしながらも、バツグからティッシュとハンカチを取り出して獄寺君の顔を拭く。……ちび達と同じような感じだなーって思っちゃった。……ごめん、獄寺君。

すぐに獄寺君は落ち着いたけど、また手を握られてしまった。さつきの間でぬいぐるみは袋に直したからいいけど……。オレ、腕の方が良かつたな……。そう思いながらも獄寺君についていくために足を動かす。ちよつとスピードが速いのは今まで時間を口スしたから。獄寺君の性格からしてきつちりこなしたいんだろうね。

獄寺君の計画を順調に消化していると、珍しいところでシャマルと出会った。学校では見るけど、それ以外で会うのは久しぶりかも。

「げつ、シャマル」

「お? 隼人にツーチャンジやねえか。ほうほう、かー! 青春してるねえ」

「うるせー!」

ああ、ケンカしないでとオレはどうやって仲裁しようかなと2人の様子を窺つてると、腰に手がまわった。シャマル?

「てめえ! 10代目に!」

「黙つてろ、隼人」

さつきまでの雰囲気と違うシャマルにオレ達2人は驚く。

「さあて、ツーちゃん。ジツとしてろよ」

「わわつ」

ひい！シャマルに抱っこされてるー!?パンツ見えるつて！と思つたけど、シャマルはちゃんと考えていたみたいで縦抱きだつた。

「えつと、どうしたの？シャマル」

「足、痛いんだろ？つたく、隼人何やつてんだ」

ひい！獄寺君の顔が真っ青になつてるー!?

「や。違うつて。オレも楽しくて、言いたくなかつたというか……」

獄寺君、絶対気にすると思うし、せつかく楽しい雰囲気を壊したくなかつたんだ。

「そうだとしても、こういうのは気付かないヤローが悪いんだ」

「すみません！またオレのせいです……」

「ああ、もう……！ほんと、たいしたことないんだつて！気にしないでお願いだから！ね

？」

オレは獄寺君にそんな顔をさせたくないんだつて！ちょっと靴ズレしただけなんだから、オレの回復力なら明日には治つてるつて絶対！

「すみませんっ！」

「ご、獄寺君!!」

「どーしょー!? 獄寺君がどつか行つちやつたーー! 追いかけたいけど、出来ないしーー!

「ほつとけ。どうせ頭冷やしたら、慌てて帰つてくんだろ」

「や、でも……」

「それより……反省しない子には、ちょっと痛い薬でも塗るかなー?」

ひいーとオレは思わず悲鳴をあげた。許してー、今回はこの前とは違うんだって。自分でも悪いと思ってるからー!

オレがあまりにも情けないぐらい嫌がつたら、シャマルは許してくれた。オレ、女でよかつた……。女じやなかつたらシャマルに診てもらえなかつたけど。

「確かにたいしたことはなかつたな」

「だよね！ 慣れない靴だから余計にそう見えただけなんだよー!」

そんな獄寺君が気にしてどつか行つちやうほどじやなかつたんだよーとオレは嘆く。リボーンが追いかけたみたいだけど、あいつキツイこと言うつて絶対。うう、獄寺君丈夫かなあ。追い詰めてなきやいいんだけど……。

「隼人と一緒に居て疲れないか?」

え? とオレが声があがると同時にさつきまで近づいていた気配が止まつたことに気

付いた。もしかして、獄寺君？

オレが振り向こうとしたら、シャマルが手を軽くひいた。……教えてやれってことかな？

「疲れるわけがないよ。楽しいよ、一緒に居て。ちょっと暴走するところもあるけど、ビアンキもそういうところもあるし、そつくりだなーってオレはもつと楽しくなるんだ」「……まいった。おじさん、ツーチayanをナメてたわ」

ボソッとオレだけに聞こえるようにシャマルは言つた。もしかしてオレがビアンキの気配にも気付いてると思つてなかつたのかな？

どうなんだろうと気にはなつたんだけど、オレは一瞬で現実に引き戻された。
「そんな優しくて可愛いツーチayanにはおじさんから熱い口づけのプレゼントー」

「ひい！」

やめてー！とオレが手をバタバタさせていると、どかつと音が聞こえた。

「この変態ヤブ医者が！10代目になにしようとしてんだつ！」

「獄寺君！」

オレは獄寺君の登場に感動した。けど……、これつて獄寺君が戻りやすくするためだよね？

そう思つてシャマルを見たら、ウインクされた。獄寺君はそのウインクにもキレてた

けど、シャマルも大人なんだなあとオレは思つたよ。なんで普段からしないのかなーと
も思つたけど、獄寺君のいる前だつたし、オレは口を閉ざしたままシャマルと別れたん
だ。

「えっと、シャマルもたいしたことないって、だからさ……」

「……オレが気にすると10代目が悲しむので、反省は後にします」
反省もしなくていいんだけど……。でも獄寺君なりに考えた結果だと思つたオレは
何も言わないとこにした。

「あんまり無理しない程度なら許可もらえたし、その……オレが行きたかったところに
行つてもいい?」

「もちろんです!」

「あ、ごめん。聞くの忘れてた。お腹減つてる?」

獄寺君は頷いた。無理をした感じじやなかつたし、ゆっくりとオレの案内でそこへと
向かつた。

「ここ)つスか?」

「あはは。ごめんね、こんなところで。デートっぽくないとは思つたんだけど、どうして
も食べたくなつてさ」

オレ達が向かつたのは、よくあるハンバーガーショップ。女の子達だとこういふとこ

ろ来ないんだよね。でも前の時は獄寺君達と放課後によく寄ったからさ。それにこういうジャンク系は女になつても変わらず好きなんだ。

いただきまーすとオレはかぶりつく。うーん、久しぶり！この味だよ、この味！

オレが感動していると、獄寺君も笑つた。肩の力が抜けた感じの笑い方だつたから、デートつてことでいろいろ気をつかわせちゃつたんだろうなあ。

「獄寺君、今日はごめんね。オレにはやつぱちよつと早かつたみたい。……そうじやないからね？うーん、なんていうか、楽しすぎた、かな」

こんな経験もう出来ないだろうなあとオレは思つちゃつたんだよね。

「……10代目？」

「うん……、凄く楽しかつたよ。ありがとうね、獄寺君。今日のこと、死んでも忘れないよ。つて、ちょっと重いね」

あははとオレは笑つたんだけど、獄寺君はちょっと怖い顔になつてた。獄寺君のことだから、嫌がることはないかなと思つてたんだけどなあ。

「……デートの時間ぐらい作つてみせます。オレは10代目の右腕になる男ですよ。それぐらい叶えてみます」

獄寺君……。

「……うん。でも相手を先に探さなきや」

結局そこだよなーとオレは行儀悪いけどストローをくわえる。獄寺君がオレのため
にと言つてくれたけど、そこで引っかかるんだよ。

「オレはいつでも大歓迎ですよ」

「獄寺君、ありがとうね。でもオレばつか相手にしてると、獄寺君が良い人逃しちゃう
よ」

「あ、いや……オレは大真面目なんスけど……」

「え？ そこまでしてもらつたら悪いよ。ちゃんと探しなよ？」

オレがそういうと獄寺君はガクリと肩を落とした。オレと一緒に緒で獄寺君も苦手だも
んねー。

まあでも獄寺君のおかげでオレでもデートは出来るんだなあつて思えたから、ちょつ
とは進んだよね。

デートの一件から獄寺君はちょっと変わった。獄寺君は獄寺君なんだけどね。なんていうか、肩に力が入りすぎていたのがなくなつたんだ。オレとしても疲れないかなと心配していたから嬉しい。なにがキツカケかはわかんないけど。

ちょっとした変化はあつたけど、オレはいつものように授業を受けていたんだ。そんな時、オレはハツと顔をあげた。クロームも気付いたようで、オレの方を見たから頷く。オレが見に行くよって。

「すみません、ちょっと抜けます」

オレを先生は止めることはない。ヒバリさんの力つてすぐーと思いながら、獄寺君や山本に大丈夫つて視線を送る。気にはなつたようだけど、無理してついてくるほどじゃないと思つたみたいで、見送つてくれた。

「……なんで屋上にするのかなあ」

ヒバリさんの出没場所つてわかってるだろうに……とオレは文句を言う。

「おや？ 僕としては人目につかない方がいいと思って選んだのですよ？」
うん、わざとだね。オレ、知らないよ？ ヒバリさんに見つかっても。

「で、何しにきたんだよ。骸」

「君に預けた方がいいと思いまして」

そう言つて、骸は何かを投げたのでオレはキヤツチする。つて、イーピン!? 「ちよ、なにしてんの!？」

かわいそうに、イーピン縛られてるじゃないか!

「それ、人間爆弾と呼ばれる殺し屋でイーピンと言う名ですよ」

つと、サンキュー。リボーンが見ていることに気付いた骸がわざわざ教えてくれたよ。でもなんでイーピンは骸のところへ行つたの?いやイーピンがド近眼なのは知つてるよ。でもオレか家綱のところに来ると思つてたんだよ。

「お前に何かしたの?」

「古里炎真にですよ。ターゲットを間違えたらしいです」

……炎真だつたよ。たしかにオレと同じぐらい不運だもんな、炎真つて……。

「なんでも前の日に犬に追いかけられてるところを助けてもらつたらしいですから、やりすぎないようにしてほしいと頼まれましてね」

オレ、今思い出したよ。見間違えて殺されかける方の印象が強くて忘れてた……。確か、オレも犬に追いかけられてたところを助けてもらつたのがイーピンと最初の出会いだつた。オレより犬に嫌われてる人、居たんだつた……。

「うん、わかつた。こつちで相談する」

「そうしてください」

オレが預かるという話になつたから、骸はイーピンを縛つてる縄を消した。有幻覚つて便利すぎ。

これでもう骸は用がないよねとホツとしたところで、扉が開いた。オレは超直感に従つてイーピンを背に隠した。

「ワオ。死ににきたの」

「クフフ。さて、どうしましようか」

オレ、今絶対遠い目になつてゐる。2人とも武器を出してヤル氣満々みたいだし、勝手にしてくださいね。オレは関係ありませんから。

骸が適當なところで切り上げるだろうと思つたオレはいつものように帰ろうとしたんだけど、ヒバリさんがオレを見た。え、なんでオレを見るの!?

「なに、隠してるの」

「……えーと、ヒバリさんは見ない方がいいです。オレの直感がそう訴えました」

咄嗟の判断だつたけど、オレの行動は正解だつたんだよ。イーピンはヒバリさんを見ると惚れて、爆発しちゃうから。

「僕の学校に持ち込んだんだ。いくら君の言葉でも確認しないわけにはいかないよ」

普段ならいけるのにー！とオレは思つた。絶対骸が関係しているつてわかつてゐから譲れないんだよ。

「え？」

聞こえてきた言葉にオレは驚いた。今、イーピン出るつて言つたよな。オレは大丈夫だよつて声をかけた。専門用語とかはダメだけど、日常会話ぐらいは覚えてる。最近使つてなかつたから忘れかけてるけど。……他の言語もヤバイかも。復習しなきや。

「誰？」

「ええつと、イーピンという名の殺し屋です」

……殺し屋つて言うんじやなかつた。ヒバリさんの機嫌が急降下したよ。主に骸に向かつてだけど。何連れてきてるの？つてね。もう完全にヒバリさんの中で骸が連れできたつてことになつてるよ。あつてるけど、これは普段の行いだよね。

「氣をつけた方がいいですよ。彼女が筒子时限超爆という技を使えば、この校舎を壊すほどの威力ですから」

いやそうだけど、そなうだけどー！とオレはヒバリさんの視線から逃れるように、距離を取ろうと一步ずつ下がる。骸、お前笑つてる暇があるなら助けろよ！？

「ほ、ほんと勘弁してくださいっ！」

「……沢田ツナ、いい加減にしなよ」

ヒバリさん本気で怒つてるー!? オレがどうしようとアタフタしていると、リボーンが出てきた。

「見せてやればいいじゃねえか」

「や、絶対ダメだつて。嫌な予感するもん」

「イーピンは極度の恥ずかしがり屋だが、本人が出てもいいって言つてんだぞ」
イーピンからも大丈夫という声が聞こえ、リボーンとヒバリさんの2人に敵うわけもなく、オレはなくなくイーピンを前に出した。

「……イーピン、大丈夫? つて、ヒバリさんに惚れてるーーー!」

やつぱりオレはそうなつたよーーーと頭を抱えたくなる。イーピンを持つてるから出来ないけど。

「おやおや。カウントダウンが始まりましたね。僕はここで失礼します」

「ちよつ。お前ならなんとか出来るだろ?! このまま放置する気かよつ!」

「ええ。彼は僕の手を借りたくないでしようから」

そうでしたーとオレは頑垂れる。骸が行つちやつたよ……。

「な、投げなきや」

もうそれしかないとオレは空を見る。すると、ヒバリさんがオレに手を出してきた。
「貸して。僕がする」

「や、オレがしますって」

「いい。元はといえば君の忠告を僕が無視したからだ」

「ううう、ヒバリさんって結構律儀なんだよ。じゃないよ！」

「絶対ダメ!!」

「なんで？」という顔をしているヒバリさんに向かってオレは言つた。

「惚れた相手に投げられるなんて、イーピンがあまりにもかわいそうです!! 同じ女としてそんなことさせたくありません！」

「ああ、話してたから時間もないよ。仕方ないとオレは額に炎をともす。こうしないと時間がなさすぎて、そんなに飛ばないから。ヒバリさんにそう言つた手前、オレは校舎に傷ひとつつけるわけにはいかない。」

「オレの言葉になのか、変化なのかはわからないけど、ヒバリさんは驚いて固まつた。だからそのスキにオレは思いつきり空に向かつて投げたんだ。」

「わっ」と

「オレは落ちてきたイーピンをキヤツチして、ふうーと息を吐いてハイパー死ぬ気モードから普通に戻る。音は凄かつたけど、校舎に被害はない。もちろんオレ達も。」

「……ツナ」

「えへへ」

別に隠してゐるつもりはなかつたんだけど、なんとなくリボーンの視線に気まずくて笑つてごまかす。そんなオレの態度をリボーンはため息一つで飲み込んでくれた。うう、ごめんつて。

「……君」

ヒバリさんの声が聞こえ、オレはそつちを見た。……見るんじやなかつた。

「まだ本気じやなかつたんだ」

「あ、ちよつ、待つて、ヒバリさん！」

「やだ」

ひい！とオレはトンファーを避ける。

「イーピンのことはオレに任せとけ」

「ちよ、リボーン!?」

結局、その日は暗くなるまでヒバリさんは逃してくれなかつた。

今日はディーノさんが来て、ボス同士交流しようぜってことで炎真と3人で出かけている。あ、あとリボーンとロマーリオさんも一緒に。

ディーノさんって本当に面倒見がいいよね。オレがボス候補筆頭になつたから今回はオレだけを誘つたけど、家綱とも交流を深めてるもん。リボーンの話では家綱はディーノさんのお古のムチをもらつたらしい。前はオレがもらつたけど、数回使つただけで申し訳なかつたんだよな。家綱はちゃんと使つてるみたいで、オレとしても嬉しい。使つてるといつてもリボーンの話では、屁つ放り腰でダメダメらしい。逃げなくなつただけ成長したリボーンの機嫌は良かつたけど。ちよつと対応が優しくなつたのは、オレをボス候補と考えてるからだと思う。つても、あんまオレにも厳しくないんだけど。

「なんだ？」

「あ、いや」

チラッとリボーンを見れば、バレちゃつて慌ててなんでもないよと手を振つた。でもその途中でオレは聞きたかつたことがあつたことを思い出した。

「ごめん。やっぱある」

コソコソとリボーンに声をかければ、オレの頭に移動した。デイーノさんがオレ達がゆっくり話せるようにと、炎真に話題を振ってくれた。やっぱ気遣いもできるデイーノさんはカッコいい。

「あの方、父さんつて元気にしてるよね？」

「家光？ オレンとこにはなんも情報は来てねえぞ」

なら大丈夫だよねとオレはホッと息を吐く。

「なんでだ？」

「いやさ、前に手紙を送つたんだけどまだ返事がなくて……。毎年、プレゼントのお礼に写真とつて送つてるんだ。いつもならこの時期までには返事が来てたからさ」

「……ツナ、お前獄寺と一緒に写真を送つてねーよな？」

「え。あ、うん。せつかくだしと思つたんだけど」

こいつの反応からしてダメだったのかな。

「や、でも。オレさ、お前に言つたのもあつたし……会つて話したいことがあるつて書い

たから、そつちで困惑してるのかも？」

「……家光、生きろ」

「んなつ！」

リボーンのつぶやきにオレは思わず声をあげた。デイーノさんと炎真が何事って感じでこっちを見たけどそれどころじゃないって。

「父さんにやつぱ何かあつたの、リボーン！」

はあと大きなため息を吐いたリボーンは、デイーノさん達に声をかけた。

「溺愛している娘から、男と一緒にうつった写真を送られて、会つて話したいことがあるつて手紙に書いてあつたらオメーらならどう思う」

「……そりやまあ、付き合つてるから紹介したいって思うだろうな」

「僕もそう思うかな」

オレはうそーと叫んだ。違うんだ、父さん！とオレは伝えたくて仕方がない。

「この様子だと、ツナはやつちまつたのか……」

「それも可愛い娘のためにと送つた服をきてな」

「……ツナさん、それはまずいよ」

炎真にも言われちゃつたよー！

「ど、どうしよう……リボーン！」

「もう一回送り直すしかねーな」

帰つたらすぐに書くよとオレはうなだれた。しょんぼりしたオレを見て、デイーノさんは美味しいものでも食つて元気出せつてことで食事を奢つてくれることに。デイーノ

さんのことだからもともとその予定だったと思うけど、優しくて泣いちやいそうだよ。トホホ……。

「ディーノさんが連れてつてくれたところは、見るからに高級店でオレと炎真はぼけ一つと口を開けてしまった。

「ボスならこういつた店にも行くことになるんだ。今のうちに慣れておかねーとな

「……僕には縁はなさそうだけど」

「おいおい、何言つてんだ。オレンとこのパーティはこれより上のランクになるぜ」

炎真は他人事のように見ていたけど、ディーノさんの言葉に青ざめた。気持ちちはわからず、でも本当のことだから。それにディーノさんの中ではもう炎真は呼ばれるることは決定されてるよ。あと、ボンゴレはもつと凄いからね。

「ツナ、人の心配してるがお前は大丈夫なのか？」

「えっと、多分大丈夫。切り替えたらだけど……」

ふうと息を吐いて、背筋を伸ばす。良かつた、身体は覚えていたよ。感心したような息をディーノさんが吐いたけど、オレはあんまりこれ好きじやない。食べた気がしないんだよね。

「……ダメだな」

「え? なんで?」

「おめーはこれ誰に教えてもらったんだ？男なのは間違いねーだろうが」
はあと呆れた感じでリボーンにため息を吐かれてしまつた。いや、教えたのお前だ
よ。前世だけど。

「ディーノ」

ひよいつとりボーンはディーノさんの肩へと移動した。そのあとコソコソ話してい
るけど、オレと炎真は聞こえなくて一緒に首をかしげた。なんだろうねって。
「……なるほど。試してみりやすぐわかるな」

「ああ」

2人の話が終わると、リボーンは肩から降りた。ディーノさんはオレのところへ來
て、そつと手を出した。

「ツナ」

「今日はよろしくお願ひします」

どういう設定なんだろうと思いながらも、無難にオレはディーノさんと握手をした。

「……ツナさん、今のは僕でもわかつた」

「え？ なにか間違つた？」

「リボーン、ビンゴだな。これはダメだ」

ディーノさんからもダメだしをくらつてオレはキヨロキヨロと周りを見渡し、リボーン

ンの姿を探す。オレ、お前の教え通りやつてなかつたの？

「基礎は出来てるんだ。そこまで不安にならなくていい」

ポンポンとディーノさんに頭を撫でられ、ちよつとオレは落ち着いた。つい昔の癖でリボーンに助けを求めてしまつたよ。

「ちよつと引っ掛けたのもあるが、普通ならあそこはエスコートのためにオレが手を出したと思うんだ」

「あ」

オレもディーノさんみたいにやつたことがあつたよ。うわー……全然氣づかなかつた……。

「つてことは、オレ、女の子？」

「ツナは女だろ」

「いやまあそうですけど」

オレが女つてのはわかってるよ。わかってるけど、混乱する。

「……パーティとか男のフリして出ちゃダメです？」

無理だらうなーと思ひながら聞いたら、みんなに首を横に振られた。やつぱりダメかー。

「この感じだと炎真よりツナの方が手こずりそうだな……」

「……オレもそんな気がします」

炎真が心配そうにオレを見ているから、大丈夫だよと笑おうとしてところで気付いた。……気付いてしまった。

「ツナさん？」

「……オレ、ダンスとかも男の方で覚えてる」

え!? と2人は声を揃えて叫んだ。オレはもう叫ぶ気力もなかつたよ……。

「覚えちまつたもんは仕方ねえ。地道にやつて覚え直すしかねえぞ」

「だよね……」

リボーンの言葉にオレは素直に頷いた。今日のところはどれだけ出来るかの確認だつたみたいで、普通に食事が出来た。けど、危機感しかなかつたオレは、帰つてすぐリボーンに泣きついた。

「リボーン、どーしょー!!」

オレ、ボンゴレ継ぎたくない……。

冗談だけど。家綱と約束したのもあるし。でも久しぶりに本気で思つたよ。性別が変わるだけで、こんなにわかんなくなるなんて思わなかつた。前は男の立場だつたからさ、望んでいることは考えればわかるんだ。でもすぐに気付かない。答えがわからないならまだ諦めもつくけど、考えればわかるからもどかしいんだ。

リボーン達は焦る必要ないって言うし、ビアンキは好きな人が出来れば自然と身につくっていうけどさ。オレのことだからスバルタじやないと無理な気がする。

それなのに炎真がスバルタ教育受けちゃうし。炎真はいつかは覚えないといけないことだからって言つてくれたけどさ。絶対オレに気をつかつてるよ。だつてオレが炎真の立場だつたらそう言うもん。

頭が混乱しているのもあつて、身体を動かしたかったのに、今日はヒバリさんの都合でバトルがお休み。今までヒバリさんの都合で休みと言われたことがなかつたからオレはショックで。

先週、グチつちやつたもんなあ。いやだつてさ、ヒバリさんぐらいなんだもん。オレ

がこんな戸惑つてることに聞き流してくれるの。知らないっていう一言で終わらせちゃうからね、あの人。他のみんなはなんでオレが戸惑つてるか不思議に感じると思うんだ。骸はわかつてくれるだろうけど、あいつは聞きたくないだろうし。

ついにヒバリさんにも呆れられたんだー！ってマイナス思考に陥つたら、リボーンに外でも行つて気分転換して来いって言われた。怒るついでに蹴つてくれてもいいんだよ？と思つたオレは多分重症。そしてうじうじしながらも体がリボーンの言葉で動くのも、多分重症。

オレつてちよつとヤバいんじゃない？と明後日な方向に思考が行つたことで、ちよつと復活。せつかく休みになつたんだし、ちび達をどつかに連れて行こうかな。元気なちび達はオレが誘つたら、喜んでついて來た。イーピンも増えてまた賑やかになつたなあ。

「……オレは休めという意味で言つたんだぞ」

「え？ うん。わかつてるつて。ちび達と遊んでくるね」

オレの体がもうひとつあれば、もっとちび達と遊んでやれるのになあと思いながらその日は過ごしたんだ。

次の日、学校に行くと先生に捕まつた。必死な感じだつたから、ヒバリさん関連かな

と思つたら正解だつた。すつげー機嫌悪いんだつて。オレに懇願されても、どうすることもできないんだけどなーと思ひながらもヒバリさんを探す。ふつーに応接室に居た。

「……ヒバリさん?」

「なに」

うわー、機嫌悪つ！じやなくて、なんでそんなに怪我してんの？

骸かなつて一瞬思つたけど、あいつはオレがヒバリさんと日曜日に会つてるのを知つてゐから、昨日は見つからないようにしてゐるはず。それにあいつはヒバリさんが並盛を牛耳つてるのもあるから、ここまで怪我を負わせる前に切り上げる。煽りながらだけど。

でもヒバリさんがここまで傷を与える相手は限られてる。いつたい誰だろう。尋ねれば、もつと機嫌悪くなりそだから聞けないしなー。

まあでも昨日会えなかつた理由はわかつた。ヒバリさんはオレを呆れたわけじやないっぽい。良かつたー。

「それで？」

「つと、すみません。ヒバリさんの機嫌が悪いから怖いつて声があがつてますよ」

「……誰、言つたの？」

「ひみつです」

これはダメだなー。機嫌悪すぎ。今すぐにでも咬み殺しに行こうとしてるもん。普段ならもうちょっと寛容。

うーん、咬み殺しきれなかつた。が、正解かな？逃げられたんだと思う。でも学校に来てるから、風紀を乱したとかそういう事件じやない。

……デイーノさんぐらいだよな？こんなこと出来そなのつて。怪我はしてるけど、問題なさそうな程度だし。リボーンは昨日オレと居ただろ。デイーノさん、ヒバリさんに見つかっちゃつたのかな。

「ヒバリさん。オレでいいなら、付き合いますよ？」

オレが仕込みトンファーを出せば、ヒバリさんは迅速だつた。ちよつとでもムカつきをなくしたいんだろうね。オレはヒバリさんを追いかけ、屋上へと向かつた。

ひいひい言いながら、オレは避ける。また強くなつてる気がするよ……。ほんと、この人天才。オレは2回目なのにもう追いつかれそうで怖い。

本当はもつと打ち合えたらいいんだけど、トンファーだと咄嗟の時に出来るのは防御ぐらいで。たまにオレからも仕掛けるけど、そのまま殴る感じになる。ヒバリさんのよううにトンファーを使いきれないんだよ。

「た、たんま……」

ヒバリさんが止まつてくれたので、オレは息を整える。こういう時、やつぱスタミナ落ちたなあと実感する。後、ちょっと脆くなつたかな。トンファー越しなのに、ヒバリさんの攻撃が痛いと感じる時がある。いやまあそれでも何時間もヒバリさんと戦えているんだから、前のオレと比べれば天と地の差があるんだけどね。毎日走りこんでるだけあって、ちょっと休憩すればすぐに復活するし。

「……君、戦い方も男っぽいね」

「え？」

「そう感じた」

感じたつてことはヒバリさんもよくわかつてないのかな。まあ女人の人と戦う機会もそうないよな。それにトンファーは仮の武器だしわかりにくいはずだから。

「でもオレこれでずっとやってきてますし」

「君にあつた戦い方は本当にそれなの？」

「……違う、気がする」

無意識に出た言葉だつた。そういうえば、オレ……ハイパー死ぬ気モードになつた時間つてどれぐらいだつた？ 骸と実験した時が最長だつたかも。あれだつて試すだけ試したら終わつたよな。多分5分もなかつた。骸を助けに行くときに使つたけど、そのたびに使つてて一瞬しかならなかつた。敵という敵の前で、まだまともに戦つてない？

「いいよ。今度は僕が付き合つてあげる」

ヒバリさんの言葉に、オレは戸惑つた。いや、言つてる意味はわかるよ。オレにハイパー死ぬ気モードになれつて言つてるんだ。しばらく沈黙が流れただけど、オレは頭を下げた。よろしくお願ひしますという意味で。強いオレと戦いたい気持ちもあるだろうけど、オレのためな気がしたから。

ボツと額に炎を灯す。ヒバリさんには悪いけど、オレはトンファーを地面に置く。手から炎が出ないけど、今のオレの状態なら素手がいい。

ヒバリさんと手を合わせていると、オレの超直感が教えてくれる。リボーンの教えは間違つちやいない。本当の死ぬ気は体がぶつ壊れようと食らいつく覚悟だ。でもオレの今の体ではそう何度も耐えれないし長く戦えない。今はヒバリさんがリングの力を使つてないから問題ないけど、もし使うようになればもつとはつきりする。オレは多分ヒバリさんに簡単に負ける。前の戦い方のままなら。……答えはわかつていたんだ。

ガンッとヒバリさんにトンファーで殴られた。けど、殴られた瞬間に死ぬ気をコントロールし、防御力を高めたオレにダメージがあるわけがない。ヒバリさんはリングの力を使つてないしね。一瞬、驚いたヒバリさんにオレは殴り返した。

「す、すみません。大丈夫ですか……？」

「……問題ないよ」

いやでも絶対入ったよ、今の。ヒバリさんは認めないとは思うけど……。だからオレが考えを整理したいってことで休憩にした。本当に考えたかったし。

「オレってやっぱバカだなー」

ほんとバカ。骸を助けに行つた時にもう死ぬ気の炎が思い通りにコントロール出来るつて気付いていたのに。あの時にそう思つたんだよ。全盛期の時と同レベルか上つてことじやん。脆くなつたとかスタミナが減つたとか、全部なんとかなるよ。さつきみたいに防御力あげれるだろうし、無駄な消費だつて減らせるよ。それに今のオレはまだ発展途上中。

「ヒバリさん、ありがとうございます!!」

なんかスッキリしたオレはまたヒバリさんに頭を下げた。ヒバリさんのストレス発散に付き合っていたはずなのに、結局オレが得しちやつたよ。

「少しはマシな顔になつたようだね」

ヒバリさん……! とオレは顔をあげて感動した視線を送ろうとしたけど、ヒバリさんはもう屋上から去つていた。

「えー……」

でもヒバリさんらしくてオレは笑つた。ヒバリさんは借りを返しただけなんだろうね。あと、先週のオレがあまりにも情けなかつたのもあるんだろうけど。

た。 こういうところがオレのヒーローなんだよなーと思ひながら、オレは教室に向かつ

正月。振袖を着たオレはみんなと一緒に神社へと向かう。

この振袖は父さんからのクリスマスプレゼント。高すぎつ！つてオレは思つて躊躇したんだけど、父さんは察してたみたいで、返事が遅くなつたのと、まだしばらく帰れないという2つの詫びと一生物だからつて手紙に書いてたんだよ。返事が遅くなつたのはオレがもう一回送り直すのを忘れてたせいでもあるんだけどね……。

母さんの話だと、オレが大きくなつてもサイズ直し出来るように作つてて、本当に一生物なんだなーつてオレは感心したんだけど、みんな揃つてため息を吐いたんだ。

「パパンがツナのことの大好きなのはわかるわ。けど、一生物の意味が違うでしようね」「そうよねえ。お父さんがツーちゃんにお嫁に行つて欲しくない気持ちはわかるのだけど……」

教えてもらうまでオレは知らなかつたけど、結婚すれば振袖は着なくなるんだつて。娘が出来れば譲つたりするから一生物というのは間違いなんだけど、今回は多分違うつて。父さんらしいちや、父さんらしいけど……。あの写真が原因だよね、絶対。

誤解が解けて、これだもんない。不安だつたオレはちゃんとリボーンに確認しても

らつてから送つたし。

あれ？ オレが結婚するのに一番の障害になりそうなのって、もしかして父さん？

なんだろう、ドラマでありそうなオレに勝てる奴じやなきや認めんとか言い出しそうな気がする。……超直感はこんなところで仕事しないで、お願ひだから。

「父さんに勝てる人つて何人居るんだろう……」

「数える程しか居ねえのは確かだな」

オレが脈略もない咳きにでもリボーンはきつちり返してくれた。嫌な肯定だつたけど。

「ツーチayan、どうしたの？」

声をかけてくれたのは京子ちゃんだったけど、オレがズーンと落ち込んだのはみんな気付いていたらしい。せつかくだし、女の子達の親はみんなどんな感じのかなつて聞いてみた。あ、クロームはオレと骸が認めた奴ね。

「……あんた、父親のことあんまり言えないわよ」

「父さんは絶対マシ。オレ達に勝てとか言うつもりはないから」

それにオレがそう言つたら、クロームが嬉しそうにしてるからいいの。

「ツナさんのお父様はお強いんですか？」

「そうだね。見えないけど、めちゃくちや強いよ。ヒバリさんですら、一撃を耐えられる

かどうか……」

わかりやすい例でヒバリさんを出したら、みんなギョツとした。ヒバリさんがリングの力を使つてないのもあるけど、それを抜いてもほんとあの人強すぎ。下手したら9代目より強いんじゃない?まあ9代目は年齢のこともあるんだけど。

獄寺君、そんな真っ青にならなくとも大丈夫だよ。ちゃんと誤解は解いたからね。

「まついけんだろ。ツナのこと本気で好きなら、それぐらいやつてみせねーとな。オレの親父もツナが結婚するつったら、やりそだかんなー」

「山本のお父さんもなの!?

ハハツ、つて笑つてたけど、山本のお父さんは時雨蒼燕流の使い手じゃん。山本のお父さんに勝てる人も少なうなんだけど……。

「オレ、結婚できるかな……」

この歳から神頼みしないといけなくなるなんて……と思いながらオレは賽銭を多めにいれた。

お詣りした後、オレ達はわいわいとふつーに屋台をまわる。……リボーンが何にも企んでないのが怖い。あいつの無茶振りが普通になるなんて、オレの前世濃すぎるんだ。前の時と違つて、オレは継がなきやつて考えてるから。ヒバリさんにもバレて

たし、こいつが気付かないはずがないもんなあ。

「あ、コラ。ランボ、こっちにおいで」

黒川の反応を楽しむんじやないっての。まあオレの抱っこが好きなのもあって、前よりは聞き分けがいいから助かってるけど。

「アホ牛。10代目は振袖なんだ。こっちに来い」

「やだもんね！」

ああ、獄寺君が無理矢理ランボを掴んじやったよ。絶対ランボが嫌がつて暴れるつて。こんな人が多いところでそれはマズイつてば。そう思つてオレは2人の間に入ろうとしたんだけど、悪寒が走つて振り向く。

「つ！」

「ツナ？」

オレの様子にいち早く気付いたリボーンが声をかけてきたけど、すぐには答えられない。誰かに見られていた。今は感じないけど、間違いないと思う。

「うわあああん！」

ランボの泣き声にオレは意識が逸れる。ひい！10年バズーカ使おうとしてるよ！

「ちょ！・ランボ、たんま！」

なんでか知らないけど、今のリボーンはランボが10年バズーカを使おうとすれば、

鉄拳制裁するんだよ。だからリボーンが手を出す前にとオレは止めようといつも動いているんだけど、すっかり忘れてたんだ。……オレ、今振袖きてた。

「あっ」

オレが転びそうになつてゐるのを見て、みんな焦つてゐるなあ。オレはもう、またやつちやつたなとしか思えなくて。死ぬ気になれば、なんとかなるかも知れないけど、場所もだけど、こんなことですることじやない。

「いてっ」

地面にダイブするよりも、断然軽い衝撃だつた。それもそのはずで、オレは人にぶつかつて転ばなかつたんだ。

「す、すみません」

オレとしては助かつたんだけど、迷惑だつたよねと恐る恐る顔をあげる。つて、大人ランボ!?

あれから会つてないのもあつて、大人ランボには悪いんだけどちよつと苦手意識がある。そーつと離れようとしたんだけど、バツチリ目が合つてゐるし肩を掴まれていた。

「若きボンゴレ、お久しうぶりです」

「う、うん。久しぶりだね」

ランボなのは間違いないんだよ。でもオレの知つてゐるランボとやつぱり違つて……。

どこがつて言われたらわからないけど。

「10代目、お知り合いでですか？」

「え、うん。まあ」

そつか。リボーンが阻止してることとは、獄寺君達も大人ランボと会つたことがなかつたんだ。

「いつまでツナに触つてやがる、エロガキ！」

……止める間もなかつたよ。流石、リボーンだよ。オレの意識がそれた瞬間だつた。「つて、感心している場合じやないよ！」

大変だーと大人ランボの様子を見たけど、リボーンだからね。一撃できつちり気絶してひいたよ。

「おめーら、あいつを見たらぶつ飛ばせ。オレが許可する。ツナに近づくエロガキだぞ」「今すぐトドメを刺しましょう」

「ひい！」

リボーン何教えてんの!? 獄寺君、ダイナマイトしまつて！ 山本もクロームも警戒しないであげて。黒川も前は大人ランボに一目惚れしたじやん、そんな汚物を見るような目で見るのはやめてあげて。

みんなを抑えてる間にランボは元に戻つた。10年バズーカ使わないように教えて

ないと……。それがランボのためだから。

リボーンが企んでないのに疲れた……と思ひながら帰つていると、リボーンに何があつたか聞かれた。そういえば、アレなんだつたんだろう。

「誰かに見られてたとは思う。いやーな感じの視線だつたけど、嫌な予感はしなかつたんだ」

オレを見ていたんだろうなあ。だつてリボーンが気付かなかつたんだよ。狙いは才レなんだろうけど、超直感が反応しなかつたのが気になる。リボーンも同じところで引つかかつてゐるんだろうね。腕を組んで考えていた。

「今、殺し屋とか来てないの？」

「そういう情報は掴んでねえぞ」

骸にも確認するけど、多分一緒。ヤバイのが来ていれば教えてくれるはずだから。

「念のため、みんなの周りを強化しといてくれない？」

「ああ」

オレの超直感は身内にも反応するから、ないとと思うんだけどね。でも何かあれば怖いから、今日は獄寺君と山本にみんなを送つてつて頼んだけど。オレは振袖だつたのもあつて断られたから。ちび達も居るしね。

「出来れば、お前は家綱についてほしい。家綱が狙われる可能性も高いから」

少し悩んだ後、リボーンは頷いた。リボーンにハイパー死ぬ気モードになれるつて知つてもらつてよかつたよ。じやなきや、リボーンはオレから離れられなかつたと思う。ボンゴレボス候補筆頭はオレだからね。

「オレは着替えたらすぐに骸のとこ行つてくる。あいつと連携とつたほうがいいし」

本当はこのまま行きたかつたけど、あいつ今のオレの姿みたら絶対嫌な顔する。超直感が反応していれば、そんなこと言つてられないけどさ。

「……おめーは骸を信用すんだな」

「うん。大丈夫。後でお前にも報告するから安心しなよ」

なんであいつはそんなに信用されないんだろうね。でもそれが骸らしくてちよつとオレは笑つた。

骸とも話したけど、やつぱりあいつも何にも掴んでなくて。人が多いところじゃなかなかつたら、誰かわかつたのになあつてオレは思つてたけど、骸はそれが狙いと考へてみたいで、オレの顔を確認してきたのが一番可能性が高いって話になつた。リボーンもそう考へてたみたいだし、多分間違いない。

それでもオレはちよつとは効果があるかなあと一人でウロウロしたりしたんだけど、反応はなし。学校が始まつてからもしばらくは続ける予定だけど。ヒバリさんにも軽く話して協力者になつてもらつた。風紀委員としてじやないと、獄寺君と山本が怪しんで付いて来ちゃうんだよ。それじや凶の意味ないからね。いやまあオレを危険な目には合わせたくない気持ちもわかるけど。ちよつとでも情報が欲しい。

オレ達がボンゴレボス候補つてのは、ボンゴレ内部と同盟だと有名な話らしい。まあリボーンをつけちやつてるからね。そしてオレが筆頭候補つていうのも一部の人は知つてゐみたい。それでも敵対しているところには流れていない。誰かが話してしまつた可能性もあるけど、オレ達しか候補が居ないのであつてかなり情報制限されているらしい。それにどこかで漏らしちやつたら父さんのところが気付くと思う。そういう

う時のための組織だし。

……そうそう、そういう組織。

「ツナ、こいつはラル・ミルチつーんだ。オレ一人じや手がまわんねえから、助つ人を呼んだぞ」

「オレのことは気にするな。お前はいつも通りに過ごしてろ」

オレの護衛兼、視線を送った相手を探すために来たんだろうな。父さんの組織つて構成員は多いけど、精銳は少ないんだけどなあ。まさかラルを送つてくるとは思わなかつたよ。まあ今回は娘のオレが可愛いっていうだけじゃないだろうけど。

「うん。わかつた。ラル、よろしくね」

オレが手を出せば、フンつと言ひながらも握り返してくれた。相変わらずツンデレだよな。

「ラルはどうするの？リボーンみたいにするの？」

「オレはオレのやり方をする」

つてことは、隠れてオレを見る感じかな。

「ツナ、いけるか？」

「大丈夫だよ」

「なんだ？」

オレ達の確認にラルは怪訝な顔をしていた。

「おめーの視線にツナは神経を使うだろうからな」

ムツとしたような反応をしたけど、ラルは何も言わなかつた。ラルの腕はリボーンも知つてゐるからね。そういうウソをつくとは思えないだろうし。

「オレの場合、惡意があるかないかで判断するからさ。ラルはオレを守るために来てくれたんでしょ。リボーンが心配するようなことはないと思うよ」

「惡意か……。どれぐらい信用できるんだ? リボーン、お前は気付かなかつたんだろ?」「殺氣はなかつたからな。ツナも嫌な予感はしなかつたんだ。あの場でどうこうする気はなかつたんだろう」

2人が確認し合つてるのを見ながら、オレは別のことを考えていた。はやく呪いを解いてあげたいなあつて。オレが声をかけたら手伝つてくれそうな人は増えてる。それでもまだ足りない。川平さんの話だとまだ猶予はあるけど、苦しんでるのは知つてゐらさ。せめて呪いを解く方法があるつて教えたいんだけど、復讐者がない。アルコバルーノの行動を把握してると思うから、迂闊に伝えられないんだよ。川平さんの力で夢で伝えてもいいけど、誰も信用しないと思うし。まあオレも居ればリボーンとアリアさんは信用してくれそだけど。まだ条件が揃つてないから予知は見えないだろうし、みんながみんな信用してくれることはないよなあ。

そういう骸がヴエルデと接触する予定って言つてたけど、どうやるんだろ。予定つてことは見つけてはいるんだろうけど、ヴエルデも変わり者だもんな。ちよつと今回のせいで予定がズレちゃつたから、春休みにするみたいだけど。骸は冬休みに入つてすぐ動けばよかつたみたいなこと言つてたけど、クロームが寂しくならないように年末年始ぐらいいは……って考えてたことを知つてるオレからすれば、お前のせいじやないんだからつて言いたくなる。口にすれば、呆れた感じで何言つてるのでしかとか言うから言わないけど。

「ツナ、聞いてんのか」

「うえ!?あ、うん。死ぬ気になれるから、オレは後回しにしてくれていいよ。ラルの邪魔にはならないようにするから」

話半分に聞いていたから、ラルに本当に大丈夫かつていう目で見られちゃつたよ……。ごめんごめん、大丈夫だつて。怪しい奴がいればそつちを優先してね。

「あ、骸にはあんま刺激しないでね。まああいつのことだから、ラルが来ていることも知つてるだろうけど、あいつは根っからのマフィア嫌いだからさ」

あれ、オレなんか言い方悪かったのかな。ラルが骸を警戒しちゃつてるよね？

「骸がどこで情報を掴んだとか気にするだけ無駄だぞ。オレはもうあいつはそういう奴だと思つてる」

「ハハハ……」

オレも笑つて誤魔化すしかなかつた。非道なことはしてないだろうけど、ギリギリアウトなことはしてそうだからね。オレも助かつての手前、あんま強く言えないし……。いやでもあれでマシになつたんだよ。昔は……、うん。思い出すのはやめよう。ラルにやつぱり大丈夫かというような視線を向けらながら、新しい生活がスタートした。

オレの中で一番の家庭教師はリボーンだけど、ラルも家庭教師の一人で。見られてると思うと、自然と背筋が伸びる。かつこ悪いところを見せたくないなあつてね。そう思つてもやることは変わらないんだけど。日課のトレーニングをやつて、ちび達と遊んだり、同級生と遊びに行つたり、一人でフランフラン歩いて囮になつたり、ヒバリさんと毎週恒例のバトルをしたりつてね。

予想はちよつとしてたけど、ヒバリさんはやつぱり凄かつた。すぐにラルの視線に気付いたんだよ。まじあの人、どこ目指してんの？これ以上ハイスペックになつてどうするの？ヒバリさんの将来が怖い。

そしてもう一人ラルに気付いた人が居た。ヒバリさんほど気づくのは早くはなかつたけど、「ツナの知り合いいか？」ってふつーに聞かれたんだよ。生まれながらの殺し屋つ

て怖いね。去年の今頃は普通の野球少年だつたのに。

獄寺君、対抗意識持たなくていいんだよ。ゆつくりでいいから。そうはいかないつて？うん、知つてた。それでもそう思うんだよ。オレの周りがおかしくなつてきてるから。お兄さんも最近体の引き締まり具合が凄くなつてきてるんだよ。元守護者で変わらないのはランボぐらいだよ。……10年後はオレの知らない感じになつてたけど。

「オレの周り怖い」

「みんな、おめーに追いつこうとしてんだ。諦めろ」

家綱を護衛中のリボーンにちよつとグチつたらそんなことを言われた。

オレは2回目だからー！って声を大にして言いたくなつた。骸に言われたのもあるけど、オレがそう叫んでも意味ない気がしたから。

みんなが普通じやなくなつてきているとオレはガクリと肩を落とした。

せつかくラルに来てもらつたけど、あれから怪しい視線を感じることはなかつた。オレの超直感もまったく反応しないし。まあラルがいつまで居るのかの判断は父さんに任せるけどね。ちよつと申し訳ないかなーと思いながら毎日を過ごしている。

変わつたことと言えば、ディーノさんのシマで裏のマフィアが活動し始めようとしていたから教えたぐらいかな。情報源は骸だけど、オレの判断に任せることみたいだから被害が出る前にと思ってリボーン経由で伝えてもらつた。ディーノさんがお返ししようとしてくれたから、チヨコが欲しいって頼んだよ。あいつに渡せば、趣味は悪くないです。ねつて言つたから、わかりにくいけど喜んでいたと思う。クロームはほんのちよつとだけわけてもらつたんだつて。……オレにはなかつたけど。いやまあ元々はあいつのおかげだから、あいつの好きにすればいいんだけど。

「どうしようかなー」

オレ、なんでディーノさんにチヨコ頼んじやつたんだろう。ハードルあげちやつたよ。

「どうかしましたか？10代目」

「んつと、今年のバレンタイン何しよつかなつて
タイミングがあつて思う。あんな良いチョコの後だと、下手なもの渡せないつて
の。

うーんとオレは考えながら歩いていたんだけど、獄寺君の足が止まつていた。

「獄寺君？」

「だ、誰に渡すんスか……？」

「骸だよ。あいつ普段オレを女扱いしないくせに、チョコをもらえる機会は逃さないん
だ」

毎年用意するの大変なんだよつてオレがグチつたら、獄寺君がダイナマイトを両手に
持つっていた。なんで!?

「ど、獄寺君。落ち着いて、ね?」

「ここの学校だからね? 頼むからやめてよ、オレが怒られる。懇願するように下から覗いて
いると、獄寺君が「うつ」つて呟いて、懐にしまつてくれた。よかつたー。なんでか
知らないけど、獄寺君つてこうすると止まつてくれるんだよ。すっげー助かる。

「小悪魔度あがつてない?」

黒川の呟きにオレは首をかしげる。黒川と一緒にいた京子ちゃんとクロームも不思
議がつてるし、わからなくともおかしくはなさそう。

「……まあいいわ。あんた、バレンタインとかやつてたんだ。山本にも渡さないから興味ないと思っていたわ」

「父さんと骸には渡してるよ。骸は大のチヨコ好きでさ。ね、クローム」

オレが話を振ると、クロームはコクコクと頷いていた。オレが知らないところで、いっぱい食べてるんだろうなあ。

「ツーチayan、手作りするの？」

「まさか。うるさいから、ホテルとかで買って用意してる。クロームは手作りだよね？」

「うん。骸様、喜んでくれるよ？」

それはクロームだからだよ。オレが手作りなんて渡したら絶対文句言う。またオレの顔に出てたのか、黒川には相変わらず変な関係ねと言われるし、獄寺君にはなぜか喜ばれた。

そうやつて骸のはどうしようかなーと難しい顔をしていたオレだけど、よくよく考えれば今年はちび達が居るわけで。ちび達に渡すならリボーンも居るよなど考えたら、ラルやビアンキも必要かなって思う。だつてイーピンにも渡すんだもん。そうなつてくると、線引きが難しくなつてきて、友チヨコも用意した方がいいかなあなんて。

しばらく考えた結果、オレは貯金箱の一つを割つた。眞面目に貯めてて良かつたよ。女の子つて大変。

父さんと骸には高級チョコ。他のみんなには悪いけど、まとめて買ったクッキーを3枚ずつラッピングして渡すことにして。あの2人と同じのを用意しようと思つたら、何個貯金箱割ればいいかわからんないし。同じホテルで買ったのだから許して。義理チョコだしね。ちび達には質より量を選んだけど。

バレンタイン当日。朝からみんなに配る。ちび達は喜んでくれたし、母さんには驚かれて頭を撫でてくれた。まだ数年猶予があるけど、囁みしめるように喜んでしまった。あれ?これオレが得してない?

ビアンキとリボーンは一緒に渡した。恨まれたら嫌だしね。そんなオレの心がまた顔に出ていたのか、ビアンキに言われた。「あなたならいいのよ?でもそうなると隼人が悲しむかしら」って。なんで獄寺君が出てきたんだろうね。前半は勘違いしないから大丈夫よっていう意味だと思うんだけど……。オレが首をひねつていれば、リボーンに「女には優しくするが、オレはガキに興味ねえぞ」って言われた。

え?オレ……リボーンにもフられたの?なんも言つてないのに!?義理チョコなのに!?

どうせオレはモテないってわかつてゐるけど、改めて言わなくともいいじゃないかと思う。

「リボーン、あなたが拍車をかけてどうするの？」

「……わりい、ビアンキ」

オレが不貞腐れていると、ビアンキがリボーンを説教するという光景が目に入つてきた。驚きのあまり、オレはリボーンとビアンキの熱を測つちゃつたよ。やつてしまつた後に怒られるかなつて思つたけど、可愛い子つてビアンキに抱きしめられちやつた。慰めてくれるなんてビアンキつてほんといい女。

日課のランニングに入る前に、ラルにも手渡す。このタイミングぐらいしかラルは顔を出さないからね。いつもリボーンとオレに夜中に何もなかつたか確認するからさ。チヨコを渡せばそっぽを向きながらも受け取つてくれた。ラルらしいなあつて笑つたら銃を向けられた。……うん、ラルだつた。怒鳴りながらも去るのもラルだつたよ。

ラルが落ち着いたと思つたぐらいにオレは外へ出る。今日も朝から獄寺君お疲れさま。毎日付き合わなくていいんだよ? と思いながらも、獄寺君が来なかつたらどうしたんだろうつてオレは思うよね、絶対。

いつも通りに走つてるとお兄さんとも会えた。ポケットから取り出してクッキーを渡せば、お礼を言いつつその場で食べててくれた。うーん、お兄さんは相変わらず豪快だね。極限に喉が渴いたぞ! つて叫んでるけど、そうだと思う。ランニング中に食べるものじやないからね。オレが苦笑いしていると、隣から不穏な空気が流れてきてビビつ

た。

「獄寺君どうしたの!?」

オレが声をかけると、獄寺君から出でる不穏なオーラがなくなつた。そのかわり、ブワッと泣きながらどこかへ行つてしまつた。ええつ!?

「お、お兄さん、すみません! 獄寺君、待つてーー!」

オレ達がドタバタ去つても、お兄さんは寛大で「おう!」と見送つてくれた。

昔のオレなら、絶対見失つてただろうなあと思ひながら獄寺君を追いかける。なかなか追いつけないのは獄寺君も鍛えてる証拠。それでも日々の努力が実つたのか、獄寺君の服をつかむことができた。けど、やつぱりそこはオレで……安心して気が抜けたところで足がもつれてしまつた。

「うわっ!」

「10代目!?!」

獄寺君の心臓がめっちゃドキドキしてる……なんて場違いなことをオレは考へていた。いやだつて、思いつきり抱きついちやつたんだもん。オレの焦る声に振り向いた獄寺君の胸にダイブしたつて感じ。体育祭でもやつたけど、あれはやるつてわかつてたのもあつたから今回とは別な気がする。

「ゞ、ゞめん」

「い、いえ……」

すぐに離れたけど、なんか顔を合わせづらい。多分獄寺君も同じ。事故だつたのはお互いにわかつてゐるんだけど、恥ずかしくなつたというかなんというか……。

「お前ら、こんなところで何してんだ？」

「山本ー！」

良いタイミングー！とオレは感動する。

「ちょっとドジちやつて、獄寺君に助けてもらつたんだ」

「いえ、元はと言えばオレが……」

2人で違う違うと言い合つていれば、山本がオレの頭と獄寺君の肩に手を置いた。

「おめーら、今日も仲良いいのな」

ハハッ、つて笑つてる山本を見て、オレはつられて笑つてしまふ。獄寺君が当たり前だろうが！と山本に絡みに言つたけど、さつきみたいに気まずい空気は完全になくなつたんだ。うーん、さすが山本つて感じ。

いつものコースから完全に離れてしまつたのもあつて、今日は山本についていくことにした。オレも結構走つてる方だと思つたけど、山本も凄かつた。この後に素振りとかもするんだつて。オレの場合は崖登りかな。今日はしないけど。ちなみにオレが崖登りしている間、獄寺君はダイナマイトを使つた修行をしている。最初はオレについて行

こうとしたけど、命綱もなしにいきなりすることじゃないし、獄寺君の戦闘スタイルにも合わないと言つたら渋々だけど納得してくれた。

時間がきて山本と別れた後は獄寺君と一緒にオレン家に向かう。オレが準備している間は獄寺君はソファーに座つて待つてくれる。たまに朝食も一緒に食べるんだ。母さんは気にしないタイプだし、毎日でもいいって言つたんだけどね。ビアンキがいるとつい警戒しちゃうんだつてさ。……だからこれはオレが折れた。

いつもお茶を出すからついでにオレはクッキーも渡す。

「……オレにですか？」

「うん。たいしたものじやないんだけどね。今日はバレンタインだから」「家宝にします」

食べて!?とオレは思わずツッコミしたよ。いやだつてさ獄寺君のことだから本気でやりそくなんだもん。結局、獄寺君は大事に懐にしまつたよ。腐る前に食べてね?お願いだから。

不安になりつつオレは学校へ準備を始めた。

いつも家綱が食事をする席にもこつそりと置いていたら、オレがシャワー浴びてる間になくなつていた。食べたかポケットにしまつたんだと思う。良かつた良かつた。

準備を終えたオレは、獄寺君と一緒にクロームを迎えていく。いつもはクロームが出

るのに、今日は骸だつた。……その手はなんだよと心の中で思いながらオレはチョコを置く。

「……まあいいでしよう」

ほんと、なにこいつ。オレがちよつとイラつとしながらも、今度は母さんの弁当を渡せばきつちりお礼を言つた。もう一度思うよ、ほんと、なにこいつ。

炎真には直接渡せなさそうだから、骸に預ける。対価としてクツキーもくれつて言われたよ。言われる気がしたから用意していたオレつて偉くない？

「クローム、行こう」

「うんっ！」

ああ、こつちは癒しだよ。オレはついクロームの頭を撫でた。

オレ達は雑談しながら学校へ向かう。クロームも朝から骸に渡してきたんだつて。昨日から作つてたのを知つてたのもあるんだろうけど。体育祭のあの様子だとチョコいっぱい持つて帰つてきそう。いやでも、あいつは口にしないかも。そういう意味ではディーノさんからのチョコを食べたのはすごいことだよな。

オレ達が学校につくと、さつく獄寺君は女子に捕まつた。助けを求められたけど、オレは頑張つてと手を振つたよ。いやだつて女子に恨まれるのは怖いし。

その間に女子達と挨拶を交わす。みんな盛り上がつてゐるねーつて感じで。ハルはい

ないけど、みんなが揃つてゐのもあつて友チョコを配る。用意してゐるならいいなさいよつて黒川に怒られた。みんなの反応を見て、交換したかつたことにオレは気付いた。そういうえば毎年オレが興味なさそうだったから、他の女子みたいに交換しようつて話にならなかつたもんな。ほんと、気付かなくてごめんつて。気まずくならないように怒つてくれる黒川つていい奴だなーなんて思つてたのがまた顔に出てたのか、京子ちゃんクロームにそうだねつて同意してくれた。黒川は顔が真つ赤になつちゃつたけど。

女子同士でわいわい過ごしてると山本が登校してきた。獄寺君みたいに女子に囲まれてるね。どうしよつかなーとオレは思つたけど、山本と目があつたから、フラツとオレは渡しに行つた。

「お?・サンキユ、ツナ」

「うん」

いつもより強めに頭を撫でられたけど、山本とはそこで話は終わり。オレ達はそういう関係じやないつてみんなわかつてゐるけど、今日はね、ちょっと怖い。山本もなんとかくわかつてゐるのか、引き止めることはしなかつたよ。

後はヒバリさんぐらいかなあと思つていたら、放課後に応接室へ來るようにと電話があつた。今日のヒバリさんは応接室に引きこもつてゐるからね。バレンタインだからどこも群れが多くて鬱陶しいんだつて。風紀の乱れだし咬み殺してもいいけど、治安が悪

化するだけだから見ないことにしているらしい。ヒバリさんにそう判断させた女子つてある意味すごい。

でも呼び出した理由はなんだろうね?とオレは首をかしげる。用意はしているけど、ヒバリさんは骸みたいに催促するとは思えないんだけどなあ。ハルにも渡しに行きたいからすぐに終わるといいけど。

休憩時間のたびにモテる人って大変だなあって京子ちゃん達と話す。特に獄寺君はごめんって思う。毎回、「10代目ー!」っていう叫び声が聞こえるんだ。今日は女の子たちに付き合つてあげてねつてオレは聞こえなかつたフリをするけど。

そんな風に過ごしているとあつという間に放課後になつた。オレはちゃんと忘れずに応接室に向かつた。

「うわー、すげー」

ヒバリさんに挨拶するのも忘れて、目に入つたダンボールにオレは反応した。ヒバリさんモテモテじやん。ダンボール2箱あるよ。もしかして山本と獄寺君より多くない?

「え?これヒバリさんが受け取つたんですか?」

「要望があつて職員室に置いてる」

淡々と答えたから、これは今年が初つてわけじやなさそ。まあ直接ヒバリさんに渡

せる人って少ないだろうし、そういう形にしたんだろうね。

「オレのも入れときますね」

「こんなにあるから困るかもしれないけど、気持ちだしね。
「その箱は君。僕のはその隣」

「あ、はい」

間違つちゃつたよと思ひながらオレは隣に入れ直す。つて、おかしくない!?

「これ、オレの!?」

「みたいだよ。持つて帰つて、邪魔だから」

うそー!?と思ひながら覗き込む。よく見ると、オレがみんなに渡したようなクツキー
みたいなものが多い。隣を見れば本命つて感じのものが多い。

「義理チヨコですね」

「……交換する?」

「頑張つてください」

絶対めんどくさいつて思つてるよ、この人。いやまあ無視するんだろうけど。受け取
るだけ、ヒバリさんの優しさだよね。

ヒバリさんのため息を聞き流しつつ、オレは一緒に添えてある手紙に目を通す。助け
てくれてありがとうみたいな内容が多い。オレのトラブル体质のせいか、絡まれたりす

る人とよく見つけるからなあ。そういうお礼が多いんだと思う。

「オレ、人生で一番モテたかも……！」

もちろん前世を合わせてだよ。ボンゴレを継いだらそりや貰えたけど、オレへつていうのは少數で……。義理だけどこれ全部オレへのチョコなんだよ！ ちょっと感動。ジーンっとオレが喜びを噛み締めてると、ヒバリさんは呆れたようにオレを見ていた。モテる人にはオレの気持ちなんてわからないよ！ 心の中でヒバリさんに八つ当たりしていると、睨まれた。また顔に出ていたんだろうね。怖い怖い。

これ以上ヒバリさんの機嫌を悪くする前にオレはダンボールを持つて退散する。クロームを送った後にハルのところへ行こうと。いやその前にこのダンボールを家に一度持つて帰るけど。

予定通りハルん家に向かつてると、その途中にハルとばったり会つた。

「ツナさん！ お会いできて良かつたです！」

「ね。オレもハルに会いたかつたから本当に良かつた」

「はひ！ ツナさんはハルの心をわしづかみにする天才です！」

思わずオレは笑つた。似たようなことを前世でも言われたよ。

「はっ、そうでした！ ハルはツナさんに友チョコをお届けしようと思つていたのです！」

「そうなの？ オレもなんだ」

一緒にです！ というハルが嬉しそうに笑つてゐるのを見て、黒川が怒るわけだなーつて思つた。ホワイトデーにくれるつて話になつたけど、女子同士なら交換の方が楽しいんだね。

またひとつ勉強になつたなあと思いながらハルと別れて、いつものように見回りをしてから家に帰ろうとすればオレの超直感が反応した。すっげー嫌な予感がする。なんだろう……。

ラルに視線を送つた後、オレは家へとダッシュした。

「おかえりなさい。ちょうど焼きあがつたところよ」

「……ハハ、そうなんだ。ビアンキ」

死んだ目をしたのはオレだけじゃなかつた。ちび達と家綱に心の中で謝る。ごめん、すっかり忘れていた。

「私はリボーンを探してくるから、先に召し上がつてくれていいわよ」

「う、うん。ありがとうね、ビアンキ」

あいつ逃げやがつたなと思いながら、オレはビアンキを見送る。いやだつてさ、ビアンキには悪いけど食べれないし。残られる方がまずいから、探しに行つて欲しいんだもん。

「おい
「うん」

ビアンキが去つた後、珍しく気が合つたオレと家綱は必死に証拠隠滅した。ビアンキが戻つてくるまでの時間との勝負だつたからね。

ふうとオレ達が息を吐いていると、ビアンキがリボーンを連れて帰つてきた。……あいつオレ達が処理したから顔を出したな。いやまあオレ達がそれをできる時間を稼いでくれたんだろうけどね。

「あら？ 全部食べてしまつたの？」

「えっ！ もしかしてリボーンの分もあつた？」

「ごめんつてオレが謝ると、ビアンキは大丈夫よつて微笑んだ。……リボーン、ごめん。本命は別にあつたみたい。

チラツとどうするんだろうと思つたら、リボーンはびっくりするぐらい寝ていた。
……まあ寝たフリだろうけど。

悪い顔をした家綱が鼻ちようちんを壊そうとしたけど、寝たフリをしながらリボーンは家綱を殴つた。……家綱がぶつ飛ばされたのを見て、オレの超直感はこれに反応したんだろうなつて思つたよ。それぐらいリボーンは本気の一撃だつた。オレに来るなら反応できたと思うけど、守れなかつたぐらいだからね。

「シャマルー！ つて男は診ないんだつたー！」

どうしよーとオレは頭を抱えているだけだつたけど、ラルが医者を手配してくれたみたいで家綱は大事には至らなかつた。リボーンが寝たフリを終えたら、護衛対象を殺しかけてどうする！ とラルが説教してくれたけどあいつは可愛い子ぶつて流したんだ。それだけならまだラルは我慢できただろうけど、コロネ口にあげてねえのか？ とかいろいろ煽つた。

その結果、……ラルが銃をぶつ放した。

今まで風呂ぐらいしか壊れなかつたのが奇跡だつたよなつてオレは遠い目になつた。

バレンタインが終わつてすぐ、オレは朝からちび達がテレビを見て騒いでいたから声をかけた。

「ガハハハ、雪だもんね！」

「え？ 今度の日曜日積もりそうなの？」

ちび達と一緒にオレはやつたーと喜んでいれば、リボーンと家綱にガキだなという視線を向けられた。この2人つて案外相性いいのかもつて思ったよ。

オレは獄寺君に会つてすぐに声をかけた。

「獄寺君つ、獄寺君つ」

「か、かわ……んんつ。どうしたんスか？」

「今度の日曜日はみんなと雪合戦だよ！」

「雪合戦？」

うん！ とオレは頷く。すつげー荒れだけど、雪合戦はオレの中でかなり良い思い出の一つだし。オレ達があの時遊んだような平和な未来を作りたいって思えたからさ。絶対やりたいことだつたんだ。

「楽しみだねつ、獄寺君！」

獄寺君もオレと一緒で楽しみなのか、何度も頷いてくれたよ。この調子でどんどんみんなを誘おうつと。

「……雪合戦？ どうして僕がそんな低俗な遊びをしなければならないのです？」

日課のトレーニング中に会えたお兄さんと山本を誘えたのもあって、オレは上機嫌だつたけど、骸の一言でテンションが下がった。いやオレも簡単に誘えるとは思ってなかつたよ。でも低俗つて酷くない？ 獄寺君に下で待つててつて頼んで本当に良かつたよ。

「ツナ、私は参加する」

「クローム！」

ありがとうとオレは抱きつく。骸と暮らしてゐるのに、ほんと良い子に育つたよ。

「……君、今失礼なこと考えました？」

「気のせいだつて」

やれやれというように骸は息を吐いた後、またまにはいいでしようつて言つてくれた。絶対クローム効果だよ。オレが誘うメンバ一つて、いろいろヤバイからね。

「しかし日曜日ですか。君、雲雀恭弥と会つてるのでしよう？」

そうだつた！とオレは骸にお礼を慌てて言つて、クロームに学校へ行こうつて誘つたよ。また骸にため息を吐かれたけど、これはしようがないよね。オレまたうつかりして忘れてたし。

まあでも今のはヒバリさんなら許してくれると思う。土曜日にズラしてもいいしね。誘えれば一番いいんだけどね。群れるの嫌いだからこればっかりは期待していない。つて思つてたんだけど……。

「いいよ」

「えええ!?」

「なに」

いやだつて群れるんですよ？いいんです？つてオレは思わず確認してしまつた。せつかくヒバリさんがいいつて言つてくれたのにね。気分がかわつたらどうしよう……。

「六道骸を咬み殺せるチャンスだからね。後、君とのバトルは前日にズラすよ」

……今回もオレが想像してるような雪合戦にならなさそう。京子ちゃん達を誘わなくて正解だつたよ。でもヒバリさんも参加してくれるんだから、土曜日にバトルをズラすぐらい問題ない。オレは笑顔で頷いたんだ。

あ、イーピンにヒバリさんが来ること先に教えない。わかつてたら多分大丈夫だろ

うし。

雪合戦当日。オレは命の危機はあるけど来る？って家綱に声をかけ、何言つてんだみたいな視線を浴びてからやつてきた。嘘じやないのに……と思ひながらも、変なことを言つた自覚もあつた。オレの誘い方が悪かつたのもあつて、家綱は留守番。だけどリボーンはやつてきた。ラルに護衛を交代してもらつたみたい。このメンバーが集まることはそうないし、いい機会だからだつてさ。

ちび達とビアンキと一緒に学校へ向かつてると、門のところで山本とお兄さんの姿が見えた。挨拶しつつ、他のみんなはまだかなつて話す。どうせ待つなら雪合戦の準備でもしようつてことになつてグランドに向かつた。獄寺君やクロームは違うだろうけど、骸やヒバリさんは好き勝手なタイミングで来そうだしね。

「えー！」

オレはグランドについて思わず叫んだ。だつて、なんか凄いんだもん。オレの中では何個か塹壕を作ればいいかなつて思つてたのに、迷路みたいに入り組んでる。

「10代目ーー！」

「ふ、獄寺君！これ、どうなつてるの？！」

「へへっ。実は跳ね馬のところをこき使いまして」

何してんの!? デイーノさん達人良すぎ!!

「結構、面白そ�だぜ。しつかり考えてるみてーだしな」

「デイーノさん!? と、ロマーリオさん」

すみませんとオレは頭を下げる。デイーノさんも楽しみにしてるからいいって言つてくれたけど……。オレがやりたいって言つて来てくれたのに、手伝いもしなくて申し訳ないなあつてなる。

「ツナ、デイーノさんもそう言つてくれてるんだ。楽しもうぜ。笹川兄なんて、もう燃えちまつてゐるのな」

山本の指をおうと、うおおおー!とお兄さんは叫びながら塹壕へと向かつていた。それを見て獄寺君が一番最初にオレに入つてもらつつもりだつたのにつて追いかけちゃつて。なんかそれを見ると、山本の言う通り楽しまなきやつて思つた。デイーノさんも2人の姿みて笑つてるしね。

「ほう。あれがバトルファイールドですか」

「つて、骸!?」

普通に歩いてきたんだろうけど、気配消すなつてビビるから。遅れてやつてきたクロームの気配で氣付いたよ。クロームに手を振りながらも、オレは心の中でつつこむ。

バトルフィールドってなに!? ただの雪合戦だよ!?

「あそこで咬み殺せばいいんだね」

「あ、ヒバリさん」

ちょっと離れた位置に現れたヒバリさんだつたけど、咬み殺す場所としてしか見てなかつたよ。トンファー出してるし……。

2人の間で視線がバチつとなつた気がした。そのまま2人は無言で迷路のような塹壕に入つていつた。

「仲良いのな」

「……絶対違うだろ」

ディーノさんのツッコミにオレは何度も頷いた。

「えつと、クロームはオレと一緒に行く? 骸はあんな感じだし」

「うん」

山本とディーノさんはどうするのかなーつて思つたら、2人は竹刀とムチを出してやる気満々だつた。あの、雪合戦……。

オレはいつてらつしやいと2人を見送つたよ。ルールとかいろいろ考えてたけど、もういいやつて。オレ達はチーム組んで楽しもうつと。リボーンは高みの見物なのか、ちやつかりよく見える位置でビアンキに抱かれてるし、オレはちび達とクロームでみん

なが居るところへ向かつた。

わけわかんない感じになつてゐるけど、オレ達は雪合戦として楽しむ。迷つてゐるお兄さんには雪玉をぶつけたり、方向がバレたら全部拳で防がれたけど。どこからか降つてきた獄寺君のダイナマイトに悲鳴をあげたり、そん時は山本が助つ人登場つて斬つてくれて危機は免れた。ディーノさんにもぶつけようと探していたら、ロマーリオさんとはぐれたらしく埋まつて掘り起こすことになつたり。

最後にはみんな合流して、バトルしている骸とヒバリさんに雪玉を投げた。オレと部下がいる状態のディーノさんが示し合わせたタイミングだつたからか、全部は当たらなかつたけど2人に当たつた。

バトルに夢中になつてたのもあるだろうけど、当たると思わなかつたオレはポカンつてした後に爆笑。オレにつられたのか、みんなも笑い出す。

「……良い度胸だね。咬み殺す！」

「クフフフ。いいでしよう、まずは君達からです」

「みんな、逃げてーー!!」

オレ達は必死に2人から逃げたよ。最後にはあの2人以外みんな雪の上に転がつていた。なんとかオレは逃げ切つたけど体力切れ。ちび達とクロームも同じ。他のみんなはあの2人にやられた。普段仲悪いのに、息が合いすぎ。基本骸の幻術に対応出来る

人はいないのに、そこにヒバリさんもやつてくるんだよ。逃げ切れるわけがなかつた。

「ふつ」

「ツナ？」

「いやさ、またやりたいなつて」

オレの言葉にみんな寝つ転がりながらも、笑つて頷いてくれた。

中2

1

オレはひいひい言いながら過ごしたけど、今日始業式が終わつてやつとで落ち着いた。卒業式と終業式が終わつてちよつとすれば、入学式と始業式つて続いたからさ。風紀委員という名の雑用係のオレはみんなにいろいろ頼まれて走り回つてた。まあわかる気もするんだけどね。オレ、絶対風紀委員の中で一番人当たりいいもん。ヒバリさん以外はみんな大きくてリーゼントだからね。先生にも喜ばれるから、悪い気はしなかつたし。

相変わらず合間を縫つて、春休みの間はちび達と出かけたり、みんなと遊びに行つたりと忙しく過ごしてた。そのほとんどに炎真も付き合つてくれた。2年にあがると同時に炎真が至門中に戻るのもあつたからね。まあオレが雪合戦に誘つたけど行けなかつたのもあるかな。ちょうど家庭科の補習だつたらしい……。なんというか運が悪いのも炎真らしいからオレは気にしなかつたんだけどね。次はシモンのみんなも誘つてしまふつて約束した。もちろん真美ちゃんも良ければつてね。

春休みつてことで今度こそ骸はヴエルデと接触しに行つた。どうなつたかは知らな

いけど。その間クロームが1人になつちやうつてのもあつて、女の子達とパジャマパーティとかしたりした。意外にも部屋さえ入らなければいいって骸が言つたから、骸ん家でやつたよ。クロームのために何日でも泊まつてほしいんだろうなつて思つたオレは春休みのほとんどそつちに居た。だから夜にリボーンがそばに居ないのもあつて、ラルもパジャマパーティーに参加したよ。本人は嫌がつてたけど、オレの護衛も兼ねてるよねつて言えば渋々付き合つてくれたよ。めっちゃ京子ちゃんとハルに可愛がられて、ツンツンしてた。ラルは赤ん坊だけど、大人っぽいから黒川は近づかなければ大丈夫だつた。後オレと友達なのもあつて、ちょっと耐性が出来てきたんだつて。そこまでガキつぽくなければ、なんとかなつてきたらしい。

そんな中でも、毎週恒例のヒバリさんとのバトルは継続。あ、でも一回だけバトルじやなくて花見に付き合つたね。1人で花見したいから誰にも来ないようにしてつて頼まれて見張りしたんだよ。前のヒバリさんはサクラが嫌いになつたけど、今回はオレ達がケンカふつかけなかつたから楽しめたみたい。そして驚いたことにヒバリさんが帰る時、占領した後の場所は好きに使つていいつて言つたんだ。まじで!?つてオレは叫んだよ。いやだつてさ、オレにそんなこと言つたらみんなと花見するつてヒバリさんはわかつてると思うんだよ。まあすぐに睨まれたから口を閉ざして見送つたけどね。その後、みんなに連絡して急遽花見をしたよ。すつげー楽しかつたんだ。

始業式が終わってみんなが教室に移動して担任の話を聞いている時間だけど、オレはクラス表を見ながら少し考えていた。家綱も友達もみんな同じクラスだつたんだ。京子ちゃんと一緒なのは記憶通りだけど、クロームや家綱も居るんだよ。みんな一緒に理かなつてちょっとと思つてたんだ。特に双子の家綱とは。

「さつさと教室行きなよ」

「あ、ヒバリさん」

すみませんとオレは謝る。始業式も終わつて雑用がなくなつたオレはもう戻るべきなのに、まだこんなところに居たからね。

「自分のクラスがわからないの？」

「見つけましたよ」

2—Aのところにある自分の名前をオレは指をさした。普段のオレなら、すぐに教室に向かうんだけど……。

「あの、ヒバリさん」

「なに」

「ありがとうございます」

ヒバリさんは何も言わなかつた。オレのお礼の意味はわかつてゐるけど、肯定する気は

ないんだろうね。前は多分リボーンがみんな同じクラスになるように根回しした。でも今回は多分……ヒバリさんがした。オレが授業を抜ける可能性もあるから、クラスに馴染めやすいようについて動いてくれたんだと思うんだ。

何を言つてもヒバリさんは認めないだろうなと思つたけど、ヒバリさんにお礼したくてオレはまた口を開いた。でもこれはオレの本心でもある。

「オレ、並中に来てよかつた」

この学校に来たのは前と同じだつたからもあるし、家から近いのもあつた。けど、もしまだ通うならつて考えたらオレは並中つて即決する。まあもうないことを願うよ。というか、そうならないようにする。

独り言のようなオレの言葉にヒバリさんは反応しないだろうなつて思つたんだけど、ヒバリさんは校舎へ視線を向けて少し口角をあげた。獲物をみつけた時のようにじやなくて、小動物を愛でてる時のような笑みだ。

これにオレはちよつと驚いた。もちろんオレに向けた笑みじゃないのはわかってる。ヒバリさんは自分の今までの行動が誇らしかったから緩んだんだと思う。でもオレの目の前で緩むとは思わなかつたんだ。

「なに」

「あ、いえ……。オレ、教室戻りますね」

頭を下げてから歩き出したオレだつたけど、ふと足が止まつて空を見た。

「ヒバリさん……。もしヒバリさんのいる立ち位置を横から来た奴が急に奪つたら、許せませんよね」

「当たり前だよ」

「……ですよね。オレもそう思います」

それでもオレは奪うしかない。

「何考へてるか知らないけど、それは多分君らしくない」

「え？」

「奪うという言葉が君らしくない。そういうのは南国果実があつてる」

ぶつとオレは笑つてしまつた。骸はオレの体を奪おうとしてたもんな。いつのまにか眉間のシワが寄つてたことに気付き、オレはもみほぐす。

「そうですね。ちよつと考え方変えます。じやないとオレは戦えないから」

「そうしなよ」

最近よくヒバリさんに導いてもらつてるなあと思いながら、今度こそオレは教室へと向かう。

今日は骸のどこへ行つて相談しよう。さつきまでの考えだつたら、骸に怒られていただろうなあ。君はバカですか、奪うも何も向こうは初めから資格がないじやないです

かつてね。頭ではわかってるんだけど、感情はそうはいかないんだってと言つてもあいつはわかつてくれなさそうだし。

でもオレらしいってなんだろうね。

うーん、怒られはしなくなつただろうけど、骸にめんどくさい人ですねつてまた言われる気がするよ……。

新しいクラスに馴染んできて、ふとオレは気付いた。リボーンが来て、もう一年たつてるじやん。せつかくだしと思つたオレは、土曜日に出かけようつて誘つた。もちろんラルにもちゃんと声をかけたよ。オレとリボーンが出かけるなら家綱の護衛はラルに任せなきやいけないしね。

「久しぶりだね」

「まあな」

特に行きたいところはないからフラフラと歩きながらリボーンと話す。前はどこに居たの!? つていうぐらい一緒に居たけど、同性のラルの方がオレの護衛に向いてるものあって、リボーンと2人つきりつていうのは本当に久しぶりだ。

「そういや、お前の目から見てオレはどうなの？」

オレはリボーンとなら会話がなくとも気にはならないけど、ちょっと聞きたかつたんだよねと思つて言つてみた。

「……オレに相談したいことがあるんじゃなかつたのか?」

「あはは。やつぱ悩んでること気付くよね」

でも今日はその話をしたいから誘つたんじやないよって教える。リボーンはそれがオレの本心なのか確認するためにオレの目を見た。

「そうか」

「うん。あ、別にお前を信頼してないとかそういうのじゃないよ。骸にはまあ相談とうか愚痴みたいな感じで話してはいるけど……。それはあんまり意味がないっていうか……」

うーん、なんて言つたらいいかなと考えながらも口を開く。

「オレってさ、すっげー頑固なんだよ。骸と話してるけど、結局自分が考え抜いて出した答えじゃないと嫌なんだ。決めるのにすげー時間もかかるだろうし、情けないことも言うけど、ちゃんと答えを出すつもり。だからあまりにも遅いと思つたら、お前が声をかけて」

多分お前がみてられないって思つたら、オレはすぐ答えを出すよつて言葉を続けて、つい笑つてしまつた。尻を叩かれて一番効果があるのはやつぱりリボーンなんだなーつて。

「おめーが何に悩んでるかオレはしらねえぞ」

「あ、そつか。んーでもお前なら気付くよ、絶対」

今オレが悩んでることと結びつくかはわかんないけど、その時が迫つたらオレに何か

言うよ。だつてリボーンだよ。

「オレは一流だからな」

「そうそうとオレは何度も頷く。

「おめーが何か隠してることも。その秘密でオレを信頼しているのもオレはわかつてゐるぞ」

「ハハハ……」

さすがリボーンだよ。ほとんどバレてるじゃん。……どうしよーー！

「暴くつもりはねーけどな」

「え？ そうなの？」

「ああ」

なんでだろうつてまた顔に出てたみたいでリボーンは口を開いた。

「おめーの性格もわかつてゐる。自分一人の問題なら、オレに相談してんだろ」「…………うん。そうだね」

「ああ、やばいなあ。前より一緒にいる時間も少ないし、話してる量だつてびっくりするぐらい少ないのに、お前がちゃんとオレを見てくれるつてわかつてすっげー嬉しい。「ツナ、オレはそんな顔をさせるために言つたんじやねえぞ」

「うん。ごめん」

リボーンにハンカチを渡されたけど、大丈夫と言つて服の裾で勢いよく拭く。オレの男っぽい行動に呆れてリボーンはため息ついたやつたけど、オレが笑つて顔をあげるとあいつは満足そうな顔をしたんだ。

まだ家に帰るのも早いのもあつて、公園で何か飲もうつていう話になつた。どつかの店に入つてもいいけど、オレ達の話つて微妙な内容になることも多いからね。家が使えないとなると公園のベンチとかの方が無難なんだ。盗み聞きとかしにくいからね。ずっとオレ達の近くにいればすぐ気付くから。

オレはコーラで、リボーンはエスプレッソをお持ち帰りする。女に払わせるわけにはいかないつてリボーンが奢つてくれたことには驚いたけど。母さんには奢つてもらうのにね。いやまあ母さんがリボーンをただの赤ん坊だと思つてるのもあるんだけど。

リボーンとベンチに座つて、オレはゴクゴクとコーラを飲む。すっげー平和。まあ中學卒業すればそんなことも言つてられないぐらい忙しくなるんだろうなあ。オレこの体で何徹まで出来るんだろうね。ある一定まで行くとハイになつて元気になるんだけど、そこまでこの体もつかなあ。普段から死ぬ氣になるわけにはいかないし。今のうちに試しておこうかなあ。

「何考えてんだ」

「いやさ、今のうちに限界を知つとくべきかなって。リボーンは何徹までいけると思う？」

「……体にわりいからやめろ」

ええっ?!つてオレは驚いた。お前、三徹時にオレが寝そなつたら何度も蹴つて起こしたくせに?!

「おめーは女だからな。無理すると子どもが出来なくなるぞ」

「あ、それはダメだね」

そういうのも影響するのかーってオレはまた一つ勉強になつた。

「子どもで思い出した。お前に頼みたいことがあつたよ」

「なんだ?」

「まだまだ先のことだけど……オレに子どもが出来てさ、ある程度大きくなつたらお前に家庭教師してほしいんだ」

前の時もそのつもりだつたんだよ。……出来なかつたけど。

ハハハ……と心の中で苦笑いしながらも変だなつて思つた。リボーンから返事がな

いや。

「リボーン?」

「……ツナ、お前は骸からどこまでアルコバレーノのことを聞いてんだ?」

「どこまでつて……」

今ここで全部つて答えるもいいのかなって、オレが躊躇している間にリボーンは何でもねえと呟いた。あれ?これ言つた方が良かつたよな?オレが口を開こうとする前に、リボーンが先に開いた。

「いいぞ。おめーに子どもが出来たら、立派なマフィアのボスになるためにビシビシしごいてやる」

「え?ほんと?」

「ああ」

「絶対?約束できる?」

「……ああ。約束すつぞ」

ニツと笑つた姿が、嘘じやないと思つたオレはやつたと喜んだ。けど、男だつたら大変な目にあう気がすることに気付いた。だからオレはすぐ家綱みたいに理不尽なことはやめてよつて言つた。けどあいつはさあなつて言うんだよ。産まれる子が女の子でありますようにと心の中で呟いたよ。いやでも今の段階でもマフィアのボスなら男の方がいいよなつて思うことが多いから、男の子の方がいいよな?

うわつ、すつげー悩む……。どつちも経験してるからこそ悩む。いやまあ選べるわけじゃないんだけどさ。

「肝心なことを忘れてんぞ。1人で子どもは出来ねえぞ」
ああ……とオレは頭を抱える。結局そこに行き着くんだーって。
いやでも今日はリボーンと約束出来たし十分だよね。

「GWにマフィアランドへ行くのでしょう。クロームも連れて行つてあげてください」
へ？つてなつたけど、骸はオレの反応を無視して僕はヴエルデ博士のところへ行きま
すからつて続けた。……相変わらずどこでその情報を知つたんだろ。オレまだ聞いて
ないんだけど。

まあいつか。あそこはマフィアが経営しているけど、あんまりマフィアっぽくないと
ころだしね。クロームは行つてもいいと思つたのかも。いやでもこいつのことだから
これも社会勉強とか言つてそう。

「あ、でもオレの記憶じやスカルが攻めてきたような」

「その件はもう問題ありません」

うわつ……。オレも過保護かもつて思う時あるけど、こいつも酷いよな。とにかくク
ロームを連れて行くことにオレも反対じやないから、了解つて返事をしたんだ。

家に帰つたオレはさつそくりボーンを探せば、家綱の部屋にいることがわかつた。
ちよつと悩んだけどノックする。

「家綱、ちよつといい？リボーンに用があるんだ。お前も聞いた方がいいかも？」

「……入れ」

渡々だつたけど、許可をもらえたよ。仲良くはなつてないけど、態度が軟化した気がするんだ。なんでかはしらないけど。

「ごめん、ありがとう。あのさ、今度のＧＷのことなんだけどクロームも連れて行つていい？」

ピクリと家綱が反応した。そういうやフられたけど、まだ好きなのかな。あれ？ 家綱も居るのになんであいつはクロームのこと頼んだんだろ。……やっぱあいつの考え方わからんねえ。

「いいぞ」

「サンキュー。つて、やっぱマフィアランドに行くんだ」

「マフィアランド!?」

なんだそれというような家綱の反応が新鮮に感じる。オレも最初は意味わかんなかつたし。リボーンが家綱にどうやつてマフィアランドが出来たか説明してくれた。家綱は微妙な顔をしていたよ。それでもあそこは白のマフィアがお金を出しあって出来たところだからね。悪いマフィアはないよ。

「ただの遊園地と思つたらいいよ。受付とかはオレがするから」

「……いや、やっぱなんでもねえ」

家綱つて割と危機回避能力が高いよな。絶対オレなら受付つてなに?とか聞くよ。

「まあそつちは問題ないと思うんだけど……、ラルも連れて行くんだよね?」

「そうだぞ」

「うわあ……リボーンが悪い顔してる。今回騙されるの絶対ラルだ。

「ほどほどにしとけよ。オレやだよ、銃撃戦の中での2人を止めるの」

「なんだそこまで知つてんのか」

「あーうん、まあね。確かラルの教え子だつたつけ?」

「ああ」

オレの中では傍迷惑な夫婦の印象が強い。結婚するまですっげー時間はかかつたし、夫婦喧嘩もすぐくて。まあほんどうどラルがテレで一方的に怒つてるだけだつた。リボーンに言われてオレが何度か止めに行つたよ。毎回なんでオレが!?!ってなつたけど、建物とかの被害がすごいから行かなくちやいけなくて……。そういう点を考えると、前のヒバリさんはちゃんとしてた。基本、アジトの中でだつたから。いやまあ骸が絡むと違つたけど。

「……マフィアランド行きたくねえ」

オレ達の会話を聞いて呴いた家綱だつたけど、リボーンとラルが行くつて時点で強制参加は決定していた。まあそつちに被害が行かないように頑張るから、普通に楽しん

で。

「行き先はマフィアランドだと!?」

ラルの大声にオレは思わず耳を塞いだ。つてか、この反応からするとコロネロが今どこにいるかは知つてたんだね。

残念ながらもう船は出ているし、オレの護衛だろつてリボーンに煽られたラルは真つ赤な顔をして怒鳴りながらも逃げようとはしなかつた。リボーンにラルがイジられる未来しか見えない。それでいい雰囲気になつたらうぜーとか言うんだろう。ラルが怒りたくなるのもわかるよ……。

船の中ではクロームと一緒にちび達と遊んで時間を過ごした。ちなみに今回獄寺君は居ない。バイトを入れてたみたいで泣く泣く諦めたみたい。そんなにお金厳しいのかなつて思つてビアンキに相談したら、デート代を貯めてるんでしょうね、だつて。ついに獄寺君に彼女が出来たんだ!? つてオレは喜んだんだけど、ビアンキに隼人には絶対言つちゃダメよって迫られた。だからまだ片思いなのかなつて思つてオレは頷いた。オレがいうと変に遠慮とかしそうだしね。

マフィアランドにつくと、オレはみんなと別れて受付へと向かう。

「つて、クロームも遊んで来たらいいよ」

「ダメ。骸様がツナと一緒にいるようについて」

骸のことだからオレはコロネロと顔を合わせておきたいってわかつてはばだよな。少し考えて、一緒に行くことにした。何かあつてもオレがクロームを守ればいいし。ラルもオレの護衛だからついてくるみたい。めっちゃそわそわしてるけど。いやまあそれでも気付ける人は少数だよね。

受付で推薦状や紹介状を聞かれたけど、オレは持つてない。リボーンにも渡されなかつたし。でもオレはこここの裏コードを知つてるからそれを口にする。オレが言つたのはコロネロの面会コード。だから今回は普通に電車に乗れた。

「沢田ツナ、どこへ向かってる」

オレが変なところへ行こうとしてるからラルが出て來たよ。電車はオレ達しか乗つてないしね。それにしてもラルはここのことあんまり知らないんだなあ。でもそうだよなあ、遊園地とかラルは仕事でしか行かなさそう。父さんのどこにいるなら、なかなかそういう仕事はないだろうし。

いろいろオレが考へてる間に、電車はついて扉が開いてしまつた。咄嗟にラルは武器をかまえたけど、目の前にいた人物を見て頬を染めた。

「オレに会いたい奴は誰……ラル?」

「コロネロ……」

えっと、オレ達は邪魔だよね？クロームはどうしようかって目で会話する。どうする？つてコテンと首をかしげるクロームは今日もオレの癪しだよ。

「ちやおっス」

「リボーン！コラ！」

……一瞬で空気が変わっちゃった。挨拶がてら2人で銃をぶつ放してるけど、ラルがプルプル震ってるよ。そろそろキレる気がする。

「やめんか！リボーン、沢田家綱の護衛はどうした！」

「その辺は抜かりねえぞ。他の奴に頼んで来た。オレも久々に顔を合わせようと思つてな」

「本音は？」

「面白そうなんだもん」

オレが聞いたら、リボーンはぶりつ子しやがつた。この後の展開を読めたオレはクロームと一緒に端へ移動し隠れる。……懐かしいなあ、この発砲音の嵐。はあ。「キリがないから止めてくるよ。クロームはここで待つてて」

「ツナ、私がやる」

「え？」

クロームの方に視線を向けると、もう三叉槍をかまえていた。ハツと3人の方へ視線を移すと、地面に大量の花が咲いた。突然のことにつき3人の動きが止まる。

「やるな。一瞬だが錯覚しちまつたぞ」

「ああ。なかなかの腕だぜ、コラ」

「悪くはない」

この3人から評価もらえるつて凄いことだよ！オレはクロームを褒めようとしたんだけど、肝心のクロームが首を振った。

「骸様が言つた通りだつた……」

骸のやつ、何言つたんだよ……：と思いながら、クロームになんて声をかけようかとオレは悩む。そういうえば、前にも似たようなことがあつた気がする……。

「クロームは……戦いたいの？」

「……一緒にいたい」

「そつか」

クロームは中学卒業すれば、オレ達はどうか行っちゃうつてわかっちゃつたんだ。小さい頃からオレ達の会話を聞いてたもんな。でも戦いたいとは言わなかつた。さつきの幻術も人を傷つけるようなものじやなかつたしね。2度目でいろいろ変わつたと散々思つて來たけど、一番変わつたのはクロームだつたかもしれない。悪いことじやないけ

どね。それにオレ達もそういう風に見ていたから。

うーん……。オレ達と一緒にいて、危ない目にあう可能性はクロームもわかってるよね。クロームは覚悟の上で言つた。けど、オレは危ない目に合わせたくないし……。いやでも元はと言えば、オレが何も考えずクロームの前で話してたからだし……。

「ツナ」

「リボーン……」

うー、わかってる。今決めなきやいかないことだつて。そしてオレ次第なことも。クロームはもうどうしたいか伝えだし、骸もオレの判断に任せることだろ。

「……なら、一緒に行つてアジトでご飯作つて待つててよ。クロームがいるなら骸は帰つてくるからさ。もちろんオレも」

いいのかなーと思ひながらも口にした。でもクロームの顔を見て、オレは間違つてなかつたと思つた。

「うんっ！」

「わわっ！」

クロームを抱きとめて、ぽんぽんと背中を叩く。クロームはずつと悩んでたんだろうなあ。気付かなくてごめんね。リボーンには発破をかけてくれてありがとうと口パクし、成り行きを見守つてくれた2人にもごめんつてオレは視線を送つた。

今度こそコロネロに自己紹介する。クロームが落ち着いたのはいいけど、恥ずかしくなったのか向こうへ行つちやつたけど。まあオレの目の届く位置にはいるから、止めはしなかつた。

「えっと、オレは沢田ツナ。一応次期ボンゴレボス筆頭」

「オレはコロネロだぜ、コラ！」

ジツとコロネロに見つめられ、居心地が悪いなあなんて思う。いやだつてさ、コロネロもリボーンと同じですぐに手や足が出るイメージが強くて……。ジツと我慢していたら、笑われた。

「典型的な見た目に騙されると痛い目にあうタイプだぜ」

これつて褒められたんだよな？やつぱ顔のせいなのかな。オレが顔をペタペタ触つていると、リボーンとラルもコロネロの意見に賛同したのか深く頷かれた。

「それでオレに何の用だ、コラ！」

「なんだ？ コロネロに会いたかったのか？」

「まあね」

ラルから視線を感じたから、そういう気持ちはないよつて慌てて弁解する。真つ赤な顔して銃を乱射されたから、ひいと言いながらも避ける。コロネロが居るからすっげー

ラルが怒りっぽいよ。オレは何も言つてないつていうなら、撃つのをやめてつてば。
「ちょ、ちよつとアルコバレー／＼に会つてみたかっただけなんだつて！」

オレがそう叫ぶとラルがピタリと手を止めた。はあと安心したように息を吐く。いやでも言つちゃダメだつたかな。でもこれぐらい言わないと止まる気がしなかつたんだよ。

「ツナ、お前は深入りするな。これはオレ達の問題だ」

「やだよ。この前言つただろ。オレは頑固つて。これは絶対譲れない」

ジツとオレがリボーンを見つめると、はあとため息を吐かれちゃつた。

「相変わらず女に甘いな、コラ」

「うるせーぞ。お前も人のこと言えねえだろ」

そう言つてリボーンはラルを見た。うわー2人とも顔真つ赤だ。そういうや、ラルを庇つたからクロネコがアルコバレー／＼になつちゃつたんだつけ。

「ツナ、行くぞ。もう目的は果たしたんだろ」

「え、あ、うん」

すつげー珍しい。うぜーとか言わなかつたし、この空氣を壊さなかつたよ。まあオレもあの2人には幸せになつてほしいからクロームに声をかけて大人しく電車で帰つたよ。そのあとはみんなと合流して遊んだ。まあちよつとしか時間はなかつたけどね。

その日から時折ラルが動搖する気配を感じるから、コロネロと連絡でもしてゐるのかなーってわかつて、オレはちょっと笑つてしまつた。

いつものようにクロームを迎えに行つたら、骸ん家にヴエルデが居た。最近アルコバレーノとの遭遇率が高いなあ。……川平さん大丈夫かな。見つからなきやいいけど。あれ？もしかしてよく出前を頼んでいたのはそのせい？

「うむ。六道骸ほどの男がついた人物はどれほどかと思つたが、ただの女ではないか」

「なんだとつ！」

「わーわー、獄寺君おさえて。相手はアルコバレーノだから」

「マフィア界に君臨する、あの？リボーンさんと同じ？」

そうそうとオレは頷く。つてか、獄寺君つてアルコバレーノのこと知つてたんだ。

「えっと、オレは沢田ツナ。よろしくね」

「断る。慣れ合う気はないからな」

……ヴエルデと獄寺君の相性つて最悪じやん。なだめるの大変なんだけど。

「そもそも私はボンゴレ10代目を暗殺しに来た。……よ、よせ。私はただの科学者だ。

私の科学がどこまで通用するか腕試しをしに来ただけだ」

「無駄な労力と僕は言つてるのですけどね」

はあと呆れた感じでため息を吐くなら暇があるなら、獄寺君を止める手伝いしてつてば。あーもう！

「さつきから何をしている。む、ヴエルデか」

「久しいな、ラル・ミルチ」

ラルー！ つて感じで様子を見にきてくれたラルに感動する。多分いつもより遅かったからだろうね。

やつとちよつとは落ち着いたので、ヴエルデの話を聞く。ヴエルデは光学迷彩の研究をしていたらしいけど、骸に無駄と言われたんだって。そこまでいうのなら、試してみようつてオレのところへ来たらしい。はいはい、無茶振りね。……無茶じやないや。

「えつと、オレがヴエルデの部下を倒せばいいってことだよね？」

「ああ。ある一定の年齢以下の人間には見えるように設計しているからな。そこの男もラル・ミルチも文句はないだろう」

どうする？ とラルに視線を投げかけられたから、オレは別にいいよつて答える。獄寺君もオレの安全が確保されてるから渋々だけどいいみたいだし。あ、もちろん手を出すのはオレだけにしてつて条件はつけたよ。

つてか、これヴエルデの方が不利じゃない？ つて思つたんだけど、ヴエルデは光学迷彩に自信があるらしい。だから今から仕掛けるつてオレが聞いてもいいんだって。

……すっげー、自信。

「なあ骸。オレ絶対見つけると思うんだけど」

「いいのではないですか？」

助言を聞かなかつたヴエルデの方が悪いって考えなのね。はいはいと頷いていれば、

オレのケイタイが鳴つた。ヒバリさんからだよ。こんな時間に珍しい。

「おはようござります、ヒバリさん。……えつ、あ、はい！ 多分そうです。すみませんっ

！あとで回収しに行きますので、すみません！」

はあとため息を吐きながらオレは通話をきつた。骸はオレの声だけで察したらしく、笑つていた。

「……ヴエルデごめん。ヒバリさんが見つけちやて、咬み殺したみたい。オレ案件っぽ

いから連絡きた。邪魔だから回収してつて」

「なつ!? どこのガキが協力したんだ」

「違いますよ。あの男のことです、気配に反応したのでしょうか」

「オレの存在にもすぐ気付いた男だからな。やれるだろう……」

ラルもヒバリさんにすぐバレちゃつたもんね。あの人、ほんとどこ目指してるんだろ。獄寺君も対抗しなくていいからね。オレにも試せとか言わなくていいから。オレの予想だと、気配だけでは厳しいだろうけど殺氣には反応できると思うから。

「だから時間の無駄と言つたのです。雲雀恭弥にバレる程度では、彼女には通用しませんよ」

「お前なあ、ヒバリさんは普通の枠から出でるからな」

ヒバリさん程度とか言つたら、他の人達はどうなるのつて話だよ。……オレのツツコミは無視された。はあと再びため息を吐いたオレは、成り行きを見守つていたクロームに声をかけた。もうほつといて学校に行こうつて。ヒバリさんが放置した場所は教えたし、あとはそつちでしてね。骸も多分目的を達したからいいはずだし。

案の定、オレが出て行つても誰も止めはしなかつた。なんもしてないのに朝から疲れたよ。

学校についたらすぐオレはヒバリさんの姿を探した。朝から迷惑かけちゃつたからね、謝りに行つたんだ。

オレがマフィアの跡取りつて知つてゐるものもあるんだろうけど、今のヒバリさんまじで優しい。小言をもらつたけど、許してくれたからね。……骸が関わつてゐるつて知つたら怖いけど。

ちゃんと黙つてた甲斐があつたのか、ふつーにオレは授業を受けられた。けど、今日は授業の一環で小学校の夢について班にわかれて調べることになつた。それも宿題と

いう形で出た。仕方ないからオレはヒバリさんにメールを送信。授業だし許可をもらえた。といつても、返事はなかつたんだけど。ないつてことはセーフだから。

なんで中学生にもなつて小学校のころの夢なんか調べるのかなあつて思つたけど、高校の進路を見据えてかも。受験があるし、一度原点に戻れつてことなのかな。わかんないけど。

前の時は何にも考えず、ただ京子ちゃんと同じ班になつたことを喜んだつけ。……いろいろ思い出してきた。そういうや暗殺者きたよ。でももう倒しちやつたね、ヒバリさんが。

それよりジャンニーニだよ。……家綱が大変な目に合いそう。リボーンがオレの部屋に武器を広げるとは思わないし、京子ちゃんと同じ班になつていたから。ちなみにオレは山本と同じ班になつたから、放課後は山本人家に集合。どうしようつかな。

この頃のジャンニーニは抜けてるからなあと思ひながら、オレは避ける。なんでオレがいる位置に着地しようとするかなあ。ラルも反応していたけど、ジャンニーニの顔は知つていたみたい。じやなきや、撃つてる。もしくはリボーンに聞いていたのかな。朝のこともありたから、途中で絶対報告はしているだろうし。獄寺君が珍しくいそいそと帰つたのはジャンニーニが来るのを聞いたからだよね。それならオレにも言つてほしいんだけど、知つていると思つて言わなかつたのかな。

「初めまして10代目候補の沢田ツナ様。私、ボンゴレファミリー御用達、武器チユーナのジャンニーニと申します」

「ええっと、よろしくお願ひします」

これから世話になるだろうなあと思ったオレは真面目に頭を下げる。アジトとかアジトとか作つてほしいから。イタリアと日本には最低でも必要だもんね。あれ？でもジャンニーニていろんな人が暗殺されているから来たとかじやなかつた？骸のあの感じだと真っ先にオレで使えるか調べた気がする。え？じやあなんで來たの？

「リボーン様からの依頼です」

「あ、そうなの？じゃあとりあえずオレン家に案内するよ」

リボーンは家綱についてるから仕方ないよねって思いつつ、こつそり家綱にオレは謝つた。

家に帰ると家綱の叫び声が聞こえた。部屋が武器だらけなんだろうなあと懐かしく思い、遠い目をしてしまう。現実逃避をしながらも、ジャンニーニを家綱の部屋へ連れてつたけど。

「ほお。これは改造しがいがありますな。おつと失礼」

ジャンニーニは目の前の光景に興味津々だつたけど、すぐに思い出したのか、家綱とリボーンに挨拶していた。家綱になんて連れて來たんだよって目で訴えられたけど、お

前も同じことするだろって目で訴え返す。家綱はリボーンを見て、うなだれた。……なんかごめん。

「仲がよろしいですか」

「誰がだ！」

家綱の反応にオレは苦笑いする。まあ目だけで意思疎通できるのは双子だからであつて、仲良いわけじやないもんね。

「えっとオレ、宿題があつて山本ん家に行かないといけないんだけど……」

もういいかなつて確認したら、リボーンに呼び止められたから首をかしげる。

「おめーはこの中で欲しい武器はねえのか？」

「え？」

「ヒバリにもらつてるトンファージや、実力の半分も出せてねえからな」

やっぱ見る人が見ればわかるよね。相手が弱かつたら、トンファーでも普通に使えるんだけどなあ。にしても、武器なあ。ぐるーつと家綱の部屋に飾つてあるリボーンの武器を見渡す。前の時にリボーンに徹底教育されたから銃だけはまともに使えるけど、オレ好きじやないんだよね。言い方はあれだけど、感触が残らないから。

「んー、どれもピンとこないかな」

「そのグローブもか？」

オレの日課のトレーニングからリボーンは初代と同じ武器と思つたのかも。

「うん。さっぱり」

「そうか」

もしかしてこれが合つてるなら、オレに合わせてチューニングしてもらおうとしてジヤンニ一二を呼んだかな。本当はレオンが生み出すのが一番いいんだけど、オレに試練がやつてくるのかリボーンは気になつてゐるんだろうなあ。オレもそこが気になつてるし。

用意してくれたりボーンにちよつと悪いことしたかなあつて思いながら、オレは山本の家に向かつた。

山本の家で班のみんなと一緒に小学校の夢を調べる。やつぱ山本の夢は野球選手になることだつた。みんなが応援しているのもあつて、オレは俯いてしまつた。

「んー、オレは野球よりやりたいことが出来たんだ。な、ツナ」

「うえつ!? えつと……」

オレが言い淀んでもると、山本はみんなにあつさりとオレの手伝いをするつて言つちやつた。みんなは当然オレのどこ? つて疑問になつちやつて、なんとかオレは父さんの仕事の関係の跡継ぎ候補とだけ答えた。跡継ぎつていう響きから金持ちと思われたみたいで、羨ましいという話に移り変わつた。大変なだけだよつて言いながらも、チ

ラツとオレが山本の様子を窺うと、頭を撫でられてしまった。

山本にはオレの気持ちなんてバレバレなんだろうなあ……。

「じゃツナの将来の夢は会社を継ぐって書いてるのか？」

「へ？ いや多分違うと思う。そん時は他にも跡継ぎ候補がいっぱいいたし、オレにまわつてくる可能性は低かつたから」

オレ自身何書いたか覚えてないんだよなあと思いつながら、小学生の時に書いた作文をちゃんと読む。いくらオレがうつかりしてるとても、流石に黒のマフィアを一掃するとかは書いていないはず。

「うーん たいしたこと書いてないね。結婚して子どもを産みたいだつて」

ウソは書かずに無難な内容を選んだんだろうなあとその時のオレの心境がわかつてしまつた。あんまりこの宿題には役に立たない内容だなーとオレは思つていたんだけど、同じ班だった女の子達にものすごく賛同された。ちよつとオレが引くぐらいに。憧れの中の一つではあるんだけど、作文とかでは恥ずかしくて書けなかつたんだつて。へ、へえ……とオレと男子はその勢いに押されながら、なんとか宿題を終えた。

また明日学校で、と山本ん家の前でみんなと別れる。オレはちよつと山本に用があつたから最後まで残つた。

「あのさ、山本。オレもう引きずるのやめる」

「ん？」

「だからさ……。山本、オレについてきて」

「おう！」

ニカツと笑った山本は多分オレが知ってる中でも上位に入るぐらい嬉しそうな顔だつた。

今日一日いろいろあつたなあとオレは帰っていたんだけど、まだ終わりじやなかつた。

「……獄寺君、だよね？」

「じゅ、10代目……」

獄寺君は小さくなつた姿をオレに見られたくなかつたみたいで、すっげーショックを受けていた。前も10年バズーカの影響で縮んだけど、リボーンが防いでるから起きないと思つていたよ。

「いろいろあつたみたいだし、今日は泊まつていきなよ。その姿じや大変でしょ。ね？」

「う……。は、はい……」

ショボーンとした獄寺君をオレが抱き上げると、獄寺君は真つ赤な顔になつた。どうしたんだろう？

「そ、その10代目、当たつてます……」

「ん？あ、そつか」

ちび達と同じ感覚で抱き上げたのはまずかつたね。ごめんごめんと思いながらも、獄寺君がちっこいのもあってすぐ忘れてしまつて、その度にピアンキにダメよつて注意された。

「獄寺君もごめんね。オレに子ども扱いされるのは嫌だよね」

「そんなことないっス……」

あ、そう？とオレが良かつたとホツとしていれば、急にリボーンが獄寺君をボコり始めた。なんで！？

夏休みに入つても相変わらずオレはバタバタと過ごしていた。理由は黒曜中との合同体育祭が今年もあるから。オレの中では去年限定だつたんだけど、あの2人がヤル気満々で……。もう2人でやつてよつて言いたくなつたよ。

というか、まだヒバリさんはわかるんだよ。骸だよ、骸。あいつはヴァリアーが攻めてくる可能性があるつてわかつてるはずだよね?!なんで開催する気満々なの!?

あいつの言い分としては、リング争奪戦がある軸とは限らないから。まあそれはわかるよ、パラレルワールドつて話だよね。あと骸の記憶だと、ヴァリアーが攻めてくるのは10月らしい。僕が仕掛けてこないだけありがたく思いなさいだつて。ふざけんなつてオレは一瞬思つた。最後に、去年やつたのにやらないのはおかしいから。……これは絶対去年負けたのが関係している。いろいろ理由をつけて勝ちたいだけだろ!つてなつた。もうこれ伝統行事になりそうだよ……と思ひながらオレは走り回つてゐる。

そんな中でも風紀委員としての仕事もまわってきた。普段はないんだけど、夏祭りにひつたくりが出たからオレも駆り出されたんだ。並盛でひつたくりなんてよくやるよね。

実はこのひつたくり、オレは知つてゐるはずなんだけど、思い出せない。屋台をやつたのとみんなと花火を見たことは印象に残つてゐるから覚えてるんだけど、ひつたくり犯の顔はさっぱり。相変わらずオレの記憶力つて酷いよなと思いつながら、制服で歩き回る。

「ツナさーん」

ハルの声が聞こえたので、キヨロキヨロと周りを見渡す。女の子達みんな揃つてゐる。しかもみんな浴衣だ。クロームの浴衣は骸が買つたんだろうなあ。この中の誰かのところで着せてもらつたんだろうね。

「みんなすっげー可愛いよ！」

うんうんとオレは満足そうに頷いた後に気付いた。お兄さんもいる。

「お兄さん、お疲れ様です」

「む？」

あれ？お兄さんはナンパ避けじゃないのかな。

「よくわかつたじやない。私が京子のお兄さんに頼んだの」

「あ、やつぱり」

黒川はやつぱしつかりしてゐるなー。このメンバーなら絶対やつてくるつてわかりきつてるもんね。そしてお兄さんは付き合つてくれてるけど、意味はわかつてないん

だ。でもまあ嫉妬の視線に気付いてないみたいだし、いいよね。

「ツナさん、風紀委員のお仕事はまだ終わらないのですか？」

「え？」

「一緒に花火見たいなって」

「うーん、どうだろ。花火会場の方は厳しいけど、並盛神社のところだつたら間に合うかも」

「あそこは穴場だからよく見えるよとみんなに教えれば、そこに集合しようつてことになつた。……つて思い出した。あそこでひつたくり犯と戦つた気がする。あつぶねー！」

「あそこは混まないし、ギリギリに来てくれない？いやさ、さつきからいい匂いでお腹減つちゃつて……出来ればあつたかいの買つてくれない？」

そういうことならとみんなが頷いてくれた。いやほんと助かる。実際ちょっとお腹減つてたし。クロームにお金を預けて、みんなに楽しんでねーと言つて別れた。

あの2人つてやっぱ相性いいよねと思しながら、フラフラとオレは歩く。黒川にはオレも気をつけろつて言われたけど、オレなんかにナンパする人なんていないんだよね。迷子を見つけたつていう声はかけらるけど。

「あれ？ 獄寺君？ それに山本も」

「10代目!?」

「よおツナ」

「オレが忙しいのもあつて町内会の出し物に出なかつたから、屋台をしてるとは思わなかつたなあ。」

「あの、もしかしてだけど……また獄寺君バイト?」

「え、ええ……まあ」

「獄寺が1人じや大変だつていうからオレは助つ人なのな」

「バカ、山本! 言うんじやねえ!」

獄寺君が怒つてるのは変わりないけど、この2人は前より仲良いよね。これはオレが女だからかな。獄寺君はいつも側に居てくれるけど、女の子達と話すときは譲つてくれるもんね。女子同士で盛り上がりがつてるとか、気まずいのもあつて山本と話すことが多いんだろうなあ。前は3人でつるんでたからちよつと寂しい。……その分、オレは京子ちゃん達と一緒にいるから仕方ないよね。

「じゃあオレもちよつとは貢献するよ」

前に大人イーピンに教えてもらつたことを2人に話す。オレってこういうのは覚えてるんだよね、楽しかつたし。

「さすが、10代目です!」

「や、これ受け売りなんだよね」

「受け売りでも覚えていたのはツナだろ。すげーことには変わりねーのな
えへへ、そうかなつてちょっとテレた。オレの記憶は偏りすぎつて思つていたから、
ちよつと嬉しい。つて、オレがテレてる間に、獄寺君が山本にケンカ売つていた。なん
で!?」

「ちよ、獄寺君!？」

オレが慌てて2人を止めようとしたら、人の気配がしたから振り向く。お客様か
な。

「あれ? ヒバリさん?」

「いつまでサボつてるの」

「わー! すみません!」

そうだった、オレは風紀委員として活動中だつた!

「君達はさつさと5万出しなよ」

「ショバ代ーーー!」

「活動費だよ」

違うつて否定されたけど、みんなからすれば一緒だつてば。……あれ? でもオレには
集めろつて言わなかつたよね。

「適材適所」

「あ、はい」

……オレどんな顔してたんだろ。とにかくヒバリさんはオレがそういう得意じやないと思って振らなかつたつてことだよね。ヒバリさんの言う通りだよ、オドオドしながら集める自分の姿が浮かんだよ……。

「君はいい加減仕事に戻りなよ」

そうでしたとオレは何度も頷く。2人にひつたくりが多発しているからお金の管理だけは気をつけてねつて伝え、歩き出そうとしたところで獄寺君に小声で呼び止められた。あんまり聞かれたくない話かなと思つて、オレも小さい声で返事をする。

「どうしたの、獄寺君」

「チヨコバナナ、持つて行つてください」

「え、でも……」

「ヒバリの野郎にバレなきやいいんスよ」

いや、そのヒバリさんがめっちゃ睨んでるんですけど……。オレがどうしようか悩んでいると、山本がヒバリさんにチヨコバナナを渡していた。……すつげー。山本のそういうところ感心する。ヒバリさんが受け取つたらオレも受け取つてもいいって山本は考えたんだろうなあ。考えることは出来るけど、なかなかヒバリさんに渡せないよね。

ふつーは。

「ありがとうね、2人とも。あ、もし良かつたら後で花火一緒に見ようね。オレは間に合うかわかんないけど、京子ちゃん達は行つてるよ。場所は山本が知つてるから」

「おう、任せとけって」

またねーと別れたけど、獄寺君がなんでおめーは知つてんだよつてイラついている声が聞こえた。まあそこまで怒つてはなさそうだし、山本なら大丈夫だよね。

山本とは小学生の低学年の時に一緒に行つてゐるから、あの場所を知つてゐるんだよね。山本のお父さんは店は開けてないけど祭り関係の注文が毎年入つてゐるみたいで。子ども一人でウロウロさせるわけにはいかないから、それならオレン家と一緒に行けばいいじゃんつてなつたんだよ。懐かしいなあ、家綱はよく花火が始まる前に寝落ちしちやつて次の日に文句言つてたね。オレからすればあの音の中でよく眠れるなーつて思つた。

食べながら歩くのは危ないと思つて近くのベンチを探す。ラツキー、空いてるじやん。……つて、ヒバリさんが居るからだつた。

「いいよ」

「え? まじで?」

……睨まれちゃつたよ。いやでもさ、普通許可貰えるとは思わないじゃん。まあざつ

さと食べて見回りに戻れつてことなんだろうけど。

ヒバリさんのお言葉に甘えて、ベンチの端っこに座つてオレもチョコバナナを食べる。うん、こだわつてるだけあって美味しい。

「今日はひつたくり被害出でます？」

「まだ」

一応見回りの効果は出てるつてことかな。よかつたよかつたと思つていれば、ヒバリさんはもう食べ終わつたみたいで立ち上がつた。

「これ捨てといて」

はいはいとオレは頷く。どうせオレも捨てに行くからね。ゴミをオレに渡したヒバリさんはフラッと歩き始めた。お金回収するんだろうな……。

チョコバナナを食べ終わつたオレはゴミを捨てた後、再びふらふらと歩く。途中で母さんとちび達に出会つて、財布が軽くなつた。まあちび達は喜んでるし、フウ太が家綱と一緒に食べようと誘つていたのをみてるとなんか和んだし。それにこつそり母さんがオレの財布を心配してくれたからね。大丈夫つて答えたけど、気持ちは嬉しい。つか、母さんとビアンキが持つてる景品の袋で思つた、リボーンは射的したな。屋台のおじさん泣かされたね。

後、炎真の家族とも出会つた。家族で来ているし邪魔しちや悪いかなつて思つていた

んだけど、オレの姿を見つけたらみんなこっちに向かって来てくれたから挨拶した。この祭りは骸から聞いたんだって。まあその骸は来てないんだけど。家でゆつくりしてるのかな、あの家からは花火見えるからね。炎真達にも穴場スポットを教えた。

そんな感じで知り合いと会いつつ、さらに花火を誘いながら歩いていたら、オレと同じぐらいの体格の男の子が引つたくりしているところを見つけた。すぐさまオレはその子の腕を掴んで、お金をおじさんに返す。

「痛い痛い痛い!!」

「え? ザー、ごめん」

そんな強く掴んだつもりはなかつたんだけど……と、力を緩めれば、逃げられた。
「……うそーん」

やばいやばいとオレは引つたくられたおじさんに気をつけてねと声をかけて、その子を追いかける。このまま逃げられたらヒバリさんに咬み殺される。

その子が逃げた先は階段をあがつた神社のところだつた。つて、やつぱりここなんだ。オレが階段をかけあがると、体格の良さそうな人が10人ほど待ち構えていた。でもまだ隠れているみたいで、オレの感覚では50人近いかも。

この人なんか見たことあるなあっていう人が、いろいろと話してくれた。なんでもヒバリさんに恨みがあるんだって。海でライフセイバーのバイトしていただけなのに咬

み殺されたみたい。

「あ！ オレが言つたよ、それ。ガラ悪いって苦情きてたから」

街を歩いてたら、いろんな人から聞いてさ。ヒバリさんに報告したよ。あれ、ヒバリさん自ら動いたんだ。つーか、一回咬み殺されたのに懲りなかつたんだ……この人達。「あれ？ でもなんでオレ？」

この人達の反応からして、このことを知つてたみたいじゃないし、わざわざオレをここに誘き出す必要つてあるのかな？ つて首を傾げる。

「ヒバリの女だろ」

「……誰が？」

「お前が」

「わあ」

相変わらずオレは巻き込まれ体質でした……。でもまあ理由はわかつたよ。オレは

ヒバリさんの人質なのね。

「えつと、じゃあヒバリさんを呼べばいいんですね？」

「……お、おう」

オレが素直に動いたから、ちよつと動搖された。いやだつてさ、呼んだ方が絶対いいもん。とりあえず電話をかけながら、ラルに大丈夫と口パクする。手を出す必要ない

よつて。残念ながら電話をかけ終わると拘束されちゃつた。素直に動いたのにね。

「あ、ヒバリさん」

「……君、なにしてんの」

「オレの首元にナイフがあるのをみて、ヒバリさんはそう言つた。……まあそだよね。

「動くなつ！この女がどうなつてもいいのか!?」

「いい加減にしなよ。フザげてるの？」

「これ、オレが人質にされて怒つてるようみえるけど、オレに言つてるからね。ちょー怖くて、すぐさま拘束から抜け出して相手を氣絶させた。

「すみませんっ！この人数だと何人か逃しそうで、ヒバリさんを呼びました！」

「ふうん」

周りの気配を探つたヒバリさんはちよつとは納得してくれたっぽい。いくらオレでもこの人数が全員逃げに徹されると、流石にキツイ。好きでヒバリさんの手を煩わせたわけじやないんだつてば。

「あ、この人達は多分ひつたくり常習犯ですよ。手慣れてたので可能性は高いです」

「ありがとうございますっ！」

「ありがとうございますっ！」

オレ達はのんきに会話しながら、バタバタと相手を倒していく。ヒバリさんはトンファーを使つてゐるけど、オレは素手。こういうタイミングぐらいしかトンファーの使い道がない氣もするんだけど、手加減が難しいしオレは気絶させれば十分だから。

「終わったー」

「前は4人で倒したけど、今回はオレとヒバリさんだけで済んだよ。まあ逃げられる可能性がなかつたら、どつちか一人でも問題なかつたもんね。」

「後はこつちで処理するよ」

「あ、はい。オレは見回りに戻りますね」

「いい。これがひつたくり犯なら、君の仕事は終わりだよ」

「そういえば、オレはひつたくりが出たから駆り出されたんだ。」

「つてことは……花火みれる？」

「そうだね」

やつたー！つて喜んだけど、ヒバリさんならオレ達の会話を聞こえていたかも……。もちろんヒバリさんの言う通り、オレの仕事が終わつたつてのもあるだろうけど、これつてヒバリさんの優しさだよね。

「あの、ヒバリさん」

「なに」

「ヒバリさんも、花火楽しんでくださいね。あ、いや……風紀委員活動があるのはわかっていますけど、空を見上げる時間ぐらいはあるかなって オレ達と一緒に見ようとかは言えないけど、ヒバリさんにも見てほしいなって思ったんだよ。

「……気が向いたらね」

「はいっ！」

オレがニコニコと返事をすれば、ヒバリさんはため息を吐いた。え、なんで!?

「10代目ーー！」

獄寺君の声が聞こえたと思つて視線を向けると、みんな揃つて階段をのぼつていた。ブンブンと手を振つてたオレは忘れていたけど、まだひとつくり犯が転がつていたよ。「なんなの、これ……」

「あはは……」

黒川のツッコミには笑つてごまかして、こつちこつちと誘導する。ヒバリさんは獄寺君の声が聞こえたところで、別のところから下へおりたけどこれの回収に風紀委員のみんなが来るからね。邪魔にならないように動く。女子達に感謝しつつ、ご飯を食べてる間に花火が始まつた。わあ、綺麗だなあ。

「ん？」

誰か人の気配がしたからオレは振り向いた。こつちに来ることはなかつたし離れた位置に居たけど、ちょっとオレは驚いた。

「ツナ、オメーが誘つたのか？」

「花火楽しんでくださいとは言つたんだけどね」

「そうか」

まあここは穴場スポットだし、知つても不思議じやないよね。

「リボーン、楽しいね」

「ああ」

やつぱり、みんなと見たこの日の花火は最高にキレイだつた。

新学期も始まり、合同体育祭の件でドタバタはしているけど、オレはその日もいつも通り過ごしていたんだ。家に帰つて来るまでは……。

あれ?と思つたオレは部屋の窓を開けたんだ。やつぱり気のせいじゃなくて、そいつは窓から入つてきた。それも念入りに幻術を使つて気配を誤魔化してやつってきたんだ。

この時点でただ事じやないなつて思つたオレは骸が入つてすぐに窓を閉めたんだけど、幻術でこの部屋に誰も入つてこれないようになつた。

「骸?」

「……やられました」

はあと疲れたように骸は壁に背をもたれた。こいつがここまで言うなんて相当だよな?

「一体どうしたんだよ」

「XANXUSの氷が溶かされました」

「あ、そうなんだ」

オレとしてはこのタイミングで溶けなきや、オレがいつか溶かしてただろうし気には

しないんだけど。つて、それぐらい骸もわかつてるよな。

「えつと？」

「……覚えてますか。XANXUSの氷を溶かした人物がわかつていなことを
「んーチエルベツロかなつてオレは予想していたんだけど」

いやまあそのチエルベツロもよくわかつてないんだけどさ。探しても見つからない
し、いつも向こうからの接触らしいし。オレには接触してこなかつたけど。

「前はどうだつたかわかりませんが、今回はおそらく違います」

「え？ 誰？」

「わかりません」

は？とオレは声を出す。チエルベツロじやないのはわからんのに？

「つてか、さつきからの話だと、お前XANXUSの様子見てたんだろ？」

「ええ。ですが、最初に言つたでしよう」

は？とオレはもう一度言つた。こいつ、最初にやられたつて言つたよな……。まあ本
体はここに居るけどさ。こいつが作つた幻覚を倒すのはどれぐらい大変かはオレはよ
くわかつてる。前の経験を上乗せしている骸は術師としてはこの世界で間違いなく
トップだ。そう簡単には倒せるはずがない。少なくともチエルベツロでは無理だよ。
「相手の手がかりはあるのか？」

「残念ながら」

「うわ……。骸が完全に後手に回ったじやん。

「失礼ですね。君と違つて僕はちゃんと考へています。その証拠に、ヴエルデ博士から連絡がありました」

「ヴエルデ？」

「ええ。僕としてもこんなに早く連絡が来るとは思わなかつたんですけどね」

「……もしかして、と思う。こいつ、誰かわかつてゐるんじゃないのか？」

「確証はありませんから」

「あ、これ確証がないだけでほぼ間違いないって思つてゐるな。

「オレも行く」

「いえ。あなたはこのままここに残つた方がいいでしょ。XANXUSが復活したことは確認しましたし、僕はその二人がどのように接触したのかを見れませんでしたから、どのように変化が起きるかわかりません。……クロームのことを頼みます」「……わかつた」

それを言われれば、オレは残る道を選ぶしか残されてなかつた。だから骸はオレに名前を言わないと。器用じやないオレは名前を聞けば、そつちに気をとられるから。「正直、ちらのことを見る余裕があるかわかりませんので、シモンのことも任せますよ」

「わかつてゐる。お前はそつちに専念して。けど、絶対に無茶はするなよ」

骸がリングをつけてることに気付かないほど、オレはバカじやない。川平さんにもらつたんだろうけど、それヘルリングだろ……。対峙したこいつが必要と判断したならオレはつけるなって言わないけど、倒す必要はないんだからな。

「そうそう、あなたのことです。どうせ9代目のことでのグダグダ悩むでしょう。しかし僕もあなたも動けません。ですから、あなたの父親のところにXANXUSが目覚めたことを流してみては?」

「え、あ、うん。なら、そうする」

父さんがうまく動けるかはわかんないけど……。確かXANXUSに追われたはずだから。でも何もしないよりは気持ちは楽だよね、うん。

「では、僕はいきますね」

「骸!」

なんですか?つていつものように骸は振り向いたけど、さつきオレの言葉に返事しなかつたのはわざとだろ。流そととしたみたいだけど、そう簡単に騙されないつづーの。でもこいつもオレの指示に素直に従うような男じやないし……。

「……骸、オレの霧の守護者はお前だからな。それを忘れんなよ」

ちゃんとわかつてゐるよな。今回はクロームとお前の二人じやないんだ。お前一人し

かオレは認めないぞ。

「……霧の対決までには戻ってきますよ」

その言葉を信じて、無茶するなよと思ひながらオレは骸を見送つたんだ。

骸のことばつかり気を取られていたオレはすつかり忘れていたんだ。……さつきまで幻術でこの部屋が隔離されていたことを。

ドカツという音とパリンという音が同時に聞こえ、オレの部屋の扉が派手に吹つ飛ばされ、窓からガラスが消えた。

「ツナ！」

「沢田ツナ、無事か!?」

……あちやーとオレは顔を手で覆う。だよね。心配するよな。どう考えたつて。だつてあいつが本気を出して隔離したんだよ、絶対心配するつて。オレの部屋が凄いことになっちゃつたけど、怒れない……。というか、オレが謝らないと。

「ごめん！ちよつと骸と話してたんだ……」

あいつ絶対こうなることわかつてただろ……とか思いながら、何の話をしていたと詰め寄る二人に、XANXUSが目覚めたことを話して父さんに連絡をいれてと頼んだ。

けど、次の日には父さんは連絡が取れなくなつた。ラルに戻つていいよつて伝えたんだけど、首を横に振られた。尚更オレ達から離れられないつて。そしてあまりにも不穏すぎるから、ラルとリボーンの担当に入れ替わつた。ラルは手を出せるけど、リボーンは手を出せないからね。家綱はオレと違つて戦えないのもあつて、3人で話し合つてそうしたんだ。3人はオレとリボーンとラルね。

母さんはオレ達よりも危なくはないけど、ビアンキについてもらつてる。だから、丈夫のはずなんだけど……。ちょっと気になることがある。

「……あのさ、リボーン」

「なんだ」

「やつぱいい」

もしかして、と思う。幻覚とはいえ骸がやられたこと、XANXUSの氷を溶かすことが出来る人物。骸から情報を聞いてすぐに話したのに、父さんと連絡が取れなくなつたこと。こんなこと出来そうな人物つてオレは一人しか浮かばなかつた。
……なあ。お前なのか、白蘭。

中2・リング争奪戦

1

骸と父さんと連絡が取れなくなつて、一ヶ月以上経つた。父さんはまだわかる。問題は骸だよ。最悪の場合はクロームを通じて連絡してくるだらうから、なんとかやつてゐるのはわかる。たとえ白蘭でも今の技術で骸を閉じ込められるとは思わないし。だから連絡を一度も寄越さないつてどうなの。昔つから秘密主義などこらあるけどさ、一ヶ月以上も連絡が途絶えるとは思わなかつた。

「そろそろ怒つてもいい気がする」

「なんか考えがあるんだろ」

オレがイラだつてるのもあつて、珍しくリボーンが骸のフォローをした。いやまあリボーンも骸の性格を掴んできたのもあるんだろうけど。

「イツ君、ツーちゃん、大変よー！」

母さんの声が聞こえたオレは一階におりる。リボーンも一緒についてきた。一階にはクロームが居るから、そういう心配はしてないんだけどね。幻術使つた気配がしたなら母さんが叫ぶ前にオレが気付くから。

「お父さんが帰つてくるわよ！」

母さんが乙女のような顔をして喜んでるところ悪いけど、どうやつて父さんが帰つてくるつて知つたか聞いた。

「アナログだねえ」

父さんからのハガキを見ながら呟く。この時期じや、やつぱアナログが一番安全だよね。家綱もホツとしたように息を吐いているけど、オレとリボーンは顔を見合わせて二階へと戻る。もちろん家綱も強制参加。ラルも呼んで父さんから手紙が届いたことを話す。

「なんだよ」

「ちつとは考えやがれ。このタイミングで家光が家に帰るなんて愚策もいいとこだぞ」「ああ。ここには守るべき存在がいるんだからな」

うんうんとオレも頷く。前の時はリボーンも知らなかつたから、ただの里帰りと最初は考えていたはずなんだ。ちょうど9代目からの課題を初めてクリアした後だつたのもあるし。けど、今回はXANXUSが目覚めて、向こうが大変なことになつてるのを知つているんだよ。それなのに帰るつて、相当ヤバイつてオレの頭でもわかるよ。

「ツナ、お前はどう考える」

「んー、父さんがかなり追い詰められて、ここで籠城作戦をするしか道が残つてない。ま

たは別の場所です。次期ボンゴレボス候補であるオレ達や母さんが危険な情報を掴んだ。次期ボンゴレボス候補筆頭であるオレの出番がきた、ぐらいかな。他になんかある?」

「悪くはない。が、あの手紙自体が偽物というのを候補から入れ忘れてる」

ラルの指摘で気付く。父さんの手紙と見せかけて偽物がやつて来るパターンも考えとかなきやいけなかつたね。

「まああれは家光からだろ」

「だね」

うんうんとオレ達3人は頷く。数年ぶりに帰つてくるのに、あのズボラな内容は父さんしかありえない。母さんじやなかつたら絶対離婚しているよ。それにオレの超直感にも引っかかるなかつたから。オレ達はそれで納得したんだけど、家綱は頬を引きつらせていた。まあオレがあげた候補だけでもかなり物騒だもんね。無事だつたから顔を見せにきたつていう選択肢は最初からないし。

「こんな時、骸が居ればなあ」

多分前と同じ理由で帰つてきてると思うんだけど、確証はないし。情報収集はあいつに丸投げしていたのがここでツケがきたよ。

「あいつは何をしている」

「ん」、別件で動いてもらつてる

オレが言葉を濁したから、ラルがイラツとした。……この状況じゃ下手に黙つてると混乱させるだけかな。

「あいつにはXANXUSの眠りを覚ました人物を追つてもらつてる。ほつとくことも出来ないでしょ？」

「今回の件にも関係あるだろ！ そういうことは共有しろ！」

「ごめん。でもなんか分けた方がいい気がしたんだよ。オレの直感が」

「直感かよ」

家綱に呆れたようにツッコミされたけど、オレは眞面目にそうだよと頷いた。

だからこそ白蘭な気もするんだよ。あいつなら、絶対自分のために動くから。まあユニに救われていたらユニのために動いたりするだろうけど違うだろうし。

「まだおめーは目覚めてはいないようだが、超直感は侮っちゃいけねーぞ」「ブラッドオブボンゴレー？ んだよ、それ」

「そこからなのか……。まあ家光に言われても、オレも迷信だと信じていらない派だつたが……」

チラツとオレを見てラルはため息を吐いた。今までのオレの行動で信じるしかなくなつたんだろうね。

「簡単に説明すつぞ。ボンゴレボスに流れる血筋で、常人を遥かに凌ぐ直感力のことを指すんだ。見透かす力と言われるぐらいだぞ。ツナは子どもの頃からそれに目覚めてるんだ」

宝くじ当て放題？ つて家綱は呟いた。危機的状況とかに優れてるし、未来が見えてるような動きをする時もあるけど、未来が見えてるわけじゃないよってオレは教えた。すっげー家綱はガツカリした。オレも似たようなこと昔思つたよ……。

「話は戻すぞ。ツナ、どう感じたか説明してみろ」

「ええっと……、XANXUSを目覚めさせたけど、次期ボンゴレとか関係ない気がするんだよね。もちろんオレ達が振り回されてるのはわかってるんだけどさ。それに拘つちゃいけないような……」

「まつたく関係ないとも言えないのか」

「うーん、多分」

やつぱり言葉にするのは難しいとオレは唸る。リボーン達もそこまで期待してなかつたようで、オレのあやふやな説明に怒りはしなかつた。

「まあこの件は骸に任せてるし、父さんから状況を聞く方を優先しようよ」
手がかりを掴んでるのは骸しか居ないのもあって、その日はそれで落ち着いたんだ。

次の日、日曜日だつたけどヒバリさんとのバトルは昨日電話して休ませてもらつた。父さんが帰つてくるかもしれないと言つたら、一応納得してくれた。一応なのは、なんか気付いてそうな気がするから。ヒバリさんが察しよすぎて怖い。

その日は家でクロームと一緒に母さんの手伝いをしていたんだけど、オレは嫌な予感がした。母さんにちょっと急用と声をかけて、家を出る。家にはビアンキとラルがいるからね。こつちは大丈夫。リボーンは何も言わずについてきてくれた。

超直感に従つて辿り着いた場所を見て、やつと思い出した。……オレつて相変わらずポンコツ。ここでスクアーロから逃げてるバジル君と会つたじやん！つてもう、なんか物騒な感じになつてるー！スクアーロ暴れすぎー！暗殺部隊なんでしょ、もつと忍んで！いやまあ一般人に手を出さないようになえて暴れて逃げる時間を作つてあげたんだろうけどさ。

「ツーちゃん？」

「つて、京子ちゃん！」

ひい！なんでこんなとこに居るの!? そうだよ、今日は日曜日だよ。オレ達が誘わなくとも、出かける可能性はあつた。アタフタしながらもここは危ないからオレは逃げようと声をかける。オレの言葉に首を傾げる京子ちゃんは可愛いけど、ちょっとは焦つて！?

「でもお兄ちゃんを待つてるの」

「お兄さん!?」

「うん。逸材が現れたからボクシングに勧誘してくるつて」

「お兄さん！」

「オレが見てくるから、京子ちゃんは家に帰つて待つて。お兄さんの行動なんとなくわかるし」

「いいの？」

もちろんと何度も頷けば、京子ちゃんはわかつたつて言つてくれた。説得できてよかつたーと息を吐いたオレは京子ちゃんと別れた。安全と判断できるところまではリボーンについて行つてつて目で頼んだから、京子ちゃんは大丈夫。問題はお兄さんだよ。絶対スクアーロとバジル君のところにいるよ、あの人……。前から京子ちゃんは天然つぽかつたよ。でもたとえボクシングの勧誘でもお兄さんが危ないことをするのは止めていたと思うんだけど、なんでだろ？

……そういう、お兄さん額の怪我なかつたつけ。

え!? これもしかしてオレのせい?! いやでもオレ何もしないよね?? あーもうどうなつてんのー!? と思いながら、オレは走つた。

「極限、ボクシング部に入部しろ！」

「うおおおい！邪魔だあ！！」

「お逃げください！ここは危険です！」

似合わないのはわかってるんだけどオレが呟きたい。カオスつて。

「お兄さん、危ないから下がつて！」

「む、沢田ではないか！」

「なつ！」

「沢田だあ？」

……オレ、やつちやつた？スクアーロがすつげーオレのこと見てるんだけど。そりや
そうだよね、父さんのフルネーム知ってるもんね。バジル君もオレを見て反応しちやつ
たし。

いろいろ思うこともあつたし、考えたい気持ちもあつたけど、とにかく言わないとい
けないことがあつた。

「修理代、ヴァリアーと門外顧問で話し合つてよ！」

絶対にオレは出さないよ！

前に繼いだ最初の頃、請求書の山にほんと苦労した。途中でヴァリアーの予算から差
し引いたらやつとマシになつたんだよ。最初からそうしろって思うかもしれないけど、

9代目の時は問題なかつたからさ。急に変更するのもどうかと思つたし、ほんどのないんだけどオレにもプライドがあつたし……。結局、オレがキレちゃつたんだけどね。……こういうところが怒らせたら怖いってなるのかな。

あ、もちろん変更するにあたつてヴァリアーの予算はちゃんと増やしたよ。そこまでオレは鬼じやない。そそこそぶつ壊しても問題ないぐらい予算はあげた。ただヴァリアーはXANXUSの食費問題があつたからね。すつげーかかつてたらしい。それでもXANXUSの食費代を抑える考えは一切なかつたみたいで。みんなXANXUSのこと大好きなんだなーってほんと思つたよ。まあスクアーロはXANXUSのわがままにイラつとしてたけど。

前のことを思い出したし、先手を打つたことですつげーオレはいい気分だつたんだけど、スクアーロの殺気がその状態を許さないんだよね。

「沢田殿つ！」

「わつ、と」

驚きながらも、バジル君が投げたものをキヤツチする。懐かしい箱だなあ。

「それを持つてお逃げください！」

「逃すかあ！」

スクアーロがオレに向かつてくるのを横目に、オレはバジル君から渡された箱を開

く。

……あー、ほんとオレこういうの嫌い。

仕方がなかつたんだろうけどね。軽く息を吐いたオレは、箱を締めてポイッと放り投げた。バジル君には悪いとは思つたんだけどね……。

オレを斬ろうとしたスクアーロも、命をかけてでもスクアーロを止めようとしたバジル君も、一瞬動きが止まる。そして二人とも標的が箱に移る。

その隙にオレはお兄さんとバジル君をオレの後ろに隠すように腕を掴んで引っ張つた。バジル君が必死に箱へと手を伸ばそうとしたけど、オレはそれを許さなかつた。

「ボンゴレリングがっ！」

「お兄さん、お願ひします」

「おう！」

絶対にお兄さんは状況がわかつてない。けど、バジル君を抑えるのをかわってくれた。オレの頼みつていうより、お兄さんは大事なところを外さないから。このまま離せば、バジル君の命が危ないことには本能で察してゐるんだと思う。

「う、お、おい!!てめえ、何を考えてる!」

まあそうだよね。オレは2人の関係がわかつていていた。リングの意味もわかつてると思うよね。

「オレ、その箱に入ってるリングに拘つてないんだよね」

「いいのか？ツナ」

京子ちゃんを護衛し終えたりボーンがひよっこりと現れてオレに質問してきた。オレはもちろん「いいよ」って答えた。……つと、早く言わないとダメだよね。「スクアーロ、XANXUSに伝えてくれない？オレの大事なものに手を出すなら……容赦しない」

途中から死ぬ気の状態になってしまった。ちょっと釘をさすぐらいの軽い気持ちだったのに。……それだけオレの誇りってことだ。

けど、ちょっと失敗しちゃったなあ。スクアーロが身構えちゃったから。ここでオレを殺さないとまずいと思つたのかもしれない。でも……大丈夫。

「そこまでだ、S・スクアーロ」

「跳ね馬だと！ツチ」

ディーノさんが来たことで、状況が悪いと判断したスクアーロは逃げていった。相変わらず状況判断が早いなあ。

「……これで良かつたか？ツナ」

「はい。ありがとうございます、ディーノさん」

ディーノさんはスクアーロを捕まえたかったんだと思うんだよね。リボーンは手を

出せないけど、オレが居るし。2人で組めば捕まることは可能だつた。けど、オレがデイーノさんの存在に気付きながらも、XANXUSに伝言を持ち帰るように言つたのを聞いたから変えたんだと思う。

色々と話したいことはあるけど、先に声をかけなきや。

「バジル君。君が頑張つてあのリングを運んでくれたおかげで、時間を稼ぐことが出来たよ。ありがとう」

「え……」

君の今までの苦労は無駄じやなかつたんだよと伝える。ショックを受けてる決定打はオレの行動だろうけどね、……父さんもあるかな。

「とにかく休んで。大丈夫、ボンゴレはオレが継ぐよ」

オレの言葉で緊張状態が切れたのか、バジル君は意識を失つてしまつた。デイーノさんはオレの頭を撫でた後、バジル君を抱えて病院の手配をし始めた。……でもなんでオレの頭を撫でたんだろう？

「バジルを安心させたからだぞ」

またオレの疑問が顔に出てたのか、リボーンが教えてくれた。そういうや、本物のハーフボンゴレリングは今デイーノさんが持つてたんだつけ。デイーノさんからは声をかけにくいよね。

「つと、お兄さん。大丈夫でした？」

「おう！」

問題ないというようにお兄さんは腕を構えた。いつもの元気なお兄さんの姿に、晴だなあと思つてしまつた。お兄さんはわかつてないけど、これが普通じやないことは気付いているはずだから。

「沢田、オレに話があるのだろう？」

「あはは。また顔にかいちゃつてました？」

「極限に」

そんなに!?とオレは驚きながらも笑つてしまつた。

「明日の朝、いつもの場所で時間もらえますか？」

「ああ！また明日な！」

京子ちゃんは家で待つてますよと伝えてオレ達は別れた。お兄さんの姿が見えなくなつたら、オレはすぐにディーノさん達を追いかけていつた。リボーンが何も言わずにオレの頭に乗つたのは、リボーンなりの優しさだよね。

バジル君の怪我は命に別状がないことがわかつたから、ディーノさんは本物のハーフボンゴレリングをオレに見せた。

「やっぱ気づいていたのか」

「……はい。リングを見てすぐに偽物とわかりました」

ディーノさんだけじゃなく、リボーンも薄々察していたらしい。オレ、このリングはつて言つてたし、ちゃんと確認までしたから。

「ツナ」

「大丈夫です。わかっています」

わかつてるつて言つたのに、ディーノさんに頭撫でられたよ。うーん、また顔に出てるのかな。とりあえず眉間にシワがよつてないよね?と確認する。

「それをディーノさんが持つてるつてことは父さんと会つたんですよね?」

「ああ。オレと一緒に來たんだ」

「じゃあ今は家に居るかな」

一応、オレが強いという報告は聞いてるはずだし。だから父さんは母さん達の方へ向

かつてると思う。前の時のこと思い出せればいいんだけど、オレの頭じやそんな細かいところまで覚えてないんだよね。あの頃、すっげー嫌いだつたし。

「……あーでも、何から話せばいいんだろう」

「どーしょーとオレは頭を抱える。前みたいに反抗していないのに、なんでこんなに気まずいのー!?

「なんとかなんだろ」

「え? ほんと?」

リボーンがそういうなら大丈夫だよね? とオレはちょっと楽観的になる。おいおい……つて感じで、ディーノさんは困った感じに頬をかいちゃつたけど。
「順番がわからないだけで、話したい内容は決まってるみてーだからな」「……そうかも」

オレ、さつき何から話せばいいとしか言わなかつたよ。黙つてたこともあつたし……まあそれはお互い様だけど。父さんは母さん似のオレのこと大好きだしなあ。説得が難しそうな気がするのも気が重いんだよね。前はオレの判断に任せてた部分が大きかつたし。放任主義つて言えばそれまでだけど、オレがボスになつて困つてたらさりげなくフォローしてくれたんだよなあ。……最初はそれすら腹がたつたけど。オレ、やつぱり歳とつたね。

「とにかく帰ろっか、リボーン」

「ああ」

そろそろ帰らないとクロームが心配するだろうしね。バジル君のことをディーノさんにお願いして、オレはリボーンと一緒に家に帰った。もちろん、ハーフボンゴレリングはディーノさんから預かつて。

家に帰つたらすぐにクロームが出迎えてくれた。ただいまとありがとうを伝えてから、クロームに父さんが帰つてないと聞くとリビングに案内してくれた。

「……逃げたね」

「だな」

ぐーすか、お酒を飲んで寝ている父さんを見て呟いたらリボーンが肯定してくれた。

「えっと、ラルは？」

「あの子なら、ママンと家綱の護衛よ。パンが全部食べちゃつたから食料の買い出しに行つたわ」

ビアンキが教えてくれたから、そつかそつかと何度も頷く。ラルが居なくなつたから飲めたんだね。ビアンキは父さんがお酒を飲んだとしても止めないだろうし、クロームはこういう相手はしたことはないからね。仕方ないよね。

「みんな、オレの部屋で遊ばつか」

オレの言葉でちび達が嬉しそうに二階へあがつていった。もちろんクロームとビアンキも一緒に連れて行く。リボーンはどうするかなって思つたら、気配を消すように隠れた。……そうだよね、リボーンはとばつちりを食らう可能性あるもんね。

數十分後、オレの予想通りラルの怒鳴り声と銃声が響いたよ。ラルはきつちりしてから、一般人には手を出さないからね。母さんと家綱の心配はしていない。心配するすれば、この家かな。

母さんの晩御飯が出来たわよという声でラルのお仕置きが終わつた。長かつたし凄かつた。家綱がオレの部屋で過ごしてたぐらい。まあフウ太と話してたけど。

それでもあの家綱がオレと一緒に居るぐらいだから、ラルのキレつぶりは相当凄かつた。オレはそんな中でもご飯を作つてた母さんが一番凄いと思う。いや、オレも手伝おうとしたんだけどね。あの中に入つていけるのはオレぐらいだし。でも母さんはちび達の面倒を見てほしそうだつたから、そつちを優先。父さんが助けてほしそうだつたのは無視したよ。自業自得だから。

せつかくまともに父さんと顔を合わすことが出来たけど、母さんの前ではマフィア関係の話はしない暗黙のルールがうちにはある。だから家綱も何も言わない。一応、オレ

の独り言という感じでさつきの間に家綱に今日あつたこと説明したけどね。それでも父さんに聞きたいことはあるはず。

それにしても、前の時オレは父さんにめっちゃムカついてたけど、家綱はそこまで反抗しないんだよね。この差ってなんだろ……。

母さんがちび達と風呂入つてる間、父さんと家綱は話をした。オレは長くなるかもしれないから、譲つたんだ。

席を外そうと思つてたんだけど、初めてリボーンがオレの膝に乗つたんだ。だからオレは動かなかつたよ。ビアンキが居るのにオレのところに座つたつてことは聞いとけつてことだから。家綱は嫌そうな顔をしたけどね。リボーンには逆らえないから……。

ポツポツと語る家綱の内容に耳を傾ける。マフィアとかについてはちよつと怒つてるけど、父さんが無事でよかつたという内容だつた。

え、なにそのすつげー大人な感じ。オレは前に一度、バスを経験したから、やつと父さんの気持ちとか理解出来たのに。

そのあとは前にオレに宣言したように、家綱は家に残るから継ぐ気はないと言つた。父さんはただ「そうか」としか返事をしなかつた。最初は知らなかつたけど、ポンゴレのN.O.2が誰か家綱もわかつちゃつたからね。だから父さんが家綱に継いでほしい

と考えてたことも知つてゐる。どつちも複雑なんだと思う。

家綱の話はそれで終わりみたいで、席をたつた。けど、その場から動くことはなくて。言うか迷つた素振りを何度かした後に口を開いた。

「……何かあつたら母さんが悲しむんだから、まじめに仕事しろよ」

父さんはフツと笑つて「任せろ」つて答えた。父さんが笑つたことが気に食わなかつたのか、ドスドスと足音を立てながら、家綱は二階へあがつていつた。あの感じだと風呂も入らずに寝ちゃう気がする。

「愛されてんなあ」

「へ？ あ、うん。よかつたね、父さん」

くうーという感じで感動してゐるから、ほつとこうかなと思つたんだけど、リボーンがオレの膝を叩いたから、父さんに付き合つて返事をする。

オレが慌てて合わせたことに気付いたのか、父さんは苦笑いしてオレの頭を撫でて部屋を出でていつた。その時にオレも風呂に入つちやおうかなー？つて風呂場に向かつて叫んだから、すつげー微妙な気持ちになつたよ。オレ、結婚は出来なかつたけど、経験がないわけじやないからね。微笑ましい感じに取れないから。父さんはオレが純粹と信じ込んでるみたいだけど。

「なあ、リボーン」

「なんだ？」

「夜中に父さんと話そうと思つたけど、今日はちび達と寝た方がいいのかなあ？」

「……ツナ、その質問は予想外だつたぞ」

「え？ そんな変なこと言つた？ もしかしてリボーンもオレが純粋だと信じ込んでたのかな。それなら悪いことしちゃつたね。」

リボーンが問題ないと言つたから、みんなが寝静まつた後にリビングへと向かう。父さんはやつぱり起きていたみたいで、ベランダで腰をかけながらお茶を飲んでた。

父さんが不器用なのは知つてる。そしてオレ自身も不器用。お茶を挟んでオレも座つたのはいいけど、会話はなかつた。

そんなオレ達がじれつたく感じたのか、気を遣つて隠れていたはずのリボーンが姿を見せてオレの名を呼んだ。

「……うん。えつと、父さん」

「ああ」

「リングなんだけど、オレからみんなに渡してもいい？」

前は父さんが勝手に配つた気がしたけど、門外顧問が選んだ守護者に渡す決まりだから、一応正しかつたんだよね。オレの気持ちはアレだつたけど……。

父さんからの返事はないから、慌てて付け加える。

「や、多分、父さんが考へてる人と同じだと思うよ。あ、後さ、オレからじやないと受け取らない人もいるだろうし」

骸とか骸とか。

オレは絶対そうだと何度も心の中で頷く。今居ないのを抜きにしても、骸はオレからじやないと納得しない。勝手に家に置いても、リングのことを知つてゐるのに無視する。

「……オレはいい父親じやねえな」

「……うん、そうだね」

一瞬、そんなことないよって言おうとしたけど、オレの本音を聞きたいと感じたから誤魔化すのはやめた。

オレは確かに父さんのことを凄いと思つたよ。けどそれは強さであつたり、部下をまとめたり、影から支えることとか、母さんを守り通す覚悟をしたこととか、そういうのであつて、子ども目線でみる父親としては凄いと思わなかつた。

オレの返事に「だよなー……」と父さんは項垂れた。いやでも父さんは頑張つてたんだよ。オレが前の記憶があるせいで、マフィアのことを知つちやつただけで、ボンゴレの筆頭候補が相次いで亡くならない限り、本当は知ることがなかつたんだから。「母さんがさ、オレは父さんそつくりなんだって」

「ツナが、か？」

「うん。オレもそう思つた。気付いたのは今日だつたけど」

父さんと話すから、いろいろ考えたんだよね。それで気付いたんだよ。家綱とオレつてそつくりじやんつて。家のことをほつたらかしていた父さんのことが大つ嫌いだつた前のオレとさ。前の記憶のこともあるつて、母さんの手伝いとかはしてたけど、オレ子どもの時から外のことばっかり考えてたじやん。そりや腹たつよ。前のオレがそつたから。

「オレはいい妹じやなかつたと思うよ。そんなとこまで似ちやつたよ」

今でも家綱とは微妙な関係だけど、多分みんなが居なかつたらもつと酷くなつてた。10年後のランボが家綱が亡くなつてるつて教えてくれなきや、そこまで気にかけなかつたかもしれないし。山本やリボーンがアドバイスくなきや、今日一緒の部屋で過ごすことは無理だつたと思う。

あーもう心当たりがありすぎる。それもオレは家にいるし、家綱はもつとモヤモヤしだらうなあ。当たり散らすぐらいしたくなるよね。オレが女つてのもあつて、手を出すのを我慢してるんだから。

「なあに、大丈夫だ。家綱も成長してる。さて、もう寝ないと明日が辛いぞ。リングは自分で配るんだろ？」

「え、あ、うん」

ほらほら寝ろーと父さんに言われて、自分の部屋に戻る。ずっと気配を消していたりボーンがそのまま残つたから、2人で話でもするのかな。報告書だけじゃ伝わらないこともあるだろうしね。

夜更かししたのもあつてちょっと眠いなと思いながらも着替える。いつもはランニングウエアで、毎朝の日課が終わつたら学ランだけど、今日は黒のパンツスーツ。このスーツはリボーンに頼んでレオンに作つてもらつたんだ。ちょっと前に頼んでたのもあつて、レオンはやつれるほど無理をしなくてすんだ。ちょっと前のオレ、グッジョブ。そしてリボーンから何も聞いてないけど、このスーツは死ぬ気の炎でも簡単に燃えな素材で出来ている。嬉しくてレオンにお礼を言つてなでなでしてたら、リボーンにレオンはオレの相棒だぞつて言われたんだ。だから恐る恐るだつたけどリボーンも撫でた。正直……え、なにこれ。つて思つたけどね。あいつ、女に甘すぎない？知つてたけど。

ネクタイをキュッとしめて、オレは鏡を見る。前も思つたけど、レオンつてセンスいいよね。黒のパンツスーツなのに、可愛いつて感じるもん。これなら持田先輩でも女に見えるよ。

着替え終わつたオレはちよつと朝早いけど、雲雀さんと京子ちゃん達に家の用事で休むとメールを入れた。さつさと送らないと忘れそうな気がしたからね。クロームも今

日は休むことにしたみたい。約束したからだと思う。帰りを家で待つてゐるつていう約束。母さんはオレ達の顔を見て、学校を休むと聞いても止めなかつた。学校に連絡しておくわねつて言つてくれたぐらいで。

ふうと息を吐いて、家の前で獄寺君を待つ。基本的に順番は決めてなかつたけど、最初だけは獄寺君つて決めていたんだ。だつて獄寺君はオレの右腕だから。

「10代目!? すみません、遅くなりました!」

「違うよ。オレがいつもより早かつただけで。それに獄寺君を待ちたかつたんだ。おはよう、獄寺君」

「……おはようございます、10代目」

オレの顔や服装を見たからか、獄寺君はいつものような元気いっぱいの挨拶じやなかつた。

「獄寺君、これ受け取つてくれない?」

「……リングつスか?」

うんつて返事をしてから、このリングについて説明した。獄寺君はオレの説明が終わるまでずっと黙つてたまま最後まで聞いてくれた。だからオレの嵐の守護者になつてほしいつてちゃんと伝わつたと思うけど、獄寺君は前みたいに感動はしなかつた。けど、喜んでないわけじやない。

「……10代目はオレでいいんですか？」

「え？」

「オレはまだ未熟です。10代目を守護するのに相応しいのか……」

「ちょっとネガティブになつてたのかな。いろいろ言うより、ちゃんと伝えた方がいいよね。」

「んー、オレは獄寺君がいい。それじゃ、ダメ？」

「……いいえ」

「あ、今よりも大人になつた時の獄寺君の顔だ。随分久し振りにみた気がする。落ち着いたというか、オレを第一じゃなくて、オレの考えを第一に考えるようになつた獄寺君の顔。こんなにも早く見れるとは思えなかつた。」

「すみません。オレしばらく学校休みます。あなたの右腕になれるような男になつてきますから！」

「うん。無茶だけはしないでね」

「はい！」

獄寺君の返事を聞いて、前みたいに止めなくて良さそうだなつて思つた。これは超直感じやなくて、信頼から。

「成長したな」

「うん。ますますカツコよくなつちやうだらうね」

獄寺君が居なくなつてから現れたりボーンに返事をしながら、お兄さんの待ち合わせに遅れないようにオレは歩き出した。

お兄さんと合流したオレは近くの公園で説明する。お兄さんはボクシングのシャドーをしながら話を聞いてくれた。トレーニングの時間をもらつてからオレも止めなかつたよ。

「沢田」

「はい」

「さつぱりわからん！」

「だと思ひました」

お兄さんだからね。予想はしてた。トレーニングしながらだつたし。

「けどな、沢田に頼りにされていることはわかる。そして、京子を……いや、京子達を巻き込みたくないからオレに遠慮しているのもわかる」

「……ほんと、そういうところお兄さんだよね。

「大丈夫だ！ 沢田、オレに極限に任せろ！」

「話はあんまりわかつてないんですね？」

「おう！」

あははとオレは笑った。どっピーカンだよ。お兄さん以上の晴の守護者なんて絶対いないよ。こういうところで巻き込んでるつてわかつてるのに、甘えちやうんだよね。お兄さんに晴のハーフボンゴレーリングを渡すと、リボーンがまた顔を出した。ちょ、待つて、その服。

「こつからはオレの出番だな」

「む、パオパオ老師！」

えつ、いつの間にリボーンはパオパオ老師として接触してたの!? オレ、女になつてから初めて会うんだけど……。そういうことにコロネロ来ちゃうし、オレのツツコミが追いつかないと!

「ではな、沢田！」

「あ、はい」

途中から完全に置いていかれたよ。オレの守護者になるつていう話だつたよね? 最後にオレが置いてけぼりつてどうなの……。

「ツナ、まだ半分も配つてねえぞ」

「……うん、次行くよ」

置いていかれたオレが悪いのね……と思いながら今度は学校に向かつた。もう時間

が時間だつたから。

オレが学校についたのは朝のH.R.には間に合うけど、遅刻している時間。そして制服じゃない。けど、担当の風紀委員に止められることはなかつた。オレが風紀委員で顔が知られているからじやない。オレが門をくぐる前に校舎の窓のところからチエツクしているヒバリさんと目を合わせたから。お咎めなしつて伝わつたんだろうね。

スーツ姿で上履きはなんか変な気がしたから、スリッパを借りる。さつきヒバリさんと目が合つたけど、オレは教室に向かう。家の用事で休むとメールして、スーツで学校に来た意味を察しのいいヒバリさんがわからないはずがない。だから後でも怒らないと思う。あまりにも遅かつたら呼び出されるだろうけど。

ちようど先生が来るような時間なのもあつて、教室の扉を開くと視線が集中した。朝から会わなかつたのもあつて、家綱はオレの服装に驚いていた。けど、理由はわかつてから家綱の方へ質問したクラスメイトには父さんの仕事関係と軽く答えていた。

「ツーちゃん、今日はお休みじやなかつたの？」

「うん、休んでるよ」

「休んでないじやないの」

黒川のツツコミにあははと笑う。まあ普通休みつて言つたら、学校には来ないよね。

オレが声をかけるまでもなく、山本はオレのところに来てくれた。竹刀を持つて。

「オレも休む感じか？」

「んー、山本次第かな」

「そつかそつか」

山本はみんなに今んとこ遅刻つてことにしといてと伝言を残した。今んとこつてなんだよつてみんなからツツコミされたけど、そこは山本、笑つて流したよ。

オレと山本は屋上に行つて、今日三度目の説明をした。山本はもうマファイアのことを知つてゐるし、親父さんから時雨蒼燕流を繼いでいる。だからヴァリアリーを誤魔化してる時間をどう過ごすかは本当に山本次第なんだよね。リングを受け取る、受け取らないとか、そういうのはオレと山本の間ではとつくの前に終わつた話。だからすぐに雨のハーフボンゴレーリングは渡した。

「ツナはどうするんだ？」

「オレはしばらく学校には行かないつもり。顔ばれちゃつたし」

多分スクア一口は家綱の顔を知らないんだよね。前の時、オレの顔を知らなかつたらか。オレ達は双子でも全然似てないのもあつて、オレが学校に行かない方が家綱は安全なんだよね。まあラルがついてるけど、隠れてるかどうかでまた違うし。
「おつけ。なら、オレは普通に通うのな。もしなんかあつても任せとけつて」

「ありがとう、山本。助かるよ」

「いいって、オレとツナの仲じやねーか」

ラルの強さを知つてゐるけど、それとはまた別の話だよね。だって、山本はオレが選んだ守護者だもん。

山本が教室に戻るのを見送つたオレは、ヒバリさんに会うために応接室に向かう。どーしよーかなー。どう考へても今日一番の難関だよ。ヒバリさんがリボーンからマフィアのことを見た後に、協力してもいいって感じの言葉はもらつてゐるけどさ。ちゃんと話は通してないからね。ぶつちやけ今日スーツを着たのは、ヒバリさんと話すから。学ランだとオレは風紀委員の一員になつちゃうし、普通の私服で学校に行つたら怒られそうだしねえ。

……思い出してきた。前もこんな感じだつた。ボスを繼いだ後でもヒバリさんに頼むのはちょっと気をつかうというか、ヒバリさんのアジトに行くのが気が重いというか、説得が出来ればこれ以上のない味方なんだけど、説得するまでが大変なんだよ……。そういう意味では骸も似たようなものだつたんだけど、あいつは普段からどこにいるかわかんないし、基本的に非協力だつたから諦めもついた。ヒバリさんは説得できる可能性がある分、失敗できないプレッシャー。説得できなかつたら全部最初から計画を練り直さないといけないぐらい大きな穴になるし、リボーンにはしばかれるし……。

あああ……と応接室の前でしゃがみこんで頭を抱えていると扉が開いた。恐る恐る見上げるとそこにはヒバリさんがいた。オレがいつまでたつても入つてこないから開けたんだろうね。ラルの気配に気付くぐらいだし。

「はあ。いい加減、入つてきなよ」

呆れた顔をしているヒバリさんを見て、ちょっと落ち着いた。そうだよね、前とは違うんだ。一応ヒバリさんとも幼馴染つて言えるぐらい付き合いは長いんだよ。それこそ咬み殺す前に、話を聞いてくれるぐらいで。オレの目が真っ赤に腫れていたら、ご飯に連れてつてくれるぐらいに。

応接室に入つて誰もいないと確認したオレはすぐに頭をさげた。

「ヒバリさん、オレの雲の守護者になつてください!!」

「やだ」

……今のはオレが悪かつた。オレはヒバリさんに守護者になつてほしいけど、他の守護者と同じことをしてほしいわけじゃないから。

「ちょ、ちよつと待つてください。ちゃんと説明しますから……」

オレは必死に説明した。ヒバリさんは今まで通り自分の理念に沿つて行動してほしいと思ってるし、邪魔をする気はないって。ボンゴレの力を使って欲しいと思うぐらいだよ。そのかわりにオレの相談を聞いてくれれば嬉しいなつて感じで。もちろん話に

乗るか乗らないかはヒバリさん次第。オレは出来ればヒバリさんとは対等な関係でいいんだよ。

「僕はボンゴレの力なんていらない。交渉不成立だよ」

「ま、待つて。えっと多分ヒバリさんにとって一番のメリットはそのリングです」
オレがそう言うとヒバリさんは何言つてんのっていう顔をした。いや気持ちはわかるけどね。そのリングはオレの守護者っていう証だし。

「前にオレ、手から炎をブワツって出すつて言いましたよね。そのリングがちゃんと揃えば、オレの炎に対応出来ると思いますよ」

「ははは……。獲物を見るような目で見られたよ。まあわかつてて言つたんだけどね。これから先、オレや骸と戦う気ならそのリングは必須です。リングにはランクつていののがあって、このリングを超えるようなものはありませんね。同等のものは1つ知つてますけど、それは他のマフィアが代々管理してますからヒバリさんがもらえるかはわかりません」

「ふうん」

「えっと探せばいいと考えてるかもしだれませんけど、ほとんど残つてないかも?数年かけて所有者のないリングを探してもらつて、オレが管理してますから」
正確に言うと川平さんだけね。でも多分オレが欲しいって言つたら、川平さんが使

わない分は全部くれるよ。

ジロツて睨まれたちやつたなあ。でも、集めちやつたんだもん。それなのに欲しかった大空のリングは全然なかつたし。ボンゴレリングもだけど、大空のリングにはわかりやすくファミリーの紋章が入つてるから碎いちやつたんだと思う。もう見つけるのは白蘭ぐらいじやないかな。

「作るつていう手がありますけど、今のヒバリさんにはツテはないと思いますし……」

オレもまだタルボじいさんと接触できてないんだよ。まあたとえ接触できてもリングがないと話にならなかつたから後回しでいいやつてなつて。それに前みみたいに9代目からの紹介の方がいいと思つて。そつちの方が信頼もあるだろうし。

「あ、後お金も」

確かにすっげーお金がいつたはず。前にヴァリアーリングつてどうやつて作ったか聞いたことがあるんだよ。オレ目ん玉飛び出るほど驚いた記憶があるから。いくらヒバリさんでも無理だよ。額がおかしいから。ランクを落とせば作れるかもしれないけど、それじや意味ないよ。

「……リング、本当に必要?」

「間違いなく。あ、これは秘密ですよ。この情報を知つてるのはマフィア界でも一部で
しようから」

「君は未来でも見えてるの」

どういう意味だろ？また顔に出てたのか、ヒバリさんが教えてくれた。

「君はいつから集めてるのっていう話。僕ならその情報を掴んだ時点で集める」「……あ」

うん、やつちやつたね。骸の呆れた顔が浮かんだよ。

「うーん……産まれる前からかな」

嘘をついて誤魔化してもよかつたけど、そうすればヒバリさんはもうオレを信じない気がしたからやめた。

……ほらね。ヒバリさんは何か言おうとしたけど、オレの顔を見てやめたもん。相変わらずオレの顔どうなのって話だけど。

「……交渉成立だよ」

その言葉を聞いて、ジーンと感動した。オレ、頑張ったなあ……。小さい時から目をつけられて、骸との間に何度も入つて、全部、全部無駄じやなかつた……！

「これから日曜日が楽しみだよ」

「すみません。やっぱなしで」

「やだ」

オレなんでヒバリさんに武器を与えちやつたのー！？

細かい話し合いを終えたオレは応接室を出た。悪い内容はなかつたんだけど、やつぱガツクリと肩を落としたよ。

ツナと声をかけられて振り向けば、ディーノさん達がこつちに向かつて歩いていた。いつものように挨拶した後、ディーノさんに心配そうな目を向けられてしまつた。まあ今回は態度に出てるつて自覚してるけどね。

「……恭弥を説得できなかつたのか？」

「大丈夫です、出来ましたよ。ただ、ヒバリさんを強くしてしまふことに頭を抱えたくなつて」

「そ、そろか」

まさかそんな内容とは思わなかつたみたいで、ディーノさんが引いていた。

「すまん、ツナ。今から恭弥を鍛える」

「もうダメだー！」

今度こそオレは頭を抱えたよ。

「うるさいよ。……ワオ。懲りずにまた来たんだ」

あはは、仲良いですね。嬉しそうにトンファー出しちやつてるし、デイーノさんは
デイーノさんでムチかまえちゃつてるよ。

「ちょっと君、今度の日曜日は逃げないでよ」

「……はい」

はあああと大きなため息を吐きながらオレは2人から離れたよ。このまま学校を出
る前に一応職員室に顔を出す。しばらく休むことの報告をしにね。ヒバリさんの許可
を取つてますし連絡がいくと思いますつて言えば、引き止められなかつた。学校に来な
いのもあつて最後に念押しされたんだよね……。

今週の日曜、オレ死ぬ気にならない状態でヒバリさんの相手出来るのかな。……とい
うか、今度の日曜つて絶対リング争奪戦の途中でしょ。オレ、何やつてんだろ。マジで。

一度家に帰つて、クロームにただいまと声をかける。いやまあ夜までまた出かけるけ
ど、クロームに待つてもらうのとは違うから、顔を出したんだよ。後、着替え。

クロームはちゃんとしてるから、今から学校に行くみたい。オレだつたらサボるよ。
……ごめん、嘘。ヒバリさんとリボーンが怖いから行くかも。

母さんにしばらく学校休んだけど、もう許可取つてるから連絡しなくていいって伝え
る。それと休むけど、出席扱いになることも。

「あら？ そうなの？」

「うん。ヒバリさんには風紀委員の仕事を頼まれたんだ」

学校に来れないなら、遠出してきてつて。いつも放課後しか見回りしないのもあって、オレの活動場所は学校周りになるんだよね。風紀委員の中でやつぱオレが一番人当たりがいいから、暇なら行つてきてだつてさ。もちろん風紀を乱した人がいれば捕まるように言われた。

別に高校に行くつもりのないオレは、出席数とか関係ないんだけど、学校を休む言い訳にもなるし、ヒバリさんの話に乗つたんだ。オレの場合、修行すれば使えるようになるとかの話じやないし。

ちなみに見回りしている時にヴァリアーが襲つてくる可能性があるから最初は断ろうとしたんだよ。でもヒバリさんが、君がそんなへマするの？ という一言でその話は終わつた。これで建物とか壊しちやつたらどうしよう。怖い。

学ランに着替えたオレは並盛の街を見回りするために家を出た。

「……いいの？ 聞かなくて」

「おめーに任せるつて家光が決めたんだ。オレからは文句ねえぞ」

ヒバリさんとの会話を聞いていたのにね。そのことにはスルーしたよ。オレが何か隠してるのも知つてるし、大空つてそういうものと思つてるのかなあ。

オレの首には今3つのリングがかかつてゐる。大空はオレ、霧の守護者候補である骸は今居ないから渡せない。問題は雷のリング。

「決めてはいるんだ。ただ、今渡していいのかわからんのだ」

甘いと言われるだろうけど、オレはやっぱランボが大怪我するのをわかつて渡せないよ。けど、大人ランボが幼いオレをどんどん連れ出してくださいと言つた言葉も覚えている。

「おめーのそういうところ、オレは嫌いじやねーぞ」

「……リボーン？」

「マフィアのボスとしては失格だがな」

「ははっ」

オレが男なら、つべこべ言つてねえで渡しに行けつて蹴られていただろうな。こういう優柔不断などころはリボーンに何度怒られたか……。それでもまたギリギリに答えを出すんだろうな、オレは。

「でもお前がオレの優柔不断などころ嫌いじやないとは思わなかつたなあ」

「おめーだからな」

「……リボーンつてオレのこと結構好きだよね」

なんだかんだ言いながら、前の時もオレが死ぬまでほとんど一緒に居たもんな。そ

りや依頼を受けたりしたら出かけてたけど、戻ってきたもんな。9代目の依頼はオレが
継いだ時点で終わっていたのにね。

ピタツとリボーンの足が止まつたから、オレも足を止めて振り返る。

「どうしたの? リボーン」

「……アリアを知つてゐるか?」

「うん。知つてゐるよ。確かジツリヨネロファミリーのボスで、アルコバレーノのボスで
もあるんだよね?」

「そうだぞ」

……大丈夫かな。オレ、ちゃんとポーカーフェイス出来るかな。

だつてリボーンだよ、もしもの時はオレがアルコバレーノになる覚悟をしていること
に気付いちやうかもしれない。そのことがバレたら、どつか行つちやう気がするんだ。
オレをボンゴレ10代目にするために、リボーンは自分を切り捨てる。呪いを解いて
も、戻つてはこない。だからリボーンにはオレが呪いを解こうと考えてゐるだけって思
わせないといけない。

「リボーン、オレとの約束覚えてる?」

「おめーの子どもの家庭教師だろ」

「うん。絶対に叶えようね」

オレがそう言うと、リボーンは帽子を抑えて歩き出した。もしかして、ちょっとテレた？……そんなことあるんだ!? 驚きつつも、初めて見るリボーンの姿にオレは笑いを噛み殺しながら追いかけたんだ。

平和な時間は5日しかなかつた。

オレはその日の朝から超直感が反応した。まだそれほど強くないから、前みたいに夜に来るんだろうね。まだ時間があるのに、超直感が警告するのは今の状態ではXANXUSには敵わないからだと思う。まだ手から炎出せてないしね。そう思うとやつぱフウ太のランディングが一番謎だなー。なんでオレが一位なんだろうね。

「父さん」

「おー、どーしたー。父さんの目玉焼きはあげないぞー。ツナがどうしてもつていうなら、わからんけどなー」

いや、別にいいよ。自分の分があるし。つてツッコミしてる場合じやないや。まあ母さんがいる朝食中に声をかけたオレも悪いんだけどさ。いやでも念のためさつさとオレはこの家から離れた方がいいし。

「今日、オレに会いに来る人達がいるんだけど、やっぱ失礼がないようにスーツの方がいいと思う?」

「そうだなー。それがいいかもなー」

「そういうことだから、母さん今日帰つてくるの遅いから心配しないでね』

「家に連れてきてもいいわよ?」

「んー仲良くなつたら連れていくね」

オレの言葉に父さんが噴いた。家綱も意味が通じていたみたいで、ポカーンつて顔をしていた。そんな中でも「その時を楽しみにしてるわー」つて返事する母さんつて凄いやね。オレは2人の反応に腹筋が鍛えられてるよ。

家を出る前に、ちび達のなかでも一番大きいフウ太に今日の夕方以降は家の中に居るよう言いつけた。情報屋でもあるフウ太はその意味をしつかり理解してるんだろうね。ランボとイーピンだけじゃなく、家兄のことも任せせて!つて返事をしてくれたよ。クロームにもお願ひをした。オレの帰りを待つてていいだろうけど、今日はクロームの家で京子ちゃん達とパジャマパーティしてほしいつて。フウ太へのお願ひを聞いていたのもあつて、夕方からずつと一緒にいるつて返事をしてくれた。ほんと、いい子に育つたよねえ。

ヒバリさんにも今日は風紀委員の活動をしないことをメールで報告する。ついでに

ちよつと騒がしくなつたらすみませんつていう一文も入れた。返事はかえつてこなかつたから多分大丈夫。後はオレが人気がないところでいるだけかな。

「ツ、ツナ……、さつきのは……」

用が済んだし、さつさと家から離れようとしたのに、父さんに引き止められた。さつきのXANXUSのことかな？

「そのままの意味だよ。オレは仲良くしたいと思つてるから」

「……そとか」

難しいことだと父さんはわかつてゐるのに、反対しなかつたよ。オレも仲良くなるのは難しいとは思つてゐるけど、家には来る可能性はあるよ。前にもオレの部屋にきたしね。

「ツナ、父さんはまだ手が出せない」

「うん。大丈夫だよ。いつてきます」

いや、手から炎はまだ出せないんだけどね。でもまあ今回も父さんはギリギリに間に合うだらうなあつてなんとなく思つたんだ。そういうところが父さんだから。

でもなあ、ちよつと氣になる。父さんが9代目がやられる可能性に全く勘付いていないことに。やっぱ、こういうところで白蘭っぽいなあつて思うんだよね。オレらが簡単に振り回されてるところがさ。

人気のないところつて、なんで不良が居るんだろうね。オレ、今日学ランじゃないのに。……学ランじゃないから、襲われそうになるのかな。はあとため息を吐きながら、氣絶させて草壁さんに連絡を入れたよ。今ヒバリさんに連絡入れるのはダメかなと思つて。でもオレの予想を反して、後で電話かかつてきた。なんで僕に連絡しないのつて。思わず隣に居たりボーンを見ちやつたよ。マジで？ つて感じで。

オレとしてはヒバリさんがバトル中だから気をつかつたんだけど、前と違つてヒバリさんは事情を知つてゐる。ディーノさんが戦いを仕掛けた理由もヒバリさんはわかつてゐる。鍛えるという考えにはムカついてるだろうけど、ディーノさんが逃げないならいいつてことだと思う。ヒバリさんはディーノさんを咬み殺したいはずだから。そして逃げないつてわかつてるなら、風紀活動もちゃんとするよね。

そんなトラブルがあつたものの、オレは今日一日中暇だつた。多分夜だらうと予想しているけど、念のために居るだけだからね。することもない。ゲームもマンガもないし。せつかくだからリボーンと話をして過ごしたよ。いろんな国の言葉でね。やつぱちよつと忘れてるのもあつて、詰まつたりはしたけど、リボーンには悪くねえと言つてもらえた。

コンビニで買った晩飯を食べ終わると、やつと人の気配がし始めた。朝みたいな不良じやないのは動きでわかつてゐる。でもオレの超直感は反応なし。正確にいうと、反応は

しているけど強くなることはなかつた。

「それ使うのか？」

「うん。せつかくだしね」

オレがトンファーを出したらリボーンに声をかけられちゃつた。これぐらいでしか使うことないんだよ、マジで。一般人にトンファーを使うのは過剰な気がするし、強いと思う人にはオレのトンファー使いでは通じないしね。

ボコボコとトンファーで殴つた。うーん、雷撃隊だね。気絶してるところ悪いけど、無線を使わせてもらう。

「やるならもつと強い人寄越さないと、怪我人が増えるだけだよ」

『貴様……』

ごめんね、レビイ。他のところ、特にランボのところに行かれちゃ困るから挑発した。レビイが部下思いなのを知つてゐるから。

効果はあつたみたいで、すぐにレビイ達が姿を見せた。

「やつたのはお前か。……罠か！」

それでもやつぱ暗殺部隊の一員だよね。オレの挑発には乗つたけど、首からリングを3つ下げるのを見て警戒したもん。

「違うよ、レビイ。大空のリングも持つてゐる。彼女が沢田ツナだよ。どうやら守護者

を集めきれなかつたようだね」

「はつ」

「油断は禁物だよ。僕の存在に気付いていたんだ」

それでマーモンは姿を見せたんだ。せつかく幻術で隠れていたのに、変だなつて思つてたんだ。

「ツナ、行けるか」

「大丈夫。でもトンファーは使えなさそう」

マーモンの姿を見て、リボーンの警戒があがつたから聞いたみたい。アルコバレーノかもしけないつて疑つてるからしようがないけど。呪いをといたマーモンの凄さはオレもよく知つてるからね。……でもなあ、正直あいつより怖くない。

「それもそうだな」

「え、またオレ顔に書いてた?」

リボーンは手を出せないから2対1の状況のはずなのに、一向に警戒しないオレ達にしごれを切らしたのか、レビイが武器に手をのばした。

「待てエ、レビイ!」

「一人で狩っちゃダメよ」

「よくも騙してくれたなあ」

「つて、二人しかいねーじやん。つまんねーの」

言いたい放題だなあと思いながらも、こんな感じだつたと思うオレがいる。

「そんなことないよ、来るよ」

オレがそう言つたら、人の気配がし始めた。ヴァリアラーのみんなも気付いたみたいで、オレを警戒した。オレの方が感覚が鋭いつて思つたのかもしれない。でも多分そこまで変わらないよ。みんなが来るつてわかつっていたから。前がそだつたとか、超直感とかじやなく、信頼でわかる。そういう意味ではヒバリさんは来ないだろうなあ。オレがやられるなんて思つてなさそう。

「10代目！」

「ツナ！」

「沢田！」

父さんから聞いて、慌てて駆けつけてくれたんだろうなと思つたオレは嬉しくて、ヴァリアラーと緊張状態が続いてるけど、みんなに手を振つたんだ。

5

オレはそこまで気にならなかつたんだけど、オレに近づけば近づくほど獄寺君達の足が重くなつた。やつぱりヴァリアーの殺氣つてすごいんだなあ。あ、でも前と違つてヒバリさんはちょっと優しいし、黒曜組も攻めてこなかつたもんね。経験不足なだけかも。オレは慣れちゃつただけだし。

でもちやんとオレの側に来てくれたよ。

「みんな、ありがとう」

声をかけると、ちょっとホツとしたような顔をした。これなら大丈夫かなーって思つたんだけど、オレの超直感が反応した。まあ少し前から気配は感じていたから、わかつてたけどね。誰が来るかって。

「でたな……まさかまた奴を見る日が来るとはな、XANXUS」

相変わらずXANXUSは暴君で、オレと目があつただけなのに手に炎を込め始めた。ヴァリアーのみんなも焦つてるじゃないか。……つて、オレも焦つた方がいいよね。

どーしーよーかなー、なんて思いながらも、みんなを守るために一步前に出る。今

オレの死ぬ気のコントロールなら、防げるはず。でも、消費が激しいから何発も無理だよね。死ぬ気の零地点突破改、使えないかな？

「死ね」

懐かしいなあ。って思うオレは多分重症。そしてもうちょっと焦つた方がいいよね。でもXANXUSが来たことに超直感は反応したけど、今からの攻撃には反応していい。

だから、前の時みたいに父さんが間に合う。

「待て、XANXUS。そこまでだ」

オレの予想通り、ツルハシが地面にささつた。……うん、ささつたよ。

「ちょ、父さん。壊さないでよ！ヒバリさんに怒られるじゃん！」

「……父さん、もうちよつと喜んでほしいな。最近、ツナが冷たい」

「昔からこんな感じだつたよね」

別にふざけてるつもりはないんだよ。だからXANXUS、殺氣をビリビリ送るのはやめて。

「真面目にやれ。家光」

リボーンつてほんと女に甘いよね。怒られたのは父さんだつた。空気を壊したのはオレなのに。……壊す前から、オレだけこんな感じだつたから怒られなかつたのかも。

父さんにはXANXUSが目を覚ましたっていう情報しか流さなかつたから、9代目がどうなつてゐるか知らない。確認する間もなかつただろうし。9代目からの勅命をバジル君から受け取つたけど、これ偽物なんだよなあ。

えーっと、なになに。イタリア語だよ、懐かしい。

「うげつ、読めねえのな。なんて書いてあるんだ? ツナ」

「極限わからんぞ!」

お兄さんにもわかりやすく説明した方がいいよね。

「9代目とN.O. 2であるオレの父さんが次期後継者を別々で選んだから、同じリングを持つ同士で勝負しろって」

「なるほど。わかりやすい! 極限、晴は誰だー!」

「指示があるんだとよ。今すぐじやねえ」

あはは、オレのツツコミを獄寺君がしてくれたよ。お兄さんがもう戦う気でいたからね。

ただなあ……。オレの記憶力じやあんま自信はないけど、後継者がXANXUSが相応しいと思つて9代目が目覚めさせたつて書いてあるんだよ。そもそも振りかご事件のことを知つてる人も少なかつたよね? これつて何かのヒントかな。……なんのヒントだよ。お願ひだから骸はやく帰つてきて!

骸がXANXUSの氷をとかした人物を追つてていることを知っているリボーンは、オレの顔を見た。この紙、変だよねえ。9代目の死炎印が入つてゐるから、やるしかないんだけどね。父さんが不思議に思つてないから、リボーンとラルがまだ教えてないのは確実だし。これはオレ達が掴んだ情報だから勝手に流さなかつたのかも。オレが分けた方がいいつて言つたのもあるかもしねないね。

新たな人の気配がしたから、オレはそつちに視線を向ける。うーん、チエルベッロはまた居るのかあ。この人達つてほんと何考へてるんだろうね。出てくるタイミングを考えると7・関係なんだけど、川平さんとの関係はないみたいだし。

チエルベッロが審判することにXANXUSは異存はないみたい。父さんは異議ありつて言つたけど、認められなかつたね。これも前と一緒。

「オレもちよつといいかな? あ、審判に反対とかじやないから。聞きたいことがあつて」

チエルベッロ達は顔を見合せた後、オレに顔を向け頷いた。

「チエルベッロ機関つて普段どこに居るの?」

「…………」

「うん、もういいよ」

答えられないというより、答えになつちやうから言えないが正解みたい。オレの仮説が正しいかな。チエルベッロは未来から來たんだ、10年以上も前から。

「ツナ、何か知つてんのか」

「うーん、オレの中だけに留めた方がいい気がする」

「……そとか」

「ごめんね、トリボーンに謝る。いやでも黙つてた方がいいと思うんだよ。オレが話したことでまた未来が変わっちゃうし、難しい。

XANXUSから更に殺氣を送られちゃつたけど、どうしようもないよと流す。いつものことだつたから。

「場所は深夜の並盛中学校。詳しくは迫つて説明いたします」

「ちよつと待つた！」

「……なんでしようか？」

オレが止めたなら、チエルベッロが警戒したよ。さつきのそんなに嫌な質問だつたんだなあ。

「並中でするなら、風紀委員長にちゃんと許可とつて！一応オレからも口添えするからさ」

「風紀委員長、ですか？」

「そう。オレが許可とつてもいいけど、オレ達は許されてもチエルベッロ機関は許さないと思うよ。それでもいいならいいけど、オレは助けないよ」

「……わかりました」

よかつたよかつた。ヒバリさん怒らせると大変だから。オレに同調するかのように、獄寺君達も何度か頷いた。前の時、ほんとよく無事だつたよね。

そんなことを思つてゐる間に、チエルベッロは明日の時間を言つてから去つていつた。そして XANXUS 達も。

獄寺君達にお礼をしたし、このまま解散のつもりだつたんだけど、父さんに捕まつた。リボーンに任せようと思つてたけどダメみたい。

「ツナ、チエルベッロ機関のことを教えろ」

「家光」

リボーンは止めたけど、父さんは首を振つた。門外顧問として聞き流せないんだろうね。

「んー、オレから言うとすれば、父さんと一緒にチエルベッロ機関なんて聞いたことがないってこと」

「ツナ」

「……骸も情報を掴んでねえつてことか」

「うん、そういうこと。本当に9代目に仕えていいるなら、あいつが知らないわけないよ」特にオレと一緒に骸も前のこと知つてるんだよ。チエルベッロの存在を探さないは

ずがない。オレに報告がないってことは見つかってないってこと。まあ黙つてる時もあるけど、チエルベツロの存在は前の時からオレが気にしているのを知っていたからね。

骸がボンゴレに詳しいことはリボーンから聞いて父さんも知つてゐみたいで頷いた。チエルベツロに対しては結局何もわからなかつたから、納得はしないけど。

「オレの超直感には引っかかるなかつたから、敵じやないよ」

味方とも言えないけどね。オレがあえて隠した言葉は二人ともちゃんとわかつたみたい。難しい顔をしている。

「それより父さんはイタリアに行つた方がいいよ」

「ああ。9代目が心配だ」

「どういうことだ」

簡単にオレらが掴んでた情報を教える。氷をとかしたのが9代目なら、遅くとも骸はこのタイミングに戻つてきてるよ。今のオレだとボンゴレじやそんなに権限もつてないし、結局オレはなんもできないんだよね。だから後はリボーンと父さん達に任せて獄寺君達に声をかける。オレ達の話が終わるの待つてくれてたから。

「みんな、お待たせ」

帰つてくれても良かつたのについて言つたら、オレを送るために待つてくれてたんだつ

て。学校の帰りとかも前は同じ道までだつたけど、遅い時間だと家まで送つてくれるようになつたもんね。こういうところで自分が女つて再確認するよね。いやまあちゃんと女と思つてるけど。

「ツナ、明日から学校来れるんじやね？」

「あ、そつか。ほんとだね」

山本に言われて氣付いたよ。ボンゴレ公認の決闘だから、他のところで手を出しちゃ問題だよね。反則負けでオレが10代目に決まつちやうし。最悪、復讐者がくるよ。

「よ、良かつたスね……10代目……」

「うむ。京子も寂しがつていたから極限喜ぶぞ！」

……お兄さんは本氣でそう思つてるね。獄寺君はまだ修行が終わつてないから、悔しそうに山本を見ているよ……。

「みんな、よく聞いて。この勝負、勝たなきやいけないことはないから」

いつもなら真っ先に獄寺君が口を開く氣がするのに、オレを見て何も言わなかつた。正直、オレの本音は出なくていい、なんだよね。でもそれは言つちやダメ。みんなが覚悟してオレからリングを受け取つてくれたんだから。そういうのもわかつて、何も言えなくなつたのかも。オレ、顔にいろいろ書いてるみたいだから。

「みんなには言つておくね。オレの雷の守護者はランボなんだ」

「ランボって、あのちっこい？」

「なんであのアホ牛が……」

「おお！ わかつたぞ、あのちびっ子か！」

「そういえば、お兄さんとランボってそんなに接点なかつたかも。2人のヒントを聞いてわかつたみたい。まあ晴と雷だしね。

「みんなが言う通り、ランボはまだちっちゃくて、戦つてと言えないのに、勝てなんてもつと言えないよ」

オレは首から下げる雷のリングを触りながら、また口を開く。

「リングもいつ渡せばいいのか、オレはまだわからない。けど、オレの雷の守護者は、他の誰でもない、ランボ。オレが決めた」

みんなわかつてほしい。どの守護者もオレが選んだ。勝ち負けとか気にしなくていい。オレが選んだのは君達なんだ。

「ツナ、それを言われるとますます負けねえって」

「え？ なんで!?」

どうしてそうなつたの?! とオレはツッコミしたけど、言葉にした山本は笑つてゐるしお

兄さんも頷いたよ。獄寺君はオレの味方だよね? と視線を向ける。

「……自分、まだ10代目のことわかつてなかつたみたいですよ」

「へ？」

「改めて、尊敬します！10代目！」

「ええええ！」

獄寺君にキラキラした目で見られるし、山本には頭を撫でられるし、お兄さんはめ
ちゃくちや燃えてるし……。なんでこうなつただろうね。

久しぶりの学校だけど、オレはまずヒバリさんに報告へ行く。後回しなんて出来ないから。そう思つてたんだけど、いろんな人に捕まつた。ヒバリさんが怖いって感じで。デジヤブだよ……。

でも気持ちはわかる。ヒバリさんとディーノさんが戦つてる音がたまに聞こえるんだよ。他の風紀委員には聞けないし、オレに言いたくなるよね。まあオレも答えられないんだけど。そもそもオレのせいだしね。

みんなにはなんとか誤魔化して、オレは屋上へと向かう。ひい、2人とも怪我でボロボロじやん！

「シャマルー！ つて女しか診ないんだつたー！」

ダメだー！ と頭を抱える。オレが騒いでるのもあつて、2人は手を止めた。

「お？ ツナ、どうした？」

「なに、今いいところなんだけど

……うん、黒川に何度か普通じゃないって言われるけど、この2人よりはマシだよね。

怪我とかそつちを気にしようよ。

言つてもしようがないし、昨日決まったことを伝える。並中でするからヒバリさんの機嫌が悪くなつたけど、チエルベツロ機関に許可をもらいにくるように言つたことを伝えたら、少しは良くなつた。オレみたいてチエルベツロも交渉する羽目になるんだろうなあ。ヒバリさんなら修理は当然として、夏祭りの時のようにお金取りそう……。

約束通り伝えたからオレは退散する。オレもつて言われたら嫌だし。日曜日だけで勘弁してください！

この後ふつーに授業を受けた。京子ちゃんに何か言われるかなつて思つたけど、何もなかつたよ。お兄さんが変だなーとは思つてるけど、オレが関係していることに気付いていないのかかもしれない。前と違つて、オレの欠席は風紀委員活動で、オレはお兄さんからボクシングの勧誘は受けてないしね。朝のジョギングでは会うけど、それぐらいだから。何よりパンツ一丁で走り回つてないし……。

京子ちゃんで思い出した。コロネロつてお風呂一緒ににはいつてないよね？まさかそんな自殺行為してないよね？ラルがここに居るんだからほんとやめてよね！オレ、止めないよ！

氣にはなつたけど、藪をつづいて蛇は出さないよ。オレ、やっぱ成長した。前のオレなら絶対口にしてたから。

夜遅く、スーツに着替えたオレはこつそり家を出た。ちゃんとクロームには伝えてるから、母さんが気にしたら誤魔化してくれると思う。……少し悩んだけど、ランボを連れて。

「みんな！」

学校につくとみんなが居たから手を振る。ちょっと驚いたけど離れた場所にヒバリさんも居た。勝敗というより、他の守護者の方が気になってるのかな。だから当然なんだけど、ディーノさんも居た。でもこれが終わればまたバトルするんだって。……この2人つていつ寝てるんだろう。それも明日は日曜日なのにね。

「**厳**正なる協議の結果、今宵のリング争奪戦の対戦カードは決まりました。第1戦は晴れの守護者同士の対決です」

「ねえねえ、あれなあに？」

オレの腕の中に入るランボはこの勝負に用意されたリングに興味津々だつた。
「……わかつてはいたんスけど、何もわかつてねえ」

獄寺君の言葉にハハハ……と苦笑いする。でもそうだよな、オレはランボになんも説明してないよ。

「ランボ、よく聞いて」

「んー？」

「ちびのお前には眠いだろうけど、ちゃんと見ててほしいんだ」

ジツとオレの顔を見ていたけど、ランボはすぐに横を向いちやつた。やれやれというような反応をみんなしてるけど、多分コイツはわかってる。お前はオレ達の背中を見て、どう感じるんだろうね。

お兄さんが特設リングに入つていったのを見て、なんか忘れてるなあと思った。サングラスについては悩んだけど、渡すのをやめたんだよね。そりや渡した方がいいに決まってるんだけど、なんか違う気がしたから。前の時のお兄さんの覚悟を知っているから余計に。

「ツナ、どうしたんだ？」

「あ、思い出した」

山本に話しかけられて思い出したよ。大事な思い出だつたのにね。円陣組んでなかつたや。でも……。

「10代目？」

「……ううん。なんでもない。大丈夫だよ」

ちゃんとみんなわかってる。誰一人欠けない、欠けさせないって。

「晴のリング、ルツスーリアＶＳ笹川了平。勝負開始!!」

この言葉の後すぐに照明がついて、リングが光る。オレは前の時と同じようにリボー

ンに借りた。獄寺君と山本がサングラスをお兄さんに渡そうとしたけど、チエルベツロのルールに阻まれる。

「……ランボ、ごめん。自分で立つて」

誰かがオレを呼んだかもしれないけど、反応できなかつた。お兄さんにサングラスを渡さないつて決めたのはオレだ。……でも後悔ばかりだ。

「沢田!!」

「つはい！」

「極限に問題ない!!!」

グツと両手を握りしめ、歯も食いしばる。お兄さんは照明のせいで何も見えてない。見えてないけど、オレがどんな顔をしているかなんてお見通しだつたんだ。

「よく言つたぜ。了平！それでこそオレの弟子だ、コラ！」

「あら？美しい恋情？友情それとも師匠愛かしら。んまあ、なんでもでもいいわ。強がりはよしなさい、あなたのパンチは通用しないんだから」

ルツスーリアに言われても、お兄さんは諦める気配はなかつた。

「この右拳は圧倒的不利をはね返すためにある!!」

うおおおというお兄さんの掛け声の後、お兄さんは^{マキンマムキヤノン}極限太陽を放つたんだ。

パリンという音と共に、照明が割れる。お兄さんの宣言通りに不利な状況は終わつ

た。

「沢田、お前は勝つ必要はないと言つたな」

ヴァアリアーがざわつとしたけど、オレはお兄さんの言葉に頷いた。

「オレもその意見に賛成だ。負けて得るものもある。だがな、沢田がオレを選んだことに後悔だけはさせん！だから……オレはこの勝負勝つ！！」

お兄さんの覚悟に応えるかのように、右拳が光り始める。

「極限!!
マキシマム
太陽!!!
キャノン

一撃でルツス・アリアのメタル・ニーが碎けた。リボーンに呼ばれて、自分が泣いてることに気付いた。ハンカチを用意してくれてたけど、また断つてオレは袖で勢いよく拭つて、口を開いたんだ。

「ありがとう、お兄さん！」

「おう！」

オレに向かつて右拳をあげるお兄さんの姿はカッコよくて……。オレはもつとちゃんとしないといけないなあつて思つたよ。リングを受け取つてくれたみんなに悪いや。そりやオレは優柔不斷だからこれかも迷うだろうけど、これだけは迷っちゃいけないとだつた。

「ツーナつ」

ガシッと山本に肩を組まれて、あわわとよろけつつも笑った。そうだよね、山本が一番お兄さんの気持ちわかるよね。

獄寺君が山本に怒つてるのをまあまあとなだめつつ、お兄さんがいるリングに視線を向ける。もうルツスーアリアにお兄さんのパンチを防ぐことは出来ない。だけど、ルツスーアリアは簡単には負けを認めない。……ううん、負けれないんだ。

どんつという音とともに、ルツスーアリアが倒れる。ゴーラ・モスカに攻撃されて。

「弱者は消す。これがヴァリアリーが常に最強部隊である所以の1つだ」

わかつていた、オレはこの結末がわかつっていた。けど、やつぱりオレは認めれないよ。でも今はまだ口に出せない。……言つても、届かない。たとえオレがルツスーアリアを庇つたとしても、今しか守れない。それじや意味がないんだ。

「……わからせ、なきや」

「10代目？」

「あ、いや、ごめん。なんでもないよ」

獄寺君に慌てて大丈夫と伝えてる間に、チエルベツロから明日は雷の守護者同士の対決と発表された。獄寺君達はオレの足にしがみついてるランボに視線を向けた。明日つてわかつていたけど、わかつていたけど、どーしょー！

オレがあああと頭を抱えてると、特設リングが壊れてヴァリアリーが行つちやつた。

なんだか悩んでばつかりいるなあとため息を吐いていたら、後ろから殺気がしてしゃがむ。こんなことする人って、あの人しか居ないよね……。

「何しやがる、ヒバリ!!」

「明日、わかつてるとよね?」

「……そうでした」

いや、忘れてなかつたよ!? ちゃんと覚えていたから! と思ひながら振り返つたけど、ヒバリさんはもうオレに背を向けて歩いていた。デイーノさんが慌てて追いかけていったからこの後バトルするんだろうね。

「10代目、ご無事ですか!?」

「あ、うん。それは大丈夫」

さすがです! つて感じで獄寺君が感動しているけど、苦笑いするしかない。

「ふむ? 極限、なんだつたのだ?」

「あ、お兄さん、今日はありがとうございました!」

「おう! それで、ヒバリはなんだつたんだ?」

そういうやお兄さんは知らなかつたつけ。毎週オレがヒバリさんと会つてること。軽

くその説明をして、上の空の状態でくるなつていう意味ですよつて教えたんだ。オレが次から次へと悩むから、喝をいれたんだろうね。

「ハハツ、ヒバリらしいぜ」

「うん。優しいよね、ああ見えて」

オレらがこんな会話してたら咬み殺されそまだけど……。うん、ちょっとブルっときたよ。怖い怖い。

「こういうところでポイントをかせーでるんだな」

「ポイントですか?」

「ああ。フウ太のランキングでツナの憧れランキング1位はヒバリだぞ」

「あ、うん。そうなんだ。……って、リボーン、なんでバラしちやうのー!?

わー!って言いながら、ランボを抱えてダッシュして家へと逃げる。超恥ずかしいじやん!!

湯船に顔までつかつてブクブクと息を吐く。思いつきり逃げちゃつたけど、別に逃げなくて良かつたじやん。逃げた方が気まずいよね、どう考えても。

「ぶはあつ。もお、リボーンのバカ」

まりリボーンもオレがランボのことで思い悩んでるから、一瞬忘れさせようとしたんだと思う。オレってドツボにハマるタイプなのに、時間がもうないし。……いやでもやつぱアレはないよ。フウ太もそう思つたんだよ、みんな勘違いしちやうじやんか。

ちゃんと訂正しとかなきや、ヒバリさんに怒られる……。

風呂から出たら、ケイタイの着信履歴が獄寺君で埋まっていた。山本とお兄さんは特に触れることもなく、また明日という内容のメールがきていた。うーん、すごい差。とにかく獄寺君に電話だなあと思っていたら、かかつてきた。

『ごめん、獄寺君。お風呂入つていたんだ』

『ごふつ、つていう声が聞こえた。オレが出たことにびっくりしたのかな?』

「えつと、さつきのことは変な勘違いしないでね。オレ、ヒバリさんの心の強さに憧れるだけだから……」

『だ、大丈夫ス。リボーンさんから聞きました』

『そうなの!? 良かつたー!』

オレが女だからちゃんとフォローしてくれてたんだ。それならなんであんなに電話を? つて疑問に思つたけど、オレの言葉で聞きたかったのかな。それとも何か用事?

『その、10代目』

『うん? なに、獄寺君』

『10代目がどの選択をしても、オレ……達は支持しますよ』

『……うん、ありがとうね。獄寺君』

この後、ちょっと話をして電話を切つた。オレにこれを伝えるために電話してくれた

んだなあ。獄寺君の優しさに感動したよ。みんな、成長するの早いよね。リボーンはオレに追いつこうとするからって言つたけど、もう追い抜かされた気がする。オレが勝てるのって後何があるんだろ。2回目なのに。

やっぱオレはダメツナだよなあと想いながら、飲み物が欲しくなつてリビングへと向かう。明かりがついているシリボーンかな。

「……大人ランボ」

「お久しぶりです。若きボンゴレ」

そういうえば、雷戦の前に話した気がする。すっかり忘れていたよ。でもオレは前と違つて女だから、風呂の時間が長いと思うんだ。それなのに会つたつてことは、父さんの仕業かな。まあ父さんはイタリアに居るから、父さんに言われてラルがしたんだろうけど。

ランボが椅子に座つてるから、オレも座ることにした。これぐらい離れてたら、苦手意識ないかも。前に会つた時はオレが転びそうちつたのもあつて近かつたもんね。

「……何か聞いてる？」

「メモが置いてましたよ、これと一緒に」

20年後のランボの角を大人ランボが持つていた。オレがどう判断するかわからな
いけど、手は打つたんだろうね。

「あのさ、大人ランボ」

「いいですよ」

「へ？」

「子どものオレの代わりに戦つてほしいんですよね？」

まさか大人ランボからそう言わるとと思つてなかつたオレは息をのんだ。

前と全然違う大人ランボの態度に、オレはすぐに返事をできなかつた。そんなオレを見て大人ランボはまた口を開いた。

「ボンゴレがオレを守ろうとしてくれてるのはわかつてます。ですが、オレはもう大人ですよ」

「いや、それはわかつてるけど……」

「それにオレはボンゴレの雷の守護者です」

ハツと顔をあげたら、大人ランボはまっすぐオレを見ていた。

「……うん。ありがとう、決心がついたよ」

「やれやれ。……あなたは本当に優しい人だ」

あはは。大人ランボにも、オレの顔を見れば何を考えてるのか、バレるようになるんだ。

決まつたのもあつて安心したのか急に眠くなつてきたなあ。オレはもう寝るよつて声をかけて立とうとすれば、大人ランボがそういえば……と続けた言葉を聞いて動けなくなつた。

「ちよ、ちよつと待つて。今、なんて言つたの?」

「ですから、白蘭さんとはお会いしましたか?」

「こんなタイミングで白蘭の名前を聞くと思わなかつたオレは混乱しながらも、なんでつて聞いたんだ。

「以前、白蘭さんに頼まれていたんですよ。オレが過去に行くことがあれば、過去の白蘭さん宛に郵送して欲しいものがあるつて」

「はあ?!ちよ、お前、何やつてんの?!」

「え?ちゃんとボンゴレの許可はとつてますよ。もちろんオレの時代のボンゴレからですが……」

オレの……?と聞き返せば、オレは獄寺氏に散々アホ牛と呼ばれてますが、そこまでアホではありますんつて大人ランボに言われたよ。

「中身は?」

「さあ?未来のボンゴレも苦笑いするだけで、中身は見ませんでしたから」

未来のオレ、何してんだろ……。え、ちよつと待つて。これ、オレが骸に怒られるパターンじゃない?いやでも、超直感には引っかかるなかつたから大丈夫なはず。そうだよね? そうであつて、お願ひだから!!!

「受け取つたオレも、過去に行けるかわかりませんよと伝えたんですが、白蘭さんですか

らね。オレが送ったのは間違いないので、あの人の力を考えれば、もうボンゴレと接触していると思ったんですけどねえ」

いや、牛乳飲んでる場合じやないから。つていうか、大人ランボも白蘭の能力知ってるんだ。

「あ、あのさ。お前から見て、白蘭つてどんな奴?」

「……変な兄ちゃん、ですね」

ボフンという音がして、10年バズーカの効果が切れてちっこいランボが戻ってきた。……寝てるし、勝手に10年バズーカ使っちゃダメかな。……使ったとしても、これ以上情報を得れないと思うから使わないけど。

あーなんで1つ解決したのに、また悩みが増えるのー!?

結局オレは一睡も出来ずに、ヒバリさんの元へ向かつた。だから、ため息を吐かれちゃつたよ。言われたのに、こんな状態だつたから。

「違うんです、ちゃんと解決しました!でも別の問題があああ……」

ヒバリさんの視線に耐えきれず、オレは嘆いた。

「あー……ツナ、恭弥もそういう気分じやねーみてえだし、話してみろよ。相談に乗るぜ

?

ディーノさんにそう言つてもらえたけど、オレは口ごもる。どう説明すればいいかわからなかつたから。オレが何も言わないから、ディーノさんがチラツトリボーンを見たよ。でも朝からリボーンにも話してみろつて言われたんだよ。結局言えなくて……だからリボーンも首を横に振つた。

「ふーん。僕があれだけ言つたのに、理由も話す気がないんだ」

あ、あの、意氣揚々とトンファーかまえるの、やめてくれませんか。元々骸のせいで鍛えられていたヒバリさんが、ディーノさんに鍛えられたんだよ。すっげー怖い。つい根つからのビビリ体質のオレは必死に話しますと首を振つた。

「なるほど。だが、これは女に優しくするリボーンには厳しいな」

ギロつてヒバリさんがディーノさんをにらんだけど、これでも褒めてんだぜ? つて流したよ。もうヒバリさんの性格掴んでる……。そしてオレもリボーンに蹴られてたら、話してたつて思つた。これについてオレは頑固だつたわけじやなかつたみたい。

3人が話を聞く体制になつたのもあつて、オレはしどろもどろになりながら説明し始めた。

「ええつと、オレと骸が警戒していた奴がいて、10年後のランボが10年後のそいつに頼まれて、この時代のそいつに情報を流したみたいで……」

「なっ!?」

ディーノさんの反応に、慌てて未来のオレの許可はあつたことを教える。このままじゃ大人ランボが怒られるから。リボーンはそれを聞いて、補足としてヒバリさんに10年バズーカのことを教えていた。知つてる程でオレが話しちゃつたからね。「それで、そいつが多分？リング争奪戦を企てた？た、タンマ。黒幕とかそういうのじやないと思います。うーん、きつかけ？」

「……XANXUSの氷をとかしたのはそいつか」

「あ、それは間違いないと思う。骸からはまだなんも聞いてないけど、多分そう」オレの気持ちがわかつたのか、ディーノさんが頬をひきつらせていた。だよね、そうだよね！未来のオレ何してんの！？って言いたくなるよね！

「君と南国果実が警戒するんだ。強いよね？」

気にするのはそこですか……、ヒバリさん……。

「強い、ですよ。でもまだ骸の方が強いと思う。ただ……あいつの力がやつかいで」

「力？」

「そいつ、パラレルワールドの自分と情報を共有できちゃつて。多分目覚めちゃつてます」

未来のオレのせいで、と付け加える。頭の良いこの3人なら、目覚める前からオレが

どうしてその力のことを知つてゐるのかとか疑問に思つてゐるだらうけど、そこは聞かないみたい。オレがどつか變つてのはなんとなく氣付いてゐるものもあるけど、多分オレを信
用してゐるからだらうなあ。

「おめーが許可したつてことは10年後のそいつは悪いやつじやねえだらうな」

数少ないオレの長所をまたリボーンが見つけてくれた。ちょっと感動。

「大人ランボも変な兄ちやんつて言つてたし、そうだとと思う。でもそいつが酷い奴にな
る可能性があるつてオレはよくわかつてゐるはずなんだよねえ」

「そこまで危険なのか?」

「3・7……、やっぱ2・8かも。それとも1・9? あ、酷い奴になる可能性が後ろです」
「……何考へてんだ?」

「だから寝れなかつたんです!」

未来のオレ、ほんと何してゐんだろうね。自分のことなのに全然わかんないよ!

「それだけか?」

へ? とリボーンの言葉に首をかしげる。

「未来のおめーが何考へてるかなんて、この際、どうでもいいだろ。……ツナ、おめーは
どうしたいんだ」

あ、そつか……とオレは腑に落ちた。未来の自分のことばかり考えてたけど、そん

なの後でいいんだ。

「あいつと……友達になりたい」

「答えは出てんじやねーか」

うんとオレが頷けば、リボーンは満足そうな顔をした。相変わらずポーカーフェイスでわかりにくかつたけどね。

なんかすっげースツキリしたから眠くなってきた。……昨日の夜も同じことを思つたね。つてことは、オレの経験上、口クなことがない。

「さつさと準備しなよ」

「……そうでした」

ハハハと乾いた笑いを浮かべる。この人がいたよ、寝させてくれるはずがない。

「恭弥、オレが相手するから。な？」

「君はまだ逃げない。けど、日曜じやなきや彼女は逃げる」

……ヒバリさんオレの性格よくわかつてる。基本、日曜の代わりにとかそういう交換条件じやなきや、オレって戦おうとしないよね。そして状況がわかつてから、デイ一ノさんの性格も読んで動いてるよ……。

「ヒバリ、ツナの代わりにオレが相手すつぞ。それならいいだろ？」

ブワッとヒバリさんから殺氣が膨れ上がった。殺氣は殺氣でも、歓喜の殺氣だつたけ

ど。

「ちよ、リボーン、お前どうしたんだよ」

やる気満々のヒバリさんを見て、オレはリボーンに慌てて確認する。正直オレが女つていうのを入れても、リボーンがわざわざオレの代わりに相手するなんて思わなかつた。

「ツナ、おめー超直感がずっと反応して、本調子じやねーだろ」

「……そんな顔に出てた？」

「こいつらの顔見れば、答えはわかんだろ」

言われて、ヒバリさんとディーノさんに目を向ければ、うまく隠せてたんだなあつて思つた。ディーノさんが難しい顔をしていたし、ヒバリさんは睨んでるし。超直感が反応してるつてことは厄介ごとだからね。

「ヴァリアーが来てから、ずっと何かに反応してるんです。XANXUSが来た時に少し強く反応したから、それかなつて思つたんですけど、それからも弱いけど継続中で……」

オレの場合、明確に何に反応してるかわかんないんだよ。だから白蘭のことかな、母さんや家綱かな、ちび達かな、勝負のことかな、それとも炎真達に危機が迫つてるとか、京子ちゃん達は？まさかの骸？って考えただけど、これだ！って感じでどうも反応し

ないんだよね。前の経験もだけど、小さい時から使ってるのもあって超直感は使いこなせてると思ってたのになあ。

「何か気付いたら、ちゃんと相談するよ」

まあそんな時間があればだけど。

一応それで納得してもらえたみたいで、リボーンがヒバリさんの相手をし始めた。
うーん、ヒバリさんが凄いのは間違いないけど、やっぱリボーンは別格だなあ。強すぎ。
……というか、あいつマジでやつてない？ゴム弾だけさ。

「……デイーノさん頑張つてください」

「おう」

ヒバリさんはやつとリボーンと戦えたけど絶対満足しない。機嫌悪くなるだろうし大変と思つて声をかけたら、デイーノさんは軽く返事したよ。オレの言つた意味をちゃんとわかつてるのにね。やっぱそういうところが兄貴分つて感じでカツコイイや。今度こそ、身につけたいよね。

相変わらず仲の悪いリボーンとランボの仲裁しながら学校に向かうと、校門で獄寺君達の姿が見えた。雨降つてゐるのに、外で待つてくれてたよ。悪いことしちやつたな。

「ごめん！みんな、お待たせ！」

「オレらもさつき来たところスよ」

それなら良かつたつてオレが笑うと、獄寺君の顔が赤くなつた。最初の頃は変なのつて思つてたけど、獄寺君の反応に慣れてきた。良いことだよね。オレの中で前の獄寺君を押し付けようとしてないんだから。

チエルベッロが現れて、雷戦は屋上でやるつて宣言したから揃つて移動する。今日の戦いはランボだからみんな心配してたけど、オレの顔を見て納得したみたい。また顔に書いてたんだろうね。ヒバリさんが来ないのも、わかつたんだろうなあ。

「雷の守護者は中央へ。対戦相手は2時間前からお待ちです」

……屋上についてから思い出したよ。レイヴイが殺る気満々で2時間前から待つてたことを。

「んーツナが気にする必要なくね？」

「オレがお伝えしたかつたことを……そうですよ、10代目。あの野郎が勝手にしたことです」

「うむ。試合前にどう過ごすのかは個人の自由だ」

その流れでお兄さんがボクシング語りが始まつて、獄寺君が怒っちゃつたけど、みんなのおかげで納得できた。

「沢田氏、雷の守護者を……」

レビイのことばっかり考えてたから、チエルベツロに再度催促されてしまつた。オレは慌てながらもしつかり伝えた。オレ達の不戦敗でつて。

そつちには不都合がないはずなのに、すつげー警戒されちゃつた。何企んでいる!? つて感じで。

「えっと、オレの雷の守護者はまだちつこくて、意味がわかつてないんだ。時期がきたら、ちゃんと声をかけるつもり」

なあなあじやなくて、オレはランボの意志でリングを受け取つてほしいんだ。余裕があるとは言えないけど、前の時と比べたらあると断言できるよ。だからその時までオレが雷のリングを持つことにした。

「一敗しちゃうけど、それはしようがないかなつて」

オレの出した答えに獄寺君達は反対の声をあげなかつた。……ううん、むしろ喜んで

そう。リボーンも甘いとは思つてゐるだらうけど、満足そうな顔をしていた。

「ぶはっ」

オレの発言でのほほんとした空気が流れてたんだけど、耐えきれず噴き出した声で、流れが変わる。出来れば、XANXUSが来るまでに終わりたかつたんだけどなあ。

「反吐が出る」

吐き捨てたように言つた言葉から、機嫌の悪さが底の底かもしれない。オレの甘さは9代目と近いから。……ううん、2度目のオレはもつと甘いのかかもしれない。ケンカすら売られないしね。ただカツ消す存在でしかないんだろうなあ。

「……ゆりかご」

ポツリとオレは呟いた。本当は最後までオレは知らない今まで終わらせるつもりだつた。けど、家綱の時みたいにオレはXANXUSをちゃんと怒らせないといけない気がしたんだ。

「てめえ、その日……！」

前と違つてオレは同情はしていない。当然オレはこの戦いが起きる前から知つていたし、ヒバリさんや骸に言われたのもある。けど、お前ではボンゴレのボスにはなれないっていう目はしていると思う。XANXUSだけじゃなく、スクアーロからも殺氣が凄いから。

「ツナ、お前なんか知つてんのか？」

リボーンに聞かれたけど、オレは答えない。だけど……。

「この戦いをする理由はいっぱいあるけど、その1つにお前に認めてほしかつたんだ。あ、いや、オレも今気付いたんだけどさ」

オレはいろいろと知つている。なのに、この戦いを止めようとは思わなかつた。いろいろと誤魔化して、モスカの中に9代目がいるつてリボーンに教えれば、それだけで話が変わつてくる。そりやモスカに入つてる9代目には悪いとは思うよ、けど。

「……うん、だつてお前9代目の息子だもん」

ボンゴレの後継の話だから、養子のXANXUSには関係ないつておかしいよね。XANXUSに認められる可能性があるなら、戦う理由の1つになるよ、絶対。

「ぶつ殺す!!」

……火に油を注ぎすぎたかもしれない。XANXUSが武器に手をかけてるじやん。え、オレやばくない？ みんなが後ろいるから逃げれないって！

「XANXUS様!!」

チエルベッロが止める前に、銃から炎が放たれた。ハイパー死ぬ気モードにはなつたけど、正直今のオレに防げるとは思えない。それでも死ぬ気の炎をコントロールして、最大限に防御力をあげる。

「……あれ？」

技と技がぶつかり合う音や光は凄いけど、オレには全く衝撃が来なかつたんだ。

「ツナさん、怪我はない？」

「……炎真っ!!」

でもなんで？炎真の大地の炎で防いでくれたのはわかるよ。なんでここに居るんだろ。XANXUS達が誰だ!?って言つてるけど、炎真はそつちには目もくれずオレの疑問にこたえてくれた。

「僕たちにも関係する話だからね。昨日の戦いも見ていたんだよ？」

「え？ そうなの？」

全然、気付かなかつたよ。殺氣とかないとオレの直感には引っかかるないもんなんあ。

「それに骸君にも頼まれていたから。ツナさんはどこか抜けてるからつて」

……あいつ、オレにシモンのことを頼んでおきながら炎真にはオレのことを頼んでたのかよ。まあそれはいいや。助かるし、と言うか……助かつたし。ただ……なんつか、あいつがオレを心配して手を回してると、なんか企んでそうつて思つちゃうよね。

オレが脳内で頷いてると、XANXUSが痺れを切らしたみたいで再び銃をオレ達に向けた。

「答える、カス」

「……僕は同盟のシモンファミリーだよ」

「聞いたことねえぞお!!」

「弱小ファミリーだからね」

炎真、絶対弱小に見えないって。オレは心の中でツッコミを入れた。だって、XANXUSの一撃を防いでピンピンしてるんだよ！無理があるって！
「ツナさん、僕たちのことは気にしなくていいよ。あの人がボンゴレの後継者になつたら、シモンはボンゴレと同盟破棄するから」

ええ!?とオレが驚いた声をあげたら、今度は炎真が驚いた。

「昨日の試合をみればそう思うよ。これは僕たちシモンの総意だから。それにツナさん……友達を殺す気なんだよ。同盟なんて続けられるわけないじゃないか」
……確かに。今のXANXUSがボスになれば、絶対にオレを殺すよね。シモンのみんながそのままボンゴレとの関係を継続するはずがない。オレだって、未来の白蘭は許せなかつたし。

「XANXUS様、これ以上の行為は失格とさせていただきます。…………では、今回の守護者対決は沢田氏側の棄権によりヴァリアー側の勝利です」

チエルベッロの言葉で、XANXUSは止まつた。ただオレの発言は忘れていないだ

ろうから、暗殺しかけてきそう。

「はあああ……」

久しぶりにおつきな溜息が出た。平穏とは言えなかつたけど、前と違つて大きなトラブルはなかつたのに自分から作つちゃつたよ……。つて、それよりシモンのことだよ。

「さつき言つたよ、ツナさん」

……だからオレの顔どうなつてんの。

「ツナ、きつかけはボンゴレでもこれはシモンの問題だぞ」

「う。……わかつたよ。みんなに気をつけてつてだけでも、伝えてくれる?」

「うん、もちろん。じゃ僕は帰るね」

うーん、炎真を見送りながら思つた。こういうのは炎真の方がしつかりしてゐるよね。オレはリボーンに言われて止まつたのに、炎真是ボンゴレの問題だからつてあつさり帰つたから。そりやオレが声をかけたら協力はしてくれるみたいだけど。実際、骸に頼まれてオレのこと助けてくれたし。

「おめーらも帰れ。オレはツナと話があるからな」

「あはは……」

オレが遠い目をしてるけど、獄寺君達も帰つていつた。相手がリボーンだからつてのもあるだろうけど。

「ツナ」

「うーん、わかつた。話すよ」

そのかわり話しててる間の警戒はお前がしてつて頼んだ。危険がないとオレは見逃しちゃうから。

「XANXUSは養子だよ」

「……そうか」

疑つたり、怒つたりするかなーと思つていたけど、リボーンは冷静だつた。

「止めなくていいの?」

「今さらオレが止めねーと思つたから話したんだろう」

「まあね」

やれやれと言つた感じでリボーンは息を吐いた。けど、すぐに切り替えたのか、あいつらにもいい経験になるしなとニッと笑つた。

「……あー、やだやだ。オレ、お前に似た気がする。今それ聞いて、頷いてるオレがいるもん」

「そこはオレ様に似て光栄に思うところだぞ」

えーって言いながらも、オレはそこまで嫌じやなかつた。リボーンは機嫌がいいのか、オレに似たならボンゴレは安泰だなどか言つてる。

「にしても、ツナ。おめー、家光に冷たくねえか?」

「だつて父さんだし」

フウ太のランギングに入つてゐるけど、ダメな父親だと思つてるのは事実だし、好きか嫌いかつて聞かれるとビミョー。尊敬はしてるけど。それにこの情報を知つても、父さんが9代目のところへ向かう覚悟に差はつかないし。

「あ、そうだ。オレの超直感、さつきから反応しなくなつたんだ」

「あの攻撃か」

「みたい」

「ツナ、勝たねーと認めてもらえる以前の話だぞ」

「それはわかつてる」

ただ超直感が反応してたつてことは、オレの今の力では防げなかつたつてことだよな。リボーンもちよつと難しそうな顔をしていた。俺に合う武器がないもんね。

「んーでも何とかなるよ」

もう超直感もひつかからないしねつてオレが笑えば、リボーンもそれもそうだなつて頷いた。リボーンにしては楽観的だなとは思つたけど、それだけオレを信頼してくれてることだもんね。

一方その頃。

少々目立つ男2人組が歩いていた。一人は全身真っ白で、もう一人は黒を基調とした服を着ていたのだから、対比で目立たない方がおかしい。

黒の方はポイントで藍色が入っているため、白ほど目立たないのかといえば、それはないと誰もが答えるだろう。彼の肩にはフクロウが乗っていたのだから。……それに髪型も変だつた。

それでも彼らの歩みを止めるものはいない。いくら変だと思つても、止めるほどではないのだ。

「んーまだ時間があるし、マシマロ買いに行こうよ♪」

「どうして僕が付き合わないといけないのでですか。さつさと行きますよ」

「えー。そうだ♪骸クンはチヨコ買いなよ」

「……まあ少しぐらいならいいでしよう」

仲がいいのか、悪いのか。恐らく2人に質問すれば、どちらの答えも聞ける。

「お父さんを助けてあげれば、ツナちゃんは喜んでくれるよね、骸クン」

「何度言えばわかるのですか。僕は沢田ツナではありませんから、わかりませんよ」

「もうイジワルだよね、骸クンは。あーあ、早く会いたいなあ、ツナちゃんに」「僕は愛しのクロームに会いたいです」

息が合うのか、合わないのか。変な2人組は洋菓子店に向かつてから、ボンゴレ本部へと乗り込んだ。もちろんモスカという兵器の資料を盗んでいくのも忘れない。

9代目の影に撃たれ、重傷を負つて身を潜めるように隠れていた沢田家光はそんな変な2人組に助け出されることになる。

そしてこの2人が動いたことで、ツナの超直感がおさまったことに誰も気付かなかつた。

せつかく学校に通えていたのに、今日からまた外でウロウロする羽目に。いやまあオレが悪いんだけどね。XANXUSの地雷を踏んだのはオレだし。もちろんヒバリさんに許可をもらつて休んでる。理由を説明したら、ああそう、つて言われたよ。正直ちよつと呆れられるかなと思ってたんですけどつて言つたら、君だからねという返事をもらつた。……意味わかんないんですけど。まあいいけど。

そして予想通りというかなんというか、雇われたのか殺し屋がやつてきたよ。やつぱあれは禁句だつたね。なんて考えながらも気絶させる。

「殺さねーの？」

「そうだね。オレのそういうの嫌いだし」

「ふーん。つまんねーの」

なんて言いながらも、オレの後ろをベルフエゴールがついてくる。にしても、なんで居るんだろうね。手を出したいけど出せないから、秘密裏に雇つてるはずなのにね。お前、ここに居ていいの？あ、もちろんリボーンも一緒にいるよ。リボーンもベルには手を出せないから居るだけだけど。

「オレ、そろそろ飯にするけど一緒に食う?」
「うししつ。いいぜ」

財布に入ってるお金を確認して、オレは山本ん家に向かつた。
「いらっしゃい。おー、ツーちゃんじゃないか。学校はいいのかい?」

「こんにちはー。今日は家庭の事情で休みました」

リボーンはオレが女だから自分で払うけど、こいつは絶対気にせず食うよね。だから先にお金を相談しようとしたら山本のお父さんの眼がカツと開いた。

「ツーちゃん、誰だその男は!まさか恋人とか言わねーだろうな」

……山本の話は本当だつたんだね。オレ、今まで本気にしてなかつたよ。

「違いますつて。ちよつと危険人物なんで、この店を頼らせてもらつたんです。ふつーの店じや危なつかしくて」

「おー、そうかそうか。おじさん、ツーちゃんに頼られるなんて嬉しいね」

いや、ほんとにオレに激甘じやない?山本のお父さん、それでいいの?と思ひながらも頼らせてもらつた手前、何も言えない。ベルはオレ達の会話を気にもせず、珍しそうに店内を見ていた。寿司屋には来たことなかつたみたい。その間に、ちゃんと予算を伝えた。山本のお父さんだから割引してくれるんだろうなあ。申し訳ないけど、すげー助かる。

「オレの奢り。つつても、お前らみたいに稼いでないから、上限はあるけどね」

「なに、賄賂?」

「ある意味そうかも。ちゃんと獄寺君の相手をしてほしいから」

「当たり前じやん。殺すぜ」

頑張つてねといい、オレは握つてもらつた寿司に手を伸ばす。ベルも普通に食べ始めた。笑つてゐるし、気に入つてくれたっぽい。山本のお父さんの寿司は美味しいもんね、わかる。

「そんな強いの?」

「強さでいえば、オレの守護者の中では弱い方かも」

「なにそれ、つまんねー」

「それはちょっと違うかな。オレンとこ、規格外がいるから基準が変なんだよ。だよね?」

「ああ。あいつはちょっと別格だな」

だよねーとオレはため息を吐く。おかげでヒバリさんもつられておかしくなつて來てるんだから。あーやだやだ。次から相手するの怖くなつて來た。

「ん。そんな奴、居たつけ? 王子の勘には引っかかつてないぜ」

「そりや居ないもん。今オレの頼みで動いてもらつてんの。もう1ヶ月ぐらい連絡な

くつてさ。酷いと思わない?」

「死んでるんじやね?」

「ないない。オレへの扱いが雑なだけ。でもちゃんとオレがキレる前に帰つてくるよ」
なんだかんだ言いながら付き合い長いしね。あいつはそれをちゃんとわかつてる。
「期待して損した。お前より弱いってことじやん」

「今のオレは弱いからね。けど、オレの強さを一番知つてんのはそいつなの。オレの逆鱗に触れないよう、誰よりも気を付けてるね」

「ふーん?」

「ちなみにこれ二度目の忠告だからね。まつたく、誰に言つてもお前ら共有しようとしないから困っちゃうよ。オレ一人一人しないといけないの?」

「オレ、王子だしー」

あーほんとコイツらヤダ、バラバラ過ぎ。XANXUSに話を通さないと聞きやしない。まあそれがコイツらの良いとこでもあるんだけど。

結局、真面目に話をしたのはこれだけでふつーに一緒に食事してベルと別れた。その後も暗殺者は襲つてきたけどね。でも明日までかなあ……なんて思う。スクアーロ、XANXUSのこと大好きだから。

5分前になつても獄寺君は姿を見せない。けど、オレらはいつも通り駄弁つてた。みんな、獄寺君は来るつて信じてるからね。そんなオレらの緊張感のない様子を見て、ヴァリアーからは殺氣がガンガン飛んでくるけどね。これはいつものことだからスルーする。けど、その殺気に混じつてヒバリさんも飛ばすからオレは窓を開けて叫んだ。

「廊下の広さはヒバリさんが一番知つてるでしょ!!」

「ピイツと横向いたよ、あの人。そんなことはわかつてたけど、群れてるのを見るのはムカつくんですね、わかります。や、わかんないけど。

「ヒバリはあんなところに居たのか」

「ははっ、ヒバリだもんな」

オレの発言でお兄さんと山本は校舎の屋上から見ていていたことに気付いたらしい。つてことは、オレにだけ殺氣を送つてたんだ、あの人。

「まつ、そんだけ恭弥が気に入ってるつてことだろ?」

「ディーノさん!と、ロマーリオさん。……よかつたですね、ディーノさんも好かれてますよ!」

「……いや、オレのは違うだろ」

やつてきたデイーノさんにだけ、またまた器用に殺氣を送つてたから思わず言えれば、頬を引き攣らせてたよ。この後もバトルらしい。頑張つてください。

そんな事をしてる間に、針が進み11時になろうとしていた。流石にみんなが心配そな顔をしてピリピリした空気になる。けど、オレは近づいてきた気配にふわりと笑う。後1秒もないところで、みんなが見ていた時計が爆発した。

「おまたせしました10代目!! 獄寺隼人いけます」

「……うん、来てくれてありがとう獄寺君。でもね、あっち見て」

「なんスか?……うげつ!」

オレらはヒバリさんが居るのを知つてたからね。ばつちり見られていた獄寺君にオレ達は心の中でエールを送つた。

「ほんと、しまんねーな」

呆れつつも、リボーンの口角が上がつてゐのを見て、これがやつぱ正解だつたと思えた。そりやヴァリアーからすれば、ふざけた態度にしか見えないよ。けど、これがオレらの肩の力の抜き方だ。前と違つてボスであるオレが裏の世界にどっぷり浸かる気でいて、守護者の中で一番真面目なのが獄寺君だ。オレの影響を一番受けやすい。こう言う時だからこそ、獄寺君は肩の力を抜かないといけない。いつも通りわちやわちやしてるのが一番なんだよね。

「獄寺君、お願ひね」

「はいっ！ 10代目!!」

獄寺君の眼を見て、オレはこれ以上何も言わない事を決めた。

嵐戦の試合内容も前と変わりなかつた。や、オレの覚えてる範囲だけどね。ほら、オレはポコポコと色々抜けてるからさ。強いて言うなら、観覧席とフィールドの間に赤外線感知式レーザーがないくらいかな。あれはオレが雷戦を妨害したから出来たからね。今回は端から棄権したもん。

開始合図の前にベルが獄寺君の肩に手を置いた。ピクつとオレが反応したことに気付いたのか、触れたことを誤魔化すためかは知らないけど、ベルがオレに向かつて「昼はご馳走さん♪」といいつつ手を振つてきた。

予想はしてたけど反応は凄かつた。獄寺君はギギギと首を機械のように動かして、オレがはいはいと手を振り返してるのを見た途端、膝から崩れ落ちたよ。スクアーロもうるさかつたね。後はそこまでかな。オレとベルがそういう性格だからと流したんだよ、多分。

「……10代目。オレ、このいざこざが終われば、10代目と食事に行きたいです」

「へ？ あ、うん。行こうね」

なんでわざわざ今から声をかけたんだろうと不思議に思いつつオレは返事した。

だつてね、獄寺君とだよ。行かない理由ないじやん。でもまあその約束で獄寺君が元気出て、切り替わることができたみたい。……なんかみんな優しい目で獄寺君をみてるよね。オレとお兄さんは一緒に首を傾げたよ。なんだろ、この空氣つて感じでさ。オレとお兄さんが不思議でいっぱいになつてゐる間に、チエルベツロが試合開始の合図を出したから意識を切り替える。

氣流に乗つたナイフが獄寺君の頬を切り裂いたのをみて、やつぱりとオレは軽く息を吐いた。お兄さんの時といい、ちよつとズルいよね。黙つてたオレが思うのは微妙かもしないけどさ。

「ツナ」

ああ、リボーンのその一言だけでオメー氣付いてたんだろとオレに訴えてるのがわかる。そうだよね、お兄さんの時は言い訳が厳しいけど、獄寺君には言つてもよかつたんだよ。オレがこの目でベルが細工したことに気付いていたんだから。うーん、獄寺君の眼を見て決めたから？ 前の時に見破つたから？……違う。オレはベルが他の仕掛けをしたとしても獄寺君には言わなかつた。

「……獄寺君はオレの右腕だから。オレの側に一番いることになるし、オレが居ないところで采配することも一番多くなる。オレがそう決めちやつたから、他のみんなより求めるものが多くなつちやうんだ。獄寺君からすれば酷い話だよね、負わなくともいい怪

我をしてるんだから」

「ツーちゃんの期待に応えろよ、隼人

「あつたりまえだらうが!!」

シャマルつてば女の子に甘すぎ、獄寺君はオレに甘すぎだよ。

オレが苦笑いしてゐる間に、獄寺君は試合前にワイヤーを肩につけられたことに気が付き、ベルの技を見破つた。その勢いのまま、獄寺君は新技のロケットボムでベルに一泡吹かせた。けど、ベルフェゴールの本領はここからで、獄寺君は前と同じように追い詰められていく。そんな中でも獄寺君は活路を探し続け、ベルのワイヤーを利用して獄寺君のボムを食らわせた。

「これが嵐の守護者の怒涛の攻めだぜ」

ズキッとオレの超直感が反応する。前の時は全然気づかなかつた。だからシャマルが必死に声をかけて、オレが土壇場で怒鳴つた。……気付いてくれ、獄寺君。オレは君をもう一度怒りたくない。オレは今まで君に目一杯伝えたつもりだよ。

「……ツチ。仕方ねーか」

最初のハリケーン・タービンの爆発音が聞こえてすぐ、獄寺君はベルフェゴールに自分が持つていた嵐のリングを投げた。周りが驚きの声をあげる中、オレは画面越しにやなくて獄寺君の顔を見たくて駆け出した。

オレが辿り着いた時、獄寺君はリングを持つて喜んでるベルを引きずり、ヴァリアーの前に置いていくところだつた。

「うおおい！ テメエなんのつもりだ！」

「オレは10代目の意志を尊重したまでだ。オレはもちろんのこと、こいつが死ぬことも悲しむ優しいお方だ。右腕のオレがリングに拘つて、10代目のお気持ちを蔑ろにすれば、他の守護者に示しがつかねーだろうが」

「……獄寺君!!」

オレが近くに来ていると思つてなかつたみたいで、獄寺君はちよつと焦つていた。けど、オレの顔を見てホツとしたんだ。この判断は間違つてなかつたとわかつたから。それでも獄寺君は眞面目だからね、最初の一言は予想がつく。オレはそれに被せるようになをかけた。

「すみません、10代目」

「ありがとう、獄寺君」

ぶつとオレ達は吹き出す。そして獄寺君はオレの後ろに続いてやつてきた山本に声をかけた。

「後、頼むぞ」

「おう！」

やっぱオレが女なのもあつて一緒にいる機会が多いのか、この2人は仲良くなるのが早いよね。獄寺君がいやいや言つてないもん。

ヴァリアーには理解できないだろうけど、これがオレ達だよと視線を向ける。オレを馬鹿にするのはいい、けどもし獄寺君の行動を笑うようなら許さないという視線だつたからなのか、ヴァリアーは何も言つてこなかつた。

少しの沈黙のあと、チエルベツロがベルフエゴールの勝利を宣言し、明日のカード「雨」の守護者の勝負と発表した。前と違つてヒバリさんは理解してるから暴れることもなく、スクアーロが勝利宣言だけして去つていつたよ。随分平和だなあ。や、ディーノさんは慌ててヒバリさんを追いかけてつたけどね。あそこだけ嵐だよ。あれ? 雲雀さんつて雲じやなかつた?

「つて、獄寺君、治療しなきや! シヤマル!」

「……しゃーねえな。ツーちゃんの頼みだ」

ありがとうと視線を向けると、これぐらいかすり傷ですよと獄寺君が強がるからオレはムツとした。

「カツコつけないの! すごい傷なんだよ!」

「うつ、すみません……」

「や、ごめん。えつと、そんなことしなくとも、獄寺君はカツコよかつたよ。すつぐく!」

……あれ？ 獄寺君？

氣を失つてない？ やつぱ無理してたんだよ!! とオレはシャマルに獄寺君は大丈夫な
の！？と詰め寄つた。

「あー、隼人はここで死んでも悔いはねえから大丈夫だろ」

「んなつ！？ シヤマル、どうにかして！」

「……ここまで耐性がない奴いるか？ オレはお手上げだな」

「そーをなんとか！」

いや無理だろ、これ……と呟きながらもシャマルはちゃんと手を動かしてくれて、獄
寺君は無事に目を覚ましてくれた。

今日はベルが来なかつたぐらいで昨日と大体同じような感じで過ごし、夜になつたら並中にやつてきた。リボーンが一緒に居たからまだマシだつたけど、寂しかつたのもあつていつもより少し早めだけどね。

「みんな、どうしたの？」

なんか重い空気になつてるから声をかけると弾かれるように山本とディーノさんがオレを見た。すっかりオレは忘れてたけど、ディーノさんとスクアーロは同級生で、スクアーロのことを山本に教えてくれていたらしい。本当は昨日教えてあげたかつたけど、ヒバリさんをほつとくことも出来なくてギリギリになつたみたい。ディーノさんにすまんつて言われちゃつたよ。

「んー謝る必要ないですよ。山本が継いだ時雨蒼燕流は凄いですから」

「……ツナ、オレの話をちゃんと聞いてたか？」

もちろんとディーノさんに頷く。

「ははっ。だな！親父も時雨蒼燕流は完全無欠最強無敵だ！って言つてたのな」「そうそう。山本なら大丈夫だよ」

山本はもうディーノさんの話は気にならなくなつたみたいで、うしつ！とストレッチを始めた。ディーノさんは困ったように頬をかいてたけどね。

オレらがわちやわちやしてるとスクアーロとチエルベッロがやつてきた。やつぱB校舎かあと軽く頷きつつ、ディーノさんにチラツと視線を送ればワインクをもらつたよ。

「跳ね馬、テメエなに10代目に色目を使つてやがる！」

「あ、いや、今のはそのだな……」

まあまあとオレは仲裁に入る。スクアーロの性格と強さを同級生だからこそ知つてるからね。それでなくとも今回のような誤魔化せそうなステージなら優しいディーノさんが手を回すのはわかるもん。

「獄寺君、まだ安静が必要なんだよ。だから無理しちゃだめだよ、ね？」
「ぐはっ」

ディーノさんみみたいに意思疎通できるかなつてオレも獄寺君にウインクしてみたけど、獄寺君の意識が飛びかけていた。そんなに酷かつたのかなあ……。そりやディーノさんと比べるとオレはブサイクだよ。それでもオレ今は女だよ。ちょっとショックなんだけど……。

「ツナ、さつさと行くぞ」

ズーンと落ち込みつつも、リボーンに言われたからと身体が勝手に動くオレはやつぱ重症だよねと思つた。

試合が始まりディーノさんは唖然と画面モニターを見ているから、オレは口を開いた。

「ディーノさんは毎日手を合わせてるから、ヒバリさんが才能の塊で天才だと思つてたでしょ。や、ヒバリさんも天才と呼ばれる分類に入るんですけどね。オレもしよつちゅうあの人は天才だからって言いますし。でも、オレの守護者の中で一番の天才は誰かと聞かれたら、オレは山本と答えるんです。普通なら刀を持つてまだ一年つていうでしようけど、山本の場合は一年も握つたつていう表現になるんです。これが初めての実戦とか関係ないんです、山本の才能の前には……」

そしてその山本がマフィアごつことは思つてなくて、オレについていくと覚悟を決めている。……オレは野球にだけ使つて欲しかつたよ。

「ツナ。おまえが気付かなくても、オレが山本の才能に気付いていたぞ」

「だよねー。オレもそう思つて覚悟してたんだよ。ヒバリさんにも怒られたのもあるしさ、リボーンが巻き込んだらもう諦めようつて。相変わらずの逃げ腰で、また骸には呆れられたけどさ。でもまさかオレ自身がやらかして山本をこの道に進ませるとは思つ

てなかつたよ」

「ハハハ……と笑つて誤魔化しながら、画面モニターを見る。スクアーロが時雨蒼燕流を知つていて見切つたとしても、山本はスクアーロの見越した想像の上を行く。「流派を超えるか……。ツナおまえのいう通り、オレの心配は杞憂だつたんだな」

ほんと、オレの周りつて規格外ばつか。なんとか技の出先がわかつていたから致命傷を避けていたけど、山本が放つた攻式・八の型……山本のお父さんが作つた『篠突く雨』の前にはなす術もなく、スクアーロは敗れた。

「勝つたぜ」

カメラに向かつてリングを見せる山本の笑顔に、フッと息を吐いた。いくら山本が凄くても無傷とはいかななかつたよ。けど、今までの試合の中じや圧倒的だつた。だから恐怖心というもの少しあはまれるはずなのに、この山本の笑顔を見たら吹き飛んじやうんだよね。

「……すみません。オレ、もつかい修行してきます」

「きよくげーん！」

つて思つてたんだけど、獄寺君とお兄さんの闘争心に火をつけちやつたよ。

「や、ほら、山本もオレの幼馴染だから。ガキの頃からつるんでるからね。山本はあの2人と交流なかつたけどさ。なかつたから真っ直ぐに育つたというか……ちょっと影響

受けて規格外になつちやつたけど

あれ？ フォローになつてる？ と首を傾げる。なんかついでにヒバリさんと骸に喧嘩売つてない？ 大丈夫？ とわけわかんなくなつてきた。

オレがうーんと頭を抱えて悩んでると、スクアーロが負けたことにXANXUSが笑い始めた。

「なんで……わかんないのかな」

「沢田？」

「10代目？」

2人の驚いた姿で気付いた。どうやらオレは無意識にハイパー死ぬ気モードになつてたらしい。

「オレは……オレには出来そうにないだけで、恐怖で人を束ねることが悪いとは思わない。オレの周りにも居るしな」

そういうつて、オレはヒバリさんに視線を向ける。けど、ヒバリさんとXANXUSは違う。

「お前はボンゴレのボスの座についた時、どんな景色を見るつもりだ

「はつ。カス如きがボンゴレのボスを語るのか」

「……お前はなにも見えてない。頂点に立つからこそ、見なければならぬものがある。

それが見えてなければ、たとえ頂点に立つたとしてもほんの一瞬だ」
 そう考えると、XANXUSは前の時に出会ったばかりの頃のヒバリさんに似ている。今のヒバリさんは出会ってすぐでもそんなこと思いもしなかつたけどね。恐怖で縛りながらも、ヒバリさんはちゃんと見えている。自分についてくれてる人達の顔が。

ふうと息を吐いて、ハイパー死ぬ気モードを解除して画面モニターに視線を向ける。

「……山本。疲れてるところ悪いんだけどさ、スクアーロを連れて帰ってきて。色々言

うだらうけど、オレの誇りもかかるからよろしくね」

「もとよりそのつもりだつたぜ。獄寺がみせてくれたしな」

「うん。ありがとう、みんな」

もう一度オレはXANXUSに視線を向ける。

「スクアーロはオレが一日預かる。お前らに殺させないよ」

「カスには似合いの行き場だな」

「……ほんとうにお前はなにもわかつてないんだね」

はあとオレはため息を吐いて、チエルベッロに進行を促す。雨のリングの争奪戦はもちらん山本の勝利で明日の対決は霧と発表された。それを聞いたXANXUS達はスクアーロに一瞥することもなく、去つていった。

戻ってきた山本にお礼を言いつつ、ボロボロでも色々と叫んで暴れようとするスクアーロにオレは一発入れる。オレが容赦なく気絶させたから、みんなちよつと引いてたよ。あのままだとスクアーロが自殺しちやう可能性もあつたのも気付いてたからか、なにも言つては来なかつたけどね。

「あの、ディーノさん。オレ偉そうに言つちやつたんですけど、今のオレの伝手じやどうしようもなくて……スクアーロのこと頼んでもいいですか？」

いや、ヒバリさんに頭を下げれば何とかなるのはわかつてたけどね。それは最終手段です……。心優しい兄弟子のディーノさんは軽く引き受けてくれた。

「あ、あと……すみません。手を回してください」

「ん？ オレが勝手にやつたことだしな。ツナが謝る必要はねーよ」

よしよしと頭を撫でられて、えへへと照れる。やっぱディーノさんはカツコイイ大人だよ！

オレは幸せだったんだけど、獄寺君がイライラしてきた。随分大人っぽくなつたかなあと思つてたけど、獄寺君はまだ年上の人はあんまり得意じやないみたい。ディーノさんもそう思つたのか、慌ててオレの頭から手を離して話題を振つてきた。

「そ、そういうや、明日は霧の試合だが六道骸は間に合いそうなのかな？」

「間に合わせてきますよ。そういうのにあいつは抜かりないんで」

オレが来るつて信じてるから、みんなも納得してくれたね。……結局あいつつて、守護者の中だとヒバリさん以外とは大して交流してないんだよな。そりや前よりはマシだけど。クロームのおかげで、そこまで悪い印象はないだろうし。よくもないけどんー、仲良くて欲しいところだけど、オレがみんなを誘導してあいつの心に踏み込ませるのは間違ってるだろうし。やっぱ様子見かな。

「とにかく明日の試合はやりすぎないように注意するぐらいだよ」

試合には心配する必要が全くないのもあって、オレは家に帰つて爆睡した。

なんて余裕な態度で居たのが悪かつたのか、骸の性格をすっかり忘れてたのが悪かつたのか、オレは頭を抱える羽目になつた。

念のために今日も学校を休んだけど、オレが予想した通りピタリと暗殺者が来なくなつた。リボーンとはこれについて何も話さなかつたけど、多分全部察してゐる。オレ自身の性格が甘いっていうのもあるけど、無意識にハイパー死ぬ気モードになるぐらいスクアーロに肩入れしたのもわかつてくれたんだろうなあ。オレが決めたから何も言わなかつたけど、多分リボーンはオレの甘さにも心配してたと思うから。あそこまでした理由がわかつてスッキリしてゐんじやないかな。や、説明もなく爆睡したオレが悪いんだけどね。

お兄さんと獄寺君は普通に心配で、ランボはどうするか悩んでだし。そりや山本は試合については心配してなかつたよ。でも勝つた後に山本らしさがなくなるんじやないかなという心配はしてたんだよ。オレが心配する必要無かつたぐらい、山本はいつも通りだつたけど。まあそういうのもあつて、やつとオレはスッキリと眠れたの。リボーンもそれがわかつてたから、何も言わなかつたんだよ。もしオレが男だつたら蹴り飛ばして、オレの考えを言わせてたと思うけど。……や、でも、そんなこともなかつたかもしない。前よりオレはしつかりしてゐるから。リボーンはオレがちゃんと考えて出した

結論だつたら、理不尽に怒つたりしないもんね、昔つから。

……にしても、相変わらずあいつは来るのが遅いなあ。コロネ口ももう来ちゃつてんだけど。体育館なのもあつて、すげーヒバリさんイライラしてるんだよね。つて、来た來た。気配が守護者の中じや一番わかりやすいんだよな。

「お前、おっそい」

はあとオレがため息吐きつつ、体育館の入り口に視線を向けた。

「「クローム!?」」

獄寺君と山本とお兄さんが慌てて駆け寄つて行つたのを見て、首を傾げる。
『骸様が間に合わないから……私が代理……』

お前マジかよ……とオレは膝から崩れ落ちた。頬むから嘘だと言つてくれ。骸がそういう奴だと知つていたけど、オレ悪くないよね？ 悪いのはあいつだから。絶対オレじやないよ？ と現実逃避する。

もうやだと嘆いてる間に、マーモンのペットが興奮してるのもあつて、代理でもいいみたいな空気になつっていた。チエルベッロも代理は認めるけど途中交代はできませんとか言つてるし。あの、勝手に話を進めるのやめて。え？ オレが現実逃避してるから悪いの？

オレがどうにかするのが嫌だから、崩れ落ちたまま期待を込めてヒバリさんに視線を

向ける。……つまんなさそうにヒバードと戯れてた。

「うん。オレ、帰る」

パツと切り替えたオレは立ち上がり、出入り口に向かう。

「ツナ、待ってて。まつ気持ちはわかるけどな」

「ディーノさん……！」

「間に合わなかつたのは仕方ねーんだ。棄権するにしても、霧のボンゴレリングはあいつらに渡す必要があるだろ？」

「……ちよつと待つてください」

オレ、すげー感動したから落差が激しいんだけど。落ち着くように息を吐いて、リボーンに視線をむける。お前はオレの味方だよね？

「しつかりしろ、ツナ。おめーがボスなんだぞ」

「……リボーン、お前……本気で言つてんの？」

「当たり前だぞ」

マジかー。マジかー。とオレは天を仰ぐ。体育館の照明つてこんなに明るいんだなあ……。やだなー、やりたくないなー。女に優しいリボーンなら、絶対助けてくれるのに。もうこの際、XANXUSでもいいよ。ぶち壊して欲しいんだけど。

「はあああああ

肺の中の空気を全部出す勢いのため息が出たよ。幸せが逃げていつちやつたなあ……ハハハ。

「あーもう！いい加減にしろ、骸！」

キツ！とオレは骸に睨みつける。オレのことをよく知ってる人から順に正解に辿り着いていく。だつてね、オレがクロームを睨むとかない。つーか、そもそもオレがクロームを放つて帰ろうとするわけないじやん。

「ま、まさか……」

「……六道、骸」

「クフフフ。お久しぶりです。僕がいない間に腕が落ちたのではないですか？ああ、あなた方に見破られるとは露程も思つてません」

うわあああとオレは頭を抱える。ヒバリさんだけじゃなく、獄寺君達にも喧嘩売ったよ、こいつ。いや、予想はしてたよ？だからオレは帰りたかったの！だつて、これだけで終わるわけないもん！

「しかし余興のつもりでしたが、ボンゴレが誇る暗殺部隊ヴァリアードも、マフィア界最強と呼ばれるアルコバレーノも、大したことありませんね。期待外れです」

ほんと、ありえねえ……全方向に喧嘩売ったよ……。

「骸！」

「事実でしょうに」

いやだから、お前が規格外なの！なんで『仕方ありませんね、僕が大人になりましたよ』みたいな態度なの。お前が煽つたから、こんなギスギスした空気になつてんの！……でもまあ元気そうでよかつた。

「……あなたは変わりないようで。胸焼けしました」

「それがオレなの！」

はあとまたため息を吐きつつ、霧のハーフボンゴリングを取り出す。

「オレの霧の守護者は、骸……お前しか居ない。だからお前に渡すけど、いつ捨ててもいいよ。や、流石にリングは返してもらわないと困るけど。……オレの最期まで付き合う必要ないから」

「……当然です。あなたは図々しくも最期の最期まで僕に頼み事を言いそうですからね。絶対に嫌です」

「ごめんってば。でもお前オレが頼まないとクローム達の前からも消えそうな気がしたんだよ。

「骸、お前に霧のリングを預ける」

「ええ。僕の気が変わるまでの間は引き受けましよう」

あははと笑いつつ、オレは骸にリングを投げた。多分みんな思うところがあるけど、

オレの顔を見て飲み込んだね。相変わらず、オレの顔はどうなつてんのつて話だけど。

「あ、やりすぎんなよ」

「はいはい、わかつてます。それに彼を殺せば、アルコバレーの呪いを解く難易度がありますからね。僕としても面倒です」

お前……そういうとこだから……。コロネロとマーモンは骸を見てるけど、リボーンはオレから視線を離さない。ふうと軽く息を吐いて、リボーンと視線を合わせる。どうせどこかのタイミングで言わなきやいけなかつたしね。復讐者のことは気になるけど、悪い予感はしないしなんとかなるかな?

「道筋は見えてるんだ。ラルもちゃんと解けるよ。でもまだ全然。あれもこれも足りてないから黙つてた、ごめん」

「……ウソつくんじやねーぞ」

「や、本当に解けるつてば」

「そつちじやねえ。オメーのことだ、その方法を話せばオレが反対するから黙つてたんだろ」

あはは……と苦笑いする。ほんと、リボーンはオレのことなんでもお見通しだよ。

「うん、でもお前の負けだよ。オレは絶対諦めないし、みんなが今の話を聞いたら、手伝ってくれるでしょ?」

そういうつてオレは周りを見渡す。オレの守護者はもちろん、ディーノさん、コロネロ、立場が問題だから態度には出さないけど、呪いを解きたいマーモンもオレの味方だもん。あ、ヒバリさんには交渉に行きますから怒らないでくださいと視線を送る。すげー楽しそうな顔された。いっぱい搾り取る気ですね、知つてました。

「……おめーと約束したからな」

はあとため息を吐きつつも、リボーンが協力する気になつてくれたから、ごめんねと笑う。あの約束をした時も黙つてたことに気付いたけど、オレが女だから飲み込んで何も言わなかつたみたいだし。

よし、と切り替えて、XANXUSに視線を向ける。

「待つてくれてありがとう。チエルベッロ、進めていいよ」

チエルベッロが頷き合い、霧戦が始まつた。

当然というように骸の圧勝。マーモンは骸の余興でヤバイとわかつてたから、すぐに抑えていたアルコバレーノの力を解放したんだけどね。骸には敵わなかつたよ。マーモンも薄々察していたからか、死んだ風に見せかけてやつぱり逃走。呪いが解ける可能性が出てきたからね。絶対逃げると思つてた。

今回は骸が逃走したと教えなかつたけど、オレの態度でマーモンが生きてるのはみんな察してたよ。あとは最初にいっぱい煽つたからか、骸は大人しかつたかな。ヴァリ

アーチが帰つてから、ヒバリさんとはバチバチしてたけど。

明日は雲戦だから慌ててデイーーノさんがヒバリさんを宥めてたよ。オレは何もしなかつたよ？ 基本的にやり過ぎないなら、オレは止めないことにしてるし。止めてたらキリがないんだもん、この2人と幼馴染という時点で察して。

日付けがかわり、深夜。オレは骸ん家に居た。霧戦後に骸と一緒にオレン家に居るクロームを迎えて、そのままオレも一緒に骸ん家に来たんだ。骸はオレン家で休まないからね。ガキの頃と違つて今はマフィア関係の居候が多いから。

「んで、遅くなつた理由は？」

「僕は遅刻してませんよ」

これは詳しく述べ氣はないな。オレはまあいいけどよ、クロームにはちゃんとフォローしろよとベッドがある部屋の方角に視線を向ける。オレも前に京子ちゃん達に似たようなことしてたけどさあ。やっぱ自分がしちやつたのと、見るとでは感じ方も違うんだよ。そりやクロームは我慢強い子だから泣きはしなかつたけど、寂しがつてたのはわかつたし。だからオレはクロームと一緒にベッドに寝転んで、骸はクロームの枕元で眠るまでそばに居た。本当はそのまま一緒に眠つてあげたかったんだけど、流石に報告

を聞かないとまずいかなつて。朝にはリボーンに報告しないといけないし。

実はこの場にリボーンがいない。多分すげー着いてきたかったと思うんだよ。でもリボーンが居ると骸がクロームを甘やかせることができない。オレら3人ともクロームに甘いから、暗黙の了解だったよ。

「なら、白蘭は?」

「……正直なところ、僕にはわかりません」

オレが白蘭の存在に気付いていたことには動搖しなかつたけど、接触したはずの骸が答えに窮するのか……。

「んつと、あいつから聞いたかも知れなけど、未来のランボが未来のオレの許可を得てなんか送つたらしい」

「ええ。内容まではわかりませんでしたが、本人から聞きました。ですから、彼の興味は大空のアルコバーノではなく、君に向かつてます」

「うーん、それはいいよ。未来のオレのせいだし。ユニに興味持っちゃって、アリアさんから世代交代しようと暗躍されても困るから」

「それはそうですが……いえ、君が判断するでしよう」

「これはマジで骸が困惑してるね。元々、白蘭は何考えてるかわかりにくいからなあ。

「今のところおかしな動きはありません。僕が置いてきた監視も壊す様子もありません

ね

「そうなんだ。つてか、オレはお前と一緒に来るかと思つてたんだけど」

「そうしたいところでしたが、間に合いませんでした」

間に合う?と首を傾げる。え?何かやつてんの?

「僕とヴエルデ博士の研究に白蘭が手を貸している状況で。後もう少しでしたが……最後まで付き合えば間に合わなくなると予想しました。出来上がり次第、やつてくるそうですよ」

「お前、結局遅くなつた理由を話してるじyan。つて、そこじゃないや。お前とヴエルデ博士がなんか作つてるのはいいよ。なんでそこに白蘭が??そもそもお前よく手を借りたよな。白蘭のことよくわかつてないんだろ?」

「ヴエルデ博士が保証しましたから」

だつたら、大丈夫かな……?うーん、ヴエルデ博士とは会つてるから、そういう嘘はつかないだろうなつてのはわかるけど、白蘭がなあ。会わないとなんとも言えないや。まあ近々来るみたいだし、そん時に判断するしかないね。

スーツをきた状態で、オレは朝から並中にやつてきた。いくらなんでも今日はデイーノさんとバトルしないだろうからね。デイーノさんが休ませようとして逃げてるはずだから。

校門がよく見える位置にやつぱ居たよ。この前と一緒でヒバリさんと目で会話してお咎めなし。今回は教室に寄らないから、ここでクロームと獄寺君と別れ、応接室にオレは向かつた。

「お茶」

……開口一番それですか。オレ結構気合入れてきتانんですけど。いやまあいいけどさ。草壁さんが居ないみたいだし、ヒバリさんが自分で入れるわけがないからね。それにオレの分のお茶も入れていいっていう意味だから、前と比べればすぐ優しい。

「早速で悪いんですけど、これ見てもらえます?このメガネをかければもつと詳しく読めますよ」

「ふざけてる?」

メガネをかけずにチラツと見ただけで、ゴーラ・モスカの設計図とわかつてもらえた

みたい。

「オレが意味もなくヒバリさんの楽しみの邪魔をすると思いませんか？」

言つたのはいいけど、素直にヒバリさんが手を伸ばすとは思わなくて驚いたよ。もしかして前のオレはコミュニケーションが足らなかつたのかな。いやでもコミュニケーションの取り方が、バトルつてどうなの……。若干遠い目をしつつも、ヒバリさんを見る。

「ヒバリさんつてメガネも似合いますね。カツコいい人つてなんでも似合うからずりいなあ」

「……君、その思つたことを口に出すのやめれば？」

「き、気をつけます。これでも昔よりマシになつたと思うんですけど……」

「どこが？ っていう顔をされたよ。ガキの頃からの付き合いだとこういう時に困るよね。前と比べれば絶対マシになつてるから、骸は同意してくれるんだけどなあ。……あれ？ 骸の呆れた顔が思い浮かんだんだけど。え？ もしかしてそんなことないの？」

「君の要件はわかつた。僕も校内で死人が出ると困るからね。うん、いいよ」

「ヒバリさんつ……！」

対価もなく引き受けてくれたのもあつて、すげー感動した目でヒバリさんをみていろば、ため息を吐かれてしまつたよ。なんか最近こういうこと多いよね。

「それで、あのボス猿を君はどうする気？」

「え?……XANXUSですか?うーん、とりあえず殴るかな」

「いつ?」

まさか僕が負けると思つてゐるの?つて感じで睨まれたよ。負けると思つてゐるなら頼んだりしませんつていう意味で机にある資料をトントン叩く。納得してくれたのか、睨まれることは無くなつたよ。いやほんとコミュニケーション取れてるね。昔のオレが見れば腰を抜かすよ、絶対。

「大空戦やろうかと思つてるんです」

「へえ。君が?」

「ヒバリさんも氣付いてるでしょ。オレ、怒つてるんです」

そう言いつつも、オレは微笑んだ。つつても、怒つてるのを隠す笑顔だけど。

「うらやましいな」

へ?とオレはヒバリさんを見る。オレがいつもの雰囲気に戻つたからか、ヒバリさんはつまらなそうに窓の外を見ながら言つた。

「出会い方が違えば、僕にもそれを向けてもらえたのかな」

「それは……無理じやないかな」

「どうして?」

いや、だつてさ。前の時と出会い方が違つたのに、全然変わんないんだもん。そりや優しいなあとは思うよ。けど、根つこの部分は変わらない。ガキの頃から骸に負け続けてプライドがボロボロだつたはずなのに、ヒバリさんは折れなかつた。

「んー……ヒバリさんがヒバリさんである限り無理な気がします。オレ、ヒバリさんの生き様が好きなんで。オレを本気で怒らせるつてことはもうそれはヒバリさんじやないような……」

なんか自分で言つててよくわかなくなつてきた。うーん……とオレが悩んでると、またヒバリさんがオレを呆れて見てたよ。

「君つて僕のこと好きだよね」

「へ？ そりやもちろん、好きですよ。さつき言つたじやないですか」

「……君のそういうところ、ムカつく」

うわっ、オレなんかやらかしたっぽい。すぐさま咬み殺すほど怒つてはないけど、ヒバリさんがムカついてるのは本当だから。

「えつと、その……」

「別にいいよ、わからなくて。ムカつくけど、現状に僕は満足してるから。けど、もし

……」

「もし？……や、やっぱいいです！失礼しました！」

ヒバリさんの眼を見て、オレはすぐさま逃げ出した。あれは狩る者の眼だよ。ヒバリさんをこれ以上怒らせないように、気をつけなきや。今日は大丈夫だつたけど、本気になつたヒバリさんにオレは逃げれるような気がしないもん。

前の時はちゃんと見れなかつたもんなどオレは周りを見渡す。有刺鉄線にガトリング……地雷もあるかな。他の守護者の中でも殺傷力が高い気がする。

「ヒバリはまだ来ねえのかよ」

「多分、ギリギリに来るんじゃないかなあ。ほら、ヒバリさんつて群れを見るの大嫌いだから。オレらが来るのは諦めが入つてるけど、見たくないものは見たくないだろうから」

「ヒバリだしな」

オレらもオレらでヒバリさんだからって諦めが入つてるよねとみんなで笑う。

「む。六道兄もいないのか?」

「ちゃんと来ますよ。ヒバリさんは目が離せない存在ですから。オレも総合的に見れば、一番恐ろしいのはヒバリさんですし」

「ああ。普通なら骸と答えるだろうが、ヒバリは底が見えねえからな」

「うなんだよ！とリボーンの補足にオレは大きく頷く。オレも気が気じやないもん、ヒバリさんにガツカリされたくないから。

わちやわちやといつものように話していたら、ヒバリさんがやつてきた。ムスッと機嫌が悪くなつてたから、苦笑いしつつ見送つていれば咳かれた。

「貸しひとつね」

「んなつ。朝はそんなこと言つてなかつたじやないですか！」

「今、僕の前で群れてる君が悪い」

そ、そんなあ～……とオレは肩を落とす。言いたいことはわかるけどさあ。昨日まではまだ見逃せるけど、今日はヒバリさんの試合だからダメつてことでしょ。オレの嘆きや獄寺君の抗議を無視して、ヒバリさんは雲のフィールドに入つていつた。

チエルベッロからの試合説明が終わり、開始合図をした途端、オレはゆっくりと歩き出した。

「10代目？」

「ツナ？」

「沢田？」

みんなが不思議そうにしているけど、オレは歩みを止めない。ちやつかりリボーンが

オレの頭に乗ってるよ。約束通り報告したから、リボーンからすれば当然か。

一瞬だつた。本当に一瞬だつた。別に疑つてたわけじゃないけど、やっぱ凄いなあと感心する。ヒバリさんに言えば、呆れられるだろうけど。オレの足音が聞こえていたはずだから。どの口が言つてるの、みたいな感じでさ。

「ふうん。これ、そんなに凄いの？」

力チリと嵌め、ヒバリさんは月明かりでリングをまじまじと見ていた。最後までしてくださいよと思いつつ、ヒバリさんが参加した理由だもんなあとと思うオレもいる。あとオレが歩いてきてるのを知つてからっていうのもあるんだろうけど。

「チエルベッロ、入るよ？」

「は、はい」

「んつと、質問の答えですけど、ヒバリさんが一番実感すると思います」

オレはまだ死ぬ気の炎を身体から出せるからね。骸はあるのヤバいヘルリングを使いこなせるし。というか、波動に耐えれなくてリングを碎くつてどういうことなの。や、オレも碎いちやうけどね。でもね、オレは血筋という言い訳が出来るから。

なんて話つつ、オレはゴーラ・モスカの外装をぶつ壊した。XANXUSが手を出さなかつた理由は、リボーンがキレてるから。後、骸が動いてるのもあるだろうね。「すみません。遅くなりました、9代目」

「……ああ、そうか。君が沢田ツナちゃん、だね」

「無理して話さないでください。後はオレに任せて」「すまない。ありがとう……」

ホツと息を吐く。衰弱から気を失つたけど、命の別条はないみたい。「ディーノさん、頼めますか！」

「ああ！」

オレが動けば怪しまれる可能性があつたからリボーンから話してもらつて、ディーノさんに医療班の手配をしてもらつていた。9代目が運ばれるのを横目にしつつ、オレは XANXUS に視線を向ける。

「ネタばらしつてわけじやないけど、骸はボンゴレに詳しくてさ。それはマフィアが大つ嫌いだからなんだけど。まあそれでお前のことも知つてたんだ。お前の性格も、苛烈さも。つつても、骸には別件で動いてもらつてたから、ゴーラ・モスカの情報を持ち帰つてくるとは思わなかつたけど。だからお前の持つ直感に引っ掛けながらなかつたのかもしれないね。つてか、本当にそんな余裕どこにあつたの？」

「ついで、でしたから」

「……うわっ、わかりたくないけど、わかつた」

白蘭がゴーラ・モスカの情報を欲しがつたつてことだろ。ついでにヴエルデも見てる

でしょ、絶対。最悪の組み合わせじゃん！

「どうが、そういうのも報告して!?」

「察することができない君がおバカなだけです」

「悪かったな！」

なんでオレお前と喧嘩してんの!? 今回、お前にすげー感謝してたのに。……だからなのかもしねなけど。

「まつお前が何を考えて、ゴーラ・モスカに9代目を入れたとか、そういうのはいいよ。9代目からも話を聞ける状況じゃないしね。……ううん、今だから出来るんだ、大空戦。やろうよ、10代目の座をかけてさ」

XANXUSとジツと見つめ合う。

「お待ちください！……沢田氏、本当によろしいのですか？」

「うん。頑張ってくれたみんなには悪いけど、XANXUSを殴らないとオレの気が済まないんだ」

オレがやる気だから、みんなも武器を持ち始めた。ほんと、オレの守護者つて好戦的だよね。まあそれはヴァリアーも一緒だけど。

結局、チエルベッロの仲裁が入って明日が大空戦となつた。今日じゃないならつて、オレは帰ることにしたけど、オレが去る最後までXANXUSの視線が外れることはな

かつた。

大空戦当日、オレは朝からリボーンとバジル君と一緒に、いつもの日課の崖のぼりコースのところにやつてきた。普段なら獄寺君も一緒にけど、まだ怪我がちゃんと治つてないから訓練は禁止つて言いつけてるから、泣く泣く学校に行つてる。……や、ほんとに。捨てられたような目で見てくるんだもん。だからノートとか頼んだよ。クロームに借りて休んでた分をまとめてくれたら嬉しいなとお願ひしておいた。多分今頃、授業そっちのけで頑張つてるとと思う。

「えっと、バジル君頼めるかな？」

「は、はい」

ここに来たのは、バジル君に手合させを頼んだから。ヒバリさんに頼んでも良かつたんだけど、切り上げてもらえるかわからなかつたからね。いくらオレでも大空戦の前に体力を削るまではやりたくない。

「待て、バジル。おめーもハイパー死ぬ気モードになれ」

「しかし沢田殿は身体を動かす程度という話では？」

「ただの死ぬ気じや、ツナと打ち合いすらならねえぞ」

えつ。なんかすげーリボーンに過剰評価されてない?バジル君がキラキラした目で見てくるから、オレは曖昧に微笑むしか出来ないんだけど。

「失礼しました!・本気で行きます、沢田殿!」

「あ、うん。よろしくね」

バジル君がハイパー死ぬ気モードになつたのを確認して、オレもその状態になる。

「いつでもいい」

「い、行きます!」

相変わらずオレの手に炎を灯ることはないけど、バジル君とは問題なく手合わせ出来ている。……いや、これは問題がないことが問題だ。チリッと殺氣を感じ取り、最小限の動きで避ける。この弾は……リボーンだ。

「リボーン殿……?」

「今のを避けんのか……」

あははと苦笑いしつつハイパー死ぬ気モードを解く。バジル君が驚いて解けちゃつてたしね。

「認めたくはねーが、コロネロを連れてきた方が良かつたか……」

「うーん、でも今から?」

リボーンにどうしよつかと視線を送る。コロネロの技だと失敗したら大怪我だから

ねえ。いやまあリボーンの弾も避けれなかつたら死んでたけどね。

「沢田殿、すみません。拙者では沢田殿の相手に務まらず……」

「や、バジル君は悪くないんだ。どつちかというとオレの問題だよ」

「ああ。ツナが死ぬ気になりきれてねえだけだ」

うんうん、そんな感じとオレは頷く。

「先ほどの沢田殿はハイパー死ぬ気モードなのでは?」

「うーん、そう聞かれれば頷くけど、もつと死ぬ気になれる気がするんだ」

そりや死ぬ気の到達点に入れることは知つてゐるけど、なんか普通のハイパー死ぬ気モードにもなりきれてない気がするんだよ。でもこれをなんて説明したらいいだろうと悩んでいると、リボーンが補助輪だと呟いた。オレとバジル君は揃つて補助輪?と首を傾げる。

「今のツナは補助輪をつけて自転車に乗つてんだ。補助輪をつけたまま、自転車競技で周りを魅了しつつ優勝するといえ、ツナのヤバさが伝わるだろ」

え。お前から見て、オレはそんな感じなの?あと魅了つてなに?

「一度でも外して乗ることさえ出来れば、あとは身体が覚えるんだがな。外す必要性をツナ自身が感じてねえんだ。だからオレがツナの意識外から殺す氣で撃つてみたんだ。だが、ツナは今の状態でも問題なく、避けやがつた」

「それはお前が殺氣を出すからじゃん」

「殺す氣でいかねーと、外せねえ」

「……なんかグルグル回つてるー！外すには殺氣が必要で、殺氣があるとオレが反応して避けちゃうとか、どうすんのー！」

「オレの弾を避けたんだ、案外今の状態でも勝てるんじやねーか」

「や、流石にXANXUSの炎は無理だつて。あいつの攻撃範囲広すぎ。そりや接近戦に持ち込めれば、いけなくもないけど……」

接近戦ならいけんのかつて感じで、リボーンには呆れられてバジル君にはポカーンとされた。え？ そんなに驚くこと？ お前だつてできるだろ？ とリボーンを見たけど、もつと呆れられた気がした。

午後からはディーノさんに頼んで、スクアーロの様子を見にきた。今のところ、ヴァリアーは仕掛けて来てないらしい。……ほんと、そういうところだよね。

「せつかく来ててくれたところ悪いが、まだ睡眠薬が切れてねえんだ。すまん、ツナ」

「いえ、気にしなくていいですよ、ディーノさん。だつて、スクアーロは起きてますから」
は？ という顔をしたけど、流石はディーノさん。ちゃんと武器を構えて、警戒したよ。

病室の警戒度が上がったからか、オレには通じないと観念したのか、スクアーロは目を開けた。

「なぜわかつたあ。」

「お前が認めたくない超直感かな」

本当に忌々しいんだろうなあと殺氣を浴びながら思う。

「うん、でもよかつた。下手すりやお前自殺するかと思ってたからさ。オレを殺す気があるならまだ大丈夫だね」

「……なに考えてやがる、沢田ツナ」

「XANXUSにはお前が必要だから生かした。つて言えば、お前は納得する？」

なんかさらに警戒されちゃつた気がする。言葉通りなんだけどなあ。オレ、ずっとあいつの面倒見れる気がしない。

「とにかく、今日の夜は大空戦でさ。お前も強制招集かかると思う。つて、何かやつてとかないから。好きにすりやいいよ、オレの首を狙うのもいいしさ」

言つたそばから、スクアーロはオレの首に手を伸ばしてきた。けど、オレは一步も避けなかつたよ。ディーノさんのムチが間に合うから。

「ツナ」

あぶねーから下がれとディーノさんに視線を向けれらたけど、僅かに首を振つて拒否

する。そりや、ディーノさんには悪いとは思うけどね。スクアーオを締め付けて抑えてくれてるしさ。ギリギリという音を聞きつつ、オレはスクアーオと視線を合わせる。

「オレはオレのやりたいようにするし、お前もやりたいようにすればいいよ。とりあえずオレはXANXUSをぶん殴る予定だから。お前にも教えておこうと思つたんだ」「テメエ程度で殴れるわけねえ、」

「オレはやるよ。決めたから」

フツとオレは力を抜いて、窓に視線を向ける。チエルベツロが来たみたい。オレはない方が良いかなと思つて、ディーノさんに任せてオレは帰つた。

母さんに不審に思われないよう、オレはいつも通り夜は過ごしたんだけど、家綱はいつも通りとはいかなかつたみたい。食事中とかすげーチラチラと視線がくる。オレには聞いてこないけど、リング争奪戦の流れはラルに聞いてるみたいだし、なんか言いたいことでもあるのかな。もしかするとやらなくていい大空戦をやることにしたから、怒つてんのかも。巻き込まれてる家綱からすればいい迷惑だもんね。

うーん、どうしようかなあと頭を悩ませる。母さんの居ないとここで声をかけたけど、なんでもねえって言われちゃつたし。もう一回聞きに行つても、多分同じ答えしか

返つてこないんだよね。

散々悩んで、家を出る前にオレは家綱の部屋に来た。オレと声をかけつつノックしたけど、相変わらず返事はなし。音がしたから部屋には居るっぽいけど。

「行つてくるね」

「…………勝てよ」

へ？とオレはドアの前で固まる。いやだつてさ、返事がかえつてくるとは思わなかつたんだもん。オレは固まつてる間にドアが開いて、目の前に家綱がいた。

「おい、返事」

「ごめん。勝つてくるよ、絶対」

「あつそ」

バタンと閉まつた扉を見つづ、オレは思う。……あつそ、つてなに。すげー矛盾してるので、あいつ気付いてないの？とオレは笑いを堪える。や、我慢できてないけど。でも声に出さないようにはしてる。

声を出しちゃうと笑つちやうから、リボーンに行こつかと視線を向ける。家綱の態度に呆れつづも、リボーンも機嫌が良さそうだつた。

「あら、ツーちゃん。いい事あつたの？」

「うん。家綱とちよつとね」

「まあ！ よかつたわねえ」

でしょでしょとオレは頷く。母さんも嬉しそうだよ。行つてくるねーとオレは母さんに声をかける。もちろんリング争奪戦のことは言つてないよ。オレは今日クロームのところで泊まることなつてゐる。実際、そのつもりだし。オレと骸の帰りをクロームは待つてゐるつていう約束だから。ちなみにランボはこつそりリボーンが連れ出してくるんだつてさ。参加はしないけど、オレが見て欲しいと思つてゐるから。一応リボーンに泣かすなよと声をかけられれば、渋々返事がかえつてきたから大丈夫だと思いたい。ほんとあの2人つて相性悪いよな。

「気をつけてね」

「うん。いつてきまーす」

「いつてらつしやーい」

あと何回聞けるかなあと思いつつ、母さんに手を振りつつオレは走り出した。

時間を確認して、予定変更。並中に行く前に、クロームのところへと向かうことになた。本格的に裏の世界に入つてしまえば、突発的に色々起きて見送ることも出来ないだろうなあと思つたんだよ。こういう時ぐらい、ちゃんと声をかけなきやね。

「ツナ……？」

「急にごめん。あ、これお泊まりセット置いとくね。じゃ、行つてくるよ」

相変わらずオレは後先考えず行動したから、すげードタバタ。しつかりしてた骸はオレと違つてちゃんと声をかけて行つたんだろうなあなんて思いつつ、ブンブンと手を振りつつ走る。

「ツナつ！……いつてらっしゃい」

「うん！ いつてきまーす」

つて、ほんと急がないとマズイ。これで遅刻とか笑えないから。

「ま、間に合つたー……」

結局、オレが並中に着くのが一番遅かつた。まさかのヴァリアーより遅かつたよ。スクアーロもディーノさんが連れてきてくれたみたいで、向こうにいるしさ。本当にオレが一番最後だつた。

ちなみに獄寺君達には何かあつたのかとすげー心配されたけど、骸達には呆れられた。オレの守護者つて両極端すぎ。とりあえず、あははー……と笑つて誤魔化す。だつてさ、説明したらもつと呆れられるし……。まあ誤魔化したら誤魔化したで、すげー呆れられたけどね。

チエルベッロのルール説明を聞くと、やっぱ全員参加でみんなは各フィールドに移動

することになった。チラツと見れば、骸はもう移動し始めてた。そういう奴だよなと軽く息を吐きつつ見送る。

ふと殺氣がして、慌ててしゃがみこむ。ブオンっとオレの頭上で空気が移動した。試合前にそんなことをするのは1人しか思いつかなくて、ヒバリさんの姿を探せばスタスタと歩いていた。

「つて、それだけですか!?」

あれ? このツツコミであつてる? つて言つてて思つた。ヒバリさんなりの激励つてのはわかるけどさ。もうちよつと優しいのが欲しいです。や、激励をくれるだけ前より随分優しいけど。なんか遠い目をしたくなるよね。デイーノさんもオレと似たような表情してた。

いろいろと思うところがあるけど、さつさと復活する。獄寺君がイラツとしてるからね。ブチギレないだけ、獄寺君も成長したなあなんて。

「えっと。みんな、無理はしないでね」

「10代目も」

「ツナもなのな」

「沢田もな!」

考えることはみんな一緒だねつと笑いあつて、オレは見送つた。

みんなが移動してる間に、見にきてくれた人達に視線を向ける。

シャマルはオレが女だから怪我した時は任せろって言つてくれた。……前と対応が違い過ぎい。

コロネロにはお前の実力が楽しみだぜつて珍しく笑つていた。……あれ？ オレつてコロネロからの評価、すげー高くない？

バジル君には親方様の分も応援しますと気合を入れて言われた。……なんかすげー複雑。嬉しいのは嬉しいけど、素直に喜べない。これでも父さんのことを理解してるつもりなんだけどね。

ディーノさんには応援してるぜと声をかけてくれた。……オレの味方つて宣言する意味を前と違つてオレはちゃんと理解している。

炎真にはツナさん頑張つてと言つてくれた。……ここに炎真がいるのがオレはすつげー嬉しい。

ランボは眠そうな目をしていた。……ちびにはキツい時間だよな。オレのわがままでごめんなと頭を撫でる。

よし、と気合を入れたオレは、最後にリボーンに視線を向ける。
「オレの言いたいことはわかつてんだろ」「うん。死ぬ氣でやるから見てて」

「ああ」

リボーンとコンつと拳を合わせたオレは、今日初めてXANXUSと向き合ったんだ。

チエルベッロから守護者のみんなに毒を注入されたと聞いても、オレはXANXUSから視線を逸らせない。いつものオレなら、すぐ一歩さいだらうから、ディーノさん達はオレらしくないと思つてそう。多分不思議に思つてないのはリボーンぐらいじゃないかな。

結局ボンゴレリングをセットできるチエーンをチエルベッロからもらつてる時すら、オレは視線を逸らせなかつた。だからなのか、ふつーにチエルベッロが試合の合図を出したよ。そこでやつとオレは動いた。つつても、口だけ。

「悪い。オレ、XANXUSに集中したい」

「……相変わらず、君は人使いが荒い。仕方ありません、わかりました」

は？ みたいな声が複数から聞こえた。XANXUSすら目を見張つたよ。なぜ……

とつぶやいたチエルベッロにオレは声をかける。

「多分毒を注入したと機械を勘違いさせたんじゃないかな。一流の術師は機械すら欺けるから」

つっても、リングの力を使わずに出来るのはあいつぐらいだよ。オレと違つて、術師は経験値がそのまま上乗せできるのがほんと大きい。イメージが出来ても、身体が動けなかつたら意味ないし。まあだからあいつもヒバリさんとバトつてたんだと思うけど。ほら、骸つて完璧主義だから。

「あとは……他人から貰つたものを信用しないからかな。オレが大丈夫つて声をかけたら、疑わなかつただろうけど」

前の記憶云々とかじやなくて、多分あいつの人間不信は酷くなつてる。みんなの性格を知つてゐるのに、馴染まないのはそういうことだろ。キヤラじやないつてのもあるだろうけど、それならオレの頼みを聞くつてのもキヤラじやないだろ。なんつーか、2回目だからこそひねくれ方をしちやつてるよ、あいつ。オレが間にに入るとかしたら、もつとひねくれそうだし。基本好きにさせてツツコミするぐらいしか出来ないんだよね。だからオレとしてはヒバリさんに期待したいところ。……あれ？詰んでね？

ま、まあ骸はオレが見てるから大丈夫つてことにして……XANXUSだよ、XANXUS。

「このままだとあつちはあいつの独擅場になるけど、お前はそれでいいの？」

あ、なんかヒバリさんがキレてる気がした。すみません、ヒバリさんが骸の助けを必要ないつてのはわかつてますと心の中で訴えつつ、XANXUSの出方を見る。

「ツチ。カスども、これ以上オレの足を引っ張るんじやねえ」

そういうつて XANXUS は銃を抜いて撃つた。方角からして、嵐と雷。そして……雨。

前の時は勝利した者だけだった。今回は……動ける者っていう意味、かな。それでもオレは嬉しいよ。スクアーロの忠誠心を疑つてないことが。お前さ、気付いてる? スクアーロに追手を出さなかつたのも、あわよくばオレを殺すと思つたからじやないの? 聞けば、全部否定するだろうね、お前は。あり得ないつて、お前自身が否定するんだよ。

「やつぱ、オレ……お前に負けれないや」

お前は敗北を知る必要がある。

「本気で來い、XANXUS。さもないと、死ぬぞ」

「はつ。イキがるんじやねえ、カスが」

オレの額に死ぬ氣の炎が灯ると同時に、XANXUS の銃がぶつ放された。

けど、それはオレに向かつてじやなく、移動のために。XANXUS は銃を持ちつつだけど何度も拳を交える。オレがついてきてるからか、時折銃からもぶつ放されるけど至近距離だから問題ない。手首や銃に当たりして軌道逸らせるから。

「ぶははは!! 所詮、その程度か」

「…………」

オレは答えるすべを持たない。今オレらが戦えてるのは、XANXUSが至近距離で戦ってくれてるから。懸念してた通り、XANXUSが空中から一方的に撃てば、オレは超直感を頼りに避けるだけしかない。それでも……それでもオレは口を開く。

「試してみるか？」

「はっ、己の力量もわからねえとは」

「どうだろうな」

ザツとXANXUSが後ろに下がる。そして飽きたという一言と共に、空中に飛び上がった。

「それ程消えたきや、かつ消えろ!!」

迫り来る大炎にオレは動こうとしなかった。ああ言いつつも、XANXUSはオレの超直感を最大限に警戒していたみたい。逃げ場がない程の炎をオレを中心に放つていた。

このままだとオレは死ぬ。超直感も肯定している。死んじやつたら、みんなは悲しむだろうなあ。それでもみんなは進んでくれると思う。けど、骸はどうかな。あいつが一番心配かも。普段は心配しないんだけど、オレが死んだらってなると心配。

なんか時間の感覚が変だなと冷静に思いつつ、今のオレの後悔つてなんだろなあと

考える。もつと死ぬ気になればよかつた？うーん、でもなあ、出来ないのは出来ないし。これは今のオレが出来る本気だもん。後悔はないかつて聞かれれば、意外とないのかもしない。よく考えればオレって2度目の人生だもん。気になると言えば、アルコバーレーノの呪いだけど、それだけは骸がちゃんと導いてくれる。あいつ結構律儀だから。

——あれ？ そういうや、オレ……まだXANXUS殴つてないや。

氣付けば、オレの全身から炎が噴き出していた。

14

観覧席にいた者は、ツナが不利と誰もが思つた。リボーンですらツナには眠つてゐる力があるとわかつてゐたが、死ぬ気とは逆にある境地に辿り着く程度と予想してゐた。程度と表現したが、それは決してナメたわけではない。ツナのポテンシャルがあればXANXUSに勝てる程の力を得ると確信してゐたレベルだ。マフィア界最強のアルコバーノと同等、もしくはそれ以上の力を得るとは思つてもいなかつた。

「わかつてなかつたのは、オレの方か……」

リボーンは独り言ちる。その言葉を拾つたディーノが不思議そうに視線を送る。その視線を感じ取つたのか、リボーンは先程と違ひ観覧席にいる者に聞こえるように口を開いた。

「今から約一年前だ。フウ太のランキングでツナは……マフィアのボスの中で総合的な戦闘力が一位だつた」

は？ という声を漏らしたのは誰だつたか。ここに居るものは誰もがツナのポテンシャルは認めてゐる。認めてはいたが、果たして一年前に教えてもらつても領けたかといえば、出来なかつただろう。リボーンですら疑つた内容だつた。信じるとすれば、六

道骸だけだ。

ツナの性格、出会ったタイミング、腐れ縁など、六道骸というほどの男がツナの下にいる説明ができるものはあつた。しかし、そんなタマか？と首を傾げるような男だった。ツナ自身も言っていたのに、骸はツナの強さを一番知っていると。

9代目に依頼され、立派なマフィアのボスに育てる家庭教師としてリボーンはやつてきた。蓋を開けてみれば、リボーンが必要なのかと首を傾げたくなるほどしつかりして、守護者になり得る者も手懐けていた。随分あめえ考えをもつが、周りの助けを借りつつ進んでいけるだろう。……だが、今ならわかる。リボーンをつけた理由が。

ツナは一度決めてしまえば、恐ろしく頑固だ。今だつてとつくに決着をつけれるのに、XANXUSに認めて欲しいと思ったからという理由で、あの手この手でXANXUSが放つた炎を無効化しやがる。側から見れば、XANXUSに同情しそうになる内容だ。実際はそのXANXUSのプライドがエベレスト級なので、ツナがそうせざるを得ないだけなのだが。

……9代目も人が悪い。ツナがやると決めていたからつて、全部託しやがつた。ボスとしての資質はXANXUSが今まで圧倒的だつた。そのXANXUSを圧倒的に上回るのがツナだ。ツナ本人は至つて温厚でのほほんとしているが、ツナと距離があればあるほどツナの強さに恐怖するだろう。だからこそ、最強の殺し屋でキヤバッ

ローネのディーノを導いた実績をもつ、リボーンの盾が必要になる。

旧知の仲でも、9代目の狸っぷりに思うところはある。それでも何も言わないのは、リボーン自身がツナに惚れてしまつたから。恋だの愛だと説明できない程、惚れてしまつた。ツナが歩む道を特等席で見たくなつてしまい、家庭教師の座を誰にも譲る気などさらさらない。

しかしだな……とリボーンは思った。ツナは碌でもねえ男を引っ掛ける天才だな、と。

人の集まる気配がして、オレはXANXUSから視線を外さないまま横目で見る。骸がうまくやつたようで、どちらも大した怪我がない状態でいた。出来れば、みんなが集まる前に認めさせたかった。……いや、それは傲慢だったな。XANXUSにとつてボンゴレ10代目になることこそが誇りだ。炎の量で圧倒し、零地点突破で吸収したり、初代エディションでXANXUSの炎を凍らせたりもした。が、オレは未だにXANXUSを殴つてもいい。力量の差はコイツもわかつてゐ、でもそんな中途半端な態度では譲れるわけがない。

「死ぬなよ、XANXUS」

XANXUSが持つ直感ですら、オレの移動が見えていない。それでもオレは拳を握った。

「これが……オレの誇りだあああ!!」

オレの拳を受け、XANXUSは宙をまつた。

『ボス!!』

今のお前なら見えるものがあるんじやないか?と視線を送れば、くだらねえと呟いた気がした。ほんと……そういうところだよ、お前……。オレは呆れつつ、ハイパー死ぬ気モードを解除した。

「あーー!疲れたーー!」

オレやつぱ戦いとか好きじやねえー!!と叫びたくなつてると、獄寺君達はオレの名を呼びつつ駆け寄つてくれた。

「みんな、大丈夫だつた!?」

「はい!……まあほとんど骸のヤロー1人でケリをつけましたが……」

「ははっ。あいつ、ほんとつえーのな!オレらの出番なかつたぜ」

「何を言つてる。オレを助けたのはお前らじやないか!」

なんとなく状況が読めてきた。あいつ、ヴァリアーが暴れてるところだけ押さえて、

あとは獄寺君達に丸投げしたな。まあ骸だし、ほつといても大丈夫つてどこまでやつてくれただけマシかなと、サンキューと視線を送る。相変わらずオレの感謝を素直に受け取る気は無いようで、目をつぶつていた。

「僕は君らと違つて、あの男の助けなんて必要なかつたけどね」

「あ、はい。それはもう、わかっています」

あれはXANXUSの行動を見たかつただけですから！と、ヒバリさんに必死に視線を送る。まだちよつと機嫌が悪そうだけど、一応納得はしてくれた。ふうとオレは汗をかきつつ、やっぱ骸はヒバリさんには手を出さなかつたんだなあと思つた。毒を自力で解除できるからとかじやなくて、ヒバリさんが骸の手を借りたくないと知つてるから。他のみんなを助ければ、誰かが行つてくれるからね。相手のことを知つてるからこそ、動きにくらいのかなあ、なんて。

「いい加減、チエーンにリングをはめなさい」

「えっと、うん。……そうする」

もうXANXUSは動けないだろうしね。他のヴァリアーもオレらの戦いの結末に水を差す気はないみたいだし。

骸に促されて、みんなからリングを預かりチエーンにはめていく。前の時はXANXUSの血を拒んで、オレは結局やつてないんだよな。うわー、緊張するー！と思つてる

と、さつさとしろという視線も来たから慌ててつける。オレってやつぱ締まらないね……。

「あれ? なんもないね」

キヨトンとオレが不思議そうにしていれば、獄寺君達も不思議そうな顔をしていたよ。

「えっと、なんか起きるだろ? なあと思つてたんだよ」

「ムム。確かにおかしい。7つの完全なるボンゴレリングが継承される時、リングは大いなる力を新たなるブラッド・オブ・ボンゴレに授けると言われている」

「それは事実です」

マーモンの言葉が世迷言と切り捨てられるのはどうかと思つたのか、骸が肯定したよ。や、多分オレが何か起きるかもつて言つたからだと思うんだけど。

——おまえを待つていた。

へ? とオレは慌てて天空のリングを見る。オレが込めたわけじや無いのに、リングからは炎が噴き出し、ボンゴレの紋章が浮かび上がってきた。

「も、もしかして……今の声……ボンゴレ……プリーモ?」

浮かび上がった紋章から、プリーモが現れた。

『久しいな』

うえ!?とオレは思わず反応してしまった。やつちやつたー!と思うけど、オレが反応しなくても無理じゃん!

『ふつ。随分、可愛らしく育つたな』

……なんか褒められてる気がしない。

『胎児の頃からボンゴレリングの影響を受けたため、どう転ぶかと思つていたが……オレの杞憂だつたようだ』

あれ?もしかして……オレのフォローをしてくれてる?

「胎児の頃からとはどういうことだ?」

『その頃からリングの適応者だった、それだけのことだ。大空のアルコバレーノなら、その意味がわかるだろう』

リボーンの質問に答えたプリーモはまたオレの方を見た。その視線が移動している時、一瞬だけどエンマの顔を見て止まつた気がした。ほんの一瞬すぎて、オレの気のせいかと思えるぐらいだつたけど、絶対間違いない。だからこの光景をプリーモに見てもらえたのが嬉しいよ、前には出来なかつたから。

『……お前なら大丈夫だろう。栄えるも滅ぶも好きにせよ、デーチモ』

「は、はい!」

『ボンゴレの証をここに継承する』

前の時は1人だつた。けど、今回はみんなと一緒にいる時に継承できた。だからかわ
かんないけど、涙が出てきた。

「10代目……」

みんなが静まつてゐる中、獄寺君に気遣うような声をかけられ、慌てて袖で涙を拭う。
「オレ、頑張る。マフィアなんて怖いし、正直好きじゃないけど、オレは繋いでいく。正
しい道なんてわかんないけど、オレが信じた道を進んでいくよ」

「ついていきます！10代目！」

「オレのこと忘れてねーよな！ツナ！」

「きよくげーん!!」

チラッと期待を込めつつ視線を向けると、ヒバリさんはため息を吐いていて、骸はや
れやれって顔をしていた。その反応が嬉しくて思わず笑顔になる。

……ランボ、見てるか？これがオレ達だよ。お前が付いてくる覚悟ができたら、その
時は歓迎するよ。

「あの、10代目」

「ん？どうしたの？獄寺君」

「ボンゴレリングの形が変わつてしませんか……？」

「んなーっ！」

え？ プリーモ？ なんで！？ とオレはアタフタする。これ、オリジナルのボンゴレリングじゃん！

「僕が調べた限りでは、初代の頃はそのような形だつた、と。恐らく継承のために形が変わつたものが、今……元の形に戻つた、それだけのことです」

骸のフォローが凄すぎて、思わずポカーンつて顔になつちやつた。今すぐその阿呆面はやめなさいという視線をもらつて、すぐに口を閉じだけど。

「なんにせよ、彼女がボンゴレ10代目でいいのでは？」

「はい。それではリング争奪戦を終了し、全ての結果を発表します。大空戦の勝者は沢田ツナ氏。よつて次期後継者となるのは沢田ツナ氏とその守護者です」

前と違つて、やつたー！ と元気いっぱいにオレは喜んだ。XANXUSの意思を汲んだのかはわからないけど、ヴァリアーの襲撃もなさそうだし、観覧席のみんなも無事に出てくることができた。

「……あ、そうだ。XANXUS」

XANXUSを守るかのように、ヴァリアーのみんなが前にたつたから、嬉しくて笑う。オレの顔に毒気が抜けたのか、力を抜いてXANXUSが見えるようにしてくれた。

「あのさ、良かつたらだけど……オレと結婚しない？」

ピシッと空気が凍つた気がした。ヴァリアー側ならわかるんだけど、オレの方からもなんだよね。

「……ツナ、お前なに言つてんだ？」

「いやだつてさ、それが一番かなつて。リボーン、お前もそう思はない？」

あれ？おかしいな。リボーンのポーカーフェイスが崩れてる気がする。そんな変なこと言つたかな？

「その、ツナ。オレもマフィアのボスだからな、その考えは理解できる。だがな、リボーンもオレも、というか……みんなだな。ボンゴレを継ぐからといって、お前の気持ちを殺してまではボンゴレに身を捧げろとは考えてないぜ？」

「オレもそのつもりですけど……。えっと、オレ、XANXUSのこと嫌いじやないですよ？どつちかというと、好きかなーって」

あれ？今度はディーノさんが固まつたよ。

「んつーと、ツナ。XANXUSのどこが好きなのか、オレらに教えて欲しいのな。親父も絶対聞くと思うぜ」

「え。山本のお父さんを納得させるのは難しいかも。だつて、ボンゴレのこと誰よりも愛しているのがXANXUSだからだもん

「んー……。理由を言わねえと、親父は絶対認めないぜ」

やつぱり？とオレはベルを連れていった時のことを思い出す。山本のお父さん、あれ本気だったよね。

「それでもオレ、XANXUSぐらいしか思いつかなくって。……ほら、オレってモテないし。そりやXANXUSは死ぬほどオレが相手とか嫌だろうけど、ボンゴレのためならギリギリ我慢してもらえる、はず。結構ギリギリかもしだいけど！そこをなんとかつてオレが頭を下げ続ければ、可能性はゼロじゃないような。他の人を見つけるよりはある気がする！」

「でもよ、オレ。ツナのこと好きな奴を知ってるぜ？な、獄寺」
え？ そうなの!? と獄寺君に視線を向ける。獄寺君は山本に肘で小突かれてるけど、すげー焦つてない？ 獄寺君は知らないんじやないの？

「えっと、山本の気のせいじゃないの？」
「……じゅ、10代目。オ、オレは……」

あれ？ もしかして知ってるのかなと期待を込めて見つめる。けど、獄寺君は口をぱくぱくするだけで続きをなかなか聞けない。

「ええい、鬱陶しい!! 沢田!! 話はよくわからんが、後ろ向きの考えはよくないぞ！ 当たつて碎けろ！」

「はい！ つて、オレはやつぱ碎けちやうの一!?」

「それはやつてみなければわからん!!」

うん、確かにそうかもと頷く。リボーンも言つてたじやん、ポンゴレのボスたるもの、竹を割つたような性格じやなきやつて！ よしつと氣合いを入れて XANXUS の方を見ようとしたら、不機嫌なオーラに氣付いて恐る恐る振り返る。

「ねえ、僕もう帰つていい？」

「うわあああ！ すみません！ 付き合わせて!!」

やつぱり機嫌悪くなつてるー！ とオレは頭を下げたよ。いやまあヒバリさんからすれば、どうでもいいよね！ そりや機嫌が悪くなるよ。……つーか、なんで骸は腹を押されて蹲つてんの？ まあいいや、骸だし。

「あはは♪ 盛り上がつてるところ悪いけど、ツナちゃんと結婚するのは僕だよ♪」

ハツとオレは顔を上げた。今までなかつた気配に、帰ろうとしていたヒバリさんも足を止めて顔をあげていたのが視界の端で見えた。

「会いたかったよ、ツナちゃん♪」

「……白蘭」

背に翼を生やして飛んでいる現実離れをした光景に、オレ達はただ見上げるしかできなかつた。